ISSN 2185-131X

リサーチ・シリーズ No.1

中国に帰ったタイ華僑共産党員

―欧陽恵氏のバンコク，延安，大連，吉林，北京での経験―

村嶋英治・鄭成

早稲田大学

アジア太平洋研究センター

2010年3月

中国に帰ったタイ華僑共産党員

―欧陽恵氏のバンコク，延安，大連，吉林，北京での経験―

村嶋英治・鄭　成

早稲田大学
アジア太平洋研究センター

目　　次

はじめに……1
第一章　バンコクで育つ
第一節　タイに出稼ぎに来た父親……7
第二節　華僑社会とタイ社会……11
第三節　タイ人民党政府の同化政策と蟻光炎……15
第二章　廣肇公学時代：学友の影響（1934−35年）
第一節　廣肇公学編入……20
第二節　共産党系の学友と付き合う……21
第三節　国民党系広肇公学の教育方針に反発して学生スト……23
第四節　共産党のビラまき……25
第三章　中華中学進学：12月9日学生運動の波及
第一節　暹羅共産主義青年団（共青団）入団（1935年末）……27
第二節　中華中学（中中）の学生ストライキ（1936年3月21日）……28
第四章　共産党の文化・宣伝活動（1936年）
第一節　華字紙副刊を利用した共産党の宣伝【村嶋補足】……34
第二節　華字紙編集者：第三派（黄病佛）と
共産党シンパ（邱心嬰）……38
第三節　共産党が指導した読書社の活動……43
第四節　演劇運動：蕭軍の『八月的郷村』を上演（1936年6月）……44
第五節　タイ華僑の演劇運動とラテン化新文字運動【村嶋補足】……46
第六節　暹羅文化界追悼魯迅大会（1936年11月8日）……48
第七節　共産党による文化界統一の試み【村嶋補足】……53
第五章　樹人中学師範班時代（1936年後半−37年前半）
第一節　樹人中学師範班に入学……56
第二節　ネオンサイン工場でのタイ人労働者
オルグ活動（1936年後半）……61
第三節　サッカー・クラブ所属の広東人労働者
オルグ活動（1937年）……63
第四節　スペイン内戦への義勇兵派遣計画……66
第五節　西安事件（1936年11−12月）……68
第六節　樹人中学から啓明学校へ（1936年後半−37年半ば）……69

第六章　抗日戦争と抗聯活動（1937年後半–39年半ば）
第一節　タイ華人の抗日戦争参加【村嶋補足】……78
第二節　抗日戦争の開始，抗聯の成立と活動……79
第三節　共産党員を南僑総会に派遣……88
第四節　砂糖キビ畑での入党……89
第五節　抗日救国聯合総会設立……94
第六節　記念映画会の失敗……99
第七章　延安へ（1939年半ば–41年）
第一節　タイを脱出……102
第二節　ウィエンチャン滞在……105
第三節　再びバンコクに潜入……107
第四節　昆明での党との連絡……109
第五節　重慶から延安へ……113
第八章　ついに延安に到着
第一節　華僑紡績工場の指導員……116
第二節　魯迅芸術文学院（魯芸）……118
第三節　党籍問題：再入党……122
第九章　延安整風運動
第一節　整風運動の発端……127
第二節　毛沢東の思想改造手法と延安川の水を飲んだ文芸幹部……130
第三節　整風運動の常套手段……132
第四節　一年二ヶ月の隔離審査……136
第五節　共産党の華僑不信：失敗に終わった華僑工作……142
第六節　曖昧なままに終息した整風運動……147
第七節　農村での宣伝活動，妻との出会い……149
第八節　華僑幹部養成と華僑隊の発足……151
第十章　大連での実話報記者時代
第一節　華僑部隊の一員として東北ハルビンへ……155
第二節　ソ連軍の実話報に勤務……157
実話報に入社……158
実話報社内の中ソ関係……162
実話報の編集・販売……164
報道方針をめぐる中ソの衝突，秋江辞職事件……164
朝鮮戦争時の実話報……166

第三節　大連のソ連駐屯軍と中共組織……168
ソ連軍の現地占領政策……168
ソ連軍の婦女暴行……168
ソ連が漢奸遅子祥を大連市長に……169
ソ連軍からの武器援助……173
第十一章　ソ連への幻滅
第一節　北京中ソ友好協会総会へ転勤……175
第二節　ソ連訪問……176
第十二章　右派分子として労働改造の三年
第一節　右派分子として打倒される……181
第二節　唐山の柏各庄農場……182
第十三章　吉林省での下放生活二〇年
第一節　吉林省の農村への下放……188
第二節　タイ華僑出身吉林省党高官とのコネ……189
第三節　文革の犠牲者：周介文，黄覚生の自殺……193
第四節　三年間のオンドル焚き労働……194
第五節　治療できず早世した長女……195
第十四章　名誉回復，再就職，退職後の出版活動
第一節　名誉回復，民政部に就職……198
第二節　革命史料研究室勤務……200
第三節　党歴審査申請と入党時期の確定……202
第四節　報告文学の創刊……204
第五節　泰国帰僑英魂録の編集……206
欧陽恵氏の著作目録（在タイ時）……213
引用文献……216
事項索引……219
人名索引……232
著者紹介

はじめに

本書は、村嶋英治と鄭成の両著者が2004年に北京およびバンコクで実施した欧陽恵氏とのインタビュー記録、それにその後の調査によって得た関連資料や情報を加えて作成した研究成果である。

現在北京で、司長レベルの待遇を受ける中国共産党古参幹部として、平穏な老後を過ごしている本書の口述者、欧陽恵氏は、1918年にタイ国（当時は暹羅：シャム）の首都、バンコクの中華街で広東人華僑の二世として生まれた。同氏は在学していた広肇公学（小学校レベル）で、先輩・級友の影響を受けて1934年頃に暹羅共産党（1930年4月に東北タイベトナム人のベトナム青年革命同志会ウドン省委員会と、バンコク華僑の中共南洋共産党暹羅委員会の両組織が合併して成立）が指導する運動に近づき、1935年後半に暹羅共産主義青年団に加わった。同じ頃、タイ華僑の最高学府と称されていた、バンコクの中華中学に進学した。党活動開始と同時期から、バンコクで出版されていた複数の中国語日刊紙の文化欄（副刊）に欧陽氏の手になる記事が現れる（巻末の欧陽恵氏の著作目録参照）。

1935年7–8月に開催された、コミンテルンの第七回大会は反日本帝国主義の方針を鮮明にした。この影響もあって、同年12月9日には北京の学生は抗日救国デモを組織した。タイでも、1936年3月21日に暹羅共産党の指導により中華中学の学生ストが勃発した。同中学在学中の欧陽氏もこのストに参加し、多数の仲間と共に退学処分を受けた。

彼等は、党が青年革命家養成の目的で新設に努めた樹人中学師範班に入学した。同師範班の学生の多くは、党の指示を受けて、工場に入り労働者の組織活動に従事した。欧陽氏もタイ貴族が経営するネオンサイン製造工場に就職し、タイ人労働者の獲得に全力を傾注した。暹羅共産党は、シャムと称しながらも、実質は華僑とベトナム人の党であり、当初タイ人やラーオ人の現地人党員はゼロであったので、現地人の獲得を最重要課題としていたのである。しかし、欧陽氏の努力は成果なく終わった。

1936–38年の暹羅華僑界では、様々な読書社が簇生し、文化活動が盛んであった。欧陽氏も複数の共産党系の読書社に属して活動した。1936年10月19日に魯迅が死亡した際、暹羅華僑も盛大な追悼会を実施したが、これを機に、欧陽氏の文化活動上の役割が増大した。

日中戦争が1937年7月に勃発して間もなく、共産党系の抗日団体は暹羅華僑各界抗日救国聯合会（抗聯）に統合された。共産党系の啓明学校に泊まり込んで、革命運動に専念するようになった欧陽氏は、文化界（文抗）、労働界（工抗）の抗日団体で活動すると同時に、漢奸（対日経済ボイコット違反者）に対する制裁（鋤奸）にも関係した。1938年2月12日に抗聯幹部がタイ警察によって一網打尽にされ、国外追放に処されると、欧陽氏は抗日運動の次世代の指導者の一人として役割が増大した。1938年半ばに暹羅共産党に入党した彼は、暹羅華僑中華民族解放先鋒隊（民先）の主任に任じられた。また、国民党系を含む諸抗日団

体の統合を命じられて、1939年初めに9抗日団体から成る抗日救国聯合総会（抗聯総会）の結成に成功した。しかし、その結成記念の映画上映会が、タイ警察に踏み込まれ、生まれたばかりの抗聯総会は機能マヒに陥った。1939年5月、欧陽氏は抗聯総会の指導的活動家10名を率いて延安に旅立った。数年間の訓練ののち、タイに戻る予定であったが、結局今日まで中国に留まることになったのである。

苦労の末、1941年2月に延安に到着した欧陽氏は、数カ月間紡績技術員として働いたのち、同年6月から2年間、延安の魯迅芸術文学院（魯芸）で文学を学んだ。この間、1942年2月頃中共に再入党。4月末には延安まで同行してきた恋人の蘇蘭が別の男性と結婚するという、彼にとっては大事件が生じた。魯芸卒業後、延安大学で8カ月間ロシア語を学んだ時点で、延安整風運動に巻き込まれ、スパイ被疑者として1年2カ月に亘り社会情報部に監禁され苛酷な尋問を受けた。

1945年初に整風運動が終息し、嫌疑は晴れたが、ロシア語学習に復帰する希望はかなわず、農村での宣伝活動を志願した。そこで、妻となる女性と知り合った。日本の敗戦後、延安で特殊訓練を受けた数百人の華僑出身者とともに、東南アジア諸国で革命を遂行するという任務を託されて、タイを目指した。しかし、国民党軍が支配する地域の通過は困難で、海路南下しようとして大連に辿り着いたが、それ以上の南下はできず、結局大連で、ロシア語知識を買われてソ連軍の新聞社、実話報に入社した。1946年10月から同報の廃刊まで5年近くを働いた。同紙廃刊後、中ソ友好協会の中ソ友好報の編集者として1957年まで勤務。この10年余が彼の人生で最も充実した時期であった。しかし、それは長くは続かず、右派として打倒され1957年7月から3年間、河北省の唐山の農場で労働改造、その後は吉林省楡樹県の農村に下放された。胡耀邦の出現で、1979年に名誉回復が実現し北京の民政部に職を得ることができるまで、20年以上を要し、人生の中で最も充実するはずの貴重な40歳代−50歳代の期間を失った。

民政部では、革命史料研究室に所属して革命の途上で倒れた革命烈士の経歴の調査編集に従事し、『中共党史人物伝』編纂に資料を提供した。1982年の退職後、1984年1月に友人と雑誌、『報告文学』を創刊、1986年には、タイ華僑仲間と共に泰国帰僑聯誼会を創立し、同会の主要事業として『泰国帰僑英魂録』（中国華僑出版社、1989−2007年、全6巻）の執筆、編集、出版に情熱を注いだ。同英魂録は、タイで共産党の活動に加わったのち、中国に戻った華僑（含むタイ生の僑生）526人の伝記を一人一人数頁に亘って記している。

本書は、泰国帰僑英魂録の記述に一層の正確さと詳細を加え、あるいは英魂録では語られていない様々な事実を付加している。本書における欧陽氏の語りから、欧陽氏だけではなく、彼の周りの華僑党員の様々な人間模様を知ることができる。例えば、タイ華僑出身で、最後は文革で犠牲になった黄覚生、周介文。抗日戦争中に病死した親友の梁傳燊、国共内戦で犠牲になった葉駝。帰国後中共組織で出世した魯文。暹羅・タイ共産党のトップ、劉漱石、李華、李啓新。タイ華僑で最初に延安に派遣されたが、タイ共産党の路線争いに敗北し

て、李啓新によりタイ共産党の指導部から追放された張慶川。延安で強いられた華僑党員の再入党手続きを拒み続けた余丁如。ベトナム華僑の肖林、同じくベトナム華僑でスペイン内戦にも参加した黄正光、袁挺丙。インドネシア華僑で中ソ友好協会の幹部であった廖経天やマラヤ華僑の彭光涵など。

革命一心で、はるばる海外から共産党員として延安入りしたにも拘わらず、延安で不当な扱いを受けた当事者の回想は、毛沢東指導部が用いた政治手法理解のために、生々しい材料を提供している。

また、第二次世界大戦直後の中国東北地方では、ソ連、中共、国民党、アメリカの四つの勢力が複雑に絡み合っていたが、その実態はいまだに解明されていない部分が多い。この時期に、欧陽氏は中共側の人間として、大連でソ連軍の新聞社に勤務した。彼の同新聞社時代の回想は、当時の中ソ間の特殊な協力関係を生き生きと語っており貴重な記録である。

欧陽氏は、1944年延安整風運動の幹部審査での監禁尋問、1950年代末の右派闘争、それに続く文革において、正に筆舌に尽くし難い体験をした。これは彼だけの経験ではなく、多くの華僑党員が共通に経験したことである。欧陽氏が正にライフワークとして、『泰国帰僑英魂録』の編集に老後の全力を注いだのは、純粋な気持ちで、誠心誠意、祖国と共産主義のために尽くし、志半ばで倒れた華僑の同志たちや、自分自身も含めて思いもしなかった不当な扱いを受けた華僑同志たちの人生を記録し鎮魂しようという強い決意があったからであろう。

欧陽氏は、1935年の党活動開始と同時に文筆活動を始め、文学好きで延安では魯芸に学んだ。1946年に実話報記者、その後中ソ友好協会報の編集。名誉回復後は『中共党史人物伝』出版のための調査、1984年『報告文学』創刊。彼が、記者や編集者として身につけた、情報ネットワーク、調査力、客観的分析力、出版のノウハウなどは、『泰国帰僑英魂録』の編集・出版のために、遺憾なく活用されたと思われる。

欧陽氏のような意欲と手腕を有する人物を得て、初めてタイ華僑共産主義者の詳細な記録が残されることになったのである。それだけではなく、彼は、海外華僑社会および中国における共産主義運動の歴史の一端を後世に残す、得難い語り部としても大きな貢献をすることになったと言っても過言ではあるまい。

村嶋が欧陽恵の名を初めて目にしたのは、泰国帰僑英魂録に於いてである。1990年代初めにタイ華僑の政治運動の調査をした時[1]であった。村嶋が同調査で、最も頻繁にインタビューした劉茂雲氏は、本書にも登場するが、実は欧陽氏をリーダーとして1939年5月にバンコクから延安を目指したグループの一員であった。1996年3月に劉茂雲氏を訪ねた際、

---

[1] この成果は、村嶋英治「タイ華僑の政治活動―5・30運動から日中戦争まで」、原不二夫編『東南アジア華僑と中国』1993年8月　アジア経済出版会　pp. 263-364、村嶋英治著 *Kanmuang Chin Sayam*（『タイ華僑の政治運動1924-1941年）』（タイ語）、チュラーロンコーン大学アジア研究所中国研究センター研究双書第一号、1996年2月、237 p.として刊行した。

欧陽氏が最近バンコクを訪問したが既に帰国したこと、タイ語を話すことができること、を教えてくれた。早速、劉茂雲氏から欧陽氏の北京の電話番号と住所を貰ってバンコクから電話してみた。しかし、実際には欧陽氏は、タイ語を殆ど忘却していたので、意思疎通はできなかった。

それから7年後、村嶋を研究代表者とする、科学研究費基盤（A）「東南アジア大陸部現代史に於ける共産主義運動の多面的根本的解明―タイを中心として―」（2003年-2005年、研究課題番号15202021）の研究助成を得た際、再度欧陽氏との連絡を思い立った。今回は、完璧に日本語を理解できる、鄭成氏（当時早稲田大学アジア太平洋研究センター助手）の、熱心な協力を得て、欧陽氏と連絡をとることができた。

これを機会に、2004年5月に、欧陽氏も名誉理事の一人である北京の中国華僑歴史学会を訪問し、同月19日から22日までの4日間、鄭成氏の通訳で欧陽氏にインタビューをすることができた。更に、同年8月初めに、欧陽氏がバンコクを訪問した際に、5日間に亘って毎日10時間近いインタビューを実施した。

86歳の欧陽氏は、何の疲れも見せずに、長時間の質問に理路整然と、かつ重複することもなく、回答された。改めて同氏の頭脳明晰さと体力に驚いた。この時も、鄭成氏は、バンコク初訪問であるにも拘わらず、何ら観光することもなく、一日中部屋の中で、村嶋の欧陽氏に対する質問とその回答を直ちに的確に翻訳してくれた。このインタビューの過程で、村嶋も鄭成氏も、同氏の人柄と回想に深い感銘を覚えた。

茲にあらためて、欧陽恵氏が、できるだけ詳細かつ正確に歴史を記録しておきたいという我々の真意に理解を示され、快くインタビューに協力されたことに、心より敬意を表するとともに感謝を申し上げたい。

鄭成氏は、欧陽氏が戦後大連でソ連軍の新聞社（実話報）に5年弱勤務した時代の話に、研究上の関心を喚起された。その後、鄭成氏は数回北京を訪問し、単独で欧陽氏にインタビューを行い、かつ「21世紀COEプログラム、現代アジア学の創生」（COE-CAS）の援助を得て、実話報のマイクロフィルムを購入して研究を深めた。鄭成氏は、「国共内戦期の地方レベルにおける中共・ソ連協力関係―旅順・大連地区を中心に―」という博士論文を完成させ、早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程を2009年3月に修了した。博士論文は、鄭成著『国共内戦期の中共・ソ連関係―旅順・大連地区を中心に』（御茶の水書房、2012年）として刊行された。

鄭成氏は長時間に亘る欧陽氏とのインタビューを録音したテープを起こし、欧陽氏の語りに即して日本語の草稿を作成した。更に、この草稿の本書9章以後に当る部分に脚注を加えた。鄭成氏の草稿は2006年半ばには、村嶋に渡された。

欧陽氏は、1936-39年初における、暹羅共産党の主要な若手活動家であるだけではなく、タイ華僑の左派文化活動の中心人物の一人であった。バンコクで刊行された当時の三大華字

紙（『華僑日報』、『中華民報』『民国日報』）の副刊[2]には、前述のように彼の作品が多数掲載されている。欧陽氏は、タイで印刷された当時の新聞などを一切参照することなく、60〜70年前の出来事を、我々のインタビューで語り、同様の内容を泰国帰僑英魂録に書いている。彼が自分の作品が掲載されていると語った、新聞副刊名、論文のタイトル、刊行時期などを、実際にこれらが掲載されている当時の華字紙（タイ国立図書館所蔵）と照合してみると、ほぼ一致していた。彼の頭脳・記憶力の優秀さとともに、彼がこれらの活動に如何に全身全霊を打ち込んでいたかを、窺うことができる。

とは言え、欧陽氏がインタビューで語ったことや泰国帰僑英魂録に記していることを、当時の新聞と照合してみると、時期が1〜2年くらいズレていたり、人物名が違っていたりすることも少なくなかった。また、期間や人数についても、例えば、同じ事柄についても、一カ月と述べたり、ある場合は三カ月と述べたりする場合もある。時期も離れた別個の事柄が一つになっている場合もある。

また、一部には全くの記憶違い、あるいは脚色ではないかと思われる話も見られる。特に歴史上の重要人物（周恩来、葉剣英、ホーチミン、傅大慶、黄文歓など）との出会いについて語った部分にその感がある。文学青年であり、鋭敏な感情を有する欧陽氏は、事実以上に美化・劇化して記憶する傾向があるようだ。しかし、故意に脚色していると言うよりも、後から得た新たな情報に自己解釈を加え、そのように思い込んだもののようである。

欧陽氏の話したことをそのまま印刷するだけであったなら、本書は早期に刊行することができた。しかし、同時代の資料により証言を裏付け、証言の事実的正確さを検討し、注記、補足を加えることができれば、欧陽氏の証言の史料的価値も一層高くなるはずである。

幸い、村嶋は、2005年9月から2年間、早大の特別研究期間制度（サバティカル）により、バンコクに滞在してタイ華僑史関係の調査を実施する機会を得た。この間、村嶋はバンコクの国立図書館に保存されていた日刊華字新聞（バンコクで刊行されたもの。1917年から1950年頃までを対象とし、2008年夏にはタイ華僑社会関連の記事は全てデジタルカメラで撮影を完了した）、およびタイ国立公文書館保存の華僑関係史料を閲覧することができた。

また、2006-7年には、潮州、延安、重慶、漢口、南昌、瑞金、桂林、海南島など、中国各地を訪問し、現地感覚を得ることができた。とりわけ、2007年1月には、本書の草稿を持って厳寒の延安を訪問し、欧陽氏に関連する旧趾を訪ねることができた。

バンコクでの華字紙やアーカイブの文献調査は、サバティカル期間の2年間では、完了せず、それ以降も、できるだけバンコクに出張して継続した。2009年初めからは、タマサート大学中央図書館で、20世紀初頭以来のタイ官報の閲覧も同時に行った。

また、欧陽氏の暹羅共産党での活動を理解するためには、同党史についての知識が不可欠

---

[2] 当時バンコクで出版されていた華字紙には、どの新聞にも紙面一面分をあてた「副刊」欄があった。副刊面には担当の編集者が依頼した原稿あるいは読者の投稿原稿を掲載した。副刊編集者は、学生自治会や読書社等に全紙面を提供することもあった。本書第四章第一節を参照のこと。

である。しかし、暹羅共産党史についての詳細で信頼できる研究は、2005年時には残念ながら存在していなかった。村嶋は、2003年から3年間科研費による調査で、暹羅共産党に関する相当の資料を収集した。これに2005年以降のバンコクでの文献調査の成果をも加えて、2009年末に「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930-1936）」（『アジア太平洋討究』第13号、133-212頁）を刊行した。なお、上記論文を増補改訂してタイ語訳したものを、『暹羅共産党の誕生』というタイトルで2012年9月にマティチョン社より刊行することができた。また、幸いにこの間に、トン・チェームシーやチャオ・ポンピチットなどタイ共産党の元幹部たちが、暹羅共産党史に関する新情報を発表したので、これらも利用することができた。

村嶋は、鄭成氏の通訳で得た情報のうち、鄭成氏作成の草稿では省かれていたものや、欧陽氏が別のところに既に出版している文章の内容を追加した。続いて、前述の調査を踏まえて、同時代の報道やその他の資料と照合し、本書各章の記述をできるだけ事実に近づけ、かつ背景理解に資するために、大幅な補注・補足を加えた。

更に、村嶋は全草稿をクロノロジーに従って再整理・再構成し、また、内容の矛盾点をできるだけ整合的に修正し、最終バージョンを作成した。

本稿では、欧陽氏の記憶違いは、できるだけ本文内に［　］を用いたり、補注で修正した。村嶋が補足した部分についても、同様に［　］を用いて範囲を示した。また、本書は華字紙の引用が多いため、日付を簡略化して例えば『華僑日報』1938.1.1と示した。これは1938年1月1日号の意味である。

本書は、事実をできるだけ明かにし、正確に記述しようと努めた。但し、編輯の過程で思わぬ誤解や推測が生じた可能性も皆無とは言えまい。本書の記述についての責任は、最終バージョンを作成した村嶋にあることを明記しておきたい。

本稿の刊行が可能になったのは、2009年度末期に、早稲田大学アジア太平洋研究センターが、一般研究費を積極的に活用する、リサーチ・シリーズの刊行を企画したことによる。同シリーズの企画がなかったならば、本稿の刊行は困難であったであろう。ここに同センターに感謝の意を表する。

2012年8月23日　　著者

謝辞、本研究は科研費（研究課題番号15202021及び19201053）の助成を受けたものである。

第一章　バンコクで育つ

第一節　タイに出稼ぎに来た父親

私の父親は、広東省佛山専区三水県[3]の農民であった。しかし、農業での生計は難しかったため、若い頃母を連れてタイ（当時の国名は、暹羅：シャム）に渡って来た。生活苦から逃れるために海外に渡った広東人には、タイを目的地にした者も少なくなかった。父が、タイを行き先に選んだ最大の理由は、当時広東からタイに行く船賃は安く、5元と手頃であったためである[4]。

タイを目指す華僑は、デッキ・パセンジャー（甲板客すなわち三等客）として乗船し、半ズボン一枚に裸足という出で立ちで、持ち物は、睡眠用のゴザ一枚、天秤棒一本、天秤棒の前後両側に吊す桶二個ぐらいしかなかった。酷暑の南洋への旅では、毎日体を洗う日課は欠かせないので、桶の一つは体を洗う容器として使い、もう一つの桶は衣類を入れる容器として使った。半ズボン一枚とゴザ一枚さえあれば、タイに行けるという感覚が庶民の間に定着していた。

南中国-タイ間を往来する船のなかには、汽船の外にも、船首に竜の頭の飾りがある木造帆船（紅頭船という）もあった。紅頭船は、風力を利用して広東省など中国南部地域とタイとの間を往復して、広東産の野菜をタイまで、そしてタイの米を広東に運んだ。船賃すら捻出できない貧しい人たちでも、船の清掃などの雑役を船主に申し出れば、タイまで無賃乗船することができた。

タイに入国するに当たっては、［1930年代初まで］パスポート所持やビザ取得といった面

---

[3] 1990年代より広東地域有数の工業開発区となっている。

[4] 欧陽恵氏（以下、欧陽氏）の父親は香港から出港したと思われる。香港からバンコク行きの汽船は、出港後北上して汕頭に立ち寄り、汕頭からバンコクに向かう場合が多かった。汕頭-バンコク間は汽船で7～8日である。この航路は、19世紀末にドイツのN.D.L.（Norddeutscher Lloyd, 北独ロイド社）のNorth German Lloyd Orient Lineによって独占されていた。日露戦争後の1906年5月に、日本郵船会社（N.Y.K.）が汕頭-香港-バンコク航路に新規参入した。日本郵船の同航路は、日本-香港間の既存定期便をバンコクまで延長したものではなく、別に汕頭-香港-バンコク間に支線航路を新設したものであり、日本からの乗客や貨物は、香港で乗継もしくは積替をしてバンコクまで運ぶものであった。N.D.L.の独占時代は、汕頭-バンコク航路のDeck Passenger（3等客）の片道船賃は15バーツであったが、日本郵船は5バーツで安売りし、一方N.D.L.は同運賃を3バーツと5分の1に引き下げて対抗し、猛烈な値引き競争が生じた（*Bangkok Times*, 9 June, 11 July, 20 July 1906）。しかし、赤字が増大した日本郵船側は、1907年に入るとN.D.L.側と交渉し、①北独ロイド社は1万5000ポンドの報償金を6年賦にて日本郵船に支払うこと、②日本郵船は用船中の外国汽船4隻をただちに北独ロイド社に引き渡すことに合意して、1908年1月に同航路から撤退した（日本郵船株式会社『日本郵船株式会社百年史』、東京、1988年、pp. 166-167）。1年後の1909年1月には、張見三や鄭智勇（二哥豊）らを中心に在タイの各属華僑やタイ人が出資して「華運輪船公司」を設立し、再び北独ロイド社と競争したが、うまくいかなかった（タイ国立公文書館文書（National Archives of Thailand、以下NATと略す）Ro.5Bo.12/15, Ro.5No.8.1/555）。

倒なことは要求されなかったので、誰でも簡単にタイに入ることができた[5]。

タイの港に到着した時、友人や親族などの出迎えがあれば、ありがたいことは言うまでもない。しかし、出迎えがない場合でも、どこかの屋根の下で一夜をしのぐことは容易であった。

中国人移民にとってタイの魅力は、安い船賃と入国の無規制だけに止まらない。タイの米は質の割には安く、海岸では簡単に魚を獲ることができるほど水産資源も豊富であった。タイは移民者にとってあまり苦労しなくとも腹を満たすことができる土地として人気があった。

移民者の中には、勤勉と才覚によって一世代のうちに富を築き、故郷に錦を飾る者もいた。故郷に立派な家を立てることができた帰僑（中国に帰って来た華僑）は、言うまでもなく周囲の羨望の的であった。同時に、これはまた新たな移民伝説を作り、出稼ぎ希望者を増加させた。

来タイした私の父は、港湾仲仕（荷役人夫）、タバコの立売りや露店商売などの仕事を転々としているうちに、建築土木の仕事に落ち着いた。その後、真面目に働き、ついには数人の部下を持つ親方となった。ヤワラート通りにある天華医院[6]からヤワラート中心方向に歩き、最初の交差点（チャロームブリー交差点）を渡った角にあった七階建ての七層大厦（チェット・チャン）[7]の基礎工事は、父がやったものである。年少の頃、私は工事現場で労働者の砂利運搬回数を記録する手伝いをした記憶がある。

事業で一応の成功を収めた父は、二人の水商売の女性を妾としたので、母との仲は悪化した。父は用事がなければ、自宅に戻らなくなった。それでも、家族の生活費は定期的に送ってきた。親子として共に過ごした時間が少なかったため、私と父との絆は薄いものであった。

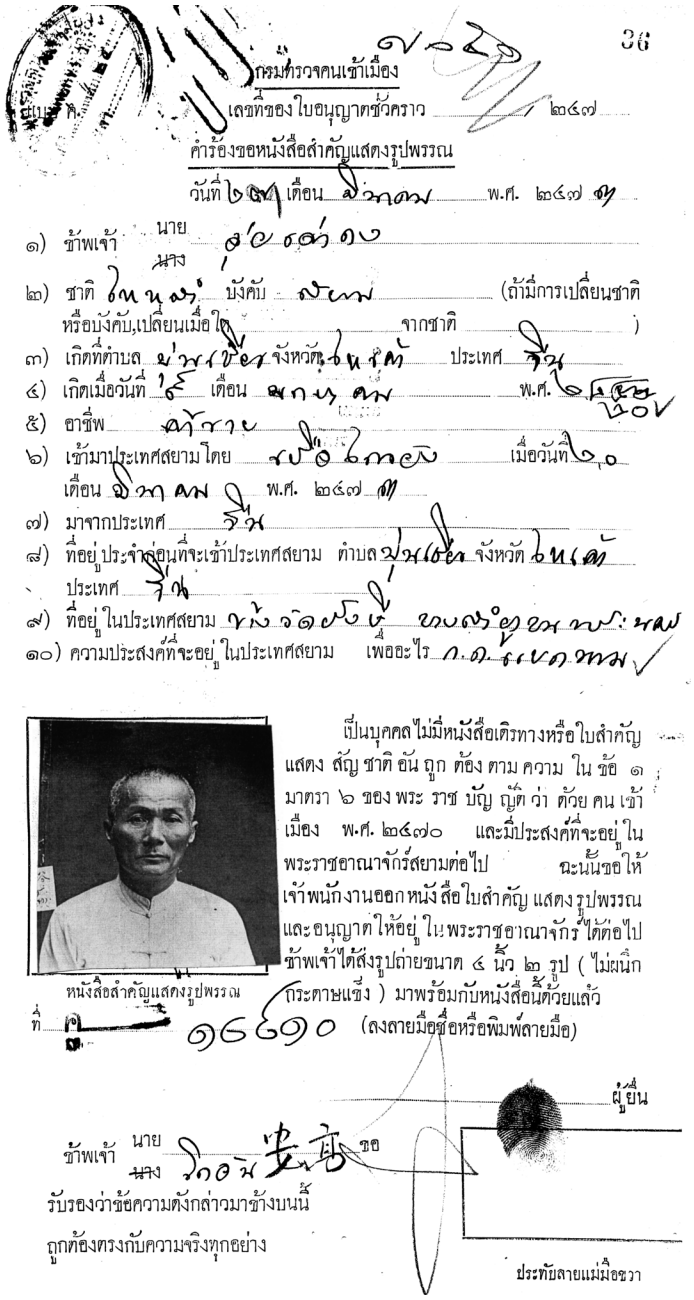
1932年前後、40歳代の父は、人生最大の不運に見舞われた。発注者が工事代金を支払わず、他方、人夫たちからは労賃支払を繰り返し要求された。年内に約束の労賃を払うことが

---

[5] 1920年代後半の七世王時代に華僑の労働移民がタイ人の仕事を奪うという警戒心がタイ指導者に広がったが、それ以前においては、外国人移民は大いに歓迎された。1905-6年当時の新聞記事は、しばしばタイの労働力不足を経済発展の制約要因であると、指摘している。例えば、「シャムで、ゴムなど工業原料となる農産物の栽培ラッシュが生じない理由は、主として労働力問題に起因する。シャムの労賃は東洋のどの国よりも高いであろう」（*Bangkok Times*, 6 June 1905）とか、「シャムの中国人に対する課税は、仏印より安い。ところが、シャムの中国人苦力の労賃は東洋のどの国よりも高い。賃金が高いにも拘わらず、中国人苦力をシャムの鉄道建設現場や鉱山で雇うことは容易ではない。それはシャムではどこにも就業の機会が多いからである」（*Bangkok Times*, 22 March 1906）、と。

[6] 天華医院（現在の正式名は「泰京天華慈善医院」）は、タイ語でRong Phayaban Chinという名で知られる。1905年9月19日にチュラーロンコーン王を招いて開院式を盛大に挙行し、翌9月20日、即ち国王52歳の誕生日から患者の診察を開始した。在タイ華僑の大部分は、5つの言語グループ（潮州、客家、広東、海南、福建）のどれかに属するが、この5属が共同で行った最初の事業が天華医院の建設であった。総工費16万バーツで、ベッド数250、運営費は寄付金によった（*Bangkok Times*, 20 Sept. 1905）。タイ華僑のナショナリズム勃興と天華医院創立の関係については、村嶋英治「タイ華僑社会における中国ナショナリズムの起源」（『岩波講座、東アジア近現代通史、第二巻』、岩波書店、2010年所収）を参照のこと。

[7] 現在、旧七層大厦の場所には、China Town Hotel（中国大酒店）が建っている。この場所からヤワラート通を挟んだ対岸が旧六層大厦（現在はスカラ・フカヒレ・ヤワラートの店が建つ）である。この六層大厦の奥に欧陽氏の生家が現存している。



36

กรมตำรวจคนเข้าเมือง

เลขที่ของใบอนุญาตชั่วคราว ๒๔๗

คำร้องขอหนังสือสำคัญแสดงรูปพรรณ

วันที่ ๑๗ เดือน ธันวาคม พ.ศ. ๒๔๗๗

๑) ข้าพเจ้า นาย/นาง

๒) ชาติ ไหหนำ บังคับ สยาม (ถ้ามีการเปลี่ยนชาติหรือบังคับ,เปลี่ยนเมื่อใด จากชาติ)

๓) เกิดที่ตำบล จังหวัด ประเทศ จีน

๔) เกิดเมื่อวันที่ เดือน พ.ศ.

๕) อาชีพ ค้าขาย

๖) เข้ามาประเทศสยามโดย เมื่อวันที่ เดือน ธันวาคม พ.ศ. ๒๔๗๗

๗) มาจากประเทศ จีน

๘) ที่อยู่ประจำก่อนที่จะเข้าประเทศสยาม ตำบล จังหวัด ประเทศ จีน

๙) ที่อยู่ในประเทศสยาม

๑๐) ความประสงค์ที่จะอยู่ในประเทศสยาม เพื่ออะไร

เป็นบุคคลไม่มีหนังสือเดินทางหรือใบสำคัญแสดงสัญชาติอันถูกต้องตามความในข้อ ๑ มาตรา ๖ ของพระราชบัญญัติว่าด้วยคนเข้าเมือง พ.ศ. ๒๔๗๐ และมีประสงค์ที่จะอยู่ในพระราชอาณาจักรสยามต่อไป ฉะนั้นขอให้เจ้าพนักงานออกหนังสือใบสำคัญแสดงรูปพรรณและอนุญาตให้อยู่ในพระราชอาณาจักรได้ต่อไป ข้าพเจ้าได้สังรูปถ่ายขนาด ๔ นิ้ว ๒ รูป (ไม่ผนึกกระดาษแข็ง) มาพร้อมกับหนังสือนี้ด้วยแล้ว

หนังสือสำคัญแสดงรูปพรรณ

ที่ ๑๖๑๑๐

(ลงลายมือชื่อหรือพิมพ์ลายมือ)

ผู้ยื่น

ข้าพเจ้า นาย/นาง ขอรับรองว่าข้อความดังกล่าวมาข้างบนนี้ถูกต้องตรงกับความจริงทุกอย่าง

ประทับลายแม่มือขวา

写真1　パスポートなしでタイに入国した華僑にタイ政府が発行した証明書

できなかった父は、年明け早々に発注者宅を訪ねた。ところが、発注者とは話しもできないままに逃げられてしまった。心労とショックの余り、父は急に体調をくずして吐血が止まらず、そのまま帰らぬ人となった。私が廣肇公学（在タイ広東人の団体が創立した小学校）の小学生だった時のことである。

写真 2　欧陽恵氏のバンコク華僑街の生家付近（2004 年 8 月撮影）

私は自分の正確な生年月日が、何年何月何日なのかを知らない。1941 年に延安に到着後、履歴書を記入する際に、自分の年齢がはっきりしないので、覚えやすいようにゴロを合わせて、「1920 年 9 月 20 日生」[8] とした。それ以降の履歴書や身分証明書などは、一律にそれに従って記入した。1982 年に中国民政部を退職した後、延安行きのためにバンコクを離れて以来、初めてバンコクに戻って姉と会った時、姉の出生証をもとに推測したところ、私の本当の生年は、1918 年であることが判った。しかし、何月何日なのかは知る由もない。

生家は、バンコクの中華街、ヤワラート通りとチャローンクルン通りの間を抜ける真君爺巷（または六層楼后街）という狭い路地内の二階建てショップハウス[9] である。

ここは、南星戯院（映画館）の裏手に当たる。姉の夫は南星戯院で映画上映の仕事をしていた。また、1938–39 年当時の暹羅共産党負責人、李華が潜んでいた棟割長屋の一室も、生家から僅かに 40〜50 メートル離れた場所にあった。共産党員になった私は、李華の連絡員を務めたことがある。

私の生来の姓は、「区（おう）」で、バンコクの中華中学の学生時代、学校で用いた名は

8　欧陽氏の中華人民共和国『老幹部離休栄誉証』（1982 年 10 月 26 日発行）によれば、同氏は 1920 年 9 月生、「籍貫」広東省高鶴県、「参加革命工作時間」1935 年 9 月、「原工作単位」民政部革命史料研究室、「原職務」司局級待遇、「工資」行政、「級別」12 級、である。

9　2004 年 8 月に欧陽氏、劉茂雲氏、村嶋、鄭成の 4 名で生家を訪問した。現在は欧陽氏とは無関係の人が住んでおり、「合来」という字号（屋号）で、飲み物などを売る小商売をしていた。

「区炳発」[10]である。バンコクの活動家や延安では、「区恵雄」という名で知られていた。1946年に大連で実話報に就職した時、「区恵雄」という名ではバンコクの国民党側にも知られており秘密保持上不都合なので「欧陽恵」と改姓改名した。区と欧陽とでは大分違うように見えるが、私の姓は正しくは区（おう）と発音し、区（く）ではない。しかし、しばしば後者に読み間違えられて不便であったことも、改姓のもう一つの理由であった。

私は9人兄弟姉妹の9番目である。一番上は男で、2歳の時に中国の郷里で病死した。2番目も男で、7歳の時に中国で病死。3番目は女で、17歳でよそに嫁いでから連絡が途絶えてしまった。4番目は生まれて半年もしないうちに病死した。5番目は女で、生まれて間もなく近隣の家に養子にやられた。7番目は女で、中国の故郷で生まれ、10歳の時タイに来た。18歳の時に結婚して家を出たのちは連絡が絶えた。1番目から7番目までは中国生まれで、私とは母親も違う。8番目は、タイ生まれで生母も私と同じ姉で、前述のように私が退職後40数年ぶりに訪タイした時に会うことができたが、その後死亡した。9番目が私である。

第二節　華僑社会とタイ社会

裸一貫でタイにやって来た華僑たちが、まず従事する主な仕事は、港でする米運搬の港湾仲仕か、バンコク市内の人力車夫[11]かであった。まだ車が珍しく、整備された道路もあまりなかった時代には、タイの米輸出には人力の荷役が欠かせなかった[12]。タイ産の米はサイゴン米とともに、優良米として知られ、香港、中国、シンガポールなどへ大量に輸出されていた。とりわけ香港やシンガポールでは、タイ米の店頭価格はタイ地元の数倍に跳ね上がったようで、実にいい商売であった。米の商売[13]で巨万の富を築き上げた華僑は、少なくなかった。

10　『泰国中華中学校友会特刊、1993年』（バンコク、1993年）の228頁には、「初中第六級全班同学名単」として、101名の同級生の名が記載されており、その中に、級友の梁傳燊（りょう・でんしん）、陳立恵とともに、「区炳発」の名が見える。中華中学の初中第六級生は通常の場合、1937年12月に卒業である。

11　1910年代に、バンコクに来た華僑男性の最初の仕事として、代表的なものは、人力車夫である。人力車は1930年代半ばまで、バンコクの主要な交通手段のひとつであった。バンコクの人力車数は1928年12月当時、3000台に制限されていた。多すぎると交通に障害があるからであった（『華暹新報』1928.12.27）。しかし、1935年春に三輪自転車（サームロー）が出現すると、急速に人力車に取って替わった（『華僑日報』1936.7.3）。一方、バンコクで自動車が増えだしたのは、1920年代後半からであり、この頃、従来からの馬車が駆逐された。なお、最初のタクシーは1927年に出現した。

12　輸出のためのタイ米は袋詰め（1袋は、白米は100キロ前後、モミは79キロ前後の重量となる）され、バンコクからコ・シーチャン島近くまで小型艀（ライター）で運ばれたのち、大型の外洋船に積み替えられた。例えば、白米4万1705袋（約4170トン）とモミ5万7183袋（約4493トン）を積んで、1935年12月13日に、同島近くから南米に向け出帆したFriesland号は、積み替えに8日間を要している（NAT Ko.To.67/247）。

13　米ビジネスには、①農民からのモミを買う仲買、②精米所（タイでは、中国語で「火礱」あるいは「米較」と称した）、③米の輸出商、の三段階がある。①、②は華僑商人の独壇場である。例えば②に関して、1936年2月5日付けで、タイ経済省商務局が作成したバンコクの精米業者一覧には、55の業者名（字号）が記されているが、このうちEast Asiatic Co., Ltd.一社を除けば、残りはすべて漢字名である（NAT Ko.To.67.10/37）。一方、③は西洋米商7家、三井物産、華僑、インド人、など多様である（NAT Ko.To.67.10/17, 21、『華暹新報』1928.12.26など）。

同じ米の商売を手がけるのなら、地元出身のタイ人の方が資金、人脈、言葉などの面で、有利ではないかと考えられるかもしれない。しかし、タイの米商売は、華僑が牛耳っていた。何故であろうか。その理由としては、次のような点を挙げることができるだろう。まず、タイに来た中国広東省出身の農民は、香港、広州、汕頭などの大都市の周辺地域に居住していたので、外部の世界に接するチャンスに恵まれ、広い視野を持っていたこと。次に、彼らは、初歩的ではあるにせよ、近代的な技術を身につけていたこと。更に、それらを積極的に利用しようとする意欲が高かったこと、など。他方、恵まれた自然環境下で生活するタイ人の農民は、汗を流さなくても容易に収穫に恵まれるためか、労働に対する熱意に乏しかった。彼らが、中国人移民から「怠け者」と軽蔑されたのもそのためである。

華僑は商売に精を出すと同時に、官界の有力者とのパイプ作りも怠らなかった。彼らはタイ高官とのコネを活かして、自らの事業を展開した。無論、便宜を提供した高官が、相応の見返りを得たことは言うまでもない。こうした華僑商人とタイ高官との間の共存・癒着関係は、かなり早い時期からタイ社会に定着した[14]。

華僑商人は、自分の利益を間違いなく確保したばかりでなく、タイ人にも利益を与えた。たとえば華僑は、病院や消防車などの公共施設の設備の充実のために積極的に寄付を行い、場合によっては、自ら施設までも設立した[15]。公共施設が少なかった時代なので、彼らの公

---

[14] 華僑商人が中央有力者に財産や利益を提供し、その見返りとして庇護と利権を獲得する事例は、タイ国立公文書館文書の中に多数見出すことができる。一例を挙げれば、1888年にプーケットのタラーンの華僑ルアン・アラームサーコンケートがワチヌナヒット皇太子の執事に提出した訴えの文書は次の内容である。私（ルアン・アラーム）はタラーンの市場の建物55室を皇太子に献上して子分（Kha）として身を献じました。そして1888年から1993年までの6年間につきタラーンの徴税請負をつとめるべく申請をしました。ところが、1888年2月10日の真夜中に、上記55室は放火されて全焼しました。この以前にも私は当地の徴税請負人を二年間務めましたが、人民を苦しめるようなことはしなかったので、タラーンに他の地方から数十家族が移住してきたほどです。それ故、人民が放火する理由はありません。但し、私が部屋を皇太子に献じ、皇太子から6年間タラーンの徴税請負人に任じるという御沙汰があったことを知った、私の前任の徴税請負人ルアン・ナリンボリラックは、プーケットの役人とつるんで、私の経営する鉱山の苦力を、阿片密売を理由に捕らえて籐の笞で打ちました。阿片密売は事実無根のでっち上げです。私は、鉱山は停業せざるを得なくなりましたが、徴税請負人の任命については何卒宜しく御願い申し上げます、と（NAT Ro.5 KoSo 6.6/1）。この例からも、華僑と中央有力者との間に露骨でドライな利益の交換関係、即ち華僑が中央有力者に物を差し出し、直ちに見返りの権益と庇護を求める実態が明瞭である。タイ国立公文書館所蔵のダムロン親王個人文書ファイルには、長期間内務大臣の地位にあり有力王族である同親王に庇護を求めるために地方在住華僑が同親王に宛てた同種の文書が多数保存されている。しかし、ダムロン親王は1910年頃になると、華僑が王族に期待して頼ってくる度合いは、減ったと述べている。同じ頃、同親王は中国の革命は、百年経っても成功しないだろうとも述べている。これは、辛亥革命を目前にして、このような認識を示したダムロン親王の見識のなさを示すものなのか、或いはタイの歴史学の父と称される同親王の卓見を示しているのか、興味深いコメントではある。

[15] 華僑の募金により、バンコクの中華街に建設され今日まで存続している病院として、「天華医院」（1905年9月20日開院）と「中華贈医所」（1921年開院）がある。また1930年頃までバンコクの中華街では毎年のように大きな火災が発生し、当時のタイ官報にも被害状態の詳細な報告が掲載されているが、華僑は、消防団を作り、募金により消防車や消防船を購入した。例えば、天華医院と同一の華僑指導者が作った消防組織である暹羅網咯（バンコク）滅火公会は、1924年3月15日に会合を開き、従来の消防器具が古くなったので買い換えることを協議している（『僑声報』1924.3.8）。

益のための義援金活動はタイ政府からの信用を高めることに役立った。これらを手掛りにして、タイ政府から官爵位や勲章を獲得することに奔走する華僑も少なくなかった。

タイ人と中国人移民との間には、いわゆる民族間紛争といったものはほとんど存在しなかった[16]。中国人移民とタイ人の間の通婚は何の違和感もなく、ごく自然のこととして人々に受け容れられていた。華人ながらタイの王位についたタークシン王（鄭信王、トンブリー王朝）[17]をめぐる伝承は、中・タイ両民族間の友好ムードを高めた。

自発的にタイ語を学習するだけではなく、タイの習慣や伝統も学んで、タイ化に努めようとする中国人移民たちも存在した。特に、蓄財に成功し、ある程度の社会的地位も得た華僑には、タイ社会での一層の発展のために自ら進んでタイ化する傾向が強かった。彼らはタイ式の名前を用い、日常生活において如何にタイ人の生活習慣を身につけるかに腐心していた。

タイ社会である程度の資産を作った富裕華僑の子弟には、教会学校（ミッションスクール）[18]に学び、中等教育を受ける者が多かった。一方、一般華僑の子弟は、せいぜい小学校

---

[16] いうまでもなく、これは欧陽氏の見解。実際は、問題がなかったわけではない。タイ華僑が近代的中国国民意識をもち始め、華僑としての集団的活動を開始したのは、チュラーロンコーン王治世末期の20世紀初頭である。1905年7-8月にタイ華僑は中国内外の中国人と連携して、アメリカの不当な中国人入国制限に抗議して、米貨ボイコット運動を行った。タイ華僑社会の継続性のあるメディアとして1904年10月10日に、日刊華字紙『美南日報』が発刊された。この後、華僑社会は保皇派、革命派に別れて抗争が発生した（前掲村嶋論文「タイ華僑社会における中国ナショナリズムの起源」参照）。この前後よりタイ支配層に華僑に対する警戒心、不信感が生じた。その理由は、第一に、華僑に中国指向が強くなり、反面タイへの同化傾向が弱くなったからであり、第二に、清国政府が、華僑社会において革命派が増大することを恐れて、華僑指導のために積極的に介入するようになったからである。ところで、チュラーロンコーン王は華僑を大切にしたが、その子のワチラーウット王は華僑を「東洋のユダヤ人」と見て厄介視したと言う見方が、タイ華人の間では一般的であるが、チュラーロンコーン王もその治世末期には、華僑に対する警戒を明確に表明している。例えば、1909年8月に清国政府の後押しでタイ華僑が暹羅中華商務総会（後の中華総商会）の設立公認を求めた時、同王は禁止はしなかったが公認は拒否した。ワチラーウット王治世の1918年には、華僑が設立した私立学校に対する規制が開始された。更に、プラチャーティポック王時代に入ると、華僑労働者がタイ人の職を奪うことを危惧したタイ政府は、1927年から華僑入国抑制政策を開始した。1930年には華僑の中国国民党の活動も禁圧した。この後の人民党政権時代に入ると、欧陽氏も本書で述べているような、反華僑政策が実施された。反華僑政策は、1939-44年のピブーン政権時代にピークに達した（村嶋英治『ピブーン、独立タイ王国の立憲革命』、岩波書店、1996年）。戦後戦勝国となった華僑は、長年の華僑抑圧政策（華僑の表現では、「排華」）に反発して、1945年9月には暴動を起こした。この前後一年間は、華人・タイ人の間に小競り合いが頻発した。

[17] 村嶋の2006年の実地調査によると、潮州の澄海県（現在汕頭市の一部）を流れる韓江沿いの鄭皇達信公園内に「清乾隆歳次任寅年建、暹羅鄭皇達信大帝衣冠墓」（公元1985年秋季重修）の石碑が存在する。墓の脇には「澄海県文物保護単位『鄭信衣冠墓』澄海県人民政府、1984年12月5日公布、1990年12月5日立」の石碑が置かれている。なお、タークシン王を倒したチャクリー王朝は、当然タークシン王に対しては冷淡であった。タイ人がタークシン王を公然と賞賛できるようになったのは、1932年立憲革命の後である。

[18] タイへの近代教育の導入者は、キリスト教会だといっても過言ではない。19世紀末から20世紀初頭にかけて、カトリック教会は、バンコクおよびシャム湾臨海の中部タイ地方、プロテスタント（主にアメリカの長老派教会、同会は1828年にタイで布教活動を開始した長い歴史を有する）が北部タイにおいて、地方都市のみならず農村部にも、多数の初等教育学校を開設した。タイ政府が学校の普及に力を入れ始めた1920年代以降、地方のミッションスクールの殆どは公立学校に移管された。しかし、バンコク、チェンマイではミッションスクールは名門私立学校として今

写真 3　汕頭市韓江の岸のタークシン王の墓（2006 年 7 月撮影）

に学んだだけで、その後は見習い[19]として就業した。ここから両者の人生は完全に分かれることとなる。生活の重圧下に苦しむ一般華僑の子弟と比べて、何の心配事もなく快適な毎日を享受できる教会学校に進んだ者たちとでは正に雲泥の差が生じた。

教会学校に通う女子学生が身に纏った白いブラウスと赤いスカートのユニフォームは、いかにも上流階級らしい風情を漂わせていた。私とはまったく無縁な存在であり、バンコクの街頭で白いブラウスと赤いスカート姿の教会学校の女学生を見かけるたびに、いつも羨望と

日まで継続している。教会学校は、タイ語と外国語（英語か仏語）教育が中心だが、華僑が多い地域では、中国語と英語教育を主とした学校も作られた。教会学校に少し遅れ、1910 年代には、華僑学校（華校）の開設が、バンコクでも地方でも始まった。しかし、タイ文部省から私立学校として認可された華僑学校と雖も、教員・施設ともに整った学校の数は少なく、多くは教師一人がショップハウス（長屋）の一室を借りて開いた、実質上私塾程度のものであった。

1920 年代半ばに、華僑子女を対象とし、中国語も教えたバンコクのミッションスクールとしては、例えば、アメリカのミッションが創立した、クルンテープ・クリスチャン学校（漢字名は盤谷学校、サートン路に現存）には、華文部が存在した。『僑声報』1924.7.3 には、「盤谷学校華文部」の名で演劇上演会への寄付に感謝する広告が掲載されている。この外にも、存真女学校（1919 年創立。存真学校もしくはサッチャピタヤー学校としてサートン路がチャローンクルン路に突き当たるバーンラック側に現存）、カトリックの玫瑰（まいかい）学校（タラート・ノーイの河畔に現存）があり、この 3 校の男女学生総数は 200 人前後（『僑声報』1924.6.7）であった。盤谷学校は、創立以来粤（広東）語による教授を行ったが、粤属以外の華僑子弟にも便利なように、国語に精通した華文教師を招いて 1924 年 5 月 15 日の新学期から国語による教育に変更した（『僑声報』1924.4.25, 1924.5.16）。

[19] 工場の少年見習い工は、「学徒」と言われる。

不満の混じった気持ちが湧いてきたものである。

他方で、タイを未開地と見なしてタイ人を蔑視し、自らに優越感をもつ華僑も少なくなかった[20]。私の父も周りの人々に、タイに来ることを「過蕃」と表現していた。蕃とは、中国語で属国、または未開の地域を意味する。「過蕃」とは、すなわち未開の地に行くという意味である[21]。自分自身も半ズボン一枚しか身に着けていないという身なりなのに、よくもほかの民族を未開と決めつけることができたものである。

タイにおける華僑の密集地域では、「老唐」とか「新唐」という言葉をよく耳にした。「老唐」とは、タイに定住している古い華人のこと、「新唐」とは、タイに来てまだ日が浅い中国人のことを指す。両者の間には歴然とした区別があり、中国人移民同士はこの「老唐」、「新唐」という言葉を用いて互いの位置関係を確認し合ったものである。

第三節　タイ人民党政府の同化政策と蟻光炎

1932年に立憲革命で権力を手にした人民党政権は、中国人移民のタイ人化を促進する一連の政策を強化した[22]。これらの政策により、華僑学校（華校）の中国語授業時間は大幅に減らされた。地理や歴史の科目も中国のものではなくタイの地理と歴史を教える内容に変更された。華僑の多くは、これらの強制を奴隷化教育と言って非難した。

タイ政府は、華僑がタイで稼いだ収入の一部を故郷に送金することに対しても厳しい目を向けた。人によって送金額は様々だが、タイで得た収入の殆どを送金してしまう人などいる筈はない。それにも拘わらず、タイの富が中国に流出している、と騒ぎ立てるタイ人は少なくなく、タイ社会の世論となった。この富の流出に何とか歯止めをかけなければならないと

20　華僑が共同で華僑学校を創立した主要な理由の一つは、「土人」（すなわちタイ人）に「異化」され中国性を喪失することに対する恐怖であった。これは1920–30年代にバンコクで発行されていた華字紙の記事に随所にみることができる。

21　「過番」も同じ意味。『華僑日報』1937.2.27に許超然が「過番」と題した記事を書いている。その文章は「『過番』両字、在昔視為掘金創業娶妻生児之代名詞、此種代名詞確亦有其相当之価値与出洋者之願望、所以外人常言華僑以一籃一身、一到外洋、即有淘金娶妻生児之机会……」で始まっている。タイ華人出身で国民党左派の知識人である黄征夫は、タイ人に対する中国人の自負を次のように書いている。「タイ国が排華政策中、最も力を入れているのは同化政策である。タイ国の文化には優れている点もないわけではないが、中国文化と比較すれば正に大物と小物の差がある。タイ国が如何に同化政策に努めても華僑自身の民族意識と彼らが継承してきた中国の体系は決して失われることはない」（黄征夫「与暹羅政府領袖論暹羅親日排華政策錯誤的公開信」、『暹僑救亡与中暹合作半月刊』第1期、中華民国1927年3月15日刊）。同時に彼は、タイ高教育層の方も、華僑を見下していることを、次のように書いている。「在暹羅方面、則因為朝野人士来対中国文化及此個大国家民族的歴史、毫無研究、又向来受英法和日本的破壊、把中国看作一個比暹羅還不如的国家、其次暹羅人把旅暹華僑代表整個的中国、而実際上旅暹華僑大多半数都広東的潮州人、潮人雖也是勤労的中国人却、多是没有受過教育、不能代表中国文化和較好部分的中国民族意識、因此暹国朝野尤其是一班具有世界智識的当局、対外中国、只存軽視的心理」（黄征夫「暹羅在中日大戦及世界大戦中的地位与傾向」、『暹僑救亡与中暹合作半月刊』第2期、中華民国1927年5月1日刊）、と。

22　1932年6月24日の立憲革命後の人民党政権の華僑学校政策は、前掲村嶋論文「タイ華僑の政治活動―5.30運動から日中戦争まで―」および前掲村嶋著『*Kanmuang Chin Sayam*（タイ華人の政治運動、1924–1941年）』（タイ語）参照。

考えたことも、タイ政府が華僑同化政策を強化した一因であった。

この外にも、タイ政府は華僑のタイ化を促すために次のような政策を実施した。従来華僑は自分自身の名で合法的に土地を購入することができたが、これができないようにされた。中国籍の人間が企業の法人代表に就くことも認められなくなった。中華街の金行は、タイ籍の従業員の名を借りて登録せざるを得なくなった。また、漢字で書かれた看板や広告に対しては、タイ語のものよりも数倍も高い看板税が課されるようになった。バンコクの中華街に海天楼という有名な中華料理店があったが、この店の看板にもタイ文字が加えられ、「海天楼」という三つの漢字は看板の片隅に追いやられてしまった。

タイ政府の強引な同化政策に、華僑は強く反発した。私の父も、一貫して不満であった。なかは、ストライキ[23]をもって抵抗することを考えた人もいた。

華僑リーダーの蟻光炎［1879–1939, 1936年5月13日に中華総商会主席就任］は、華僑の激化した気持ちをなだめ、抵抗すればするほど、相互の対立が深まるだけだ、タイを助けた華僑出身のタークシン王を模範にしてタイ政府に協力すべきである、と唱えた。暹羅共産党は、タイ政府に抗議するために華僑学校の学生ストライキや商業ストライキなどを考えたようだが、蟻光炎の説得によって止めたという。

タイ語を奨励し中国語学習を制限する政策に対しても、蟻光炎は「他人様の国に来て生活するのに、その国の言葉も話せないようでどうするのだ」と言って、タイ語学習の意義を認めた。更に彼は、「昔、タイ入国の際、タイ政府から煩わしい手続きや高い入国税を強いられなかったことに深謝すべきだ。もう少し時間が経てば、情勢は必ずよくなるだろう」と、タイ社会との調和的共存を唱えた。彼は実に器が大きく、広い視野を備えた人物であった。数十年後の今日においても、当時の蟻光炎の言行は多くの点で啓発的である。

現地社会との調和的共存を図ることに関して、暹羅共産党書記長を［1936年頃から］務めた劉漱石［1899–1942］[24]も同じく柔軟な考えを持った人物であった。劉は、共産党員に対

---

[23] タイ政府に抗議する、華僑の一斉閉店スト（罷工罷市）は、1910年6月と1945年9月に生じた。この外にも、時々一斉ストを行うべきだという意見が、華僑から出されている。

[24] 本稿の重要登場人物の一人である劉漱石の経歴については、泰国帰僑聯誼会《英魂録》編委会編『泰国帰僑英魂録、第一巻』（中国華僑出版公司、北京、1989年）pp. 126–130に、欧陽氏が慕蘭の筆名を用いて書いた「劉漱石永生」、および同書pp. 131–133の韮人「我們継承您的遺志」がある。後者は中国共産党暹羅総支部（1941年8月に中共から派遣されて来タイした李啓新の指導のもとに、1942年12月に暹羅共産党はタイ共産党として再建された。その後もタイ共産党は実質上、中共の指導下にあったが、戦後組織的には、中共暹羅総支部が分離し、同総支部は1953年に解散されるまで存続した）の機関誌『真話報』新54号（1947年8月3日）の記事を一部簡略化した内容である。両者の記述によれば、劉漱石は、広東省恵来県人で字は任荒、1925–27年の第一次国共合作期の大革命時代に故郷や福建省漳州で反帝国主義反封建闘争に参加し、北伐にも参加した。1927年4月に国民党の反共攻撃が始まると南洋に逃れ、バンコクの協益、培民学校に勤務した。在タイ時に、中国からタイに巡察に来た某大官から、中国の官職に就けるように推薦する、国民党に再度参加するだけでよいと誘われたが、断ったことがあるという。1934年（ママ）冬天に暹羅共産党の代表として上海で中国革命の領袖と会商した後、泰越革命聯席会議（1935年3月末にマカオで開催されたインドシナ共産党第一回党大会直前の同年3月14日に同地で開催された暹羅共産党とインドシナ共産党との合同会議）に出席した。

して、タイで革命を成功させるためにはタイ語習得が不可欠であると強調した[25]。暹羅共産党幹部の多くが、中国での共産党弾圧からタイに逃れてきた、タイ語が話せない中国人であったという実情に鑑みると、劉の見解はきわめて現実的であった。

タイ生まれの華人は、［タイ政府の華人同化政策のために］自動的にタイ国籍を付与されて兵役の義務を課された。彼らの中にはタイ政府に徴兵されることに、抵抗感を持つ者がいた。劉はいつも次の決まり文句で、彼らを説得した。

「よく考えてみろ！ 兵隊に行けば、軍事訓練を受けられ、銃を手にすることができるではないか。またと無い話ではないか！ 一旦銃を自分の手に取ることができれば、どう使うかは本人次第である」、と。

ところで、誰が中国移民排斥運動の原動力であったかについては、今でも誤解があるように私には思われる。それは、もっぱらタイ人が起こした政治的キャンペーンであると理解されがちであるが、私は、タイで一大勢力を成していた古い中国人移民が、後から来た中国人移民に自分たちの地位や優位性が奪われることを恐れて、タイ人官僚と共謀して起こしたも

当時暹羅共産党は、1934年夏に香港に成立したインドシナ共産党海外指導部の指導を受けていた（村嶋英治「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930-1936）：シャム共産党内におけるベトナム人幹部の役割を中心として」、『アジア太平洋討究』13号、2009年）。劉漱石が教師として在職した新城門（Bang Lamphu）の協益学校は、中国国民党暹羅総支部下の第七支部が開校した学校である。在タイ国民党の党紙である『華暹新報』1927.12.26には、「第七支部（協益社）歓迎蕭部長」という見出しが付されている。これは国民党暹羅総支部下の第七支部が「協益社」を名乗っていることを公然と示すものである。協益社は先に越迪（Wat Tuk）協益平民学校を開き、続いて1928年1月5日に新城門協益学校を開校した（『華暹新報』1927.12.22, 12.23）。更に萬茂（Bang Mo）にも開校した。第三番目の萬茂校は間もなく黄魂学校に移管した（『中華民報』1934.1.5）。

劉漱石は中国に帰国して国民党政権の官吏に任官するように誘われたことからも推察されるように、国民党と何らかの関係があって、その人脈を利用して国民党の支部が経営する新城門協益学校に教師として就職したものと考えられる。劉漱石が新城門協益学校に在勤していることが確認できる最も古い資料は、『中華民報』1931.8.1の「新城門協益学校教務由劉継邦先生担当」という記事である。劉継邦とは劉漱石のことであると推測される。その前日の中華民報は邱亦山を「新城門協益学校新任訓育主任」（『中華民報』1931.7.31）と報じている。邱亦山［1907-1997］は共産党員であり、1942年に香港で劉漱石の最期を見取った人物でもある。新城門の協益学校は1934年9月にタイ文部省の閉校命令を受け、翌1935年8月に培民学校という名で再建された。劉漱石は1939年8月11日に逮捕されるまで培民学校の教師を勤め、同年10月14日に国外追放の処分を受けた。

彼は中国に追放されたのち、タイに隣接するラオスに派遣された。1941年後半、劉漱石は林鳴とともに香港の廖承志、伍治之に報告に戻った（『泰国帰僑英魂録、第二巻』1991年、p. 275）。日本軍が香港を占領後、劉漱石は同地で結核に倒れたので、香港にいた邱亦山と伍治之は、劉漱石を共産党組織と関係ある九龍病院に入院させた。間もなく漱石は死亡し、邱亦山と伍治之は漱石の骨を漱石の郷里まで運んだ（『泰国帰僑英魂録、第五巻』2003年、p. 287）。なお、新民（Sin Min）学校は、1927年1月12日の文部省布告で新設を許可され、59 Tambol Saphan Maensriに開学（『タイ官報』Vol. 43, p. 3840, 23 Jan. 1927）、開学10カ月後の1928年1月9日までに、学生数は70人から200人に増加した。かつ、同年1月9日の新学期から女子クラスも開くことにしたので校舎の移転許可を文部省に求めた（NAT So. Tho.54.1/1384）。

[25] 主に華僑・華人およびベトナム人から成る暹羅共産党は、1930年の創立以来、方針としては一貫して党員のタイ語習得を重視した。但し、ベトナム人の組織ではタイ語学習は成果をあげたが、華僑・華人組織では余り成果はなかった（前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930-1936）」参照）。

のであった、と考えている。老華僑と新華僑との間の生存空間争奪戦という側面もあったように思うのである。

蟻光炎は華僑の間で、極めて人望が高かった。経済的に困った華僑は、蟻光炎からなんらかの援助を得ることができた。例えば、一時仕事が見つからない人は、蟻光炎のところに行けば、食事ぐらいにはありついた。中国の故郷にいる重病の親族を急遽見舞いに行かざるを得なくなった場合は、蟻光炎から船の切符一枚を援助してもらうことができた。貧しい人たちに対して絶えず援助の手を差し伸べる蟻光炎は、いつの間にか華僑社会で「天秤棒主席」という愛称で呼ばれるようになった。

「天秤棒主席」という呼称について、劉漱石の次のようなコメントがある。「蟻光炎先生の天秤棒の両端には、それぞれ中国とタイ国がぶらさがっている。彼はまさに中タイ友好の象徴そのものだ。我々の組織のメンバーになるべき人物である。」このような見解は当時共産党内部の雰囲気では、容易に披露できるものではない。劉漱石自身が、毎日資産階級打倒というスローガンを叫ぶような左寄りの人間ではなかったということであろう。

蟻光炎が主席である暹羅中華総商会は、経済界における一大組織で、時には、商会以上の役割を果したのである。タイ政府は蒋介石の国民党政府との間には正式な国交を結ばなかった。タイ政府は日本軍に勝てない蒋介石政権の無能さを見下していると同時に、国交樹立によって、タイの中国系企業が、国民党政府から指図を受けようになることを懸念していた。そのため、タイ政府は、国民党政府からの度重なる国交樹立の申し入れに対し、いつも曖昧模糊とした態度で対応した。しかし、国交がなくとも相互に連絡しあう必要がある案件がないわけではない。蟻光炎の中華総商会がそのパイプ役を務めたのである。

蟻光炎は単なる一介の商人ではなく、政府と民間との間の連絡仲介役の役割を果した。また、蟻光炎は、華僑社会において、共産党、国民党に次ぐ第三の勢力を代表していたと言うことができる。この第三勢力は、時には共産党と国民党との力関係を左右できるほどの力を持っていた。

蟻光炎は、1939年11月21日にバンコクで暗殺されたが[26]、蟻錦中、蟻美厚などの子供を残した。錦中と美厚はまったく違う人生を歩んだ。

蟻錦中はシンガポールで教育を受けた後、清華大学に入り、水利を専攻した。タイに戻って家業を継ぎ、世界規模でコメビジネスを展開した。蟻錦中は政治活動に対して、一切関与しない方針を取っている。彼は父親の蟻光炎に対しては、記念イベントや伝記［蟻錦中『蟻光炎伝』、世界華人企業家伝記編委会（北京）、香港、1994年など］を出版して、孝行を尽くしている。

一方、蟻美厚は蟻光炎が故郷に残した妻の世話を見てもらうために、兄弟からもらった義理の息子である。しかし、その後、蟻美厚の聡明さに気が付いてタイに連れてきた。タイに

---

[26] 詳しくは、前掲村嶋論文「タイ華僑の政治活動」p. 336参照。

来た蟻美厚は商売には興味を示さず、政治活動に夢中になった。タイ政府にとって、蟻美厚は頭の痛い存在となっていた。政治活動に身を投じた蟻美厚は伍治之と仲がよかった。1949年新中国の成立直前、蟻美厚は伍治之［当時中共暹羅総支部書記代理］の斡旋により、中共の招待で秘密裏に中国に渡った。その後、蟻は大連経由で北京に入り、海外の愛国華僑代表として、1949年10月1日、人民中国の建国式典に参列した。当時海外から北京に向かい、式典に出席した華僑代表の人数は、僅か5人だったことを考えると、中共が蟻美厚をいかに重視していたかが判る。

その後、周恩来は蟻美厚を毛沢東に紹介した。毛沢東は蟻に対し次のように挨拶したと伝えられる。「ご尊父のことはよく存じています。延安に赴く多くの愛国青年を援助し、延安時代の我々をよく支援してくれました。国のため犠牲となり、暗殺されたことは本当に不幸でしたが、民族の英雄という名にふさわしい方でした」、と。建国直後の毛沢東は、蟻美厚を使って、外国との貿易ルートを確保しようと考えていたのであろう。中国に戻った蟻美厚はタイに帰らず、香港に多くの店舗を開き、貿易分野で人民中国の建設に参加した。1950年代初めの朝鮮戦争の際、国際的に封じ込められた人民中国への物質供給の面で、蟻美厚の会社は大きな役割を果たした。

第二章　廣肇公学時代：学友の影響（1934–35年）

第一節　廣肇公学編入

タイ人男性には、小学校を卒業して中学校に進学する前に、お寺で沙弥として3カ月間の修業をする者が多く、それが慣習のようになっていた。更に成人になって比丘に出家する場合は、親戚や友人を集めて盛大にお祝いをする。仏教は外部の人間には想像ができないほどに、タイ社会全体に浸透している。軍隊でも、毎日早朝集会の時、兵士たちはまず読経をする。私はこのような仏教生活は送りたくなかったので[27]、タイ人の学校ではなく、広東人華僑の団体が創立した広肇公学（小学校）[28]に入ることにした。

私は正規の学校に入学する前に、自宅近くの私塾に数年間通い、中国語の読み書きの基礎を習った。1931年[29]6月に広肇公学に入った時、私塾で身に付けた学力が考慮されて三年生[30]のクラスに編入された。広肇公学では、学友たちとはすべて広東語で会話したのでタイ語を使うことはなかった。

ただし、タイ語学習は全くしなかったということではなく、生家の近くにあった俊才夜校[31]というタイ語学校でタイ語を学んだことがある。とは言え、私のタイ語は全然上達しなかった[32]。今から思えば、少年時代の私がいつか必ず祖国に帰ろうと心に決めていたことも

27　華僑の両親は、通常その子弟がタイの上座部仏教に出家することには極めて消極的であった。村嶋英治「タイにおける華僑・華人問題」、『アジア太平洋討究』第4号、2002年、p. 43参照。

28　廣肇公学（Kwong Siew School）は、①中華街のチャローンクルン路に面した第一学校、②サートン路とチャローンクルン路が交わるあたりの、チャローンウィアン路（バーンラック地区）の第二学校、の2校が存在した。欧陽氏が学んだのは、生家から徒歩10分程度の距離にある第一学校である。

29　欧陽氏は、1930年6月に広肇公学3年生に編入されたと言うが、当時の華僑学校の小学校は、初等が4年制、高等が2年制であり、初等・高等小学（6年間）を卒業して中学校に進学する制度であった。欧陽氏が中華中学に進学したのは1935年であることは、間違いないので、広肇公学3年に編入された年は、1931年でなければ計算が合わない。欧陽氏の本インタビューでの話や、あるいは同氏が『泰国帰僑英魂録』に執筆した原稿は、他の資料と照合すると年月が実際と1～2年ずれたものが少なくない。本稿では、他の資料と照合して正確な年月が判明した場合は、欧陽氏が語った年月ではなく、正確だと判断される年月を用いる。

30　1930年代までのタイの華僑学校は、殆どすべてが小学校レベルだったが、学ぶ学生の年齢はまちまちで、10代半ば以上の小学生も少なくなかった。それ故、小学校でも学生運動が生じることとなる。また、華校では、日本のように「児童」、「生徒」、「学生（大学生）」などと言った、教育レベルによる呼称の区別はなく、レベル、年齢に拘わらず、「学生」と称された。本稿もこれに従い、華校に学ぶ者を一律に「学生」と表現する。

31　『中華民報』1936.5.2に「本京真君爺俊才夜校」とある。真君爺は欧陽氏の自宅近くの廟の名である。

32　タイ政府は、1918年に、①華僑学校にも一定のタイ語授業を強制し、また②華僑学校の中国人教員にもタイ語能力を要求し、就職後一定期間の後にタイ語試験を実施して不合格の場合、教員資格を剥奪する法律を施行した。法律施行当初より、タイ文部省は、②については比較的厳格であったが、①については曖昧であった。タイ文部省が華校のタイ語授業実施を厳しく強制し始めるのは、1933年に入ってからである。

一因であるだろう[33]。

とにかく、タイ生まれでタイ育ちの私は、本来はタイ語が自由に話せて当然のはずだが、実際にはタイ語より、ロシア語の方が得意になった。私がロシア語を初めて学んだのは、後述するように1943年に延安大学ロシア語学部においてであった。その後、1946年から1951年まで大連でソ連軍が発行した実話報に勤務し、続いて1957年まで中ソ友好協会に勤務したので、ロシア語との付き合いが長くなった。

第二節　共産党系の学友と付き合う

入学した広肇公学の同じクラスに、梁傳燊［1921–1939, りょう・でんしん、筆名：牧軍、広東人］、1学年上には女性の潘女雄がいた。この二人とは、すぐに親しくなった。両人は、私が1935年に共青団に入団した時、立会人を務めてくれた。

間もなく、学年が二つ上の魯文［1919–2001］とも知り合いになった。魯文は、道を渡る時いつも気に懸けて注意をしてくれるなど、いろいろな面で私たち後輩を親身に世話してくれる、親しみやすい兄貴のような存在であった。魯文は次第に、私に革命の道理や抗日の必要性について話したり、進歩的読み物を勧めたりするようになった。

魯文は廣肇公学時代には関錫潤という名を用いた。これが彼の本名である。彼は廣肇公学で退学処分を受けた後、共産党系の崇實学校の教員となったが、その時は関弓という名を使用した。延安に着いてから魯文と改名し、以後この名で通した。

魯文の紹介で、私は鄭堅とも知り合った。この時、魯文と鄭堅は既に共産党員であったようである。両人を導いたのは、広肇公学の教員で共産党員の夏夢雲（上海出身）である。鄭堅は、1934年に13歳の梁傳燊を共青団に参加させた。

当時のタイ政府は、共産党員を18年[34]もの懲役刑に処すほどに、共産主義活動を厳しく取り締まっていたので、一般の人々が自ら進んで共産党に近づいてくることはまずなかった。当初、魯文らは共産党員であることを隠して、我々に接近した。

私は彼らが密かに貸してくれた魯迅の諸著作、茅盾［1896–1981］の『子夜』、巴金［1904–2005］の『家』、『滅亡』、蒋光赤［1901–1931］の『少年漂泊者』、『鴨緑江上』など

---

[33] 通常、華校に学ぶ、タイ生の華僑子女は、中国語よりもタイ語の方が得意であり、中国語の読み書きのレベルは低かったといわれる。その中にあって、欧陽氏はバンコク時代の10代後半に中国語の作品をバンコクの華字紙に多数発表していることから見て、中国語の世界に浸っていたものと思われる。

[34] 18年は欧陽氏の誤解。戦前期タイで共産党員の長い投獄の例としては、1929年12月22日に進徳学校屋上の廟で会議中の華僑共産党員20数人が逮捕され、1938年まで収監されていたケースがある。彼等は刑法102条の規定により15年間の刑および五千バーツの罰金を課された（『中華民報』1930.2.13）。1930年10月11日に逮捕された暹羅共産党の宣伝担当責任者、伍治之（別名：伍乗臣、廖阿伍、連阿伍）は、刑事裁判所で15年の刑を宣告された。これを不満として控訴裁判所に控訴したが、控訴裁判所も刑事裁判所の判決を支持し確定した（『中華民報』1931.5.19）。彼は1938年末まで獄中にあった。この他にも、1935年3月20日にバンコクで逮捕された3名、同年6月6日にウドンで逮捕された2名は、各15年の刑に処され、戦後の1945年12月21日に恩赦を受けるまで10年以上投獄されている（NAT（2）So.Ro.0201.83/39）。

の小説を読んだ。

私を共産主義運動に導いた魯文、鄭堅、梁傳燊の3名は既に故人となっている。

魯文は、1919年にバンコクで生まれた。彼は広肇公学の学生ストを指導して退学処分を受けたのち、共産党系の崇實学校で教員をしていたが、周りの同志たちよりも一足早く［37年末に[35]］タイを出て、延安へ向かった。彼は順調に出世して、北京で北京鉄道管理局党委書記兼局長（1950年）、中共北京市委交通工作部副部長、北京市委委員（1972年）、北京市郵政局党委書記兼局長、中国郵電工会全国委員会主席兼党書記（1980年）などを歴任して1988年12月に退職し、2001年11月19日に北京で死去した。

鄭堅の本名は鄭景賢で、革命活動に参加後、鄭堅と改名した。［鄭堅は、タイにおける共産主義運動再建のために、1941年8月に来タイした李啓新（［1910.2.10生、2007.6.9没[36]］本名：閔徳才）が設立した指導機関、中共旅暹工委[37]の委員の一人。同工委は在タイ共産党のトップ層である李啓新、李華、邱及、林鳴、鄭堅で構成された[38]。］鄭堅は、タイで交通事故により亡くなった。彼の死をめぐっては、日本軍に暗殺されたという説もある。［正しくは、彼は終戦直後に、日本軍の軍用車に敷かれて死亡した[39]。］

梁傳燊は、私が1935年に共青団に入団した際の紹介者である。彼が［タイからの最初の延安に向かった7人の一人として、1937年11月に[40]］延安に出発するまで共に活動した。彼は延安で、中国人民抗日軍政大学（抗大）で学習したのち、魯迅芸術文学院（魯芸）の文学

---

35 魯文（関弓）は、1937年末に抗日義勇隊100人余を率いて帰国した（暹羅啓明学校紀念文集編輯組編『永恒的懐念：暹羅啓明学校紀念文集　1935-1938』、広州、1990年、p. 63）。

36 古参タイ共産党員チャオ・ポンピチット（Chao Phongphichit, 中国名：劉源泓、1924年8月28日生2012年9月21日死亡）は李啓新について次ぎのように記している。李啓新の本名は、閔徳才で、「コミンテルン東太平洋司令部」（ママ）代表の肩書きで1941年8月に来タイした。来タイ目的は、李華を助けて中国系暹羅共産党（僑党）の思想、組織、活動を統一するためであった。李啓新は、本人（李啓新）、邱及、李華、林鳴、鄭堅を構成委員とする、最高指導機関として工委［中共旅暹工委］を作り指導した。彼は幼少より海南島で活動に参加し、香港、上海で入獄を経験した。知識が高く、当意即妙の問答・駆け引きに優れ、仕事は勤勉で、どの階層の人々にもうまく接することができた。彼と話した人の殆どは彼に魅了されて心服した。彼は、当時の新指導部［李華指導部］と思想の相違から距離を置いていた個人や組織を訪ねて回り、勧誘説得して新指導部の下に統一することに成功した。また、短期間の間に一定数の青年男女を党活動家として選別し育成した（Chao Phongphichit, "Luk Chin Rak Chat（22）", *Matichon Sut Sapda*, 13 Feb. 2009, p. 42）。なお、チャオの言う工委とは、「中共旅暹工委」のことである（『南離子邱及』中国世界語出版社、北京、1993年、p. 436）。チャオが2012年1月9日にプラ・ピンガーオ橋近くの自宅で村嶋に語ったところによると、チャオは1941年4月4日に入党したが、その際の紹介人は朱南和一人であった。しかし、入党には紹介者二人を要し、一人だけでは手続上不完全である。李啓新は同年8月に来タイ後、自らも紹介者に名を連ねることで、この問題を解決した。チャオは1950年に中国共産党が北京に新設した研究所にタイ語専門家としてタイ共産党から出向した。その際、李啓新が、チャオのもう一人の入党紹介人であった事実を初めて明らかにした。

37 この工委のメンバーの一人である邱及の年譜には、邱及は「1941年6月回曼谷、任中共旅暹工委常委、負責宣伝部工作」（前掲『南離子邱及』、p. 436）と記されている。

38 Chao Phongphichit, "Luk Chin Rak Chat（22）", in *Matichon Sut Sapda,* 13-19 Feb. 2009, p. 41.

39 元タイ共産党政治局員Damri Ruangsutham（ダムリ・ルアンスタム、1923年生、実名：呉文利、現在は呉維實［ウシット］と名乗る）との村嶋のインタビュー、2004年8月14日、バンコク。

40 前掲『永恒的懐念：暹羅啓明学校紀念文集　1935-1938』pp. 64-66.

系に進学した。魯芸の学友たちとともに［1940年頃に］山西省西北に進軍し、遊撃戦を戦っている時に行方不明になった、という。彼はその前から体調が悪く、病死したようである。その時、僅か18歳に過ぎなかった。私が1941年初めに延安に到着した時には、既にこの世にいなかった。

第三節　国民党系広肇公学の教育方針に反発して学生スト

廣肇公学の教員たちは、孔子の書を真剣に教える[41]一方で、学生たちが世の中の出来事に関心をもつことには、否定的であった。教員たちのこうした態度は却って学生の反発心を駆り立てた。広肇公学教務主任（校長）の梁振標は、南京で訓練を受けた国民党員であった。毎朝の朝礼では彼が歌う国民党党歌に、学生は唱和しなければならなかった。毎週土曜日の週会では、彼の三民主義の講義を聴かされた。彼は常に、朱徳や毛沢東を共匪と罵倒し、学生の私物である図書を没収して、学生が国事を論じることを禁止した[42]。

我が家では、父は殆ど家にいなかったし、主婦の母は正規の学校教育を受けたことはなかった。両親とも子供がどのような学校生活をしているのかに関心を払わなかった。そのような中で、私は魯文の仲間と一緒に遊び、日々を過ごした。彼らは、中国が日本軍の侵略に喘いでいるにもかかわらず、蒋介石政権は何らの抵抗もしないことに憤慨して、抗日の必要をまわりの学生たちに懸命に宣伝した。東北三省が中国のどこにあるのかさえ知らなかった私だが、彼らの影響を受け、抗日意識は誰にも負けないほどに強固になった。

九・一八事変［満州事変］の勃発後、中国本土ほどではないにせよ、タイの華人たちにも、国家滅亡の危機感が広がった。

広肇公学の各クラスが交代で担当するポスター作成の順番が回ってきた時、私たちは抗日を訴える文章を掲載することにした。学校当局は直ちにポスターを没収して、孔子の功績を称える祭日[43]までに、ポスターを作り直すように命じた。しかし、その命令を我々は無視した。それどころか、学校当局との対立も辞さず、魯文の提案に基づいて、「反孔子」をテーマとした内容のポスターを作成した。その挑発的な内容を見た教務主任（校長）の梁振標は、激怒してその場でポスターを破り捨てた。6年生の魯文や鄭堅が、絶好のチャンスを見逃すはずはなかった。彼らは学校当局が横暴にも学生の愛国表現の自由を奪った、と訴えてストライキを発動した。梁傳燊は「奴隷化教育反対、愛国の自由を要求する」と大書した。

魯文らのスト発動の決定は、私には事前に知らされなかった。スト当日、魯文が私に頼ん

41　バンコクの華校では孔子の誕生日に様々な式典を行った。たとえば、『励青日報』1927.9.22は「紀念孔子之熱鬧」と題して次のように報じている。「今天為我国俗称孔誕辰之期、於是洛中華僑公立私立諸校均行停課一天、以資慶祝而誌不忘、並行各種典礼演講、使学生得以銘刻脳海、永為紀念、至明天初仍照常上課云」。

42　欧陽「把生命献給了祖国的海外孤児―懐念梁傳燊」、『泰国帰僑英魂録、第一巻』p. 6.

43　孔子誕生記念日（本来旧暦の8月27日だが、国民政府は陽暦の8月27日に変更した）は、1929年に国民政府が定めた学校の祭日の一つで、学校祭日は授業を休み記念式典を実施することが義務づけられている（『華暹新報』1929.6.21）。

だ任務は、学生に映画の切符を配って学校から映画館に連れ出すことであった。これによって授業ボイコットを実現しようとしたのである。その後になって共産党分子が学生ストを発動したのだという学校側の発表を聞いて初めて、私は意図せずして共産党活動に関与したことを知った。これが、私が共産党に関わった最初の経験である。

反動的学校当局は、中華民族が日々滅亡に近づいているのに、少しばかりの愛国表現さえも学生に許さなかった。結果的に、ストに参加した年長組の学生は50人に届かず、未だ世間知らずで闘争経験のないこどもたちの三日間のストは、魯文と鄭堅が退学処分を受けて、敗北に終わった[44]。

こうして、私は革命についてよく判りもしないままに革命の世界に飛び込んだ。学校の教師は間違っていると、ぼんやりと感じてはいたが、具体的にどこがどう間違っているのかは説明できなかった。祖国が危ないことは知っているつもりだったが、なぜ危ないのか、どうすべきなのか、と問われたら、恐らくうまく答えることはできなかったであろう。そもそも亡国とは何であるかと問われても、自分の見解をはっきりと述べることはできなかった。ただ、国が滅びたら、自分の将来は真っ暗になるのではないか、バンコクの商店で門番をして

---

[44] 広肇公学の学生ストの報道は、中国語新聞に見出すことができない。また、欧陽氏にも年月日についての明確な記憶がない。それ故、スト発動の正確な年月は判らない。共産党系の学生によるストは、崇實学校でも1934年6月19–20日に暹羅学生聯合会のメンバーである、6年生の邱逸群、庄江生らが指導した学生ストが生じている。これは教師を批判した一学生の退学処分を契機としたものであった（《崇實学校》紀念文集編委会『崇實学校』、人民交通出版社、北京1995年、pp. 39–40, 321）。担任教師を批判する文章を日記に書いた六年甲クラス（卒業まで数日を残すのみであった）の林特書を、6月18日に学校が退学処分にした。翌19日、同級生の丘清渓（邱逸群）、荘文俊（庄江生）、倪捷敬、李国光ら9人及び5年甲クラスの林剣波、許方進、荘国華、5年乙クラスの盧炳松、方禄栄らが、学生会の名で、退学処分の取り消し、学生に校務に参与する権利を認めること、担任教師や訓育主任の罷免などを求めた。6月20日、学校当局はこれら9名のスト・リーダーの退学処分を決めた（『民国日報』1934.6.21, 6.23）。

庄江生は、1934年スト当時の崇實学校の暹羅共産党系組織について次のように回想している。即ち、「従創辦起到1934年上半年、暹羅華僑的愛国進歩組織在崇實逐漸建立起来了。如“学聯”、“反帝大同盟”等。還建立了共青団。共青団員有余維欣、鄭耀山（鄭龍）、丘清渓（邱逸群）、荘文信（庄江生）等、僑党也在学校発展了組織、当時的党員有馬夢樵、黄耀寰等」（同上『崇實学校』p. 39）。

1933年に弾圧を受け活動が停滞した暹羅共産党は、1934年に入ると活動を活発化させた（前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930–1936）」、p. 158）が、崇實学校の学生ストはその一環であると思われる。そうだとすれば、廣肇公学の学生ストが生じたのも、1934年半ば前後であると考えられる。また、1935年6月21日には、張慶川をリーダーとして新民学校で、20名余の学生がストを実施した。初中3年生の林剣鴻（1917–1944）が壁報で連続して教員を批判したことを理由に、6月14日に退学処分を受けたことがストの契機であった。ストの要求は、退学処分の取り消し、腐敗教員の追放であった。後のタイ共産党総書記余松（Song Nophakhun, ソン・ノッパクン，1919–2012）もスト学生の一人である（『中華民報』1935.6.26）。新民学校のストで退学処分を受けた張慶川と林剣鴻は、当時次のような文章を華字紙に掲載している。即ち、林剣鴻「残年」（『民国日報』1935.2.19の新民学校新語文学研究社「新語」に掲載）、慶川「一些矛盾的現実社会観」（『民国日報』1935.3.27の荒径社「荒径」第3期に掲載）。林剣鴻はその後中華中学に学んだ。結婚し二子をもうけたが、抗日戦争のため回国服務し国民党の中央陸軍軍官学校（黄埔軍官学校）第四分校に第17期生として入学し（『中央陸軍軍官学校第17期26総隊　華僑生畢業同学録』）、1941年9月に卒業した。日本軍下のタイ国に潜入して地下工作に従事のため1944年3月6日夜ナコンパノム上空からパラシュート降下したが、発見され銃撃戦で死亡した（『鉄血雄風：泰国華僑抗日実録』、泰国黄埔校友会、バンコク、1991年、pp. 16–18）。

いる植民地出身の亡国インド人のような落ちぶれた存在になってしまうのではないか、といった類の不安を感じていたのは確かである。

今から顧みると、私が革命の世界に飛び込んだ原因は、三つあると思う。一つは、母国の行方に強い関心を寄せる人々が既に立ち上がっていたという社会的背景。二つ目は、魯文をはじめとする共産党員の積極的な党活動への勧誘。三つ目は、学校当局の教育方針が反発心を煽り立てたことである。

第四節　共産党のビラまき

廣肇公学の学生時、梁傳燊は、「遊びに行こう」とよく私を誘った。遊びとはいうものの、ほとんどの場合、ビラ撒きの見張りを手伝うことでであった。商店街などの公共の場所で共産党系のビラを配る時は、見張り役が不可欠であった。私はいつもその見張り役をやらされたのだ。ビラ撒きをする時は、まず見張り役が現場に向かう。見張り役は複数存在するのだが、秘密に徹するため、各見張り役には他の見張り役がどこにいるかは知らされていない。ビラ撒き中に誰かに気付かれて捕らえられそうになったら、見張り役は直ちに人込みに紛れ込んで、通りがかりの人々の注意をそらすために野次を飛ばしたり、わめいたりして大騒ぎをして、ビラ撒きが逃げられるように助けるのだ。

私は初めてビラ撒きに参加した翌日の新聞紙に、昨日共匪［共産党］がビラ撒きをしたという記事を見つけて、「へえ、この程度のことでも共匪の仕業というのだろうか？」と半信半疑の気持ちになったことがある。それまでの私は、共産党を自分とは別世界の偉い存在のように見ていたからである。

これも共青団参加以前のことだが、梁傳燊に頼まれて、住宅の郵便受けにタイ語の宣伝文書を入れたことがある。タイ語のビラを撒くことは、極めて稀なことであった。

ビラ撒きは非常に短い間に終了しなければならないので、中身をじっくりと読む余裕などはなかった。ビラ撒きにあたっては、まず担当者が現場に行く直前に上位者からビラを10枚程度渡されて、10分間以内に撒き終わるようにといった類の指示を受ける。一人当たりの一回の配布枚数が10枚程度と少ないのは、短時間に配布しきれなかったり、人に気付かれて警察に通報されたりする事態に備えたためであった。所持しているビラが10枚程度だと、緊急事態になっても、即座に処分することができる。それに、ビラ撒きの主目的は、共産党の存在を知らせることであるから、一人当たりせいぜい10枚程度撒けば十分で、多量に撒き散らす必要はなかったのである。

ビラ撒きといっても直接人に手渡すことはなかった。人気の少ない時を狙って、二人組みで公園の樹木の幹や便所の壁に貼り付けるか、ビルの屋上から撒くことが多かった。貼り付ける場合は、一人が糊を塗り、後ろから来た別の人がビラを貼った。屋上から散布する場合には、人だかりができるので、その人込みに紛れて逃げ出すのである。

ビラ撒きのほか、「挿紅旗」もよく行われていた。「挿紅旗」とは、党の記念日に、人出が

多い場所、時間帯を狙って、いきなりビルの屋上や橋の欄干の中央などの目立つ場所に赤旗を差し込んで立てることである。「挿紅旗」作業は、三人がかりで実施した。二人が見張りに立ち、残る一人が周囲に気付かれないように、そっと赤旗を立てるのである。一応「旗」と称してはいるが、実際にはハンカチ一枚程度の大きさの赤い布である。「挿紅旗」の目的も、主義主張を宣伝するというよりも、世間に共産党の存在をアピールすることにあった。

私は1935年末に共青団入団が認められ、更に抗日戦争開始後の1938年半ばには暹羅共産党に入党した。これらの期間を通じて共産党のビラ撒きは続いた。ビラ撒きは、年に二、三回ぐらい、メーデーなどのような記念日に行われていた。ビラのほとんどは中国語で書かれたものであった。

私が劉茂雲と二人で、1937年抗日戦争開始後にヤワラートの中華街の商業中心地区（現在のマンコン路とパートサーイ路が交差する周辺[45]）でビラ撒きをした時は、それはメーデーのビラだったと思うが、劉茂雲が道路の入口の警官にお茶をおごって警官を引き留めている間に、三角形に折ったビラを、私が5分間で10枚ほど商店に投げ込んだ。

しかし、宣伝ビラの作成と配布には危険が伴った。党活動に多くの損害を与えるきっかけになることが少なくなかった。党の総負責人であった伍治之が［1930年10月11日にマッカサン地区の］自宅のショップハウスで、ビラが発見されたために逮捕されたのはその一例である。また、1939年［8月11日］に黄耀寰らが啓明学校の後身校（新中華学校）で逮捕されたのも、ビラ散布に端を発している。このような痛い目に遭った末、党の指導部は、ビラ撒きはあまり賢い活動方法ではないことを漸く認識するようになった。それ以降、ビラ撒きは行われなくなった。

---

[45] この辺りは、1908年11月に来タイした孫文が演説した場所である。それを記念して、マンコン路はかつて中国名「演説街」と称された。1938年10月1日号の中国報は社址を「曼谷演説街門牌八二六号」と記し、タイ語では演説街をTrok Tang To Kang（陳焯剛）と記している。これから陳焯剛の建物（現存する）の前の通りが演説街であることは明白である。

第三章　中華中学進学：12月9日学生運動の波及

第一節　暹羅共産主義青年団（共青団）入団（1935年末）

廣肇公学［の高小を1935年7月後半に[46]］、卒業した時点の私は、未だ共産主義青年団（共青団）団員ではなかった。

そのころ、梁傳燊は私に「C.Y.［共青団］に入る勇気があるか」と尋ねた。

「もちろん」、私は即答した。

「では、お互いにC.Y.を探して見よう。お前が先に見つけたら、俺に教えろ。俺が先に見つけたら、お前に教えてやる」と、梁は言った。

数日後、梁は「俺は見つけたぞ。今晩行ってみよう」と私に声をかけた。その夜、潘女雄、梁傳燊と私の三人は約束の場所に集まった。間もなく、阿桂（アー・クイ）という人物が姿を現した。梁の紹介によると、阿桂は潮州人で、C.Y.から派遣された人だという。秘密主義の活動方式を貫いていた当時は、個人情報は同じ組織の同志たちにも明かさなかった。そのため、私は今日に至るまで阿桂の本名を知らない。

阿桂はその場で、「これから、君は共青団員だ」と私の加入を告げた。入団に当たって、何か文書を作成したとか署名したとか、という記憶はない。秘密が漏れることを恐れて、そのようなものは残さなかったのである。当時、私たちはすべて中国語で会話していたので、タイ語では共青団を何といったかは知らない。潘女雄、梁傳燊と私の三人で一つの細胞（小組）が編成され、潘が組長であった。

共青団に正式に入団した日は、1935年12月10日と記憶している。この時、私は既に中華中学に入学していた。私の中華人民共和国『老幹部離休栄誉証』（1982年10月26日発行）には、「参加革命工作時間」は1935年9月と記されている。1935年9月は、共青団への入団の申請をした月であり、同年12月に入団を許可されたのである。

この「参加革命工作時間」は、202頁に後述するように1982年になって認定されたものであるが、その時には入団紹介者は既に死亡していたので、張慶川の下で共青団員として活動していた庄江生［1918–2003］が、私が団員であったことを証明してくれた。

三人グループの一人、潘女雄は抗日戦争勃発前に中国に帰り、連絡が途切れた。それからは、1937年に梁が延安に出発するまで、私は梁と二人で活動した。梁が延安に出発するまで阿桂との連絡は梁を通じてのみであったが、最後に一人残された私は阿桂と直接に連絡を

---

[46] 1929年に国民政府が施行した「学校学年学期及休暇日期規程」では、学校は二学期制で、8月1日～12月末が第一学期、1月1日～7月末が第二学期である（『華暹新報』1929.6.21）。廣肇公学は1936年のケースでは、7月18日に第8届卒業式を実施し、高小28人、初小46人が卒業している（『華僑日報』1936.7.20）。欧陽氏が同校高小を卒業したのはこの一年前と考えられる。

取るようになった。梁が延安に出発した頃から、共青団の活動は減少し、私の活動の重点は読書社にシフトした。

村嶋から、暹羅共産党はコミンテルンに、1935年前半の共青団員総数をバンコクで28人、東北タイで67人と報告している[47]が、この数字をどう思うかという質問を受けたが、私にはこの数字の正誤は判らない。なぜなら、私自身の経験では共青団員は自分が所属する細胞の団員しか知らなかったからである。メンバー間の連絡はいわゆる単線聯系で、それぞれの細胞長だけを通して、組織と連絡を保っていた。秘密維持のため、団員の情報が入っている名簿などは作成されなかった。このような事情から、一般団員が別の細胞に所属するメンバーについて知ることは不可能に近かった。それに、組織内部のことは尋ねてはいけないという雰囲気が、組織全体を支配していた。それ故、今回私が戦友の庄江生を記念する文章を『泰国帰僑英魂録』[48]に掲載するために書くにあたって、多くの関係者に彼がバンコクで所属した共青団組織の構成員や名称を尋ねてみたが、誰も知らないという有様であった。

第二節　中華中学（中中）の学生ストライキ（1936年3月21日）

1935年12月9日、北京の学生は、日本の華北分離［華北自治運動］に反対して、大規模な抗日救国デモに決起した。［この12月9日運動は、1935年7-8月のコミンテルン第七回大会で決まったソ連保衛のための抗日方針を受けて共産党が指導した学生デモである。日本が河北省、察哈尔省に設置した冀察政務委員会を、国民党政府は容認した。これを対日弱腰政策であると批判し、内戦を停止し統一抗日を求める、学生デモは全国各地に波及し、華僑社会にも及んだ。］反対内戦、抗日救国の運動はバンコクの華僑学校の学生にも大きな刺激を与え、学生の活動を活発化させた[49]。［この時は、広東の西南政府も蒋介石の「華北自治」容認を売国政策として厳しく批判した。タイ華僑出身で西南政府の重鎮であった蕭佛成はその重要な批判者の一人であった。］

鄒韜奮［1895-1944[50]］が、［1935年11月に］上海で創刊した、週刊誌『大衆生活』（大衆生

---

[47] 前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930-1936）」p. 162。なお、当時の暹羅共産党員の総数は180名である。

[48] 『泰国帰僑英魂録、第六巻』2007年、pp. 273-280に庄江生の伝記が掲載されている。執筆者は庄の息子たちで欧陽氏の名は記載されていない。同伝記によれば、庄江生は、広東省普寧市生まれで、両親とともに来タイした。1933年に崇實学校において労務の代償として授業料免除を受けて学び、暹羅反帝大同盟の第一分盟組織委員、共青団市某区的区委書記を務めた。1938年2月にタイを離れ、福建の龍岩で新四軍に参加し、その後延安に赴いた。なお、注44にみるように、1934年の崇實学校の学生ストのリーダーの一人である。

[49] コミンテルン第七回大会（1935年7-8月）が、日本帝国主義を主敵として以来、暹羅共産党の反日活動が活発化したことは、前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930-1936）」pp. 176-177。

[50] 鄒韜奮は、江西省余江人、新聞記者、政論家、出版家。1935年8月に帰国後、中共指導下の抗日救国運動に参加し、上海で『大衆生活』、香港で『生活日報』および『生活星期刊』を発刊した。1936年11月7日に逮捕 された。愛国七君子裁判の被告の一人である（2007年1月末時、上海の龍華烈士記念館展示より）。

写真4　雑誌『大衆生活』(1936年2月8日号)

活社）は、バンコクの私たちにも届いた。同誌は、華北自治運動に反対し、抗日救国（救亡）を主張した雑誌として影響力があった。日本と妥協的な南京の蒋介石政府は、同誌を［1936年2月に］停刊に追い込んだ[51]。

私が、梁傳燊らと共に中華中学（略称：中中）に進学したのも、その頃［1935年後半］であった。［中華中学（初中3年制）は、暹羅中華総商会が全タイ華僑の協力を得て、1933年末にサートン路の中華総商会敷地内に設立した。タイ華僑社会における唯一の公立中等教育機関であり、タイにおける華僑の最高学府と称された[52]。］

51　『華僑日報』1936.2.8の副刊「華僑文壇」は、『大衆生活（週刊、生活版）』を推薦している。同誌の停刊は、バンコクで「鼓吹救亡的大衆生活周刊受南京政府一再圧迫不得已宣告暫行停刊」(『中華民報』1936.3.11）と報道された。

52　タイ国立公文書館文書（NAT So.Tho.54.1/1544）によれば、1933年11月23日に、中華総商会主席陳守明一人の名でタイ文部省に中華中学の開校許可申請書が提出され、同年12月7日に許可された。1933年12月1日付けの「暹羅中華中学招生簡章」(NAT So.Tho.54.1/1540）は、第一章　宗旨　第一条　校以発揚中華民族精神、適応環境需要、発展青年身心、培養健全国民、並為研究高深学術及従事各種職業之予備為宗旨。第二章　学制学額、第二条　本校採用三三制、暫設初級中学、修業期限、定為三年。第三条　本校初級中学、暫設普通科、自二年級起、増設選修科。第四条　本校破除学年制、採用能力分組弁法、凡学制升班、俱以学科為単位。第五条　本校学額暫定　三年級生三十名、二年級生四十名、一年級生四十五名、予備班生五十名。……第四章　学年学期　第十五条　一学年分為二学期、自一月一日至六月三十日、為第一学期、七月一日至十二月卅一日為第二学期。……第六章　納費　第廿二条　本校初中及予備班学費、毎学期二十四銖（毎

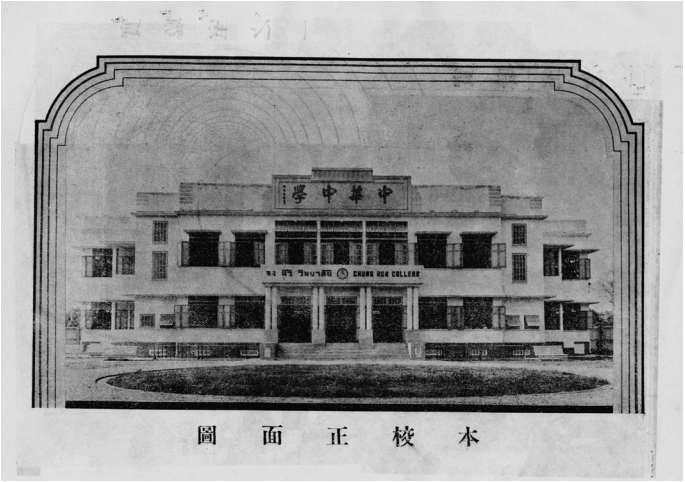


写真5　中華中学

中華中学一年生の我々の学年主任は、譚金洪[53]という国語の先生であった。彼の授業は奥が深く、生き生きとしたものであったが、私や学友の一部は、その授業を好まなかった。私の席の前に座席があった梁傳燊が、ある日の授業中に譚先生を風刺して、「国難に直面しているのに、我々に救国の道を指導せず、デブオヤジの『後ろ姿』(背影）を微に入り細に入

学期分作六個月、毎月以四銖計算）　雑費（講義・体育・実験等）毎学期三銖……と記している。設立時は初級中学（3年制）のみであったが、日中戦争が始まり祖国への進学が困難になったので、1938年7月から高級中学が増設された（『中華民報』1938.6.28)。同校は、年初と年央の年二回新入生・編入生を受入れていた。1935年1月の入学について見れば、1935年1月8日に入学受付開始、1月入学生は100名余、2、3年級への編入生は数人のみで、それ以外は1年生。出身学校は廣肇公学が20余名で最も多く、続いて培英10余人、黄魂8〜9人、進徳6〜7人、新民3〜4名、他県学生も10余名（『中華民報』1935.1.9)。また、『中華民報』1934.6.11には、廣肇公学の3名の教師（教務主任梁振標、教員趙孟招、羅徳英）が同校の高年組の男女学生60〜70名を率いて中華中学（中中）を見学した記事を載せている。合併により900人近い学生を有した廣肇公学は、中中への進学指導に熱心な学校であることが判る。戦後、在タイ共産党組織が、中国共産党の総支部とタイ共産党とに分離されたのち、タイ共産党に属すことになった、タイ共の初期幹部には、中中に学んだ経歴を有する者もいる。例えば、Wirot Amphai（ウィロート・アムパイ，黄君玉、初中部第四期生)、Chao Phongphichit（劉源泓。太平洋戦争時の偽名：陳操、初中部第12期生)、Nit Phongdapphet（女性、伍勤英、高中部第13期生）など（前掲『泰国中華中学校友会特刊、1993年』、『泰国中華中学校友会復会十二週年紀念特刊（1986-1998)』)。中華中学に高中が開設されたのは、1938年7月9日開始の新学期からである。「従来初級中学卒業者で進学希望者は、本国の高中に進学したので問題はそれほどなかった。しかし、日中戦争開始以後、本国は日本の爆撃などで危険となったので、帰国進学は不便になった。これが、高中開設の契機である」(『中華民報』1938.6.13, 6.28)。それも束の間、中華中学は、1939年8月24日には、ピブーン政権が推進しているラッタニヨム（愛護泰国）の教育を実施していないことを理由に私立学校法による設立許可を取り消され、翌8月25日から廃校となった（『中原報』1939.8.25)。なお、タイの華校は1939年8月までに殆どが廃校処分を受けている。

[53] 譚金洪の名は、広肇公学の1934年双十節式典の来賓として報道されている（『民国日報』1934.10.11)。

り講義するなんて、それでも学生の模範であるべき師と言えるのか」と叫ぶと、教室のみんなはどっと笑った。譚先生の体型はチビでデブであったからだ。先生は怒りで顔が真っ赤になった。教科書を机に置き、窓の外にしばらく目をやって気持ちを落ち着けた後、彼は、「この『後ろ姿』は、朱自清［1898–1948］先生の傑作だ。聴きたくない者は、教室から出ていけ」と口を開いた。私を含む共青団員や進歩派学生、10余人は、梁傳燊の後に従って堂々と教室から退出し、校庭の芝生の上に座して、上海で発行された『大衆生活』（鄒韜奮編輯）や『読書生活』など進歩派の雑誌を自習した。

バンコクで譚金洪先生は、他の文学好きの仲間とともに、彷徨学社を発足させた。このグループの作品は抗戦救国を題材にすることはなく、些末な日常の出来事をテーマにしていた。私より先に延安に行った梁傳燊は、延安の抗大に学ぶ譚先生を目撃して驚き、私に手紙で報告してきた。1941年に私が延安に到着した時には、梁傳燊は既に戦病死していた。極左思想が頭に充満していた私は、譚金洪を告発するのは義務であると考え、中央組織部秘書長の武競天に、譚金洪は国民党のスパイであると密告した。それから半年くらい経って、私が学ぶ魯迅芸術文学院を別用で訪問した武競天は、譚金洪はすでに抗日戦で戦死したと伝えた。これで私の譚先生に対する疑いは氷解し、今でも彼に申し訳ないことをしたと思っている[54]。

1934年6月［19–20日］に崇實学校で暹羅学生聯合会のメンバーとして校長追放を要求してストを実行し、退学処分を受けたのち、名前を変えて中華中学に入学していた邱逸群［1917–1993］[55]は、林南中［1910–1967］[56]とともに中華中学でも学生ストを［1936年3月21

---

[54] この部分は、欧陽恵「負疚的懐念—敬悼譚金洪老師」、『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 35–40。

[55] 邱逸群（丘清渓）はタイ国ナコンパトム生。1933年に崇實学校5年生に編入、同級生倪捷敬と共に、学聯（暹羅学生聯合会。赤色学生聯合会とも称す）に参加。1934年6月の崇實学生ストのリーダーとして退学処分を受けた。このストは学聯の支持の下に実行された。この後、間もなく李華の紹介で共産主義青年団に参加。反帝大同盟執行委員のポストを与えられ、学生運動を担当した。1935年に改名して中華中学に入学し、2年生時の1936年3月21日ストのリーダーとして退学処分を受けた。反帝大同盟執行委員時代は、記念日毎に同盟メンバーの学生のビラ配りを指揮し、またラーマ1世王橋の欄干に赤旗を掲げる（挿紅旗）などをして活躍した（前掲『崇實学校』、pp. 320–324）。1937年日中戦争開始後間もなく中国へ。香港の連貫は、逸群は単独で活動できる力があると見て、延安での学習には送らず、香港に留めて使った。香港陥落後は、汕頭で地下活動に従事した。

[56] 林南中（別名、林洪超）は1910年海南島文昌県生。1928年来タイ、印刷所の見習工（学徒）に。叔父の紹介で反帝大同盟に参加。広州市に戻り1929年3月に同市の共青団に参加、身分が暴露したので香港、海南島を経て1930年再度来タイ、華僑日報で働く。1931年3月に工会青工店員小組に参加、10月進歩華僑青年団体［共青団？］に加入。1932年6月同青年団体代表大会で特委に選出される。新聞社の労働者に積極的に工作活動。1934年中華中学入学、同校でも学生のオルグに努める。1935年12月9日運動の後、文章、講演、読書社組織などの方法で抗日救国運動を展開。1936年3月21日の中華中学ストで退学処分を受ける。その後、いくつかの華校で教師をしながら抗日救国宣伝に従事。1939年7月、黄耀寰の紹介状を得て、延安に。香港、海防、ハノイ、昆明、貴陽、重慶ルートで1940年初に延安着。陝北公学で半年学習。卒業後1945年まで延安印刷廠で労働。1941年入党。1945年延安中央党校学習、1946年ハルビンの東北局に到着、1949年まで東北で農会組織、県委、省委等の工作に従事。1949年北京に戻り、同年から1967年に病死するまで広東省、海南島などで工業関係の仕事（林平江「懐念我的父親林南中」、『泰国帰僑英魂録、第三巻』、pp. 125–127）。林南中の延安行きのルートは、後述の欧陽氏らの陸路ルートとは異なり、バンコクからまず船で香港に出たのち、ハノイに渡り以後陸路コースをとっている。

日に[57]、発動した。

［このストは、1936年3月20日に、2年生の邱逸群が退学処分を受けたことで、校長に処分撤回を求めて3月21日に一部学生が起したものである。報道によれば、ストの中心人物は、3年生の林南中（四期生）、1年生（六期生）の陳立恵、梁傳燊（牧軍）らである。学生の要求は、次の6点であった。即ち、①邱逸群の退学処分に反対し、邱逸群の復学を要求する、②学費の半額免除を受けている特待生に対する学校当局の冷遇虐待に反対し、一律に平等待遇を要求する、③寄宿舎廃止に反対し、寄宿舎の整理を要求する、④言論圧迫・出版制限に反対し、言論及び出版の自由を要求する、⑤腐敗教員熊新民に反対し、学生に教員を解任する権利を与えることを要求する、⑥目的達成まで誓ってストは止めない。結局、ストは3月24日には終息し、学校当局は20余名のスト学生の登校を禁止した。一般輿論は、学校理事会の騒乱学生厳罰方針を支持した[58]。］

このストは、学校の運営権を奪取しようとしたものではない。表向きの要求は、校長［許葛汀］の交替であったが、本当の目的は、愛国の自由を求め、学友に死書（役に立たない書物）の学習を強制する学校の陰謀を暴露することにあった。邱逸群は、再三、ストの指導部（林南中、陳立恵［1919-1941］[59]、王耀華、梁傳燊）に次のように指示した。ストは持久戦ではなく速戦即決だ、学友とその父兄を驚かせて目を醒まさせ、みんなの心を抗日救国にすることができれば勝利である、と。ストによって更に多くの学友たちを鍛え、抗日救国運動の仲間として獲得することを狙っていたのである。邱逸群は、退学処分を受けた学生を受入れ

---

[57] 欧陽氏はいつがストライキの日であったかについて、正確な年月日を記憶していない。彼は『泰国帰僑英魂録』では、ストライキを1935年12月とか、1936年末と誤記している。中華中学第五期の女子学生であった陳麗英が、2005年5月7日にバンコク郊外のパトムターニーの自宅で村嶋に語ったところによれば、五期生は1クラスのみで、50～60人の学生がいた。この内に、女子学生の数は10人であった。授業は、一日一時間のタイ語、同じく一日一時間の英語の外はすべて中国語で実施された。教科書は天外天の新華書局で購入した。同期中で卒業できた者は30-40人であった。なお、陳麗英は戦後に、後述する兪任甫と結婚した。また、欧陽氏と同期の六期生だが、反共の道を歩いた人物として潘子明（タイ名、Prasit Rakpracha警察大佐）がいる。潘子明が、1994年1月5日にバンコクで村嶋に語ったところによれば、彼は1918年にバンコク近くのサムットソンクラーム県に生まれ、黄魂学校（小学校）で6年間学んだ後に、中華中学に進学した。抗日戦争開始後同校第三年を卒業し、中国に渡り1938年3月に黄埔軍官学校に入学した。

[58] 『華僑日報』1936.3.21, 3.23, 3.24。欧陽氏は陳立恵、梁傳燊と同学年の六期生、但し新聞の報道には、欧陽氏の名は見出せない。

[59] 陳立恵（筆名：陳恵、銅馬）は、原籍は潮州普寧県、1919年ラーチャブリーの商家に生まれ、ナコンパトムの高小卒業後、1934年に中華中学に進学した。ゴーリキー、魯迅などの文学から強い影響を受けた。1936年3月の中華中学のストに参加し、実弟の陳立旺ら20余人とともに退学処分を受けた。同時に退学した戴慶有（陳駁）とともに樹人中学師範班に学ぶ。南哨読書社編『Nanshao』の総編集を担当し、1937年7月10日に樹人中学師範班卒業。タイでは、反帝大同盟の会員で、未だ入党はせず。卒業後直ちに、戴慶有と共に汕頭に渡航し、地下で中共が指導する汕頭青年抗日救亡同志会に参加。同年秋、中国共産党党員に。1938年2月、泰国僑生12名を率いて福建省龍岩で新四軍に参加。1939年新四軍皖南軍部の中共七大大会の代表の一人に選ばれた。1941年1月皖南事件で犠牲（陳一星（陳立旺）他「陳恵烈士五十周年祭」、『泰国帰僑英魂録、第二巻』pp. 53-58）。なお、『中華民報』1937.6.19の副刊欄に掲載された『南哨』革新号第二号には、「立恵（樹人学校宿舎にて）」と文末に記した文章が掲載されていることから、1937年6月時点でも、陳立恵は未だ樹人に在学していたことが判る。これから、同時点では欧陽氏ら中中退学者グループも未だ同校に在学していたものと考えられる。

るために、反帝大同盟に迅速に新たな学校を創立するように建議した。彼は当時、反帝大同盟の最も若い執行委員の一人であった[60]。

［1934年から中華中学の学生自治会は、一カ月に一回の割で、中華民報の副刊面全ページを使って、暹羅中華中学学生自治会学術股編『中中学生』を掲載しているが、その筆者には、邱逸群、林南中、陳立恵などのスト・リーダーが名を連ねている。例えば、『中中学生』第10期（『中華民報』1935.8.16）には、陳立恵の「旧的悪劣的汚濁的社会趕走了伊」という文章が掲載されている。

そのほかにも彼らは、3月21日のスト直前に、抗日救国を要求する中国の学生運動に同情的な記事を書いている。村嶋の目に留まったものを挙げれば、次のようなものがある。

林南中「学生救亡運動感言」(『中華民報』1936.1.22の「時事談座」に掲載)、

剣鴻［林剣鴻、1935年6月新民学校ストのリーダー］「談談学生救亡運動」(『中華民報』1936.2.13)

英才「論学生救国運動」(『中華民報』副刊「中中学生」第16期、1936.3.5)

南中［林南中］「慰北平受傷同学書」(同上『中華民報』副刊)

邱逸群「我們対学生運動的認識」(同上『中華民報』副刊)

ストの後、退学処分を受けた中華中学（中中）学生の「馬燦雁、程仲筠、蕭再営、林南中、邱逸群、梁傳燊、黄君玉[61]」は連名で「中中被開除学生為保存名誉啓事」(『中華民報』1936.3.30）を掲載した。］

中中学生ストで、退学処分を受けた学生は20余名、自主退学した学生は40余名に上った。スト指導部は、退学学生からなる自主学習班を組織した。私も、中中に一年間も在学しないうちに、退学処分を受けた。ストによって、学生たちに革命の洗礼を受けさせて、革命への決意が強固な者をスカウトしようという我々の目標は達成された。この意味で、中中学生ストは成功であったと高く評価できる。

丁度、その時、小学校だけしかなかった樹人学校が中学校を増設した。我々中中退学者は、樹人中学に転入した。私が樹人中学に在学した、1936年半ばから1937年半ばの時期は、暹羅共産党指導下に読書社などの文化・宣伝活動が高まった時期である。まず次の第四章で、文化・宣伝活動について述べ、続いて第五章で、樹人中学での活動を紹介する。

［なお、1936年4月19日までに、暹羅共産党のベトナム人幹部の殆どが逮捕され、暹羅共産党内のベトナム人組織の活動も停止した[62]ので、1936年半ば以後の暹羅共産党の活動は華僑華人によって担われた。暹羅共産党は正に華僑共産党（僑党）と化した。］

60　欧陽恵「懐念逸群」、『泰国帰僑英魂録、第四巻』pp. 201–202。

61　黄君玉（初中部第四期生、タイ名はWirot Amphai）は、戦中および戦争直後のタイ共産党の主要リーダーの一人。注44の1935年6月の新民学校ストに参加した余松（Song Nophakhun, タイ共産党第二代目総書記）も同様の経歴を有する。タイ共産党のリーダー達は、1930年代半ばに華僑学校在学中に暹羅共産党下の共産主義運動に参加したことを示している。

62　前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930–1936)」参照。

第四章　共産党の文化・宣伝活動（1936年）

第一節　華字紙副刊を利用した共産党の宣伝【村嶋補足】

1920年代の後半および1930年代のタイの華字紙には、どの新聞にも一頁分の副刊欄が存在した。副刊欄には、特定のタイトルが付され、一人の定まった編集者が置かれ、文芸作品や評論などを掲載した。編集者が執筆したもののほかに、編集者が依頼した原稿や読者の投稿作品が掲載された。また、副刊面すべてを使って、特定の読書社、華校、団体等の作品・作文集だけを、定期的に印刷することもあった。編集者が共産党シンパの場合、共産党系の人物の原稿を多く掲載したり、あるいは、副刊の全紙面を共産党系が牛耳る団体（読書社や華校学生自治会など）に定期的に提供したりすることも可能であった。

1928年当時の華暹新報の副刊欄は「華暹之花」というタイトルであり、この欄は新潮学校、潮州女校などの文集を定期的に掲載している。

中華民報の副刊欄は、1932年11月末まで「流光」というタイトルであったが、同年12月1日から「椰風」に変更された。同紙には別に、新知識、娯楽等の紹介欄として「蕉雨」が存在した。

1934年に紙面を改革した後の民国日報[63]内には、4紙面（4ページ）から成る「曼谷日報」があり、この4面中、2面は広告、1面は「新時代」、もう1面は「楽園」（1935年7月8日号から「大衆」と改名）であった。「新時代」は投稿欄で、「楽園」は編集者による新知識、娯楽等の紹介欄であった。

中華民報の「椰風」の編集は、黄病佛［1902-1961］が1934年夏から、1935年5月の退職まで担当した。彼の編集のもとで、華校教師で暹羅共産党員である許侠［1911-1998］[64]の

---

[63] 『民国日報』は、1927年1月に『国民日報』の名で創刊された。1933年までの民国日報は、初期の『申報』（上海）スタイルで、国内・国際ニュースを、多数の小さな枠の中にべた組みで掲載していた。このような旧式のレイアウトは1934年に変更され、他の華字紙と同様なスタイルに変わった。これは、連吟嘯が総編輯に就任したためであろう。なお、連吟嘯は、1929年4月時には、すでに国民日報（編集長は蔡学余）の編集部に在籍している（『華暹新報』1929.4.3）。

[64] 潮州澄海生、26年潮汕地方で澎湃の指導する土地革命闘争に参加、27年共青団員、団支部書記、同年末共産党員、赤衛隊中隊長。1928年と1931年にタイに退避。1931年から1938年3月に国外追放処分を受けるまで在タイ。1931年バンコクの醒華学校［25年創立］教師、35年啓明学校創立とともに教員仲間から校長に選ばれた。［36年も許侠は選挙で啓明学校校務主任（校長）に選ばれている（『華僑日報』1936.10.17）］進歩分子と共産党との間の仲介者としての役割を担う。1936年末我們読書社の宣伝委員として中華民報副刊掲載の「我們的話」の主編者、日中戦争開始後抗聯常委、1938年2月12日に啓明学校で逮捕され、3月末国外追放処分。汕頭で一時活動後サイゴンに行き、ショロンの華僑救国会の新聞に勤務。1939年シンガポールに移り抗日組織で活動。日本軍のシンガポール上陸に際し、インドネシアに潜伏。戦後シンガポールで民盟活動、1949年イギリス当局によって国外追放に処され、中華人民共和国成立前夜の北京へ。夏衍、潘漢年らと共に軍に随行して南京、上海に入り、混乱の中、国民党政府・高官が所蔵していた華僑史料の収集に努めた。中国各地で勤務の後、60年北京の中央華僑事務委員会勤務。文革時、

論文の掲載が1934年7月12日号から始まり、以後、高い頻度で1935年5月4日号まで続いた。例えば、「書信来往、病佛、許侠」（黄病佛と許侠の往復書簡）（『中華民報』1934.7.18）や許侠の尊孔（孔子）批判[65]（『中華民報』1934.8.2）など。許侠は論文脱稿日の日付に、当時の華字紙では一般的であった民国暦を用いず、西暦を使用している。王病佛が1935年5月に中華民報を退職したのちは、副刊「椰風」には、許侠ら共産党員の宣伝論文は見られなくなった。

なお、黄病佛退職後の、1935年8月31日から9月18日号までの「椰風」に、共産党の呉琳曼［1911−1948］[66]（筆名、林曼、琳琳）が随筆を連載しているが、内容は、ただの紀行文

四人組は、華僑を「地、富、反、壊、右」とともに打倒対象とし、国務院僑務辦公室と全国僑聯を叩潰すと宣言した。この時、許侠は国務院で司局級の幹部として造反派の圧力に苦労した（欧陽恵「敬悼許侠師長」、『泰国帰僑英魂録、第五巻』pp. 324−332）。

[65] 8月27日は、国民党政府が定めた孔子生誕祝日。廣肇公学で学生が尊孔に反対してストをしたのも、この頃の可能性がある。

[66] 潮州饒平県生、ベトナムで最後に使った名は呉敬業（別名：入党時は呉壮、香港で陳光、タイで呉琳曼など）。父親の呉逸士はマラヤで錫鉱山を経営。幼少からイポーで過ごす。1928年イポーの育才中学生時代に進歩派書物を上海から輸入して読む。当時イポーには共産党組織は存在しなかった。同地に進歩派の書物を売る書店を開き、共産党入党を希望していたところ、書店を訪れた中共広東省委シンガポール臨時委員会［南洋共産党］の譚耀泰の紹介で1930年3月に入党。同年4月末、イポーで開いていた書店と週刊誌出版は英当局に閉鎖された。1931年に汕頭に移動し、東江地区南山紅軍に秘密裏に武器を運ぶ任務に従事。1932年香港に移り、学校の教室を借りて進歩青年を集めた夜間国語班を開く。文芸研究会や白梅話劇社を組織し、文化人や労働者と交流。樹人中学を開校し訓育主任として学生を指導するが、間もなく同校は英当局によって閉鎖された。1933年英語補習を名目として九龍の英文学校に入学して学生自治会を組織し、かつ在香港中共両広臨委委員の立場で香港の左翼青年3名を共青団員として獲得。その内の一人は将来の妻、鐘英。1934年3月中共両広臨委は中共香港工委に改編、同工委の宣伝委員を担当。1933年5月から春雷文芸研究社の名で『春雷半月刊』を出版。某華字紙の「前哨」と名付けられた副刊面に、革命文芸と理論を載せ、プロレタリア文学を宣伝。その後、新興読書会を作り、革命書籍を読み、革命歌曲を唱い、話劇を公演する活動。新興読書会メンバーが増加して、国民党の注意を惹いたので、小団体に分けた活動に変更。また、武術と気功を教える大衆体育会を組織。国音訓練班では拼音を教えた。活動の拠点として、陳光（敬業の偽名）を校主として香港政庁に正式に登録した智仁勇小学校（授業料安価、教員はボランティア奉仕）を開設していたが、1934年に、「九・一八」3周年記念の配布用ビラを校内で印刷していたところ、英当局の手入れを受けて逮捕された。父親の援助で高額の保釈金を積んで保釈を受けた。その時、裏切者がでて香港の共産党組織が破壊され、市委書記が逮捕された。累が及ぶことを恐れた敬業は保釈金を捨て、船の炊事夫に化けてシンガポールに逃げ、10月にバンコクに移った。バンコクでは呉琳曼と改名。許一新、蓮芬、許煜、邱心嬰らと知り合った。一時ナコンサワンの精米業者の家に潜み、そのむすめの蘇蘭姉妹の家庭教師。［蘇蘭は呉琳曼を頼ってバンコクに上京し、樹人中学に入学。ここで欧陽氏と知り合った。］バンコクで樹人、啓明学校の教師。邱亦山の援助で、鐘英が来タイして結婚。1938年2月12日に逮捕され許侠らと共に国外追放を受ける。汕頭で許侠と共に『救国周刊』を発刊。日本軍がアモイに進攻したので、組織の指示を受け1938年5月にサイゴンに移動し、呉敬業と改名。同地で中共党員（後にインドシナ共産党員に転籍）の陳炳権（Tran Binh Quyen）と連絡し、越南南圻華僑救国総会（救総）の総幹事として活動、南ベトナムの愛国華僑の支援を得て1938年8月に『全民日報』を創刊し、総編輯を担当した。1938年10月10日、陳嘉庚がシンガポールで開催した「南洋各属華僑籌賑祖国難民代表大会」（南僑総会）に救総代表団秘書として参加。1939年に、カンボジアにおける唯一の抗日拠点として中正書局をプノンペンに設立。同書局は全民日報の代理店も兼ねた。1940年、仏印当局は日本の圧力で、華僑の抗日運動を禁止し、全民日報も発禁にした。1940年末に緬甸に移動し新聞発行を計画したが、同行した陳炳権らが国民党特務に逮捕され、その後日本軍が進攻してきたため昆明に逃げた。南中国でトラック運送業を経営、1943年共産党組織との連絡が途絶した。日本敗戦後ハノ

で左翼的なものではない。

民国日報の副刊面には、1934年12月11日号から1935年前半まで8回に亘って歯輪読書社編「歯輪」が掲載された。「歯輪」の執筆者は、暹羅共産党下の婦女協会メンバー（陳桂華、黄覚生など）である。また、同報副刊面に、1934年11月から1936年6月まで共産党員呉琳曼が、林曼または琳琳の筆名で書いた文章が頻繁に掲載されている。なお、呉琳曼が1934年10月に来タイした後の最初の原稿は、1934年11月に彷徨学社編「平無」[67]に連載された。

香港で、読書社、話劇社、学生自治会、体育団体、雑誌出版、ボランティア方式の学校経営など、多様な教育、宣伝、文化活動を指導した呉琳曼の来タイは、タイにおける同種の活動の積極化に貢献したはずである。

呉琳曼は、1935年7月に、許一新、魯文ら崇實学校の教師が中心となって企画した西風劇社の創立に加わった。

1935年前半に暹羅共産党がコミンテルンに提出した「報告」では、「歯輪」の連載を婦女協会の活動の成果としている。また、同「報告」は、プロレタリア芸術聯盟は宣伝の媒体として同聯盟のメンバーである華校教員、新聞記者がブルジョア華字紙の副刊面に執筆し、かつ副刊面の編集権を握ることを方針としており、既に新聞記者一名がメンバーであると述べている[68]。この記者一人とは、邱心嬰と見て間違いない。

民国日報は「南京中央宣伝部所辦的」(『中華民報』1934.6.2）と評されているように、国民党政府の蒋介石系の新聞であったが、編集部に共産党シンパの、邱心嬰が少なくとも1929年の創刊以来から1936年まで在職しており[69]、彼がプロレタリア芸術聯盟の会員に参加してのち、「歯輪」や呉琳曼の論文を掲載したものと思われる。

黄病佛は、1936年2月に華僑日報に就職し、新たに設けられた「華僑文壇」という副刊の編集を担当した。『華僑日報』1936.2.3から、黄病佛編「華僑文壇」の掲載が開始された。黄病佛主編の「華僑文壇」は、共産党員の投稿を多数掲載した。また、拉丁（ラテン）化新

イに移る。中共駐越南連絡員を通じて、広東区党委との関係が復活し、華字紙および華校の設立準備に従事。しかし、1946年12月仏軍がハノイを攻撃したため準備途中で疎開。ホーチミン派の駐Ha Giang特派員に会い、正式にベトミンの越南華僑政治保衛局の工作に仲間と共に計3名で従事。商人に化けて、中国国境に近いHa GiangとPho Bangの間でベトミン支援のために華僑工作に当たる。しかし、ベトミンの現地公安局と関係のよい国民党特務と対立し、この特務の讒言により上記保衛局のメンバー百余人は、フランスのスパイとしてベトミンに1947年12月に逮捕され、敬業を含む全員が1948年春にThai Nguyenで裁判の機会も与えられずに秘密裏に処刑された。以後妻の鐘英は「反革命家属」とされた。鐘英の努力で1985年に中共雲南省委組織部は、呉敬業の処刑は冤罪であることを認め名誉回復。名誉回復まで時間がかかったのは、中国がベトミンによる不当な死刑を認めれば、ハノイ政府との関係に悪影響が出ると躊躇したためであったという（『泰国帰僑英魂録、第一巻』、pp. 91−97、および呉敬業的一生編写組『呉敬業的一生』中共広東省党史研究委員会、中国華僑歴史学会、北京、1990年）。

67 琳琳「簡樸（2）（3）（4）（5）」(『民国日報』1934.11.7, 11.14, 11.21, 11.28副刊、彷徨学社編「平無」第4期、第5期、第6期、第7期に掲載)。

68 前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930−1936）」p. 163。

69 『中華民報』1934.1.29,『民国日報』1936.1.1。

文字運動を推進した。新文字すなわちラテン化文字（ローマ字）の運動が、タイの華僑社会で活発化したのは、1936年4月である[70]。

病佛編の「華僑文壇」は、当初は漢字で「病佛編」と書いていたが、1936年6月9日の第88号から漢字は用いず、ラテン化文字のみを用いてBingfoban（数号後には、Bingfobianと修正）と表記した。このころから、病佛は自筆の文章にも漢字を使わず、Bingfozo（病佛作）とのみ署名することもあった。また、同時期に「華僑文壇」の副刊欄に月に1〜2回掲載された漫塗文芸研究社編「緋醇」は漢字とともに、FEICHUNとラテン化文字でも併記するようになった。病佛は、「華僑文壇」第150期（1936年10月12日号）から、「華僑文壇、病佛主編」とラテン化文字“HUAKIAO WENTAN,BING FO ZHU BIAN”との併記を開始した。「第150期」の表記についても漢字を用いず、Di 150 kiとラテン化文字だけで記すように変更した。

華僑文壇が100号を達成したことを記念して、病佛は同文壇に執筆したことがある作家を中心にして1936年7月5日に暹羅華僑文芸作者協会（作協）を設立した。彼は、同年11月9日の魯迅追悼大会の挙行においても中心的役割を果たした。華僑文壇での執筆などを通じて、黄病佛と親しくなった許侠や呉琳曼は彼を共産党に取り込もうと努めたが、日中戦争が始まっても病佛は共産党系の組織的な運動に参加しようとはしなかった。欧陽氏が後述するように、病佛は共産党にも国民党にも属さない、自由な進歩派（第三派）の立場を貫いた。

「華僑文壇」の編集者は、1937年12月ごろに共産党系の邱心嬰に替わった。邱心嬰が「華僑文壇」面を担当するようになると、同面に欧陽氏が慕蘭の筆名を用いて書いた論文が掲載されるようになる（213頁の欧陽恵氏の著作目録参照）。

上述のように暹羅共産党は華字紙副刊を宣伝媒体として重視し、そのために副刊の編集者である記者をメンバーに獲得しようと努力した。その最初の成果は、邱心嬰であった。更に、黄病佛を獲得しようと努力したが、成功しなかった。

1936−39年当時、バンコクの主要華字紙『華僑日報』、『中華民報』、『民国日報』の3紙は、「三華報」といわれた。この3紙はタイ華僑社会（僑社）における重要な情報媒体であり、僑社の様々な式典、会合（例えば中国からの来タイ要人の歓迎会、中華総商会の執行部選挙[71]など）には必ず招待された。

この三華報の副刊は、在タイ華僑インテリやアマチュア作家の発表の場としても機能していた。これらの副刊を読めば、一般新聞の文化文芸欄にもかかわらず、共産主義的論調が主流を占めているのに驚かされる。マルクス主義的社会経済分析や文化分析、民族解放闘争の呼びかけ等々。1930年代後半のタイ華僑インテリに共産主義思想の影響が如何に強かった

---

70 『華僑日報』1936.4.20および、「新文字運動的展開」(『華僑日報』1936.4.27副刊、「緋醇」に掲載)。

71 三華報は1936年3月1日の中華総商会執行委員監査委員選挙の開票立会人（監票員）を委嘱されている（『華僑日報』1936.3.2）。

かが判る。勿論、これは思想面の影響であり、彼ら全員が、共産党系組織のメンバーであったわけではない。黄病佛のような立場のインテリも少なくなかったのである。なお、このような一般新聞・雑誌のコラムに共産党系の論考を掲載する宣伝方法は、タイ共産党時代の1950-70年代も同様で、違いは媒体が華字紙からタイ語出版物に変わったことだけである[72]。

第二節　華字紙編集者：第三派（黄病佛）と共産党シンパ（邱心嬰）

黄病佛［1902-1961］[73]は常に異色的な存在であった。彼や、華字紙記者の翁寒光、林秋野［1936年時の中華民報副刊「椰風」編集者］らが中心になって、文学愛好者からなる彷徨学社を［1934年初め頃に[74]］設立した。彷徨学社の組織は緩く、入会退会も自由であった。扱うテーマも政治的なものばかりではなかった。彷徨学社には、タイ華僑界の有名アマチュア作家の多くが属し、メンバーの文学的水準が高かった。メンバーの作品が、上海で発行されていた月刊誌『新月』に掲載されたこともある。

黄病佛が「華僑文壇」を編集していた頃が、タイ華僑文学の黄金時代であった。毎日午後、彼は、華僑日報社屋近くの喫茶店に陣取って、文学青年たちとの会話を楽しんでいた。政治活動には消極的な彼も、魯迅関係の活動は率先して行った。

共産党は彷徨学社を取り込むために、黄覚生などを送り込んだこともあった。当時、共産党系の読書社は「生力」、「南哨」、「夜哨」など闘志を感じさせる名称を用い、筆名も工農大衆と親和的な「田夫」とか「牧軍」などを好んで用いたのに対して、黄病佛のグループは、「彷徨」とか「病佛」などと暗い名称を用い、両者はかみ合わなかった。

共産党はプロレタリア芸術聯盟に黄病佛を引き込もうとしたが成功せず、抗日戦争が始まった後も、彼は救国会にも参加しなかった。彷徨学社のメンバーは、国民党にも、共産党にも属さない第三派として自由な立場をとり、党派的な活動に与して自由を失うことを嫌った。

72　村嶋英治「1970年代のタイ国における学生運動と共産主義」、『アジア経済』23巻12号、1982年12月号参照。

73　孫淑彦・王雲昌編『潮汕人物辞典』（中山大学出版社、広州、1991年）p. 97によれば、「潮州澄海人、1927年来タイ、華暹新報の記者」。国民日報総編輯魏天育の紹介で蕭佛成の華暹新報に入社し、1928年3-4月時に、副刊「華暹之花」を担当。しかし3〜4か月担当しただけで病気になり王鏡秋［台湾出身で日本籍の医者、1920年代半ばから在タイ、博愛医院を経営、1930年代貧困労働者から成る経済互助公会を組織して会長、太平洋戦争終結直前の1945年7月に抗日華僑によって暗殺された］医師の助言に従って中国に転地療養。バンコクに戻った後は、中華会館［蕭佛成を長とする中国国民党暹羅総支部の隠れ蓑組織］が経営する新潮学校の教員として勤務した。病佛は、同校の学生自治会の指導も担当した。ところが、同校の運営委員会が学生自治会を廃止したため、自治会役員の学生たちが不満を爆発させて、1929年10月10日に自治会室を破壊するという事件が生じた。学校側は、病佛が学生に暴動を教唆したとして非難した。これを契機に病佛は新潮学校を辞職した（『華暹新報』1929.10.21, 10.22, 10.24）。1930年1月1日に陳逸民の紹介で中華民報に入社。1934年夏に同報副刊「椰風」担当者の中国帰省時、「椰風」を代理編集。その後副刊編集者に昇格。1935年5月に中華民報を辞職。1936年2月に華僑日報に入社し、新たに設けられた副刊「華僑文壇」の編集者に。『華僑日報』1936.2.3は、黄病佛編「華僑文壇」第1期［第1号］を出版。自著としては、1934年に『烏鴉集』（「病佛著烏鴉集昨天出版」『民国日報』1934.12.22）、『死之集』（上海生活書店）がある。

74　『中華民報』1934.3.19。

それ故、共産党員や共青団員は、黄病佛をあまり評価せず、かえって見下すようなところがあったのは当然である。また、1936年末に劉漱石、呉琳曼らが我們読書社を作った理由の一つは第三派が主流を占める彷徨学社に対抗するためであった。しかし、同時に、黄病佛が編集する「華僑文壇」は、共産党系の読書社や共産党人士の作品や評論の発表の場になっていたことも事実である[75]。

タイの華僑知識人には、彷徨学社の人々のように第三派の立場の人も少なくなかった。タイ華僑研究では、共産党、国民党の外に、どちらにも属さなかった第三派を研究することも重要である。戦後の黄病佛は、タイ国各地を旅行してタイ紹介の素晴らしい著作『錦綉泰国』(泰華文化事業出版社、1974年)を残した。

一方、もう一人の著名記者、邱心嬰［1909−1974］は共産党シンパとしてプロレタリア芸術聯盟に加わり、共産党のために貢献したが、最後は共産主義に失望して世を去った。

邱心嬰は1909年5月に潮州の潮安市に生まれた。父親は労働者であった。同地の小学校を出た後、香港の商店で働き、1927年に来タイした。1929年に国民日報[76]の記者として働き始めた。［1932年6月初めに国民日報は発禁処分を受けたので、紙名を逆転して民国日報として、1932年6月4日より刊行した[77]。］邱心嬰は、［1934年には］暹羅共産党下のプロレタリア芸術聯盟のメンバーに加わった。

1936年3月21日の中華中学（中中）ストの時、既に華僑日報に移っていた邱心嬰は自らストの現場を取材した。前の職場の民国日報の記者姚念から、同報がスト学生を理由もない騒乱者であると罵倒する社説を載せる予定であることを聞いて、自分が担当している華僑日報の暹羅ニュース欄に、学生の愛国正義の行動を支持するという、多数の父兄の談話を掲載した。［『華僑日報』1936.3.30には、地方のラーチャブリーから上京した陳立恵・陳立旺兄弟の父親陳南生が、中中当局の退学処分を批判したという記事が掲載されている。］また、頑固派が、スト学生は社会治安の破壊者であるとして警察の介入を求めようとしているという情報を得た邱心嬰は、劉漱石を訪ね、タイの僑社の現状は中国の政治状況とは同じではないので、適当なところで学生ストは止めさせた方がよいと建議した。劉漱石と、当時学生運動の指導を担当していた張慶川は、ともに邱心嬰の見解に賛成して、ストを収めることを決めた。

その前に紙面拡大計画中の華僑日報から、スカウトの話しを持ちかけられた邱心嬰は、劉漱石に意見を求めた。漱石は、華僑日報に移った方が、更に大きな役割を発揮できると言っ

---

75 例えば、『華僑日報』1936.9.5の「華僑文壇」に掲載された許侠の論文（「文壇時論、所望於努力言論者」）は、末尾に「1936.8.26」と日付を付し「随着国難的加深、中華民族已臨到了『非戦則亡』的地歩！ 所以在全民族猛然醒覚的情況当中、浩大的『抗戦図存』的呼声已如狂潮般激蕩着全中国、只要是、不願做奴隷和漢奸的、便都会揮挙奮起了、所以戦線早已快疾而又堅固地統一起来、……努力言語的朋友、応明瞭自身所拠的地位、健全自身応有的力量、発言絶応慎重、立論絶応正確、……辦論得体、不但能確定認識、拡展工作、而且更能厳密組織増強力量……」と述べている。

76 1927年1月1日創刊（NAT Ro.7 Mo.26.3/33）の国民党系の新聞。

77 タイ国立図書館所蔵紙の調査による。

て職場を替わることを勧めた。

邱心嬰（ママ）が華僑日報副刊「華僑文壇」を担当するようになって直面した問題は、当時祖国の文芸界で発生した「国防文学」と「民族革命戦争的大衆文学」との間の論争に、タイ華僑文芸界がどう対応するかという問題であった[78]。少なくない青年作者たちが、邱心嬰

---

[78] 『華僑日報』上の論争としては、1936年7月20日の同報副刊面の漫塗文芸研究社編「緋醇」第27期に掲載された、森吉「文学上的統一戦線」、路路「再談関於『文学遺産』」を、黄病仏が「華僑文壇」で批判して生じたものがある。森吉や路路は、タイ華僑文芸界に統一戦線を求め、非同調者は漢奸を助けるものであると批判した。病仏は、自由な批判を禁じる、押しつけがましい主張に対して、集団（暗に共産党を指すと思われる）も自己批判を忘れてはならぬと反論した。

この時期のタイの華字紙副刊（『華僑日報』の「華僑文壇」、『中華民報』の「椰風」）は、国防文学論、国防戯劇、民族革命戦争的大衆文学論、革命的ラテン文字化などの論文で賑わっている。例えば、1936年5月6日の「華僑文壇」に掲載された、許苦「従『国防文学』『国防戯劇』談到現在的劇運」は、「随着民族危機的深重、各方救亡工作之緊張、継『国防文学』之後、『国防戯劇』也便給人提出来了。……因為国防戯劇、也就是在這種特殊的情勢之下産生的、我們応該説、国防戯劇是我們当前底救亡運動的武器之一、是我們民族解放闘争的有力的反映之一、也可以説、在我們光栄的歴史之中—殖民地、半殖民地弱小民族的独立史、全世界的反帝史、和全世界的革命史—最富於歴史意義的芸術之一部門……我們雖然遠離祖国、但是我們也是中国人、我們也是世界上的被圧迫民族之一。在中国的民族危機日益加深和世界大戦的情勢日形緊張的情景之下、我們要展開戯劇之対於時代的任務、我們要在可能的範囲以内、尽量使僑胞認識敵人、認識自己、認識目前他所応負起的責任、認識漢奸売国賊的罪悪、……」（『華僑日報』1936.5.6）。

1936年7月27日の「華僑文壇」には、笑天の「推進国防芸術與新文字運動之重要性」が掲載されている。同論文の最初の部分は、

「事実擺在我們的眼前、我們民族的危機是達到最後関頭了　不容我們再『沈黙』再『忍耐』再玩什麽『埋頭苦幹』的把戯了　我們中国誰都感到有馬上組織一強有力的民族革命戦争的全民統一戦線的必要

因此、為了要配合着当前客観的情勢所需求、為了要推動作整個民族解放的実現、站在先覚者的文化界、已根拠了目前的政治形勢以及大衆一致的需要、従而提出了『国防文学』與『国防戯劇』的口号、這口号已是風起雲湧地向実践的路拡展開去、已経得到広大群衆的認識與擁護、這口号、最近驚破了××（ママ）主義的迷夢、撃砕了漢奸們的心胆。

『国防芸術』這火炬、燃起的時間雖還不久、可是它強烈的光芒、已深々地照透了全国每一個大衆的心坎、同時、也波及到南洋各地了。

在暹羅、『国防文学』與『国防戯劇』的展開情態、我在這裏来做一個概括的検挙、『自西風劇社演出「水銀燈下」之後、国防戯劇在僑社的話劇界中、已植下了根皃了、直至本年児童節日［4月4日］崇校［崇實学校］劇運諸君在該校演出了「察東之夜」「回声」二齣意識較正確而純粋的国防戯劇以後、国防戯劇才在僑社中、普遍地被人所注目、已経又演出了「李七嫂」「打回老家去」二劇、国防戯劇的陣線、可算是正式地在華僑劇運的進程中展開了』（白干『集体力的表現與国防戯劇陣線的展開』）従這一段文字里、我們便可以明瞭「国防戯」在僑社中展開的情態……』（『華僑日報』1936.7.27）。

『華僑日報』1936.7.28の副刊面の漫塗文芸研究社編「緋醇」第28期に掲載された、森吉「論現在我們的文学運動」は、正に、「民族革命戦争的大衆文学」と「国防文学」を比較して次のように述べている。

「這是魯迅先生論目前我国文学動向的一篇論文、発表於『現実文学』創刊号、他以為我国文学運動、随着時間的推移、一直向前発展着、到了現段階、已経樹立在一個更堅固的基礎上、牠的路向是更具体地、更実際闘争底地、発展到民族革命戦争的大衆文学。

魯迅先生説在総口号之下、縦使適応時宜提出其他具体口号、例如「国防文学」「救亡文学」「抗×文学」……是不妨碍運動進行的、反而却是客観環境所需要的、不過口号太多了、有時也会使人頭昏、渾乱。

本来與其分出許多的口号、還不如把視線集中於一個総目標上、在総口号領導之下、才能獲得更大的効果、才能看出積極的作用、要能充当這総口号的文字、其本質的包含度量必定是最強大無疑的了。「民族革命戦争的大衆文学」這個総口号便応着這個実際需求而産生而出現！

現在我国的危機已到了一髪千鈞、人民已被迫到死亡線上、所以人々共同遭遇的存亡的問題、也

に討論会を開くことを求めた。心嬰は、呉琳曼、許侠、それに私も加えて、この論戦について華僑文壇はどういう態度を採るべきかを研究した。上層部から明確な指示がなかったので、我々には腹案がなく、ただ座談会を開いてみんなの意見を聞くことにした。開いて見ると、予期しなかったことに、陳立恵と梁傳燊、莫莎と邱健、侠魂と酒徒のそれぞれの間に激論が生じた。彼らは本来親密な戦友なのだが、気まずい思いのまま散会することとなった。この後、邱心嬰は我々数人を連れて劉漱石を訪ね、指示を仰いだ。漱石は卒直に、自分は国内外の文芸界のことには疎いので、みなさんの意見を聞きたいと答えた。そこで心嬰は次のように述べた。

祖国で二派に分かれて論戦している人達は、両方とも進歩的な革命作家である。どうして彼らは公開で論戦しているのだろうか、誰を利することになるのかを考えないのだろうか。今回のバンコクでの座談会も祖国文芸界の論争範囲を超えるものはなかった。ただ各々自分が擁護する方のスローガンをならべたに過ぎない。タイ華僑文芸青年の殆どは、内戦反対、

即是整個民族生死的問題、一切的現実的生活莫不和這個問題有密切的聯繫、這個新的現実必然会向文学要求反映、而新的文学的内容必然的要為新的歴史階段所決定、這在創作上、我們不能太狭窄的限於某一局面、而応把眼光放大到現実社会各個角落里去。

「民族革命戦争的大衆文学」和這個現実是最吻合没有的了。牠是以現実的生活為其創作的基点、牠的内容対於民族闘争要求解放更能給以正当的解釈。

文学的創造都起於社会某一階段的意識作用、「民族革命戦争的大衆文学」在実践上不独能够反映環境的生活而且也能推動那些環境的生活、我們從這種作品中、既可以窺見真実的生活、又可以窺見生龍活虎的戦闘、時代跳動着的脉搏。

有人嘗拿「民族革命戦争的大衆文学」和「国防文学」比較、其実却是不必的。「国防文学」一方面也是立脚於民族革命高潮的現実上、在牠的原則下来描写、不能離開現実的領域也與「民族革命戦争的大衆文学」一様的。祇有属於民族革命戦争的意識陣営里的文学作品、才能够取得真実的偉大的評価。

我們要求生活和文学結合着、如果我們将勇敢地走向旭日東昇的前進階級的文学的前方、我們便応該共同推動那能作最高表現民族革命戦争的文学！」

『華僑日報』1936.9.7 副刊欄の螞蟻社編「菩提樹」第2期に掲載されている、二毛「『国防文学』不能適応華僑嗎」は次のように述べている。即ち、「我們還聴到一般人対這『国防文学』的反対、他們的理由　(1) 国防文学與華僑無関、它応在国内才有実践性、(2) 国防文学的題材是抗戦的事件、華僑遠在千里之外、没有親臨戦線、就没有『国防文学』的題材、其実、抱這反対態度的人、是因為他們対於『国防文学』還不甚了解、把它看成太狭窄的東西了。『国防文学』這個創作目標的口号的提出、是在華北問題発生的厳重情形之下、它不是狭小的『民族主義』、不是擁護一個階級的政治的『民族主義』、而是擁護站在民族革命解放的大衆生活的文学、它不僅描写東北義勇軍的抗戦、大衆的救国運動、它還『歌頌真正為民族而奮闘的民族英雄、幇助健全的民族意識的成長、暴露漢奸的陰謀和醜態』……我們華僑雖処在遠隔祖国的海外、然而対於祖国的危機和我們是有切身的関係的、……救亡存在華僑大衆中、那是明々白々的。這様、我們華僑文芸応該站在『国防文学』創作目標下、把華僑大衆対祖国革命的熱烈的賛助、対祖国危亡的迫切関心、対祖国的領土被強敵侵佔的憤恨、把僑衆掙扎在生活圧迫下的苦闘和遭各種不平等待遇的痛苦、把経済破産的華僑社会的種々状態、積極的反映在作品中、並該顕示明暗之路、刺激他們覚悟起来」。

また、『華僑日報』1936.10.4 の「文壇情報」に掲載された、黄人「『九一八』後的中国文壇」は次のように述べている。「自従我們的『友邦』増兵華北、加緊走私、中華民族所受的圧迫、越来越沈重、従事文芸工作的進歩的知識分子、想挽救中華民族厄運、於是在国内文壇上誕生了『国防文学』與『民族革命戦争的大衆文学』、這両個口号、欲在現段階聯合各党派的分子、在民族抗争的旗幟下、加緊抗敵工作、一面在鼓舞大衆熱情、一面喚醒大衆集団意識組織大衆為民族解放運動而争闘。筆者此刻雖然遠居海外、非直接参加国内文化工作、但我們相信、緊決地相信、現段階的中国文学将在『民族解放戦争』的旗幟下挺進」。

抗日救国を主張している。それなのに、もし、華僑文壇上で陳立恵と梁傳燊が論戦したら団結上不都合だ、と。

漱石は彼の見解に賛成し、各副刊の編集者に論争を掲載しないように声をかけることにした。また、各読書社には小さな座談会を開いて意見交換をするのはよいが、論戦を文章にしないように求めた。

当時［第二次国共合作以前］の華僑日報は、面白かった。同紙の社説や祖国ニュース欄では、毛沢東や朱徳を“共匪”と罵倒していたが、一方、華僑文壇に掲載された文章は、南京政府をからかい攻撃していた[79]。これは同紙の経営者が南京政府のご機嫌を取りつつも、進歩派読者も獲得して新聞の売り上げを増やそうとしていたからである[80]。邱心嬰は華僑文壇の担当を頼まれた際、経営者に文壇の内容を検閲しないように約束させた。心嬰は密かに呉琳曼、許侠とともに華僑文壇のウラ編集委員会を作り、共産党員の文章は修正なしでそのまま掲載した。

邱心嬰はプロレタリア芸術聯盟が解散する時、劉漱石に入党を希望したが、漱石は党外に留まった方が祖国に貢献できると答えて入党させなかった。太平洋戦争中もタイに留まった心嬰は、戦後、バンコクの潮州会館総幹事、中国民盟暹羅支部常委を務めた。1953年に逮捕され、強制送還処分を受けて汕頭市に戻り、同市で僑聯の仕事に従事した。

私は、1957年初に心嬰が全国僑聯の会議で北京に来た時、李華、邱及、黄耀寰とともに会うことができた。汕頭に戻ったのち、心嬰は、30頁近い入党申請書草案を送って来てみんなに意見を求めた。私が心嬰の詳しい経歴を知ったのは、この時であった。しかし、間もなく反右派運動が生じて、私が右派分子にされた後は、私に手紙を書いて来る人は誰もいなくなり、心嬰の入党がその後どうなったのかを知る由もなかった。心嬰からの入党申請書草案を含む、私宛ての友人たちからの手紙一切は、文革中に“反党黒材料”として紅衛兵に持って行かれてしまった。

私は20年に亘る吉林省への下放生活ののち、胡耀邦の御陰で1979年に名誉回復することができて北京に戻って来た時、邱及から、心嬰は大右派の冤罪を着せられて病死したと聞かされた。1980年代後半、私は泰国帰僑英魂録の資料収集のために三度も汕頭市に出張する機会があったので、心嬰の妻を訪ねて墓参りをすることを思い立った。友人の協力を得て、汕頭市中を探して見たが、彼の妻も、墓も見つからなかった。香港に住む邱亦山に電話で尋ねて、彼の妻は遺骨を持ってバンコクに帰って間もなく亡くなったことが判った。

---

79 華僑日報は、満州国成立以来、同国を一貫して「偽国」と表現した。一方、共産党については、日中戦争が起き第二次国共合作がなるまでは「共匪」と書いている。

80 華僑日報は1937年1月15日に新屋が完成し、同時に新しい印刷機を入れた。これを記念してバンコクの有名弁護士3名の保証付きで、同紙の販売部数は1万50部であることを公表した（『華僑日報』1937.3.16）。なお、1920年代半ばにおいては、当時の3大華字紙の売上部数と読者数は、「華暹新報、僑声報、中華民報の3紙は、各1000部前後の発行部数、読者は数万人」（『僑声報』1925.3.11）と報道されている。1909年初における2大華字紙（華暹新報、啓南新報）の売上部数は各300部前後である（前掲村嶋論文「タイ華僑社会における中国ナショナリズムの起源」参照）。

更に、伝を頼って残された、バンコクの息子に電話をしてやっと全容をつかむことができた。それによれば、心嬰は、毛沢東の何でも自由に意見を出せという号令に騙されて、意見を言ったところ1958年に右派分子とされ、汕頭市僑聯秘書長の職を奪われ、労働改造に送られた。結核で体の弱かった彼は再起不能の迫害を受け、1974年に血を吐いて死亡した。死の床で、彼は、ここは自分の国ではない、早くタイに帰り、自分の骨灰はチャオプラヤー河に流すようにと妻子に遺言した[81]、という。この言葉から、長年入党を希望し、結局入党できなかった彼が、最後にはいかに共産主義に失望していたかが判る。

第三節　共産党が指導した読書社の活動

タイ華僑の読書社は、最初はそれぞれの華僑学校内で始まった。私が広肇公学に在学していた時分にも、既に校内には読書社が存在していた。そのうちに、参加学生が複数の学校にまたがる、学校横断的な読書社が現れた。学生だけではなく、華字紙の記者や編集者、アマチュア作家などのインテリが参加した読書社も生まれた。読書社の活動は、週に一回程度の会合をもち、国際、国内問題についてテーマを決めて討論するとともに、メンバーの意見や作品を集めて出版するというものであった。これらの発表の場として利用されたのが、華字紙の文芸投稿欄である副刊面である。

タイで読書社が盛んになったのは、抗日戦争勃発前後に、民衆が自発的に多数の読書社を結成したからであるという説があるが、これは間違っている。実際は、読書社は共産党の指導により抗日戦争以前から組織化が着手されていた。共産党が読書社に目を付けた理由は、将来共産党に加わる可能性のある学生を読書社で育成するためであった。

読書社が組織化される以前の共産党の大衆組織には、「赤色」という語が付されていた。しかし「赤色」では大衆は怖がって近寄らなかった。そこで大衆を獲得するために、人々が近づきやすい抗日救国を掲げた読書社運動に活動の重点を移したのである。党の新しい方針を受けて、プロレタリア（普羅列塔利亜）芸術聯盟、赤色総工会、赤色学聯[82]（学生聯合会、学聯ともいう）など多数の赤色系統の組織は、やがて、姿を消した。読書社の組織化は、［運動方針を階級闘争から抗日救国活動に転じた1935年末以後の］共産党の人材獲得の新しい方法ということができる。なお、私は、「赤色学聯」のメンバーになったことはない[83]。

共産党系の読書社で、リーダー格として活躍した者のほとんどは樹人中学、崇實学校、啓

---

[81] 慕蘭（欧陽恵）「追懐心嬰」、『泰国帰僑英魂録、第二巻』pp. 191-204による。当時の華字紙と照合すると、この稿は、欧陽氏が書いた回想の中でも、最も記憶違いと混同が多い。邱心嬰は華僑日報の記者として各読書社の文集を同報に掲載したと欧陽氏は書いているが、これらが掲載されたのは華僑日報ではなく、殆ど民国日報の副刊においてである。また、邱心嬰が華僑日報に移った時期もズレている。

[82] 1936年4月19日に、13名の共産党関係者が逮捕されたが、その中の一人は「羅修俊　瓊人［海南人］、赤色学聯代表」（『民国日報』1936.5.20）と報道されている。

[83] 「赤色」は階級闘争を強調する意味があったと思われる。「赤色」の消滅は、1935年8月のコミンテルンの方針転換も関係があるであろう。張慶川を指導者とした学聯の活動は、崇實学校、廣肇公学、新民学校、中華中学等の学生ストを指導した1934～36年初めがピークであったと思われる。

中華民報

中華民國廿四年十月廿五日　星期五

二回憶

區恵雄

欧陽恵

幽靈眞境

写真6　欧陽恵の最初の刊行作品（『中華民報』1935.10.25副刊「椰風」）

明学校の三校の学生であり、共青団の中堅幹部であった。彼らは、時事解説、唱歌、作文などの様々な活動を展開し、多くの若者の支持を得た。

私の読書社活動を具体的に述べれば、1936年半ばに、私は、陳立恵（筆名：銅馬）、梁傳燊（筆名：牧軍）らとともに「生力」という読書社を立ち上げた。［生力読書社編「生力（Shengli）」は、『民国日報』1936.5.30の副刊面に、第1期が掲載され、同日報1937年3月31日号掲載の第20期まで続いた。第1期には、恵雄（区恵雄、即ち欧陽恵）作「企望着『天明』的来臨」が掲載されている。生力読書社編「生力（Shengli）」の筆者名には、恵雄、傳燊、立恵、念念、馬燦雁、鄧年勝、迅雷、阿白三、老油、孤鴻、洪因、陳燈、馬道、水夫、周通などがある。］

次いで、私は1936年10月には南哨読書社、同年12月28日には我們読書社に参加した。これらの活動については、魯迅追悼大会の項で述べたい。

第四節　演劇運動：蕭軍の『八月的鄉村』を上演（1936年6月）

抗日救国運動展開のため、演劇を用いることを劉漱石が唱導し、1936年5月1日に秋田劇社が成立した。「秋田」という名称は、日本の左翼作家秋田雨雀の姓から借用したものである。文学と演劇を愛する、許一新[84]、呉琳曼、魯文（関弓）、李光（林学）、黄流が、秋田劇社の中心になり、私や、陳立恵、梁傳燊、杜力生、杜金泉、呂雪冰、潘女雄も参加した。半月ほどして、同劇社の呉琳曼、魯文、許一新が協力して、「李七嫂」の三幕話劇の脚本を書

---

[84]　潮州澄海県生、10歳で父親に連れられて来タイ。1938年2月12日に共産党員の一斉手入れで逮捕され、国外追放処分。香港の八路軍駐香港辦事処の下で出版活動。日本軍の香港占領で、ウィエンチャンに移る。1942年5月恵州での任務中に病死（欧陽恵「懐念“抗聯”主席許一新同志」、『泰国帰僑英魂録、第二巻』pp. 83-90）。

き上げた。

「李七嫂」は、［1935年8月に魯迅の援助で出版された］、中国東北人民の抗日闘争を描いた蕭軍の小説『八月的郷村』[85]を、戯曲化したものである。［当時タイで劇の公演は事前に警察当局の許可を要したが[86]］、『八月的郷村』というタイトルのままでは反日劇として人目を引くので、「李七嫂」というタイトルに変えて検閲に出した。検閲官は、嫂（あによめ）という語句から単なる愛情劇と判断したのか、許可した。蕭明隊長を演じる主演男優に、崇實学校教員の黄流、李七嫂を演じる主演女優には、生力読書社の積極分子でもある呂雪冰が選ばれた。梁傳燊（牧軍）は抗日負傷者の役を演じた。

南洋で生活する私たち学生は、氷、雪、霜の区別も判らず、銃にさわったこともないのに、氷と雪の困難な中で日本軍を攻撃する人民革命軍を演じることになった。呉琳曼は私や陳立恵、梁傳燊を、中華街の新華書局という本屋に連れていって、東北の事情を調べさせた。この時、同書局の店員をしていた林明傑と知り合った[87]。また、私たちは大きな氷の塊を買ってきて、手足で触って東北の寒さを体験した。

この劇の主題歌など、音楽は崇實学校校長で、共産党バンコク市委員会[88]宣伝部長の許一新が担当した。許一新は、読書社のメンバーや夜学の学生に観賞させるために、リハーサルという名目で何回も上演した。そして、［1936年6月1日と2日の両日、崇實学校四周年記念の募金演劇会として[89]］、中華総商会の光華堂において、「李七嫂」が上演

---

85 田軍（蕭軍）『奴隷叢書之二、八月的郷村』（出版社、奴隷社。発行者、上海四馬路　容光書局）は1935年8月初版、1936年2月再版、同年9月六版が出版されている。

86 1936年10月3日夜に中華総商会光華堂で、啓明学校への寄付金集めのために、西風劇社が公演を行ったが、その演目の一つ、大幕国防劇「流民三千万」の審査に当局は、何日もかけた上、公演日の正午になって公演不許可を言い渡した（『華僑日報』1936.10.3, 10.5）ことがある。

87 慕蘭「永遠感謝您那微微的一笑：追思蔡明兄」、『泰国帰僑英魂録、第四巻』pp. 159−160。

88 暹羅共産党のバンコク市委員会は、タイ語でカナカマカーン・ナコーンと称される。

89 「崇實学校今天挙行四周年、今晩在光華堂遊芸、今天為攀素旺［Saphan Sawang］崇實学校成立四周年紀念日、上午9時、該校全体員生、斉集開会紀念、会場情形、極為熱鬧、今晩7時30分鐘、該校假光華堂遊芸、以示慶祝、又、該校因全体教職員之苦幹、雖在経済拮据中、尚能促進校務、故是籌款各界多楽予賛助、茲将該校今晩在光華堂遊芸節目録之如左、1奏国歌、2唱校歌、3致開幕詞、4前奏曲、5西班牙的回憶、6銀神舞（笑劇）、7金鏤衣（清唱）、8海灘上（表情歌）、9尼羅河［ナイル河］之夜（舞）、10凡爾賽［ベルサイユ］的俘虜（話劇）、11打回老家去（歌劇）、12良宵（歌舞）、13李七嫂（三幕話劇）、14奏暹国歌」（『民国日報』1936.6.1）。「崇實劇団上演新話劇、招待文化界参観、崇實劇団、是曼谷話劇界的中堅隊伍、他們都很熱烈地献身給藝劇運動、六月二号晩、他們擬假座光華堂、公演「凡爾賽的俘虜」、「八月的郷村」……等、専招待各報館各学校各藝術団体的文化人前往参観、忠誠地虚心地来接受諸先進者的批評和指示云云（風来）」（『民国日報』1936.6.1副刊、「新時代」新第64期に掲載）。さらに、『民国日報』1936.6.2は「崇校昨晩遊芸、戯劇表演成績特優、今晩節目略有更改」の見出しで「綜計是晩以「李七嫂」一劇、演来最有精彩、這劇是従「八月的郷村」改編出来的、劇情既最充実、演技亦極高超終場博得掌声不絶」と報じている。これから、「八月的郷村」というタイトルが、欧陽氏が言うほどには秘密ではなかったことが判る。共産党員の呉琳曼（琳琳）は、「『李七嫂』看後砕記」と題した文章で「値得提出来一説的、是這次崇校劇団在「李七嫂」的演出中、英勇地作反旧礼教的実践、撕毀了礼教這隻吃人不見血的紙老虎。過去、有的劇団為了屈服旧教礼、所以多要些女扮男角或男扮女角的把戯、使話劇損失了不少的光彩、崇校劇団男女演員、竟不顧一切地作大胆的表情、実在給今後的華僑劇運、開了一条大路。対于英勇的女劇人雪冰君及其余劇人、我們特在此致敬。爰祝他們永遠拿着闊斧肇着大旗、站在華僑劇運的前鋒」（『民国日報』1936.6.13副刊「新時代」）と評している。

光華堂

写真7　光華堂

された[90]。

劇の最後に、銃を掲げた蕭明隊長が、抗日に出発する雄叫びをあげ、隊伍を率いて、日本軍に突撃すると、舞台上も舞台下も「東北は我々のものだ！ 故郷を取り戻せ！ 日本帝国主義打倒！」の叫びが会場に渦巻いた。

光華堂が借用できたのは、許侠が［1936年5月13日に主席に選出されたばかりの[91]］蟻光炎中華総商会主席に説明して理解を得ることができたからである[92]。

第五節　タイ華僑の演劇運動とラテン化新文字運動【村嶋補足】

中国でもタイ華僑社会でも大衆の識字率は極めて低かった。そのため漢字文書を用いた共産党の宣伝には、限界があった。これを克服する方法として、共産党は、一つは文字ではなく演劇によって訴える活動、もう一つは漢字ではなくローマ字によって識字率を高める運動を実施した。

1936年5月6日号の華僑日報22面の「華僑文壇」（第68号）に掲載された、許苦「従『国

---

[90] 「三幕話劇「李七嫂」、這是従「八月的鄉村」改編出来的、是一齣富有刺激性的戯劇、劇情大概是叙述東北自衛軍為着恢復祖国的失地、不怕辛苦和敵人抗戦的惨状、後来因為有一個隊員叫老唐的、恋上了一個女人「李七嫂」、不守紀律、致全隊惨遭敵人襲撃、険些兒全隊都「回老家去」、在這一役老唐是為恋愛而犠牲了性命、後来「李七嫂」要代老唐復仇、終于也負傷而亡、全劇非常緊張、特別是在那受傷的兵士、聴見了同隊的弟兄唱着歌的時候、亦掙扎的起来唱那条「打回老家去」的歌的時候、因為声調的雄荘、詞意的激昂、表情的深刻、真令人聴了大有怒髪衝冠的激動、而同時鼻管子裏也莫名其妙的覚得酸溜溜的、険些兒墜涙、確是不平凡的戯劇」（「崇實懇親会、公演参観記」『民国日報』1936.6.3）。

[91] 『中華民報』1936.5.14「商会昨晩挙行第四次互選蟻光炎被選為商会主席」。総商会リーダーである陳守明と蟻光炎の対立の結果、何回も投票が繰り返され、蟻光炎がようやく商会主席に選出された。

[92] 本節は、欧陽氏とのインタビューに、彼の次の3点の著作を加えて記述した。欧陽「把生命献給了祖国的海外孤児―懐念梁傳燊」、『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 8-9。欧陽恵「懐念抗聯主席許一新同志」、『泰国帰僑英魂録、第二巻』p. 84、慕蘭「滚滚湄江万古流―懐念黄流」、『泰国帰僑英魂録、第四巻』pp. 269-272。なお、黄流は、1938年2月に崇實学校校長許一新が逮捕国外追放になった後、同校の後身、重慶学校の校長をした。戦後は広州の情報機関に勤務し、タイで情報工作。

防文学』『国防戯劇』談到現在的劇運」は、次のように述べている。すなわち、中国では、植民地・半植民地の反帝国主義革命・世界革命を大衆へ宣伝する手段として、演劇が重視されている。その演劇は、中国人に対する敵の残虐さを主要なテーマとしたものである。文字を用いて大衆宣伝をしようとしても、中国人大衆の7-8割は文盲なので効果は少ない。かつ、生身の人間が演じる演劇は、観客に大きな情緒的感動を与えることできるので、文学以上に宣伝効果は大きい、と。

タイにおいて共産党系人士も参加して創立された劇団としては、1935年5月に結成された西風劇社が最初である。1936年2月21日号の華僑日報の「華僑文壇」に掲載された「1936年暹京華僑劇壇展望」は次のように述べている。

タイ華僑社会においては、華僑学校の遊芸会で話劇（新劇）が単発的に演じられることはそれ以前もあったが、目的と組織を有する新劇運動は、1935年5月に結成された西風劇社が嚆矢である。西風劇社の発起人は周熹、黄毅、呉琳曼、林明傑らである。この劇社は、1935年7月に光華堂で「水灯下」を公演した。しかし、その後活動は停滞した。発起人たちがメンバーの再登録をしたところ、登録した者は20余人に過ぎなかった。呉琳曼は、未だ山巴（バンコク以外の地方県を指す）在住であるが、まもなくバンコクに出て来て西風劇社の中心人物たちと復興について協議する予定であると聞いている、と。

この協議によって西風劇社は、再興されたようである。1936年6月8日号の華僑日報の副刊面は、西風劇社編「西風」に充てられ、そこに数本の劇運奨励の文章が掲載されている。ところが、同社の責任者が、メンバー会議の承認手続きを経ることなく、啓明学校支援のための公演を決めたことに、メンバーから異議が生じた（『華僑日報』1936.9.12）。結局、同社は、1936年10月3日夜に啓明学校の寄付金集めのために中華総商会光華堂を借りて公演を行った。しかし、同年12月27日に黄魂学校で開いた翌年度の役職者を選出する大会には、呉琳曼、許侠ら20余人しか出席せず、流会となった（『華僑日報』1936.12.28）。この後、西風劇社は解体に向かったようである。西風劇社の旧社員と生力読書社のメンバー男女20余人は「南風戯劇社」を結成した（『華僑日報』1936.11.24）。

演劇運動もラテン化新文字運動も、言うまでもなく共産党だけの運動ではない。両者ともに、黄病佛のような第三派の立場のインテリを含む、幅広い参加者があったものと思われる。黄病佛のラテン化新文字運動への並々ならぬ関心は前述した。共産党にとってのラテン化新文字運動のメリットは、ローマ字で中国語を教えながら同時にイデオロギー宣伝もできる点にあったと思われる。

タイ華僑社会で、拉丁化（ラテン化）文字入門書や左翼本の売れ行きはよかった。『華僑日報』1936.5.12は次のように報道している。

> 南京政府中央宣伝部は各県市党支部に対して、葉籲士・尹庚著『拉丁化概論』（天馬書店出版）、葉籲士・尹庚編『拉丁化課本』（天馬書店出版）などの拉丁（ラテン）化に関

する書物、艾思奇著『哲学講話』(読書生活社読書生活叢書)、沈茲九編集の雑誌『婦女生活』など計11冊を、共産主義を宣伝するものであるとして禁止した。この他にも、ラテン化文字半月刊雑誌『我們的世界』(我們的世界社出版)も、政府を誹謗し階級闘争を鼓吹し、またラテン化文字を唱導して人心を惑わしているとして禁止した。これらの図書雑誌はバンコクへも輸入されて販売されている。なかでも『拉丁化概論』、『拉丁化課本』は売れ行きがよく毎回2、300部輸入される度に売り切れる。300部ほど輸入された艾思奇著『哲学講話』も、すべて売り切れて各書店に在庫がなくなったので、現在上海に注文中である。次いでよく売れるのは、『婦女生活』で毎号7、80冊が売れている。

タイ華僑のラテン化新文字運動は、標準語だけではなく、華僑中最大人口の潮州人が用いる潮州語のラテン化新文字学習も行われた。

第六節　暹羅文化界追悼魯迅大会(1936年11月8日)

1936年10月19日に魯迅が逝去した。

[同夜、その報を知った「華僑文壇」編集者の黄病佛が、翌朝まず訪問したのは、許俠(啓明学校)ついで呉琳曼(樹人学校)であった。『華僑日報』1936.10.22の副刊「華僑文壇(HUA-KIAO WENTAN)」(病佛主編(BINGFO ZHUBIAN)第157期、DI 157 KI)は魯迅の逝去について「我們的哀悼」と題した追悼文を掲げた。その一部を引用すれば、次の通りである。

> 魯迅先生不止是我們中国的第一個作家、同時也是一個偉大的思想家実践家、用魯迅的名字、可以威脅我們的敵人、用魯迅的名字、可以愧悪和魯迅同時代的、已経落伍了、或是投降了的戦士;聴魯迅的名字、就够使我們的每一個青年振奮、刺激我們的每一個青年向上。『魯迅』已非周樹人先生私人的筆名、而是一個戦士的栄銜、是中国救亡群衆的指路碑! 魯迅自己的脈搏雖然停息了、他的群衆、却加強的散居深入在我們的祖国的救亡群衆裡、在海外各華僑社会的愛国家、愛民族的群衆裡、在全世界的各個弱小民族的反X(ママ)的群衆裡:我們不怕他去了。

この追悼文には、36団体及び暹羅華僑文芸作者協会に属する163名が名を連ねた[93]。36団

[93] 欧陽氏は、劉漱石、邱及、呉琳曼、許俠、荘世平、邱亦山、黄病佛、蝶衣、翁寒光、呉継岳、秋野、老丁、老尖ら各界知名人士300余人が発起人になった葬儀委員会のリストを「華僑文壇」に発表した(慕蘭「追懐心嬰」、『泰国帰僑英魂録、第二巻』pp. 195-196)と回想している。これは10月22日の「華僑文壇」の「我們的哀悼」に名を連ねた団体、個人を指しているのであろう。但し、同「華僑文壇」が掲げた、暹羅華僑文芸作者協会に属する163名中には、琳琳(呉琳曼)、許俠、桂華(陳桂華)、耀寰(黄耀寰)、南和(朱南和)、孟基(何孟基)、林南中、邱逸群、明傑(林明傑)、兪任甫、立恵(陳立恵)らの共産党系の人士の名があるが、劉漱石の名はない。華僑共産党トップの劉漱石は表面に出ないようにしていたので、当然のことだと思われる。欧陽氏の回想では劉漱石の名がしばしば出てくるが、後から思い込んだものであり、事実とは異なる可能性がある。

体とは、即ち、人味読書社、彷徨学社、漫塗文芸研究社、南島学友社、塗鴉社、螞蟻学社、南国書報公司、僑民派報社、我們読書社、心声詩社、南哨読書社、献衆新文字研究社、生力読書社、思潮読書社、華青学社、時事研究会、広肇二校学生自治会、新中国電戯院、樹人中学健児団、黒猫籃球隊、啓明学校、樹中［樹人中学］国難研究社、樹中女生読書社、初声新文字社、白虹社、努力社、華生社、奮闘社、楽華社、競社、雁社、明鳴学校、真善学校、湄濱学校、施風社、啓明互助社である。］

10月19日に魯迅先生の逝去の報がバンコクに届いた。当時の政治環境は非常に悪く、共産党系のあらゆる団体は地下活動を余儀なくされていた[94]。共産党は各読書社に、それぞれ個別に小規模の追悼会を行うように通知した。邱心嬰（ママ）[95]は心が落ち着かず、読書社関係の会議で、公然とした盛大な追悼会を実施すべきであり、そのために各読書社の責任者はそれぞれ各界の知名人士に呼掛けて葬儀委員会を作るべきであると主張した。彼の意見は大方の支持を得て、各界知名人士300人余が発起人となった。

［『華僑日報』1936.10.24は次のように報じた。バンコクの華僑文化界が連合して発起した魯迅追悼大会には、既に60前後の団体と300人の個人が参加の意思を表明しているが、10月23日夜、越鵠（プラッププラーチャイ）の啓明学校に、各団体の代表を集めて大会籌備委員会の組織と大会主席団の選出方法とについて協議した。出席者は新聞、学校、学生会、文芸社などの団体の代表52名であった。各団体が自己紹介した後、呉琳曼を臨時主席、華僑日報副刊編集者黄病佛を臨時記録係に選んだ。琳曼と病佛の両人は追悼大会を発起した経過を報告した。その後大会籌備委員11名（呉琳曼、黄病佛、翁寒光、林秋野、許侠、荘蝶、霊雨、荘世平、鄭鉄馬、林明傑、崇實学校）、候補籌備委員3名（如今、黄楚襄、許尚先）を選出した。大会主席団7名の選出方法は大会籌備委員の互選によることを決めた。大会会場は三角路新中国電戯院を借用する予定である。

11月4日号の華僑日報、中華民報に次の挨拶文が掲載された。

---

[94] 1936年はタイ政府による暹羅共産党員の大量逮捕が続いた。同年4月19日にレマンティン書記長ら首脳部が逮捕され、同年10月31日にはコーンケーンにおける共産党主導のデモで200人余が逮捕されたばかりであった（前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930–1936）」pp. 187–195）。

[95] 注93に引用した、慕蘭（欧陽恵）「追懐心嬰」では、欧陽氏は、魯迅追悼会開催における邱心嬰の役割の重要性を強調している。しかし、魯迅追悼大会当時の報道では、黄病佛の重要な役割は再三報道されているが、邱心嬰の名はどこにも見当たらない。また、欧陽氏自身の別の回想、即ち、許侠追悼文で魯迅追悼大会に触れた個所では、許侠、呉琳曼、黄病佛、蟻光炎の4名の役割しか記しておらず、邱心嬰には言及していない（『泰国帰僑英魂録、第五巻』p. 327）。加えて、本稿から判るように、この時点では黄病佛は共産党員の呉琳曼や許侠に極めて協力的である。欧陽氏の「追懐心嬰」の稿は、黄病佛を邱心嬰と混同した、記憶違いの可能性が高い。

暹羅文化界追悼魯迅先生大会籌備委員会啓事

我国偉大作家魯迅先生、不幸於上月十九日晨病故滬寓、本会同人追念先生生前対我国文化事業之偉大貢献、特定於本月八日（星期日）上午九時至十二時、假座本京光華堂挙行追悼大会、藉表哀忱、凡我同胞及文化界同人、意欲参加者、請先期向下列各地点報名（倘有輓聯花圏送交列下各地点）

中華中学　盧維基君、新民学校　荘世平君、崇實学校　陳昌成君、

樹人学校　呉琳曼君、啓明学校　許侠君、　新華書局　林明傑君、

華僑日報　黄病佛君、民国日報　翁寒光君、中華民報　林秋野君、

民衆日報　沈鋭君

本会経費負担、特附表於下

一、各学校或社団　　一銖［バーツ］

二、個人参加者　　二十五丁［サタン］

三、学生　　五丁［サタン］

至願意多捐者、無任歓迎、繳費時間、則諸一律於本月六日以前到各報各処繳清　謹此通告[96]。

11月8日の「暹羅文化界追悼魯迅大会」の式辞次第は、1、粛立、2、向魯迅先生遺像行三鞠躬礼、3、唱哀悼歌、4、黙念五分鐘、5、主席団主席（許侠）宣佈開会理由、6、報告大会籌備経過（黄病佛）、7、報告魯迅先生史略（翁寒光）、8、演講（陳昌成、呉琳曼等）、9、唱哀悼歌、10、攝影、12、閉会であった。学校、団体代表、個人など合計六、七百人が参加した。数十対の輓聯の中には、ラテン化新文字で書かれたものもあった。中央に、巨大な彩色の魯迅半身画像、その左右両脇に十余の中国国旗が飾られていた[97]。魯迅追悼大会は、タイ華僑文化界にとって未曾有の盛事であった。］

この魯迅半身像を描いたのは美術教師で共産党員の李光（客家、戦後林学と称する）である。1939年、我々が延安に向う途中にラオスのウィエンチャンに已むを得ず滞在せざるを得なかったが、同地の共産党事務所でも李光に会った。戦後、彼はタイで逮捕された後、長期間投獄されたと聞いている[98]。大会会場には、駐バンコクの一部の国の公使館代表が献呈した花輪もあった。特に人目を引いたのは、大会主席台の両側に懸けられた「大地有阿Q、

96　『華僑日報』1936.11.4。

97　『華僑日報』1936.11.9。

98　李光（戦後は、林学と称する）は戦後発刊された共産党系の新聞『全民報』（1945年10月から1952年12月まで刊行）の第三代目で最後の編集長である。彼は共産主義者の容疑で逮捕されたが、タイ国籍を有していたので国外追放は免れた。タイ人妻との間には一子があったが、この妻は彼が投獄されてのち、共産党を怖がって姿を消した。そのため彼には身元引受人がおらず、同獄者の弁護士トーンバイ・トーンパオ［1926–2011］が出獄後奔走してやっと釈放されたが、それまで1912年間獄中で過ごさざるを得なかったという（村嶋のDamri Ruangsuthamとのインタビュー、2004年8月14日、バンコク）。

中華民報　原刊五　朝七頁

追悼魯迅先生特刊

我們底悼詞　本社同人

魯迅先生對世界和平的努力

魯迅與中國文學

魯迅先生和新文字運動

悼亡

紀念高爾基

二週年祭

写真 8-1　南中・恵雄（欧陽恵）「魯迅先生対世界和平的努力」（『中華民報』1936.11.6）

僑聲報　星華日報

我們要爲高爾基報仇

紀念高爾基

二週年祭

写真 8-2　慕蘭（欧陽恵）「紀念高爾基」（『華僑日報』1938.6.18）

何時滅狂人」という大輓聯である。この文案は邱心嬰（ママ）と呉琳曼が考え、許侠が揮毫したものである。

魯迅逝去当時、私は南哨読書社のメンバーでもあった。［南哨読書社編「南哨（Nanshao）」第1期は『中華民報』1936.10.12の副刊面に掲載された。1936年11月6日号の中華民報副刊面、南哨読書社「南哨（Nanshao）」第二期（「追悼魯迅先生特刊」）[99]に、恵雄（欧陽恵）・南中の共著として「魯迅先生対世界和平的努力」が掲載されている］、実際は、この

[99] 『中華民報』1936.11.6の副刊欄に掲載された南哨読書社編「南哨（Nanshao）」第二期の筆者には、林南中、恵雄［欧陽恵］、銅馬［陳立恵］、哨子、黄鷺、立寰、烽火、上天らの名が並んでいる。

文章は、共青団の主要な責任者であった林南中が一人で書いたものであるが、文章の発表によって官憲の余計な注意を惹かないように、私の名を加えて共著の形にしたものである[100]。

更に、私は、共産党のトップである劉漱石が指導する格式の高い我們読書社にも参加した。私がメンバーとして正式に認められたのは、1936年12月28日のことである。［華僑日報に、恵雄（欧陽恵）の名が初めて現れるのは、同日報の1936年12月28日号の副刊、我們読書社編「新献」においてである。ここには、我們読書社が実施した「魯迅先生給与近代文化界的影响」座談会における、文、許俠、鈴子、恵雄（欧陽恵）、絲恩、如今の発言を掲載し、かつ、この座談会に、恵雄、絲恩を連れてきたのは、鈴子であり、恵雄、絲恩の両人は鈴子の高弟であると記されている。この号には白涛、絜秋の作品も掲載されている。］

上述の鈴子とは、呉琳曼のことであり、絲恩は梁傳燊である。我們読書社のメンバーは、1936年12月28日までは、劉漱石、林明傑、心桜、許俠、呉琳曼、邱亦山、俠魂、魯心の8人であった。私と梁傳燊の二人は、この日をもって、正式に我們読書社に加入を認められた。

上記の如今は、潮州出身の人物で、我們読書社のメンバーではなかったが、当時「華僑文壇」でかなり活躍しており、「今日之群」[101]も主宰していた。絜秋については不詳である。恐らく一般の文学愛好者であろう。白涛は、現在タイ在住だと聞いている。重要な人物ではないが、正義感が強い人であった。

我們読書社を創立した理由の一つには、第三派から成る「彷徨学社」に属するインテリを獲得する意図もあったようだ。当初「我們的話」を編集したのは、我們読書社宣伝委員の許俠である[102]。

［我們読書社が編集した文集の掲載は、『中華民報』1936.11.11に「我們的話」というタイトルで開始された。これが「我們的話」第1期（号）である。「我們的話」第2期は『中華民報』1937.1.27に掲載された。第2期には、慕蘭（欧陽恵の筆名）、牧軍（梁傳燊の筆名）、如今、瑞珠、白涛などの名が見える。「我們的話」は1938年8月31日号の第11期で終わっている。］

簇出した読書社を統率する必要が生じたので、共産党の方針によって、呉琳曼、許俠、黄病佛、邱心嬰、それに私の五名で「文化聯友社」が組織された。「文化聯友社」は、抗日戦争が勃発すると、「暹羅華僑文化界抗日救国聯合会」（呉琳曼が主席、許俠は組織委員、私は宣伝員）に衣替えされた。

---

100 南哨読書社編「南哨（Nanshao）」は中華民報副刊に掲載され、第1期（1936年10月12日）、第2期（11月6日）、第3期（1937年1月19日）、第4期（2月18日）、第5期（3月31日）、革新号第1期（5月15日）、革新号第2期（6月19日）まで続いた。最後の期には、陳立恵（樹人学校宿舎にて）の文章が掲載されている。この読書社の中心は陳立恵であり、彼が1937年7月樹人卒業と同時に汕頭に発ったため、南哨読書社の活動が休止した可能性がある。

101 今日社編「今日之群」は1937年半ばに中華民報副刊に掲載されている。例えば、同年6月9日、9月15日（第6期）など。

102 欧陽恵「敬悼許俠師長」、『泰国帰僑英魂録、第五巻』p. 326。

第七節　共産党による文化界統一の試み【村嶋補足】

上述のように1936年10月22日の「華僑文壇」の「我們的哀悼」に名を連ねた36団体中、6団体が読書社である。この後、1936年12月4日には、陳桂華を責任者として[103]婦人解放を掲げた女性グループの螺旋読書社編「泡沫」の中華民報副刊への掲載が開始され、1937年5月21日（第5期）まで続いた。崇實学校の読書社、流火読書社編「Liuxuo」[104]も、第1期が『中華民報』1937.2.16に掲載され、1938年10月21日号の第12期まで続いた。更に、夜哨読書社[105]「夜哨」第1期が、『中華民報』1937.10.4副刊に掲載され、第7期（1938年3月19日）まで続いた。

共産党は、11月8日の魯迅追悼会に参加した、多様な華僑文化団体を、共産党の指導下に統一組織に組み込もうと試みたようである。それは、文化界救国統一戦線に関する論文が、華僑日報副刊にいくつか登場したことから推測される。これらの論文では、魯迅を追悼するだけではなく、彼の民族解放闘争精神を継承し、実行に移さなければならないとして文化界の救国統一戦線を提起し、これに消極的なインテリたちを厳しく糾弾した。例えば、陳垣「統一戦線的巨敵」（華青学社主編「朝陽」、『華僑日報』1936.11.14）などのように。

11月21日には、魯迅追悼大会に参加した団体の代表を啓明学校に集めて、今後どうするかを協議した（『華僑日報』1936.11.18）。この会では、予定されていた大会記念誌を発行するためには手持ち資金が少な過ぎるとして、大会経費の残金を綏東（内モンゴル）に送り前線兵士慰労のために使用することを決めた[106]。この席で許侠は、中華民報副刊「椰風」の編集者である林秋野に文化界の統一組織を作って、一致して行動できるようにすべきであると説得したが、林秋野は黙って答えなかった。盧静子は、統一組織は難しいようだから止めた方がよいと発言した。そこで呉琳曼が、消極的な人は止めればいい、魯迅先生の仕事を継続する決意のある人は署名しようではないかと提案した。結局、賛成者は、暫定的に「文化界聯合会」と名付けた団体の会議を今後開くことにした（許侠「記悼魯大会結束会情形」、『華僑日報』1936.12.15「華僑文壇」に掲載）。

また、中華民報副刊「椰風」の常連執筆者で、「椒文学社」のメンバーである荘蝶、郭枯、盧静子は、救国会の七領袖の釈放を請願する電報に署名することを拒否した。盧静子は、不偏不党の「第三種人」の立場を主張して、聯合戦線に参加しなかった。一方、許侠は「第三

103　螺旋読書社編「泡沫」は、『泰国帰僑英魂録、第四巻』p. 252によれば、陳桂華が責任者。

104　“Liuxuo”や“Nanshao”など、漢字ではなく、ローマ字を用いているのは、当時流行した、ラテン化文字運動の影響である。

105　「夜哨」第6期（『中華民報』1938.1.17）は、夜哨の主要メンバーは、店員・工人から成る9名であると記している。また、前掲『崇實学校』p. 116によれば、夜哨は木器同仁抗日救国会のメンバーが作ったものである。

106　1936年11月、内蒙古軍と国民党軍の綏東戦事が、綏東（綏遠省東部）に拡大した。中国では、内蒙古軍は日本軍の傀儡と見なされ、かつ内蒙古の独立は中国の領土喪失をもたらすので、中国人に強い抗日意識が生じた。中国世論は日本との開戦を期待するまでに硬化した。

中華民國廿六年一月十五日

生力
Shengli

第五十期
生力讀書社編

速寫
查私
恩之

天慢慢的黑下來，刺人肌骨的風，很嚴厲的打着人們的身體，絲絲的細雨，一滴滴的洒在人們的臉龐，船夫們裹着被曲成一團睡在船上。在這冷靜的江邊，沒有什麼聲息。這兒有的是蹌餓的破舊，古老的樹，一條狹小的馬路，和冷得打哆索（口旁）着的老船夫。

一會兒，馬路上傳來了皮鞋聲，從這聲裡射來一線燈光，船夫們閃一閃眼，大家站起來，在船頭很奇怪的打望着這燈光來處的底細，聲音漸近，這燈光越來得亮。船夫們低下頭來，像有點害怕，發抖着，默默的；「船裡有東西嗎？客人？」一個穿西裝的「斯文人」叱着，像大人要打小孩似的。

中華民國廿六年一月廿七日

中華民報

前奏

民衆的力量，曾經粉碎了敵人的野心；
你戰鬥的決定，曾經斷送了民族的光榮。
我們英勇的犧牲者呵！
我們不退讓呀，要踏着舊路勇猛前進！
——一二八紀念歌

偉大的一頁
藍沫

二二八，中華民族史上將要偉大的一頁
記憶中的生涯上永遠擦不了去的印子呵

幾年的測題，我每次都重新發上了傷痕
依然在眼前地伸出了五個年頭
再不許見你第一朵結不起冒的花
當年這出 撥開了獅子的鬍鬚
掙開鐵鏈的最後一口吼聲了大空
這書標亦沒有在腦懷了的迷夢
看看吧：我們的哀邦與哀鴻（不忍一顧）一顧？
看看吧！我們的哀邦與哀鴻中我一顧一顧？
想想得：我們當時的臉是一種輕蔑中被擯出了去？
想想得：我們當時的心是狂的瘋和無名的掌拆
世界利時！
這數球無來將換在日子的輪轉了去
我們的心文重新正張了一層紫色的光輝
我們的臉文重新了一層紫色的光輝

這一聲的巨响——二二八——却驚醒了墨者貪婪的迷夢，
笑往了腐小民族的嘴巴；
這是中國的自救是給那，
強寄的一個教訓，
現在眼望文伏前的沉寂
須要重覆的追念着五年前的血戰——二二八——
起來吧！中國！不要沉沉的睡去！
英勇！奮鬪的傑作在這裡
了碎敵人的陰謀，
夢，她在這裡
「武器拙劣」
「中國必亡」

一二八

海之戰，忽
國海內外聲
這是中華民
爭，但我就要
分不是獄新
涉反中美國
安，靜呢中國
亂，因此這裡
月，裝備強
社，勢不得起
姿，統×是上
修屋，表面程
戰化

第二期

悲壯

做奴隸
使全
底國
張
大衆的公
年紀念日
道
念日的到來
現快地
備着
並繁
因之
因之
的血，已點
旅之路的明
大的路子，給
的路子，給
我們

写真 9-1　生力読書社（『中華民報』1937.1.15 副刊面）

写真 9-2　我們読書社（『中華民報』1937.1.27 副刊面）

種人」とは、実際は「資産階級的走狗」、「ファシズムの同路人（シンパ）」であり、「不革命即反革命」であると厳しく批判した（許侠「答椒文社並関於聯合戦線的意見」、『華僑日報』1936.12.18「華僑文壇」に掲載）。

中華民報
中華民國廿六年四月二十日
螺旋讀書社欄 第四期
婦女解放的路線（四）
——獻給婦女同胞們——
章

写真 9-3　螺旋読書社（『中華民報』1937.4.20 副刊面）

中華民報
中華民國廿六年五月十五日
我們的革新
南哨讀書社編
革新號第一期

写真 9-4　南哨読書社（『中華民報』1937.5.15 副刊面）

許侠と呉琳曼は、「華僑文壇」編集者で、タイ華僑文化界の重要人物である黄病佛を取り込むためか、黄病佛とともに啓明学校で、「現代文学研究班」コースを開いた[107]。しかし、欧陽氏が語るように、結果的には黄病佛も第三派の立場を貫き、共産党の取り込みは失敗に終わった。

107　『華僑日報』1936.11.26 に「現代文学研究班：招収学員」の見出しで、次の広告が掲載されている。
「講師：許侠、病佛、琳琳［呉琳曼］。
学科：文学史、文学理論、佳作選読。
地址：越鵠啓明夜学内
時間：毎晩七点至八点
十二月二日開班」

第五章　樹人中学師範班時代（1936年後半–37年前半）

第一節　樹人中学師範班に入学

1936年3月末に中華中学から追われた学生を受け入れるため、共産党幹部の黄耀寰［1903–1981］[108]、呉琳曼、許侠は、新たな私立学校を設立することを計画した。しかし、新しく私立学校を設立するには、タイ文部大臣に対して新設の申請をなし、文部大臣の許可を得て登録される必要がある。既存学校の名前と校舎を借用するれば、簡単に済むと判断した三人は、樹人学校に目を付けた。彼等は、蟻光炎に、樹人学校に中等教育部門を増設することの必要性を訴えて、同校との間の斡旋を求めた。これを受けて、蟻光炎は旧知の樹人学校校務主任（校長）温伯明を三人に紹介した[109]。

双方は相談の結果、樹人という校名を続けて使用すること、樹人学校に、中学部および師範班[110]を増設することに合意した。こうして、私たちは、タイ文部省への新設申請手続きを

108　黄耀寰（黄日彬、黄彬、蔡英士とも称す）広東省梅県生、1923年梅県師範学校卒業、同地で教師に、1927年10月中共入党、1929年梅県県委委員、常委、区委書記、1931年白色テロで党組織が破壊され、バンコクに。その三カ月後に郷里で息子が出生、妻は4年後別人と再婚。息子に初めて会ったのは、1953年になってから北京で。1934年バンコクで暹羅共産党の大衆組織である反帝大同盟総部の負責人。［再建後の］反帝大同盟の歴代負責人は、劉漱石、黄耀寰（蔡英士）、方浮生、林鳴、凌某、邱逸群の順。1936–37年時暹羅共産党バンコク市委書記、1939年8月11日に、新中華学校（元啓明学校）で逮捕され、10月14日国外追放。ラオス等で活動後、戦後再びタイに。1950年に治療のため帰国、回復後北京の華僑事務委員会（中僑委）で科長、専員、処長、カンボジア、ラオス大使館にも派遣された。1969年文革で北京からの立ち退きを強制され、長沙の息子家族と同居。1971年息子の転勤に伴い広東の田舎に。四人組が粉砕された後1978年10月に広東省帰僑聯誼会付秘書長の職に任じられた。1981年死亡（前掲『永恒的懐念：暹羅啓明学校紀念文集　1935–1938』pp. 19–41、慕蘭「桃李満天下―懐念黄耀寰老師」、『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 236–243）。

109　樹人学校は1931年9月開校、温伯明は潮州人で、開校時35歳（NAT So.Tho.54.1/1463）。蟻光炎は、ゼロから一代で成り上がった、僑社の傍流ビジネスマン。1932年当時に蟻光炎が樹人学校に資金援助をしたという報道がある。在タイ華僑の主流派ビジネスマンの代表陳守明（1904–1945）と中華総商会主席ポストを争い、1936年5月13日に就任した。抗日戦争勃発後、積極的に抗日運動を支援した。1939年11月21日に華僑によって暗殺された（前掲村嶋論文「タイ華僑の政治活動―5・30運動から日中戦争まで」参照）。

110　師範班は小学教員養成課程である。1936年当時は、タイの華僑学校では師範班設置が流行した。その理由としては、第一に、立憲革命後バンコクにも義務教育法が施行され、タイ生まれの華僑子女（タイ国籍）も就学が義務付けられた。そのため、タイ文部省からタイの義務教育校として認可された華校への入学者数が急増し、教師の需要が増大したこと。第二に、タイ文部省が華校教員資格として、高度のタイ語能力を要求し、厳格な試験を課すようになったために、中国本土から来タイした教員でタイ語試験に合格できる者が減少し、教員不足に輪をかけたことである。タイで育った者は、タイ語の基礎があるので、タイ語試験の合格率も高くなるはずだと期待され、タイの華校で教員を養成する考えが生まれたのである。黄魂学校は、1932年春に2年制の師範班を開いたが、1期生が卒業した時点で廃止した。しかし、1936年末に師範班を復活した。『華僑日報』1936.12.22は、次のように報じた。「本京ワット・リアップの黄魂学校は創立から1910年にならんとし、学生数も毎年増加して現在は800名を超えた。同校は師範教育にも注意を注ぎ1932年春に師範部を創設した。但し、第一期生の卒業時、丁度中華中学が開校した。中

省くことができた。

［樹人学校は1936年7月15日から始まる新学期から、黄耀寰、呉琳曼、何孟基、兪任甫、孔雀、陳豹らを教員として新たに採用した（『華僑日報』1936.7.1晩版）。孔雀以外は、すべて共産党員である。樹人学校校務主任（校長）温伯明は、①小学校（1年級新生及び挿班［編入］生）、②中学部（初中1年新生、2年級挿班生）、③師範班新生（資格、初中2年或は相当程度者）を募集する新聞広告を出した（『華僑日報』1936.7.2）。予定通り、7月15日に「樹人学校速成師範班及初級中学昨天開学」（『華僑日報』1936.7.16）した。

樹人学校は1936年11月14−15日の二晩、同校で第一回募金演劇会を挙行し、入場券の売り上げが500バーツ、会場での寄付金1400バーツを得た。話劇はすべて国防劇であった（『華僑日報』1936.11.16）。

当時タイの華僑学校は、年二回学生を募集し、年初と年央の二回、卒業・入学を実施した。樹人学校も、1936年度の第二回目の学生募集を1936年12月に行った。その際、次の募集広告を新聞に載せた。

樹人中学暨小学部・師範班・幼稚園招生

招収：師範部　中学部　小学部及幼稚園各級新生及挿班生［編入生］
教師：特聘思想正確與経験豊富之教師多位随時随地負責教導及訓練
宿舎：設備男女宿舎各多間、特置専員管教、以利来自遠方之学生
校址：一在耀華力路［ヤワラート］光禄第全座、一在媽宮後3131号全座
報名：12月18日開始
考試：1月3日上午9時（過期者随到随考）
開学：1月4日
樹人中学招生委員会[111]

以上から、中学部を設けてから樹人学校は樹人中学と校名を変更したこと、また学校は二カ所に分かれていることが判る。中等教育レベルである師範班（師範部）と中学部は、ヤワラート路の校舎に置かれた[112]。師範班は速成師範班とも言われ、修学期間は一年であった。

華中学は、学級編成のために入学生集めの必要が生じ、黄魂師範部の在校生の編入を特に認めたので、タイ唯一の華校師範部はここに消滅した。これは1934年のことである。現在、中華中学の学生数は揃っているが、華校小学校教員の資格問題は解決されていない。それどころか今年は、タイ文部省の教員資格の規定は従来以上に厳格となり、華校監督、教科書採用制限も厳しさを増している。どこも資格のある教師が不足しており、教育を困難にしている主因となっており、華僑教育への影響は少なくない。ここに、同校は来年度より華僑師範教育の重責を再開することとなった」、と。また崇實学校は1937年から芸術師範班を開設した（『華僑日報』1936.12.25）。

111 『華僑日報』1936.12.21。

112 ヤワラート校舎がオープンしたのは、1936年10月5日になってからである。『中華民報』1936.10.7は、「樹人中学及夜学昨均挙行開学典礼」と題し「本京樹人学校、自租定九層楼左側之

師範班は、1936年7月に開学し、1937年7月に第一期生を卒業させた直後に廃止された。同時に開学した中学部は30名余の入学者があったが、卒業生を出すこともなく一年足らずで、師範班とともに廃止された。中等教育レベルを廃止した後、再び元の小学課程だけに戻った[113]。]

共産党員が海外から来タイした場合、まず地方に住まわせて様子を見ることがあった。例えば、邱及［1910-1984］[114]の場合は、来タイ後まずコーンケーンの華校［孔敬華僑学校[115]］で教職に就いている。呉琳曼も同様で、［1934年10月に］来タイ後、樹人中学の教師に就任してバンコクに定住するようになるまで、中部タイのナコンサワンで生活した[116]。同地の潮州人精米業者の家に、そのむすめ、蘇瑞蘭（蘇蘭）、錦蘭姉妹の家庭教師として住み込んだ。樹人中学の教職に就いた彼は、教え子の姉妹を伴って上京し、同校に入学させた。私は、同校で蘇蘭［1922-1997］と知り合い、延安まで革命の道を共にすることになった。

1936年3月21日の中華中学ストで退学処分もしくは、それを契機に自主退学して、同中学を去った、私を含む約40名は、樹人中学師範班甲クラスに入学した。そのうち十数名は女子学生であった。甲クラスには、工場等での活動のために欠席する者や早退する者が多

大厦拡充二校以来、該校当局一面積極修葺校舎、一面向教育部註冊中学及夜学部、迄今修葺工作、已大部完竣、註冊方面、已得教部批准、該校於昨日挙行開学典礼」と報じている。また、『華僑日報』1936.12.30の教育消息欄は、樹人中学が夜間に1クラス40名の無料識字教室を2クラス、1月5日に開く計画であることを次のように報じている。「本谷樹人中学、対于明年上半年之工作、已定出整個計画、分頭按歩進行、如衆識字班之創設、即為新計画之一、該校同人為普及教育及消除文盲起見特於晩上開識字班二班、毎班容四十名、免費招生、以利失学之男女同胞　開学日期已定於一月五晩、聞如進行順利時、将陸続増設数班」。

113 李誠然「談談暹羅華僑中等教育」、『暹羅華僑日報星期刊』第1巻第20期（1938年8月14日号）pp. 14-16。

114 邱及（丘及とも書く。実名は、邱仲推、筆名は、斯特）は、客家でタイ移民の第四世代としてタイのスパンブリーで生まれた。4歳から中国の郷里に送られ、教育を受けた。1932年12月に上海美専を卒業し、1933年春に、潮州の揭陽中学に図画音楽教員として就職し、同時に左聯の地下出版物を編集した。学校では学生読書会、絵画研究会を組織した。1934年5月に逮捕され、1年半投獄された。出獄後は、共産党員であるという嫌疑のために中国で教師の職を得ることができず、1936年3月にバンコクに渡航。1936年6月にコーンケーン華僑学校に校務主任（校長）として就職。東北タイの華僑抗日運動を組織した。『中華民報』1938.1.10に、「中華中学本学期添聘大批教員、上海美専畢業歴任揭陽中学教員及坤敬［コーンケーン］華僑学校校務主任邱仲推」とある。1938年初め、八路軍駐香港辦事処の廖承志、連貫と信書を交換し、廖承志の紹介でバンコクの共産党組織と連絡が取れ、1938年6月にバンコクに出て、中華中学教師、同時に暹羅華僑各界抗日救国聯合会（抗聯）宣伝部長。タイでの弾圧が厳しくなった1939年9月に香港に出て廖承志に総括報告、11月廖承志の指示で南ラオスのパークセー（Pakse）で華僑工作に従事、同地で12月に寮南公学創立準備中に校董らと共に違法集会容疑で逮捕された。罰金刑で釈放された後、ラオス、プノンペンなどで活動し、1941年6月にバンコクに戻った（前掲『南離子邱及』、pp. 433-436）。

115 多分、邱及の指導によるものと思われるが、『中華民報』副刊欄に、孔敬［コーンケーン］華僑学校読書社編『草原Cao Yan』が、「魯迅先生追悼専号（上）」（『中華民報』1936.11.28）を第1期とし、第8期（『中華民報』1937.10.2）まで掲載されている。タイトルを草原と漢字で書き、同時にローマ字でCao Yanと書いているのは、当時のラテン化文字運動の表れである。

116 1936年2月21日号の新聞記事には、呉琳曼は未だ山巴（首都バンコク以外の地方県を指す）に在住中だが、まもなくバンコクに出て西風劇社の中心人物たちと復興について会議する予定（「1936年暹京華僑劇壇展望」、『華僑日報』1936.2.21の「華僑文壇」に掲載）、とある。

かった。このクラスの学生の殆ど全員は、革命家の卵で、まず、タイで抗日救国活動に身を投じ、文化団体、婦女組織、労働組織などの救国団体の中堅幹部に成長した。そして最終的には、中国に回国服務して革命に加わった。多くは、中共の支配地域である延安、あるいは新四軍の活動地域に赴いたが、党の指令を受けて、国民党の勢力圏に入り、地下活動に従事した者もいる。

樹人中学師範班甲クラスの学生が受講した科目には、世界経済地理、新教育概論、大衆哲学、政治経済学などの科目もあった。新教育概論は、人間として、如何に生きるべきか、どんな人間を目指すべきかを内容としていた。科目名は忘れたが、担当教員が、中国の封建時代と当時の蒋介石の国民党政権下の暗黒とを比較したのち、中国の将来モデルとして社会主義国家のソ連を提示したことに深い印象を受けた。これらの科目はいずれも学生に革命の基本的理念と理論とを理解させることを目標にしたものであった。

甲クラスより半年遅れて次の学期に新たに師範班に入学した学生は、乙クラスと言った。乙クラスの学生は普通の学生が多く、革命教育ではなく通常の授業が行われた。

樹人中学で夜間に、共青団員および団員予備者向けに二カ月間ほどの学習会が開催されたことがある。私はここで、大衆哲学、政治経済学を学んだ。哲学の講義で使われた教科書は、『生活』[117]という雑誌に掲載された大衆哲学シリーズを謄写版印刷で複製したものであった。当初は呉琳曼と許侠の二人が交代で、大衆哲学を担当していたが、後には、主として呉琳曼が担当した。経済については、後に社会科学研究院に勤務した、マルクス主義経済学者狄超白［1910−1977］の著作『通俗経済学講話』を教材とした[118]。同書の学習は、週二回のペースで行われ、2カ月間で終了した。

樹人中学に入学するまでに、私は蒋光赤の『鴨緑江上』、『少年漂泊者』、巴金の『家』、『滅亡』、ゴーリキーの『母親』を読んでいた。これらの書物は、暗黒の旧社会に対する怒りを喚起させるには十分であったが、それだけでは、どうすれば新社会が創造できるのかは判らなかった。樹人で黄耀寰、呉琳曼、許侠らの授業を受けて、旧社会がどのようにして形成されたのか、新社会はどのようにすれば誕生させることができるのかを理解することができた[119]。

今でも印象深いのは、地理の授業で使った世界政治経済地図である。地図には、いわゆるファシズムの勢力範囲と社会主義勢力の範囲が記されていた。思えば私にとって最初の社会主義教材だったかもしれない。また、「風雲児女」［1935年上海製作］、「桃李劫」［1934年上

---

117 鄒韜奮が上海で発行した『大衆生活』が発禁にされてのち、香港に移って刊行した『生活日報』もしくは『生活週刊』のことだと思われる。『中華民報』1936.6.4は「鄒韜奮将在香港創辦生活日報」と題し「向以宣伝抗敵救亡而為南京政府所不容的大衆生活編者鄒韜奮……」と記し、更に『中華民報』1936.6.20には、「鄒韜奮主編生活日報、生活星期増刊、創刊到了。暹京僑民書報社総発行」という入荷広告が掲載されている。

118 『華僑日報』1936.7.1の新華書局の広告に、狄超白著『通俗経済学講話』、葉籲士『拉丁化概論』などがある。

119 慕蘭「桃李満天下―懐念黄耀寰老師」、『泰国帰僑英魂録、第一巻』p. 237。

海製作］などの抗日映画の鑑賞も教育の一環として、カリキュラムに取り込まれていた。学生同士で「卒業歌」を熱唱した光景は、今でも鮮明に覚えている。「卒業歌」は、「桃李劫」のテーマ曲で、学校を出たら、すぐに失業の運命に直面する大勢の青年学生に、救国を呼びかけた大ヒット曲だった。

また、この頃、中国共産党員の呉玉章［1878-1966］がパリで発行した中国語誌『救国時報』［1935年から1938年まで刊行］、中国共産党の理論家何幹之［1906-1969］が書いた『中国はどこへ向うか』なども読んだ。救国時報は、人民日報サイズで、4面から成る華字紙であったが、駐コミンテルン中共代表団の王明らがモスクワで出した、抗日救国の八・一宣言（1935年8月1日）を［1935年10月1日号に］掲載したことで有名である。

救国時報などの輸入禁止書籍は、新華書局[120]の店員で共産党員である、林明傑（蔡明）［1908-1991］[121]が密かに香港から輸入した。彼は、税関吏員に賄賂を渡して、税関検査を無事通過させていた。救国時報は、店頭では売らず、本を買いにきた党関係者に本のなかに挟んで数部ずつ配布していた。

新華書局は、進歩的書物を多数揃えていた。私は呉琳曼、魯文の紹介で新華書局に通い始め、ひたすら立ち読みした。新華書局へ頻繁に足を運んでいるうちに、店員の林明傑および、日中戦争開始前後に同書局に店員として就職した劉茂雲[122]と親しくなった。劉茂雲が、人の目を盗んで、店の本を密かに渡してくれたことは一度や二度ではなかった。日中戦争開始後、抗日団体である「暹羅各界華僑青年抗日救国聯合総会」（青抗）のリーダーとなった劉茂雲とは、1939年5月に延安を目指して一緒にバンコクを出発した。林明傑は共産党員であったが、警察に目を付けられないように注意していた。彼はタイ共産党と僑党が分離したのち、1952年に中国に帰国した。

私たちはタイにいながら、このように上海や香港の左翼本の殆ど全部を入手することがで

---

120 ヤワラート路の現在「蘇成興金行」がある場所に、かつては天外天劇場があった。天外天からパートサーイ路（涂糞堆）方向に向かった隣に新華書局が位置していた。なお、1937年4月時点でバンコクには7つの中国語書店が存在した（『中華民報』1937.4.26）。新華書局の当時の住所は、天外天馬路門牌81-83号であり、この住所は、1935年末コミンテルンから暹羅共産党宛ての郵送物の送り先としても使われた（前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930-1936）」pp. 182-183）。新華書局では、華僑学校で使用する教科書も販売した。例えば、「本京及内地各華校、将於本月杪挙行学期考試而本学期亦告結束、継之則為放暇間、各校当局、例於放暇期間内、規画新年度採用教科書標準、茲悉本京新華書局已提前辦到初高級適用之復興教科書及南洋教科書二十余箱、以供当地需用、各該教科書均経教育審定而無妨碍於当地政府之法律者」（『華僑日報』1936.12.15）、とある。

121 林明傑は中国帰国後、広東省僑聯顧問、汕頭市僑聯主席（慕蘭「永遠感謝您那微微的一笑：追思蔡明兄」、『泰国帰僑英魂録、第四巻』pp. 158-162）。

122 劉茂雲自身が村嶋に語ったところによれば、彼が新華書局に就職したのは日中戦争開始前後のころである。劉茂雲の父は潮州からバンコクに来て小商売をしていた。茂雲は、益智学校で高小まで6年間学んだ後、明徳学校で師範班に2年間学んだ。その後、鉄製品販売店に就職した。その仕事を辞めて、新華書局で2年間ほど店員として働いた。この時、先輩店員の林明傑が、劉茂雲に欧陽恵を紹介した（村嶋の劉茂雲とのインタビュー、1996年3月15日、バンコク）。

きたのである[123]。

第二節　ネオンサイン工場でのタイ人労働者オルグ活動（1936年後半）

樹人中学師範班甲クラスでは午後になると、授業に出席する学生の数が減少した。共青団のメンバーである学生たちが、午後の授業を欠席して、バンコク市内のそれぞれの担当工場に向ったからである。

私たちは、正規の学生ではあったが、一部の授業にのみ顔を出すだけであり、欠席することも少なくなかった。このような就学形態が可能であったのは、温伯明校長が学校を管理監督する任務を怠っていたためであろう。

師範班入学後2週間くらいして、私は、阿桂から工場に入って、労働者を対象にマルクス・レーニン主義を宣伝するように指令された。宣伝オルグ活動の対象とする労働者を選んで、個別的に接近せよというものであり、労働組合（工会）を組織する任務は、指令もされなかったし、自分自身でも全く意識していなかった。

同時に、クラス担当の呉琳曼からは、午前の2科目だけ授業に出て、午後は工場で仕事をしながら革命活動を行うようにという指示を受けた。呉琳曼は、資本家の贅沢な生活は、すべて労働者からの搾取の上に成り立っているという宣伝をすることを活動の中心に置くように指示した。

結果を先に述べるならば、派遣先のセーンネオン（Saeng Neon）という工場で私がいくら頑張って共産主義の宣伝を行っても、周りのタイ人労働者からは受け入れられなかった。結局、中途半端で辞めてしまうことになった。

私が革命宣伝活動の目的で就職したセーンネオン[124]は、ネオンサインなどを作る工場で、

---

[123] 1934年5月1日から施行された出版法は、国内で出版される出版物・新聞に付き、印刷所の登録許可制、編集者の資格要件、発禁・検閲などを規定しただけではなく、タイに輸入される出版物・新聞についても規定した。官報に書名・新聞紙名を公示することで輸入もしくは国内持ち込みを禁止することができた。違反者は六カ月以下の懲役もしくは千バーツ以下の罰金、もしくは両罰が科された。また、輸入・持ち込み禁止の出版物を販売もしくは配布し、あるいは販売もしくは配布しようとした者は500バーツ以下の罰金を科された（*Prachum Kotmai Prachamsok* Vol. 46 (2476), pp. 835–849）。実際に、タイ政府はしばしば、中国語の特定の雑誌・書籍・教科書などのタイトル挙げて、輸入禁止書に指定し、官報で公示した。しかし輸入中国語書籍の取締は時期によっても強弱があり、1936年当時はそれほど厳しくはなかった。例えば、『華僑日報』1936.7.1には、新華書局の次のような広告が載っている。即ち、「鄒韜奮主編　生活日報、生活増刊、青年自学叢書、是大衆知識的淵源、是青年自学的指針、『帝国主義』伯韓編8分、『通俗経済学講話』狄超白著3角、『新経済学大綱』沈志遠著2元、『世界経済危機』沈志遠著8角半、『現代哲学的基本問題』沈志遠著3角、『政治経済学』拉比託干著2元、『拉丁化概論』葉籲士著2角……」。中国語の共産主義関係文献は、タイ国に大量に持ち込まれたようである。村嶋が実見したものでは、暹羅共産党の初期メンバーの一人、兪任甫（タイ名：Mani Sukhawirat, 1912–1971）の旧蔵書中に1938年8–9月に刊行された、郭大力・王亜南訳、馬克斯著恩格斯編『資本論』第一巻～第三巻（読書生活出版印行、中華民国1927年8月～9月初版）があった。

[124] 正しくは、1932年10月5日に会社設立の登記をしたSeang Glaude Neon（Burapha）株式会社であると思われる。同社は営業目的として「Claude Neon Lightsという特殊な光によって輝く広告サインの製作・輸出入・販売、およびガラス器具・電球・化学器具の売買」を掲げ、設立発起人には、ルアン・シリソンバット、プラヤー・パクディーナレート、プラヤー・サーラサートシリラクの3名のタイ人官僚貴族、および5名の西洋人が名を連ねている（『タイ官報』Vol. 49,

バンコク市中心部のバーン・モーの、チャオプラヤー河にかかるラーマ1世王橋の隣にあった。呉琳曼には、広東銀行バンコク支店に勤務する丘という友人がおり、丘はこの工場の上海から来た中国人技術者と知り合いであった。それで、丘の紹介で私は、この技術者に会い面接試験を受けて就職が決まったのである。仕事はガラスの管を作ることで月給は12バーツ、その他に注文を取ってくると一定額のマージンが支給された。

呉琳曼から、同志として特にタイ人を獲得するように指示された。彼は、セーンネオンはタイ人の工場なので労働者の多くはタイ人であろうと思ったのかも知れないが、実際には中国人が殆どであった。すなわち、20数名の中国人労働者と6〜7人のタイ人労働者を抱える中規模の工場であった。技術者は二人のイギリス人のほかは、全員上海から来た中国人で、一方、役員はすべてタイ人であった。タイ人は、役員層と若い労働者層の二極に分かれていた。私は工場に入ってすぐに、勧誘は大変難しいだろうと直感した。

しかし、ここに来た以上、やるしかない、と自分に言い聞かせて、毎日工場に出勤して、職場の仲間と作業に励んだ。私はターゲットを二人のタイ人に絞り、仕事が終わったのちは、コーヒーに誘うなど、友人になろうと努力した。彼らとは当然タイ語で会話した。

私はターゲットの一人である若いタイ人男性労働者とコンビを組んで、ネオンサイン製作の注文を取るために、バンコクの繁華街を回った。仕事の合間に、時々、彼を映画やコーヒーに誘った。「泰山猿人」というゴリラ映画を一緒に見たことを記憶している。ある時、外回り営業で総額数百バーツのネオンサイン製作の仕事の注文を取ることができた。しかし、この時我々に支給された歩合給は数十バーツに過ぎなかった。私は、この機会を捕らえて、労働者が一所懸命に働いても、利益は資本家に吸い取られ、実際に自分たちが手にすることができるものは雀の涙程度だ、こんなことが許されてよいのかと、革命の道理を彼に吹き込もうとした。

お互いに親しくなるにつれて、いろいろなことを話した。彼が「親が悪い。金がないので」(Phomae mai dee, mai mee satang) と嘆いた機会に、すかさずに「ソ連はいいぞ」(Russia dee) と水を向けた。ソ連への憧れを彼と共有しようとしたが、彼は、ソビエト・ロシアという言葉を耳にしただけで、すぐに「共産主義者は悪い奴だ、そんな話しは聞きたくない (Khom-miunit mai dee,mai au)[125]」と取り合わなかった。

私は工場から得る僅かの給料や歩合のほとんどを、彼一人の勧誘のために費やした。しか

pp. 2396–2397, 9 Oct. 1932) 同社は1933年1月12日に株式会社として登記された。その際の役員は、タイ人はカンペーンペット親王、プラヤー・サーラサートシリラク、チャオプラヤー・シーピパットの3名、それに西洋人が3名である。住所は、613 Chakraphet Tambol Wat Rachaburana と記載されている (『タイ官報』Vol. 49, pp. 3619–3620, 22 Jan. 1933)。設立地はラーマ1世橋のバンコク側入口の近くである。Department of Commerce, Ministry of Economic Affairs, *Commercial Directory of Thailand B.E.2484*, の職種分類で Neon Light Installer は、Claude Neon Lights (Oriental) Ltd. (所在地は、130 Pak Klong Talat) 一社しか存在しない。この英語社名は、タイ語の Seang Glaude Neon (Burapha) と一致する。同社は1942年7月時点でも存続していることがタイ官報で確認できる (『タイ官報』Vol. 59, p. 1801, 28 July 1942)。

125 これらの語は、欧陽氏がタイ語で表現したものである。

し、彼は私の革命の話には耳を貸さず、ただ自分の貧乏な生まれを嘆くだけであった。

勧誘活動の実情は、呉琳曼に定期的に報告していた。成果が上がらないことに加え、多忙な李華に代って啓明学校で6年生の国語の授業を代講せよという指示を受けて、やってみると幸い学生から好評を得たので、継続して授業を担当することになったこともあって、セーンネオン勤務は半年もしないうちに中止となった。私の人民大衆への最初の勧誘活動は、あえなく失敗に終わった。

タイ人勧誘に成功した他の同志の事例は、私が知っている範囲では存在しない。但し、秘密地下活動という共産党の運動の性格上、党活動には厳格な規律があり、自分が他のメンバーにタイ人労働者を獲得したかどうかを尋ねることなどはできないことであった。それ故、タイ人労働者を獲得できたケースがあったかどうかについて、私の情報は極めて限られている。

呉琳曼は私の前にも、当時は工場と労働者の多い半ばスラム街であった黄橋（Saphan Luang）地区にある民生マッチ工場（民生火柴廠）[126]、マッカサン地区の国鉄工場、その外にもセメント工場[127]、製材所、あるいは港湾荷役などに学生を工作のために送り込んだはずである。しかし、その人数、活動内容などは私の知り得ないことである。

無論、まったく知らなかったわけでもない。時には、マッチ工場に派遣された蓮芬（後に許一新と結婚）などの女子学生たちが、女性労働者たちを連れて来て、歌の練習をしているのを見て、よくやっていると感心したことを覚えている。

第三節　サッカー・クラブ所属の広東人労働者オルグ活動（1937年）

セーンネオンを辞めた後、私、梁傳燊、潘女雄の3名の広東人からなる共青団細胞は、鐘育民の指導の下に、広東人大衆を獲得するように命じられた。党組織と関係がある広東人大衆の数が少ないので、拡大の必要があったからである。

私たちは広東人労働者のサッカー・クラブを対象と定め、宣伝と勧誘を実施した。今回はお互いに母語である広東語を使うので、意思疎通の問題もなく、まずまずの成果を挙げることができた。私はこのチームのメンバーを啓明夜校にも連れて行ったことがある。当時、外部の人には、啓明夜校が赤い学校であることは判らなかった。

［バンコクには学校のサッカー・クラブの外に、青年華僑が結成したサッカー・クラブも多数存在し、相互に試合を行っていた。その一つに、「工余足球隊」がある。このクラブは鐘育民（共産党員）をリーダーとして1937年半ばに活発な活動をしていたことが、当時の

[126] 「民生火柴廠」は、タイ最初の大規模マッチ工場として、1928年6月に黄橋に開業した（『中華民報』1929.11.11）。当時タイのマッチは、スウェーデン製の輸入マッチが大部分を占めていた。そこで輸入マッチ業者は値下げ競争を仕掛けて、民生マッチを潰そうと努めた（NAT Ko.To.67.10/10）。

[127] 1928年5月初、商務交通省大臣のカムペーンペット親王は、海外に輸出できる商品を機械によって生産している、タイの工場は、Siam Cement Companyと石鹸生産のSiam Industries Ltd.の二つしかないと述べている（NAT Ko.To.67/92）。

写真 10-1　工余足球隊（『中華民報星期刊』1937.4.11）

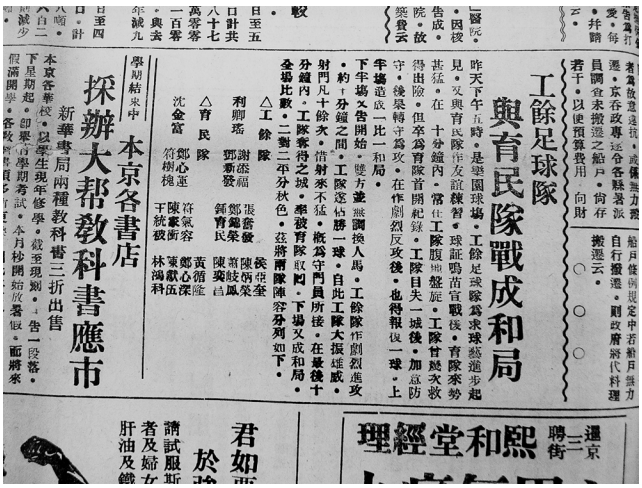

工餘足球隊
與育民隊戰成和局
昨天下午五時。是樂園球場。工餘足球隊爲求球藝進步起見。又與育民隊作友誼練習。球証鴨苗宣戰後。育隊豪勢甚猛。在十分鐘內。常任工隊腹地盤旋。工隊甘越次救得出險。但卒爲育隊首開紀錄。工隊自失一城後。加意防守。後果轉守爲攻。在作劇烈反攻後。也得報復一球。上半場遂成一比一和局。
下半場又告開始。雙方並無調換人馬。工餘隊作劇烈進攻。約十分鐘之間。工隊遂佔勝一球。自此工隊大振雄威。射門凡十餘次。惜射來不猛。概爲守門員所接。在最後十分鐘內。工隊奪得之城。奉獻育隊取勝。下場又成和局。全場比數。二對二平分秋色。茲將兩隊陣容分列如下。
△工餘隊　張奮發　陳炳榮　梁中奎　謝盛福　鄧鍾榮　利卿瑤
△育民隊　鄧敏鳳　鄧奇岐　陳奕昌　鄧育發　黃循隆　鄧心深　沈金富　符氣容　陳豪衡　梁獻伍　林鴻科
本京各書店
採辦大帮教科書應市
新華專局兩種教科書三折出售
學期結束中
本京各書局。以學生現年修學。截至現銷。告一段落。下星期起。即舉行學期考試。本月杪開始放暑假。滿學生。各教科書賣多有減少
熙和堂經理
請試服斯
君如
於

写真 10-2　工余足球隊（『中華民報』1937.6.18）

新聞から窺える[128]。］

潘女雄は、広肇足球隊（サッカー・クラブ）のリーダーである譚亮濱［1917-1988］[129]に接近することに成功した。腕のいい金銀細工職人の亮濱は、サッカー愛好家の華僑たちだけではなく、トラック運転手や町工場の労働者にも友人が多く、交際範囲が広かった。私たち

128　例えば、『中華民報』1937.4.13の「工余足球隊週刊特刊」に掲載されている鐘育民「本隊今後的展望」や『中華民報』1937.5.8, 6.18, 8.6などの記事。

129　1917年に広東省南海県［現仏山市］で絹織物職人の家庭に生まれ、1930年バンコクに出稼ぎに。1937年5月に暹羅華僑工人抗日救国聯合会第五分会主任、1938年8月延安に行き、陝北公学、中央党学校に学ぶ。陝甘寧辺区総工会政務秘書、中央海外研究班泰国研究組組長、巡視団副団長、華中党校教育幹事など歴任、解放後は仏山市委書記、南海県委書記、1958年洛陽のトラクター工場長（『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 390-395）。

は、亮濱に進歩派の雑誌を読ませるとともに、夜は彼に同行して、彼の友人たちを訪ねて、世間話をしながら共産党の抗日救国政策を宣伝した。

亮濱の雇主である金行の主人は、国民党支部の執行委員で、亮濱に再三、国民党入党を勧誘していた。ある日、この主人は亮濱に葉陸萍（1913–1964、陸叔または六叔ともいう、広東人[130]）という友人を紹介した。陸叔は中華街のど真ん中にある源昌醤園（ヤワラート路No.273号に現存、龍鳳金行の大看板の向かい側）という商店の主人であった。陸叔は、亮濱を訪ねてきて、蒋介石の誕生祝いに軍用機を贈るための募金[131]をしたいので、華僑サッカー・クラブ間の競技会を企画して欲しいと依頼した。

私たちは、この情報を得るや直ちに上部に報告した。許一新と呉琳曼は、私の細胞会議に出席して、これは単なるスポーツ行事ではない、政治的な催し物だ。我々はこの機会を利用して、綏東（内モンゴル）の抗日義勇軍を支援するための募金をすべきである、と説いた。正面から抗日救国のために募金をすればタイの法律に反する[132]ので、国民党を表に出して競技会を組織すれば、危険性は減少する。問題は、国民党の募金をどのようにして横取りするかであった。

女雄と私は、亮濱を訪ねて、華僑社会で威信があった文化聯友社の名を使って、率直に綏東抗日義勇軍のための募金に変更して欲しいと頼んだ。亮濱は、文化聯友社が共産党系であることを知っていた。しかし、幸いにこれは彼の希望と一致していた。亮濱が仲介したので陸叔は、私と梁傳燊に会うことを了承した。陸叔は、蒋介石の誕生日祝いを名目として抗日のために軍用機を寄付するのである、と説明した。しかし、国民党のやろうとしていることは、共産党軍を弾圧するための軍用機の充実であることは見え透いていた。亮濱が考えていた募金方法とは、国民党の外郭団体である励志社の名で、僑社の名流を集めてパーティを開き、会場で名誉特別入場券を配布して、多額の寸志を頂こうというものであった。

梁傳燊は、国民党は僑社に手足になる大衆組織をもっていないので、パーティ頼りのようだと見抜いて、「名誉特別入場券だけに頼っていては、競技会にくる観客数は微々たるもの

---

130 1913年に広東省新会県に生まれ、1930–31年広州大中中学に学ぶ。1933年3月来タイ、源昌醤園の経理。バンコクで、戦中に共産党指導下の反日大同盟執行委員、戦後民主同盟駐暹支部常委、中華総商会執行委員、共産党系の南洋中学理事、広肇会館理事など。1950年バンコクにソ連の共産主義グッズ（赤旗やメダルなど）を販売する華聯太商行を開く。1952年帰国後、広州僑聯執委、入党することなく1964年病死（楊慧（欧陽恵）「回憶與葉陸萍相処日子」、『泰国帰僑、第一巻』pp. 207–210）。

131 蒋介石50歳の誕生（1936年10月31日）祝いに、1936年後半に実施された軍用機購入のための募金と思われる。『華僑日報』1936.12.30は「陳樹人収到南洋各埠寿機廿八架捐欵内暹羅華僑捐欵五万圓」と報じている。『華僑日報』1936.10.30は、「中華総商会通告第12号、為通告事　本月卅一日恭逢行政院長蒋公五秩［50］寿辰敬請同僑懸掛国旗以誌慶祝　此告、暹羅中華総商会中華民国廿五年十月参十日」を掲載している。

132 華僑の抗日目的の募金を禁止することを主目的とした募金統制法が公布されたのは、日中戦争開始後の1937年9月20日である（*Prachum Kotmai Prachamsok* Vol. 50（2480）, pp. 1044–1049）。一方、蒋介石の誕生祝いの募金は1936年末、綏東戦事も、1936年11–12月であるから、時期的にズレがある。この部分は、欧陽氏に記憶の混同があると思われる。

で大変寂しいでしょう。沢山入場券を印刷して、1枚1バーツで売り捌いたらどうでしょうか。販売は文化聯友社が引き受けます」と語り、更に「文化聯友社には、多数の読書社が加わっています。読書社のメンバーには、華僑学校の自治会役職者も多いので、学友たちに入場券を売り捌くことができます」と説得した。

陸叔は歯切れ良く、了承してくれた。彼は入場券を印刷して、亮濱を通じて我々に渡し、一方、我々は亮濱を通じて、売上金を陸叔に渡すことを決めた。進歩派が牛耳る華僑学校の中には、学校を休みにして学生に入場券を販売させたところもあった。しかし、我々は集めた金を、陸叔に渡さなかった。陸叔には、華僑の意思は、蒋介石の誕生祝いではなく、華北の抗日義勇軍支援にあることが判ったのでと釈明した。同時に領収書を付して、きちんと会計報告を陸叔に行った。

これまで国民党のために募金しても、党内元老に着服されるばかりであった陸叔は、我々の公明正大なやり方に感激した。許一新、呉琳曼とともに我々は、感謝を表明するために陸叔を訪問した。その際、亮濱らが準備中の工聯読書社に、陸叔も知識分子の立場で参加してはどうかと誘った。工聯読書社は、我々の勧めで亮濱らが広東人労働者を集めて組織したものである。日中戦争が始ると、工聯読書社は、暹羅華僑工人抗日救国聯合会（工抗）第五分会に変身した[133]。このように譚亮濱は、我々の努力が実って、獲得することができた最初の人物となったのである。

第四節　スペイン内戦への義勇兵派遣計画

魯文（関弓）は1930年代のバンコクの華僑社会で大いに活躍した人物であった。彼はいつも演劇活動に積極的に参加して、注目を浴びていた。スペイン内戦勃発（1936年7月）後、暹羅共産党指導部の指令を受けた魯文は十数人の若者を集めて、スペイン戦場に赴き、戦いに加わろうと準備したことがあったようである。私が、このことを初めて魯文から聞いたのは、1980年代後半に泰国帰僑英魂録編集のために資料を収集した際であった。

中国共産党は東南アジア各地の共産党組織にスペイン内戦に義勇兵を派遣するように指示を出したという。その目的は、将来の武力闘争に備えての軍事訓練、経験の蓄積にあったようである。バンコクでは魯文らが中心となって派遣の準備を試みた。短期間のうちに十数人の若者が集められた。私はこのメンバーではなく、在タイ時にはスペイン内戦へ義勇兵を派遣する党の方針があったことも、その準備の中心人物が魯文であったことも何も知らなかった。最終的には、タイの共産党組織には、スペインまでの旅費がなく、通訳ができる人もいなかったので実行できなかったという。

スペイン内戦時、中共の下では「保衛馬徳里」（マドリードを守れ）という歌が盛んに歌われた。タイでも、党の指示によるものと思うが、華僑学校、労働者の夜間学校、読書社、

---

[133] 楊慧（欧陽恵）「回憶與葉陸萍相処日子」、『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 207−210。

工場などで、この歌がしばしば歌われた。この歌について、私は一つの思い出がある。

愛国の情熱をかき立て、募金を集めるために、ある革命劇を上演したことがあった。その際、蟻光炎を来賓として招待した。我々が蟻を招いた目的は、出し物の鑑賞を通して、彼の愛国的情熱を喚起して、多額の寄付を引き出すことにあった。加えて、彼から他の華僑商人へ呼びかけてもらえば、更なる寄付金獲得が期待できるからであった。上演当日、許侠と私は通訳として、説明と勧誘の任を帯びて、蟻光炎の隣に座った。蟻光炎は潮州出身で、標準語は解さないので、我々はそばで逐次、歌詞を潮州語に訳した。

劇が始まると、蟻光炎は「打回老家去」(東北を日本から奪還して故郷へ帰ろうという意)という抗日歌を、大変気に入った様子であった。続いて、「保衛馬徳里」の合唱となった。「手榴弾をあの殺人放火者のフランコに投げつけよう。起きて！ 起きて！ 全スペインの人民」という歌詞を、私は今でもよく覚えている。多くの若者たちが、スローガンが書かれたプラカードを高く掲げて、舞台を走り回りながら、勢いよく大声で熱唱した。

蟻光炎はマドリードという地名がわからないと言って、どこにあるのだと私に尋ねた。許侠はこの機を捉えて、蟻光炎にマドリードの場所だけではなく、スペインの民衆が今、自分の権利を守るために戦っているが、フランコやイタリア軍の干渉を受けて、現在危機に陥っている、とスペイン内戦の事情を説明した。許侠の熱のこもった説明にもかかわらず、蟻光炎は冷淡な反応しか示さなかった。

我々は、今すぐに彼に寄付の話をしても良い結果は得られないだろうと考えて、彼の顔色をうかがいながら、少しずつ話を進めた。許侠は、これらの若者たちは歌だけでなく、実際にスペインの人々を助けるために、現地に行くつもりのようですが、今のところは旅費不足で困っているようです、と慎重な言い回しで述べた。

蟻光炎は「渡航方法は」とはじめて口を開いた。

「まずフランスに入り、そこからスペインに行きます」と許侠は答えた。

蟻は、「金がかかりそうだな」と一言。それから、舞台上で舞っている青年たちを指差しながら、話を続けた。「若い連中は、どうも、世の中のことがよく判っていないようだ。金さえあれば、何でもできるというようなことは、この世にはあり得ない。ところで、彼らは、スペイン語が出来るのだろうか」

「できませんが」

「それでは、通訳の用意も必要になるだろう。一体何のためにいくのか。まさか向こうの人に迷惑をかけるために行くつもりではないだろうね」と、蟻光炎は手厳しい。最後に、彼は、こんなことで、人に資金の援助を求めることは絶対にすべきではないとぴしゃりと断り、再考の余地を残さなかった。「実弾射撃も外国語も、何もろくに出来ない子供が人を助けるなんて…笑い話だよ」、と。

許侠が、蟻光炎の反応を黄耀寰（共産党バンコク市委書記）と劉漱石に報告すると、両者は蟻光炎の話にも一理あると判断したためか、その後、若者をスペインに送る話は立ち消え

となったようだ。

延安到着後、私はスペイン内戦に関する中共の文書に接する機会を得た。これらの文書を読んで、若い人たちを募集してスペイン戦場に向かわせようとしたのは、延安の指令によるものであることをはじめて知った。この指令が意図したことは、スペイン人民を助けるとともに、幹部候補生たちに戦場を経験させ、彼等の軍事能力を向上させることにあったのであろう。延安で私は、毛沢東が国際縦隊に渡したという赤い旗を見たことがある。この旗からもスペインへの義勇兵派遣が党中央の方針であったことが判る。この旗は現在中国革命歴史博物館に保存されている。

延安では、スペイン内戦に実際に参加した、黄正光、袁挺丙というベトナム華僑出身のロシア語教官から、話を聞く機会があった。両人によると、当初ほかの四人の仲間と共に、六人で意気揚々とスペインに向かい、外国人から成る「国際縦隊」に編入された。しかし、一旦戦闘になると、たちまち大混乱が生じた。問題は何よりも、国際縦隊は世界各国出身の義勇兵によって構成されているので、兵士の言葉も文化も違い、意思疎通が全くできなかったことであった。

戦場で、六人には指令も正確には伝わらなかった。激戦の戦場で立ち往生したあげく、全員捕虜となってしまった。中国国民党の高官、宋子文がスペイン当局と交渉して、この六人を含む中国人捕虜の釈放を実現させた。黄正光、袁挺丙は華僑というよりもベトナム人であったが、釈放の対象となるのは中国人に限られていたので、ベトナム華僑と自称して釈放されたのである。やっと自由の身となって重慶に帰った彼らは、その足で八路軍重慶弁事処に手配を依頼して延安に向かった。

第五節　西安事件（1936年11–12月）

［1931年の満州事変（9.18事変）で領土を奪われた中国では強い抗日意識が生じた。同時に、失地回復（民族解放）というスローガンは中国人を結集させるために、最も効果のある手近で恰好のスローガンとなった。日本が作った満州国は、バンコクの右派紙である華僑日報でも一貫して「偽国」と称され、これに協力した人々は「漢奸」と批判された。

1936年11月、内蒙古軍と国民党軍の戦闘が、綏東（内モンゴル綏遠省東部）に拡大した。中国では、内蒙古軍は日本軍の傀儡であるという批判が高まり、更に強い抗日意識が生じた。中国の世論は日本との開戦を期待するまでに高まった。タイ華僑の団体は、バンコクでも地方でも募金活動を行い綏東戦事に従軍する兵士の慰問のために南京の僑務委員会などへ送金を開始した。バンコクの魯迅追悼大会に参加した団体も残金を綏東戦支援のために送る決定をしたことは前述した。このようにタイにおける抗日のための華僑の募金は日中戦争開始以前から始まった。しかもこの時点では、華僑日報が募金活動を報道するなど公然と実施された。

日中間の問題解決のために、川越大使と張群外交部長との間に交渉がもたれたが、交渉は

遅々として進行しなかった。更に、1936年11月25日に日独防共協定が成立し、ドイツは日本の満州支配を承認した。続いて、日伊協定が成立し、日本がイタリアのアビシニア支配を認める見返りに、イタリアは日本の満州支配を認め、満州国を承認した。日独協定の成立は中国に大きなショックを与えた。国際的に孤立していた日本が、国際的な協力者を得たことは中国人側にはソ連との連携への期待を高めることとなった。しかし、蒋介石は1936年11月3日にも、洛陽で「整個国家民族最大禍害之赤匪」は「有知識有組織之漢奸」であると非難し、共産党を先づ最初に撲滅すべきであると演説（『華僑日報』1936.11.27）し、共産党との戦いの継続を公言した。これが、張学良が西安で蒋介石を監禁し政策の変更を迫ることになる背景である。]

1936年12月12日に西安事件が生じた時、我々は興奮した。蒋介石が捕らえられたことを喜び、我々は、啓明学校の校庭にゴザを敷いて座り議論に耽った。このゴザは、許侠の居室である教員宿舎から持ち出したものであった。「蒋介石を殺してしまえ！」といった元気のよい発言が多かった。しかし、劉漱石（ママ）は、現状を十分に認識したうえで、新しい状況に対応すべきだとたしなめた。

啓明学校関係者が誰ともなく集まって、西安事件を祝う夕食会になったことがある。この席で、黄耀寰（当時、共産党バンコク市委書記[134]で啓明学校の副校長であった）が、「赤色学聯とか共青団とかいう、恐ろしげで近寄り難い名前はやめて、読書社として活動してもよいのではないか」と発言したことを覚えている。これは、当時、党幹部は赤色学聯や共青団を重視しなくなっており、いずれは解消しようとする方針を持っていた証左であろう。

第六節　樹人中学から啓明学校へ（1936年後半–37年半ば）

呉琳曼、黄耀寰、何孟基など樹人中学師範班の教員は、最初同師範班だけで教えていたが、後に啓明学校［1935年5月開校[135]］の教員も兼務した。彼らは授業のほかに、啓明夜校の運営にも携わっていた。彼らが啓明学校に力を注いだのは、同校を共産党の人材養成拠点として重視していたからである。

実際に、1930年代半ばに崇實、啓明両校で養成した学生幹部が、1937年以降抗日運動の主力となった。日本軍がタイを1941年末に占領する前に、共産党がタイで行った活動のなかで、最も成功したと言えるのは、共産党による華僑学校の設立である[136]。中でも、崇實学

134　欧陽氏によれば、この肩書きは、李華著『泰共産党史―初稿』（1984年頃謄写版印刷で作成された5～6万字の原稿）中に記されているという。

135　啓明学校の校史としては、前掲『永恒的懐念：暹羅啓明学校紀念文集　1935-1938』がある。『民国日報』1936.5.28に「啓明夜学拡充、三角路啓明夜学、現因学員日増、原址不敷応用、特遷往越鵠中央医院旁野虎路口三層楼、聞已加聘学問優良與経験豊富之教師多人、分担暹文英文国文各科功課、開学日期定六月五号云」とある。

136　チャオ・ポンピチットは、1939年後半までに華校の殆どが、タイ政府によって閉鎖されたので、共産党は主要な活動の場の一つを失った。それ以後は、労働者の中での活動に力を傾注せざるを得なくなったと述べている。

校は一番の成功例だと言えよう。

崇實学校の学生の多くは、もともと国民党系の黄魂学校［Huang Huan, 1927年開校[137]］に在学していたが、共産党の指示を受け、学生ストライキを起こした後、黄魂学校を飛び出して、一部の教員とともに新たに崇實学校を1932年半ばに発足させた[138]。共産党は崇實の教員陣を充実させるため、広肇公学などの学校から有能な教員を転勤させるとともに、活動に熱心な学生も崇實に送り込んだ。つまり、崇實学校は学生ストの産物として生まれたのである。共産党はこの経験を活かして、［1936年3月21日に］中華中学（中中）で学生ストライキを発動して、同校を退学した学生をまとめて、樹人学校の師範班を立ち上げたことは前述した。

私は崇實学校のことは詳しくはないが、同校は、ラーマ4世通りの黄橋（Saphan Luang）付近にあった[139]。

啓明、崇實の二校のほかに、共産党書記長の劉漱石が校長を務める培民学校という名の華僑学校（小学校レベル）が存在した。警察の目を引かないよう、普段我々はなるべく培民学校で活動を行わないようにしていた[140]。培民学校に常駐している人間は劉漱石と黄文歓（マ

---

137 『タイ官報』Vol. 44, p. 297, 1 May 1927によれば、黄魂学校夜間部新設許可は1927年4月27日付け文部省布告で公表された。全日制も同時期に開校したものと思われる。同校は1928年初にはワット・リアップ付近に移転した。理事者には陳文添など蕭佛成系の国民党員が名を連ねている。

138 タイ国立公文書館文書（NAT So.Tho.54.1/1500,1510）によれば、崇實（タイ文部省に登録した校名はSong Sit。但し、崇實を潮州語で正確に発音すれば、Song Sikとなる）学校は、No. 1876 Trok Phraya Sunthonphimol, Tambol Sathani Rotfai Paknam, Ampoe Pathumwanに全日制を開校する許可の申請を1932年7月2日に提出し、夜間部開校についても同年8月3日に提出した。同年8月17日の文部省布告により新設認可が公表された。申請書の記載によれば、授業科目は、タイ語、潮州語、英語および規定科目、男女共学で、学生の年齢制限はなく、校長とは別に一般教師数4名、とある。一方、同校卒業者の記念文集、崇實学校紀念文集編委会編『崇實学校』（人民交通出版社、北京、1995年）では、開校を1932年6月1日と記している。崇實学校創立当時のタイの華字紙によれば、同校は新式教育法に熱心な高学歴の教員が集まって創立したものであり、新民学校、黄魂学校に並ぶ僑社のトップレベルの学校として位置づけられている。授業料も安くはなく有名私立学校と同レベルであり、スポーツにも力をいれており僑社の模範的な学校と見られている。タイ国立公文書館文書（NAT So.Tho.54.1/1623）によれば、開校後1年半後の1933年12月4日付けで同校は文部省に、学生数が170名になり教室不足となったとして学校敷地の拡張の許可を求める申請を行った。『タイ官報』Vol. 51, p. 212, 22 April 1934によれば、同校は1934年4月18日付けでタイ文部大臣によって、タイ初等教育法違反を理由にタイの小学校としての認可を取り消された。1934年6月19–20日には、前述のように学生ストが生じた。その後、『タイ官報』Vol. 52, p. 2020, 6 Oct. 1935によれば、同校は校舎を1175, 1177ko Thanon Sawang Tambol Thanon Sawang Ampoe Bangrakに移して1935年9月26日に再認可を受けた。移転再開に伴い、教職員の大幅な変更が行われ共産党系の学校の性格が目に見える形で現れた。なお、同年6月27日には方禄栄ら元崇實校生2名が共産党のビラを散布したとして逮捕された（『中華民報』1935.6.28, 6.29）。黄魂学校のストについての資料は未見である。

139 注138にいう、Thanon Sawangは、黄橋地区に存在する。劉茂雲によれば、1930年代前半の黄橋付近は、工場と労働者の多い半ばスラム地帯の貧民窟であり、電気も入っていなかった。また、共産党が影響力をもっていたので紅区と言われることもあった、という。

140 培民学校は，共産党が設立したものではない。培民学校の前史は注24参照。国民党支部が創立した新城門（バーンランプー）の協益学校は，学生数増大に対応して，1934年初めに共産党のリーダーの一人楊雪濤（李華）を含む4名の教師を新規採用した。その結果，教師の総数は8名となった（『中華民報』1934.1.5）。しかし，同校は私立学校規則違反を理由に1934年9月3日付

マ)[141] 二人のみであった。

崇實学校と啓明学校との共通点は、両校とも理事会（董事会）が設置されていないことであった。理事会の監督を受ける廣肇公学などの一般華校と比べれば、外部からの干渉は少なかった。

崇實学校、啓明学校、樹人中学師範班の学生たちは、中国本土の大学やタイのチュラーロンコーン大学もしくはタマサート大学などへの進学を目指すためではなく、革命教育を受けるために入学したのである。これらの学校では、国民党系の一般の華僑学校が教えたような数学、物理、化学、歴史、地理、国語、英語、タイ語などの科目は重視されず、政治経済学、階級闘争論、大衆哲学などが教えられた[142]。1930年代のタイの華僑学校はすべて、国民政府の教育部が定めた教科書を採用していた。共産党系の学校でもこうした教科書は揃えていたが、ほかの華校とは違って、タイ文部省視学官の立ち入り検査に備えて、机の上に飾り物として置いていただけである。

啓明学校は、共産党員の許侠が中心になって工場労働者を対象とした初級識字教育の夜学校として、1935年5月に設立された。許侠が初代校務主任（校長）で、彼は、昼間は樹人中学で授業をし、夜は啓明夜校で授業を行った。呉琳曼も啓明夜校でエスペラントと新聞記事コースの授業を担当した[143]。また、樹人中学師範班の一部の学生は、昼間は樹人で授業を

けで文部大臣から閉校命令を受けた（『タイ官報』Vol. 51 p. 1755, 9 Sept.1934）。同校の校董会メンバーは旧校舎を使用して培民学校と改名した学校を1935年9月3日に再開した（『中華民報』1935.10.3）。なお，『タイ官報』Vol. 52 p. 1590, 18 Aug.1935によれば，タイ文部省は1935年8月13日付けで培民学校（寄棟屋根造，所在地No. 1958 Chakraphong Rd.）の新設を許可している。1936年2月20日に，潮州からバンコクへの密航者多数が摘発拘束された（『中華民報』1936.2.21）。この密航者たちは強制送還されるまでの間，極めて惨めな状態におかれた。この「被拘蔵客」の生活援助のため，一部華校の学生が立ち上がった。中心になったのは新城門培民，崇實，華僑中学，新民などであった（『中華民報』1936.4.14, 4.15, 5.2）。これらは共産党員の教師が存在する学校であり密航者救援は共産党が運動として実施したことが推測される。

141 黄文歓（Hoang Van Hoan, 1905–1991）には、『滄海一粟』（解放軍出版社、1987年。英訳は、Hoang Van Hoan, *A Drop in the Ocean*, Foreign Languages Press, Beijing, 1988）という回想録がある。欧陽氏は、劉漱石との連絡のため培民学校を訪問した際、黄文歓に遭ったと言う。しかし、黄文歓は1935年3月にはタイを離れており、欧陽恵が活動を始めた時期（共青団に入団したのは1935年9月）より前である。それ故、欧陽氏が黄文歓に会う可能性は考えられない。欧陽氏の記憶違いか、人違いであると思われる。

142 欧陽氏のこの話は、少々誇張があるようである。陳天賜（1920年生、タイ名は、Thian Sukosol警察大佐）は、中華中学（中中）第四期生であるが、初等教育の高小5年、6年は崇實学校で受け、中中に進学した。陳天賜が2005年5月5日にバンコクで村嶋に語ったところによると、彼の父親も彼自身も崇實学校が共産党の学校であるとは知らなかった。在学時は、同校は国民党ではないことが判る程度で、共産党色は明白ではなかった。中中に進学して1936年3月にストが生じたが、ストには参加しなかった。同期生の林南中（ストリーダーの一人）とはよく話したが、彼が共産党員だとは知らなかった。もう一人の同期生で後にタイ共産党の幹部になった黄君玉とは交際はなかった。陳天賜は、中中に二年間在学後、廈門の学校に進学したが、1年ほどで日中戦争が始まったので、タイに戻ってきた。18歳でタイ軍に徴兵され、19歳で警察官に転じた。特高警察に配属され、中国人の動静を調べる仕事に従事した。制服を着用せず、かつての同級生などを訪問したが、徐々に、特高警察であることが知れて、同級生たちは彼を避けるようになった。

143 許侠自身の回想では、彼は党の指令により、1935年5月にバンコクのプラッププラーチャイ地区（中央病院の近く）に、労働者を対象とした夜学として、啓明学校を開校した。許侠は校長、後

受け、夜は不定期だが、啓明夜校で労働者を対象にした初級レベルの識字教育の授業を担当した。時には、一晩に10数名の樹人学生が啓明夜校で授業を行う場合もあったので、同夜校では10コマ以上の授業が同時に行われていたことになる。

啓明にやってきて、授業を行う樹人の学生は、多くが共産党員もしくは共青団員であった。啓明夜校に学ぶ学生たちは、ほとんどが学校周辺の工場労働者であり、読書社活動に参加している者もいた。私の推測だが、労働者を組織的に教育する共産党の学校は、啓明夜校以前には存在していなかったように思う。

［夜間学校として出発した啓明は、1936年9月1日に昼間部（初級小学及び高級小学）も開学した（『華僑日報』1936.8.8）[144]。同校は、昼間部の学生募集のため、次の広告を華僑日報に、1936年8月8日号から開学まで連日掲載した。

我們又用辦夜学的精神来創辦日学部！
普及大衆教育！
啓明学校　日学部、夜学部招生
発展華僑文化！
本校過去及現在辦夜学的純潔宗旨和苦幹精神已被賢明諸同僑所認識所愛護！
現為応環境的需要、本校同人又用辦夜学的精神、来創辦日学部了！
開学　9月1日
招考　初級小学和高級小学（兼強迫班）各級新生
教法　用活的科学方法、不読死書
設班　暹文初級中級高級
　　英文高級初級商科
　　中国文学班　国語新文字班　潮語新文字班　粤語速成班　木刻班　図画
　　提琴班
特設　暹文高中補習班（内分法文、英文、算学、暹文、中文）特聘曼咯法政大
教授乃沙天君及国立拉差偉高中英文主任Mr. HH. P. PDCRCR等担任指導
校址：越鵠中央医院旁一層大楼
歓迎　各界師友参観・指示・批評！

に呉琳曼が夜学部主任に就任した（前掲『永恒的懐念：暹羅啓明学校紀念文集　1935-1938』、p. 50）、啓明学校の場所は、越鵠野虎路（ワット・プラッププラーチャイ地区スアパー路）である（『華僑日報』1936.10.17）。

144 欧陽氏は、樹人中学師範班を離脱した際に、啓明夜校に全日制（日学部）が開設されたので啓明学校に移ったと述べたが、これは次のように辻褄が合わないので記憶違いと思われる。即ち、1936年7月の樹人中学師範班の開設から、同年9月の啓明の全日制の開学までは、僅かに2カ月間しか開いておらず、樹人に8カ月いたという欧陽氏の話と矛盾するし、また、欧陽氏が一緒に樹人から啓明に移ったという陳立恵は、注59、149に見るように1937年6月時点でも未だ樹人中学に住んでいる。

昼間部併設学校に拡大できたのは、蟻光炎からの資金援助があったからであるという。

樹人中学師範班は、1年あまり続いた。[『華僑日報』1937.7.10によれば、1937年7月9日夜に中華総商会の光華堂で第一回師範班の卒業式を行った[145]。] 樹人学校校長の温伯明が、我々と手を組んだ理由は、単に金儲けのためであった。その後、彼は、授業とは無関係な資料が大量に印刷されていることから、我々が共産党の活動を行っていることに気付いたらしい。巻き添えを食い、危険な目に遭うことを恐れて、彼は提携を破棄することにしたようだ。私たちは、ストを起こして、温伯明を追い出し、一気に学校を乗っ取ることまでも検討した。しかし、学校の財産は校長温伯明の個人名義で登録されていることを知り、計画の実行は困難であることが判った[146]。

温伯明は、「これ以上やると、警察に通報するぞ」と許侠に警告した。許侠は、「温伯明は蟻光炎と仲がいいから、我々も控えめにやらなければ」と主張して、蟻光炎に斡旋を求め、両者が一堂に会した[147]。

私たちは温伯明によって、樹人学校から追い出された。私は蘇蘭、陳桂華、朱南和[148]、陳立恵[149]などの仲間たちと一緒に、ヨッセーに移転した啓明学校に移った。私は、当初事務の仕事を担当していた。その当時、教員を務めていたのは許侠、呉琳曼、李華などであった。暫くすると、李華がほかの仕事が忙しく、授業の時間が取れなくなったので、私は黄耀寰から代講を頼まれた。担当課目は国語（中国語）であった。それまでに、私はすでに数本の

---

145 『華僑日報』1937.7.7には、「暹京樹人中学暨小学部夜学部招生、本校招収初中一年級新生、一二年級挿班生、師範挿班新生、小学部各級・幼稚園・強迫班新生及挿班生、夜学部各科専修班生、報名　7月1日起、考試　7月5日上午9時、開学　7月6日」の広告が掲載されている。師範班の募集も行われていることから、この時点では師範班廃止は未だ決まっていないことが判る。

146 欧陽氏は、延安で病死した親友、梁傳桑（牧軍）の伝記で、次のように書いている。「樹人学校の温校長は商売気から同校に師資班［教員養成班］と政治経済を学習する夜校を作り、中中の退学処分を受けた40余名を受け入れた。組織から呉琳曼が派遣されて樹人の拡張に参加した。温校長は半年もすると学費を値上げした。［共産党］組織は、樹人学校師資班班長の牧軍に罷課して温校長を追い出すように指令した。しかし、温校長は自分の名義で校舎を借りており、警察を導入してスト学生を追い出した。樹人を追放された貧乏学生たちは自分たちの学校を作ろうと募金活動して、遂に学生たちの自分の学校［啓明学校］を作った（『泰国帰僑英魂録、第一巻』p. 9）。

147 欧陽氏は蟻光炎に斡旋を求め、両者一堂に会した際に、「中学部の設立の可能性について検討した。温伯明は、師範班学生のほとんどが学費未納という現状を見て、経営者としての立場からこれ以上進めると、学校は破綻すると判断して、中学部の設立をきっぱりと断った。蟻光炎は、双方の意見を折衷して中立案を出そうとしたが、結局話し合いが決裂し、中学部の設立計画は見送られた」と語ったが、本稿で見るように中学部は樹人中学創立当初から存在し新聞で学生募集をしているので、欧陽氏の記憶違いである。なお、『中華民報』1936.10.13によれば、蟻光炎は「樹人中学名誉董事長」である。

148 朱南和（1919–1979）潮州潮陽県生、父死亡のため8歳で母と共に来タイ。働きながら14歳から崇實、啓明等に学ぶ。16歳で共青団、日中戦争開始後、学生抗日救国聯合会を指導し、寒衣集めや募金をして、八路軍や新四軍に送る。1938年春共産党入党、日本軍のタイ進攻に対して地下抗日、1954年に帰国し広東省華僑事務委員会に勤務、1958–78年香港で南洋商業銀行副経理、中国通訊社総経理、香港中国旅行社副董事長など（『泰国帰僑英魂録、第二巻』pp. 237–241）。

149 『中華民報』1937.6.19の副刊欄に掲載された『南哨』革新号第二号には、立恵（樹人学校宿舎にて）の文章が掲載されている。彼は住所を依然樹人学校と明記している。彼は中中ストのリーダーの一人で、中中で退学処分を受け、欧陽恵らと共に樹人に移った学生である。このことから1937年6月段階でも、中中退学者は樹人から退居していないことが判る。

エッセイを華字新聞の副刊（文芸欄）に発表した実績があり[150]、少々知名度があったためか、私の授業は学生に人気があった。

［1936年12月末の啓明学校の学生募集は、次の通り。

啓明学校日夜学部招生
日学部：除辦完全小学及強迫班外、分設国文、暹文、英文専修班
夜学部：計設現代文学研究班、暹文低・中・高専修班、英文、世界語、国音、
　　新文字、算数、古文、商業等十四班
名額　：日夜学各部招収新生十五名（随到随考）
開学　：夜学部一月三日、日学部一月五日
校址　：越鵠野虎路中央医院旁三層大楼全座（『華僑日報』1936.12.29）

1937年5月に啓明学校は越鵠（プラッププラーチャイ）から攀多社（サパーン・ヨッセー）の元華僑中学の校址に移転し、6月1日から開講した（『中華民報』1937.7.13）。華僑中学は1937年5月6日から強制閉校を命じられたので、その校舎を啓明学校が賃借したのである。1937年6月の啓明学校の学生募集広告では、同校には師範部、中学部、小学部、幼稚園、強迫部（タイ文部省がタイの義務教育校と見なすと認可クラス）、夜学部があり、夜学部には、中英暹算及婦女識字班が開設されている。設備は、校車、儀器室、図書館、体育場、遊戯場、小農場、女宿舎、男宿舎、校園があった（『曼谷日報』1937.6.28）。1937年7月10日に移転先の講堂で新遷典礼及高初級第一届畢業典礼を挙行した。その様子は次のように報じられた。「邀請外界参加、計是日来賓共数十人之多、全体粛立、並向中暹国旗総理遺像暹皇御像、行三鞠躬礼、及唱中暹国歌後、即由該校校長致開会詞並報告遷校経過未来計画発給畢業証書、継由中華総商会主席蟻光炎先生代表中央委員蕭佛成先生並以該校校董主席資格致訓詞、勗該校員生再合作苦幹、並謂学生之於求学時代即為啓明時代、再次則由来賓許煜貝子端陳如今諸位演説、教職員代表演説、亦多勉勗之詞及至畢業生代表致答詞後、即摂影茶話散会」（『中華民報』1937.7.13）。］

啓明学校の教員には給料がなかった。ただ、食事と宿舎が無料で提供されるだけであった[151]。財政事情がよい時のみ、散髪代などとして月3バーツ程度の小遣いが支給された。す

---

150 『中華民報』1936.11.6の副刊欄に掲載された、南哨読書社編『Nanshao』第二号、「追悼魯迅先生特刊」には恵雄（欧陽恵の実名）という名がある。『中華民報』1937.1.27副刊欄「我們的話」（第二号）にも、慕蘭（欧陽恵の筆名）が執筆している。また、『華僑日報』1936.12.28副刊の我們読書社編「新献」は、我們読書社の「魯迅先生給与近代文化界的影響响」座談会での、メンバー6名の発言を載せている。その6名とは文、許俠、鈴子、恵雄、絲恩、如今である。恵雄の名が、華僑日報の中で見いだせるのはこれが初めてのことである。次に『華僑日報』に恵雄の作品が掲載されたのは『華僑日報』1936.12.29副刊「華僑文壇」上であり、作品名は、「當」（質屋）。

151 1930年代半ばの一般的な中華学校教員の月給は30〜40バーツ程度である。通常華校の支出は、教員給与が大半を占め、次いで校舎の賃借代金、学生送迎用の校車の維持費などであった。一方、収入は、寄付金と学生の学費とが二大収入源であった。1920年代半ばから「義務学校」と

べての教員は奉仕の精神で党の仕事に従事していた。

教員の他にも20〜30人の青少年革命家たちが学校内に寝泊まりしており、彼等にも無料で食事が供されていた。三食が無料とはいえ、極めて粗食でお粥に漬け物だけというものであった。それ故、金持ちの親、たとえば蘇蘭の父親などが、子どもの面会に来て、置いていった小遣銭のなかからおごってもらった、カーウ・マン・ガイ（海南島文昌風トリ飯）や豚肉のサテなどが何よりのご馳走であった。このように学校経営は教師の犠牲的な無料奉仕によっていたが、やり繰りは大変苦しかったようで、校長の許侠は金利20パーセントという高利の金にも手を出していた。

啓明学校には、拉丁（ラテン）化新文字とエスペラントの学習班が置かれた。呂咪がエスペラント専任教員、許侠がラテン化新文字の教員を務めた。抗日戦争が始まった後、東北タイのコーンケーンからバンコクに転勤してきた邱及がエスペラント教員陣に一時加わったことがある。邱及は、昼間は中華中学（中中）学校で授業を行い、夜は啓明学校でエスペラントを教えた。私の知る限り、当時のバンコクで、新文字とエスペラントのコースを設けていたのは啓明学校しかなかった。

啓明学校にエスペラント語が開講された当初、学習者は40名近くもいたが、授業が進むにつれて、次々に脱落して、2カ月で学生がいなくなり、コースを修了した者は一人もいなかった。私も脱落組の一人で、抗日戦争勃発前に学習班に入った時は興味津津だったが、そのうちに内容の難しさに圧倒されて、途中から抜けてしまった。あえて言い訳をすれば、エスペラント語の実用性に徐々に疑問を覚えるようになったことも一因であったかもしれない。

呂咪は、啓明学校でエスペラント語の教員のほかに、［エスペラント語情報に関心がある読者を対象にして、中華民報の副刊面を使って「希望者　ESPERANTO」を定期的に出版した。その創刊号（第1期）は1937年9月17日号に掲載され、第34期（『中華民報』1939.7.17掲載）まで続いた[152]。なお、中華民報は1939年8月9日号を最後に発禁廃刊となった。］

呂咪は北京や上海在住のエスペラント学習者から中国国内の情報を得て、蒋介石政権の内戦方針に反対する主張や国内の抗日の動きを、世界中のエスペラント学習者に伝えることに努めていた。

啓明学校の教員はみんな日常生活レベルのタイ語には支障はなかったが、文章を書くような高度なタイ語力を持っていたのは、恐らく海南人の兪任甫（タイ名：Mani Sukhawirat,

---

称して、ボランティア教員による授業を行う学校は存在したが、交通費などの別の名目で比較的高額の手当を支給せざるを得なかったので、間もなく赤字経営に転落し廃校に至るものが多かった。共産党が運営した崇實学校と啓明学校は、意識の高い党員教師の奉仕によって、支出を抑えることができた。なお、崇實学校の教師は、タイ人のタイ語教師を除いて一律に月4バーツであった（『華僑日報』1936.5.12）。

152 欧陽氏は、呂咪が中華民報に連載したエスペラント語シリーズのタイトルを「緑星」と語ったが、これは欧陽氏の記憶違いである。当時の中華民報の通常副刊欄（新聞紙一面分を使用）は「椰風」と称した。時々「椰風」が休みとなりそれに代わって、外部の団体が編集した特集が掲載された。これらの特集はそれぞれ「希望者　ESPERANTO」、我們読書社「我們的話」、業余読書社「群声」などのというタイトルをもっていた。

1912–1971）一人だけであったと思う。彼は、中国語はそれほど上手くはなかったが、流暢なタイ語を操った。そのため、タイ文部省の役人が学校に査察に来た時、いつも学校側を代表して、応接係を務めていた。

タイではタイ文部省の規則により、華僑学校でも一定時間数のタイ語授業を実施する義務があった。しかし、啓明学校はこの規則を無視しタイ語の授業を全く実施しなかった。但し、タイ文部省の係官の査察に備えて、タイ語教員を数人雇っていた。これらのタイ語教員は、普段はタイ語のかわりに、タイ語の歌を教えていた。兪任甫はこれらのタイ語教師の世話係でもあり、よく冗談を飛ばしていた。私は啓明のタイ語教員たちとは全く付き合いがなかった。兪任甫のタイ名も、彼が共産党党員であったのかどうかも知らない。彼はその後タイで弁護士になったという話しを聞いたことがある[153]。

私が啓明学校で国語（中国語）の臨時教員をした時、教員仲間に、陳豹（Tran Bao）というベトナム人がいた。陳豹[154]は、抗日戦争が始まったのち、回国服務する労働者を率いて中国に帰ったが、途中で労働者を置き去りにして、公金と共に姿を消した人物である。

---

153 兪任甫（Mani Sukhawirat）は、タイ生まれの暹羅共産党員としては最も古参の一人である。タイ共産党政治局員であったDamri Ruangsuthamが村嶋に語ったところによれば、兪任甫は、Wirot Amphai（黄君玉、1944年12月23日に第一回代表大会を開いた泰国反日大同盟のタイ語秘書長）、Song Nophakhun（余松、1943年にタイ共産党第二代書記長に就任）、Damriなどのタイ人（タイ生まれでタイ語も理解できる中国系タイ人）共産党員の先輩格に当たる。村嶋が、兪任甫の妻（Samon, 陳麗英）と息子（Suchat）に2005年5月7日にインタビューしたところでは、WirotとDamriはそれぞれ別個に、兪任甫の死後も兪任甫の旧居（バンコクの戦勝記念塔脇のケーキ店）を数回訪ねてきたという。自らも中華中学（中中）五期生である陳麗英によれば兪任甫は、啓明学校の夜学のタイ語教師で、昼間は裁判所で中国語・タイ語の通訳として働いていた。Damriが村嶋のインタビューに語ったところによると、兪任甫は、タイ仏印紛争時にピブーンの失地回復を支持し、ピブーンをファシストとみる共産党主流派の見解と対立したため、一時共産党の活動から遠ざけられた（Eiji Murashima, "Opposing French Colonialism: Thailand and the Independence Movements in Indochina in the Early 1940s" *South East Asia Research*, Vol. 13 No. 3（Nov. 2005）pp. 333–383参照）。兪任甫はタマサート大学に入学し、同大学の学生登録簿によれば、彼の学生番号は11200番、1938年頃学生登録をし、1944年に学士号を得て卒業している。その後、彼は弁護士を業とし、戦後には反共法の容疑で逮捕された人々の弁護士を引き受けている。彼の遺族は、依然共産主義容疑者の裁判記録を保管している。Marut Bunnag（1924–, タマサートで学生運動リーダー、民主党員、国会議長、法相など歴任）が、2004年12月17日に村嶋に語ったところによると、兪任甫は1957年に創立されたタイ国弁護士協会の30名の発起人の一人である。

なお、チャオによれば、兪任甫の後に、啓明学校のタイ語教師をしたのは、Wirot Amaphaiであるという（Chao Phongphichit, "Luk Chin Rak Chat（9）" *Matichon Sut Saphda* 14 Nov. 2008, p. 39）。但し、中華中学六期生である欧陽氏は、同中学四期生のWirot Ampai（黄君玉）のことは、全く記憶にないという。

154 Tran Bao（陳豹）は、タイではチョートという名を使い、暹羅共産党執行委員会のベトナム人執行委員のために通訳をしていた。抗日戦争開始後、1938年に暹羅共産党執行委員会は、Tran Baoに40人の華僑青年を新四軍に連れて行くように指令したが、彼は青年達を香港に置き去りにした。その後、漢口に現れ、葉剣英に会って、シャムから抗日戦争のために帰った帰僑だと自己紹介した。1938年6月インドシナ共産党海外指導部の対外連絡担当者Phung Chi Kien（馮志堅）は、漢口を訪問し葉剣英に会ってTran Baoを監視するように注意を促した。Tran Baoは、Ngo Chinh Hocと同一人物だと思われる（前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930–1936）」、pp. 166–167）。

啓明学校は呉琳曼、許侠たちが［1938年2月12日に］逮捕される時点まで存続していた。呉、許らが共産主義活動の容疑で逮捕された場所は啓明学校である。実は私も逮捕現場に居合わせたが、無事だった。警察は事前に逮捕する人物を決めており、それに該当しない者（私を含む）には手を出さなかったからだ。この後、学校は警察に封鎖された。暫くしてから、校名だけは新中華学校という名に変更し、従来のままの教員および学生で、旧啓明学校と同一の敷地・校舎を使って［1938年6月20日に[155]］再開した。この時、タイ政府に対して認可申請手続を担当したのは、兪任甫である。

崇實学校も1938年2月12日に許一新校長らが逮捕され一時閉鎖されたが、同校跡地に、重慶学校という新しい名前で［1938年5月8日に[156]］再開した。

呉琳曼と許侠が警察に逮捕された原因は、彼らの日中戦争開始後の抗日活動が目立ち過ぎたためだと考えられる。とりわけ、許侠は特務隊（すなわち鋤奸団）を率いて、李華の指示のもとに、対日協力者に対して、大規模な暗殺活動を行ったので、タイ社会に大きな不安を生じさせた。もっともこうした一連の暗殺活動で、実際に手を下したのは、愛国心に目覚めた華僑のヤクザ組織である洪字（アンジー）のメンバーであったが。

---

155 『中華民報』1938.6.18。
156 『中華民報』1938.5.20。

第六章　抗日戦争と抗聯活動（1937年後半–39年半ば）

第一節　タイ華人の抗日戦争参加【村嶋補足】

1935年7月のコミンテルン第7回大会は、東アジアの共産党の闘争・宣伝を階級闘争重視から反日本帝国主義闘争、民族解放闘争へ、路線変更を決定した。これを受けて、暹羅共産党の宣伝活動は、反日に重点が移った[157]。

蒋介石の国民政府は、西安事件、日中戦争の勃発を経て、1937年8月21日に中ソ不可侵条約を結び、同月末には共産党の活動を合法化し、ここに第二次国共合作が成立した。

日中戦争勃発は、タイ華僑の愛国感情を昂進させた。バンコクで出版されている、華僑日報や中華民報などの一般華字紙さえも抗日運動の宣伝機関と化した。例えば、タイ政府の華字紙統制が未だ緩かった1938年2月時点では、どの華字紙も、ほぼ毎号、タイ各地から中国の抗戦に参加するために回国服務する華僑青年が地方のタイ国鉄駅頭で在地の華僑の盛大な見送り受けて出発する様子や写真を、実名入りで愛国の美談として報道している。タイ華僑出身で、中国政府軍の将校に任官して抗日戦争に従軍している者の生い立ちや経歴も、尊敬を込めて連載されている。また、中華民報の副刊「椰風」には、抗日のために帰国する友人を送る送別の辞や詩文がしばしば掲載されている。他方、華僑抗日組織の日貨ボイコット運動を余所に日本商品を販売した「漢奸」たちの謝罪広告が一日に数件は載っている。

第二次国共合作の成立により、タイ華僑社会では、国民党だけではなく、抗日戦力としての共産党への期待も高まり、共産党への公然とした支持表明も増大した。共産党のイメージは、それ以前の「共匪」から愛国的民族解放者へと変化した。

タイの一般華字紙は、抗日戦を戦う中国共産党についての報道を急増させた。共産党の幹部（毛沢東、朱徳、周恩来、葉剣英、葉挺等）の講演、演説や八路軍・新四軍の戦果を大々的に報じた。延安の学校の紹介や入学手続き案内、更にはそれらの学校に入学するためにタイを出発した青年たちの実例もしばしば掲載された。

たとえば、華僑日報は、延安における共産党の学校（陝北公学）の入学案内を掲載（『華僑日報』1938.2.16副刊「華僑公園」（老丁主編））し、同校に入学のためにタイを出発した青年男女についても報道（『華僑日報』1938.2.23）している。毛沢東について好意的に報道（『華僑日報』1938.2.21「華僑公園」）し、朱徳の八路軍の抗敵戦争報告（『華僑日報』1938.2.21）を掲載し、八路軍の遊撃戦の勝利を紹介（『華僑日報』1938.2.24）している。

1929年12月22日にバンコクで南洋共産党暹羅特別委員会のメンバーの一人として逮捕投獄され、1938年初めに釈放された朱叟林は、出身地のピチット県ターローを訪問した後、

---

[157] 前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930–1936）」p. 177。

直ちに延安に旅立ったが、同年1月末から、中華民報および華僑日報の両紙は、朱叟林が「瘦憐」の筆名で書いた、タイから延安に向かう路程報告を連載した。

暹羅共産党は華僑の愛国感情に依拠して、暹羅華僑各界抗日救国聯合会（抗聯）の組織化など大衆的基盤を飛躍的に拡大するチャンスを得た。

日中戦争勃発後、タイ華僑は全階層で愛国心が燃え上がり、抗日を掲げる共産党の活動は極めて容易となった。寒い中国からタイに来る際に着用してきた冬用の古着を募集して本国の戦地に送る共産党の募衣活動に、従来にない広範な華僑大衆から積極的な寄付が寄せられた。これに関して、恵雄（欧陽恵の実名）「募衣運動（二）」（『華星日報』＝華僑日報付属紙1938.2.4号4面副刊「同路」に掲載）は、「我々が過去に実施した数多い民衆を覚醒させる活動は、少数の知識分子［主に華校の学生を指す］のみを対象としていたので誤っていた。これまで誰も、国難についての情報を切実に求めている華僑大衆が多数存在していることを顧みなかった」と記している。

旧正月には華僑は、商店街や長屋を廻る獅子舞へ祝儀を出す習慣があるが、1938年の旧正月（1938年1月31日）には、共産党系組織は、救国募金のための獅子舞を繰り出して成功をおさめた。

1938年2月12日、タイ政府は突如として、華僑共産党員等の一斉逮捕を行った。この逮捕は、後述する共産党系の抗日団体、暹羅華僑各界抗日救国聯合会（抗聯）の執行部を一網打尽にしたものであり、共産党系の運動に大打撃を与えた。逮捕された者は、啓明学校の許侠、呉琳曼、崇實学校の許一新、許煜［きょ・いく］、啓蒙学校の伍退思らの共産党員の教師や、医師の貝子端[158]ら22名（『華僑日報』1938.2.24）であった。呉琳曼、許侠、許煜らは、華字紙上にしばしば記事を書いていた文筆家でもあり、貝子端は1934年当時から華字紙上にしばしば自分が経営する病院の広告を出している人物であり、誰もが僑社の知名の士であった。

第二節　抗日戦争の開始、抗聯の成立と活動

1937年7月7日に盧溝橋事件が生じた直後、バンコクの華字紙は号外を出した。号外が出た日の夜、党組織は啓明学校の運動場に読書社メンバー、啓明夜校で学んでいる労働者、啓明学校や崇實学校などの学生を集めて集会を開いた。この日、啓明学校にいた我々には、夜、集会を開くから外出しないようにという指示を受けていた。17時か18時頃に始まった集会は、大光灯という明るいガス灯が煌々と照らすなか深夜まで続いた。まず、許侠が演台に立ち、抗日戦争が始まったこと、国のために力がある者は力を、金がある者は金を提供するように求めた。その後、興奮した学生、労働者たちが競って次々と演台に駆け上り、徹底

[158] 貝子端は、西洋医でバンコクの華校の校医も担当していた。1937年4月4日の児童節には各華校が健康優良児のコンテストを行ったが、貝は広肇公学の応募児童百人余の身体検査を依頼されている（『華僑日報』1937.4.3）。

抗戦や日本帝国主義打倒を訴えた。青年達は口々に、軍隊に志願するぞ！ 帰国するぞ！ と宣誓し、なけなしの有り金すべてをその場で寄付した。最後に黄耀寰がまとめの発言をし、救国会を組織する旨を宣言した。しかし、香港出張から李華が戻り、明確な方針が伝えられるまで、我々は何をすればよいのか判然としなかった。

当時の李華［1912–1988］は暹羅共産党書記長劉漱石に次ぐランクの人物であった[159]。私がタイで活動していた時は、李華が中国でどのような教育を受けたのか、どうしてタイに来ることになったのかは知らなかった。1980年代半ば、私は、泰国帰僑英魂録に李華の伝記を書くことになった。この時、李華のむすめ（二番目の妻、林慕豪との間の子）が私につぎのような資料を提供してくれた。それによれば、李華は、1912年3月5日に潮州饒平県で欧陽という姓の漁民の家庭に生まれた。1930年に汕頭の大中中学在学時に共青団に入団した。その後、東江反帝大同盟代表大会に出席し、区団委宣伝部長なども務めた。1931年に病気を患いタイに渡ってきた。翌1932年には暹羅共産党に入党した。タイでは、李華という名を用い、その後も李華で通した。李華の他に、楊白濤（ママ）、楊礼華、洪濤などの名を用いたこともある[160]。

李華が1988年に死亡する前に、後述の泰国帰僑英魂録編集のため、私が北京で李華に

---

159 1939年8月11日に劉漱石らが逮捕されて国外追放された後、暹羅共産党の幹部指導者として残ったのは、李華、阿桂、張慶川らである。しかし、注179等で述べるようにこの後、同党組織は政策方針面、人脈面などから分解状態になった。1941年8月に、李啓新が中共から派遣されて来タイし、党の再統一、再編を図った。その帰結として、1942年11月27日から12月1日までバンコクでタイ共産党の第一回党大会が開催された。李華は同党初代書記に選出された。しかし、実質は李啓新（筆名、素林）がトップで、李華はナンバー・ツーであった。欧陽氏が李啓新に近い友人から聞いたところによると、戦後、李啓新と李華の対立が激化し、中共中央から仲裁者が派遣されてきたという。この結果李啓新はタイを離れることとなった。李啓新の後任として1947年末、伍治之が中共暹羅総支部代理書記として派遣されてきた。李華は1952年に帰国し、最後は外交部アジア司長（局長）で副部長待遇であったという。李華の最初の妻は黄覚生。黄覚生との間に子どももいたが、黄覚生が延安に旅だったのち、林慕豪［1911–1989］と結婚した。林慕豪はバンコクの大商人、林耀春の長女で、彼女の弟妹（妹の林謙（スリヤー）、弟のシー・アノータイとウィット・ウドムプラサート）は全員共産党の活動に参加した。李華は、死亡する1年ほど前には、帰国華僑聯合総会副主席であった。欧陽氏は在タイ活動時代には、李華の信頼があつく、李華の連絡係りを務めた。李華が潜んでいた宿舎の一つは、欧陽氏の生家から、わずか50メートルほどしか離れていない長屋の一室であった。『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 396–408に、欧陽「悼念李華」というタイトルで李華の伝記を書いているのも欧陽氏である。李華は死亡する4年ほど前に、『泰共党史―初稿』を作成した、と言われる。これは李華のタイでの活動をまとめて報告したもので、もし公開されればタイ共産党研究にとって貴重な資料となるであろう。

160 欧陽「悼念李華」、『泰国帰僑英魂録、第一巻』p. 397。欧陽氏は李華がバンコクで用いた姓名の一つを「楊白濤」と記しているが、これは「楊雪濤」の誤記と思われる。『中華民報』1934.1.5は、新城門協益学校（劉漱石が校長）に「楊雪濤」が新任教員として採用されたと報道している。同年、新城門協益学校は文部省から停校処分を受けて廃校となり、1935年9月3日に後身として培民学校が創立された（『中華民報』1935.10.3）。『中華民報』1936.9.3には「八月份華校教員考試暹文」の結果が報道されている。それによると1936年8月にタイ語の検定試験に志願した華校教員の一人に、楊雲（ママ）濤がおり、「楊雲（ママ）濤、培民、欠考」、即ち試験に欠席したとある。楊雲（ママ）濤は楊雪濤の誤植と思われる。注252も参照。なお、欧陽氏によれば、劉漱石は李華を「阿涛」と呼び、呉琳曼、許侠、黄耀寰は「阿楊」と呼んでいたが、1930年代の啓明学校でも救国運動でも一般には「李華」と呼ばれていた、という。

会った際、彼から直接聞いた話しだが、抗日戦争開始後、劉漱石が李華を香港に派遣し、廖承志[161]、連貫[162]［八路軍駐香港辦事処（八辦）］に新情勢にどう対処するかの指示を請うた。香港の廖承志、連貫は、李華を通じて劉漱石に、直ちに暹羅華僑各界抗日救国聯合会（略称：抗聯）を立ち上げ、広大な僑胞を指導して抗日救国運動を展開せよと指示したという[163]。李華が多忙だというので、私が代わって啓明学校6年生の国語の授業の代講をしたことを前述したが、この時李華は香港に連絡に行っていたものと思う。1938年当時には、党幹部はしばしば香港等を訪問して、廖承志などから指示を受けるのが常であったようだ。李華は時々、忽然と消えた。その時は、どこかに連絡に行っているのだろうとは薄々感じていた。

李華が香港から戻り、明確な方針をもたらすまで、我々は何をしていいのか、よくは判らなかった。その間には、我々は西安事件以後国共合作になったのだから、と考えて、国民党政府の救国国債まで販売した。

暹羅華僑各界抗日救国聯合会（抗聯）を組織するための準備会議（第一次討論籌備成立“抗聯”的会議）には、私も出席した。討論の結果、許一新（崇實学校教師）、呉琳曼（啓明学校教師）、許侠（同前）の三名が抗聯組織化の準備責任者に指名された。この席で、許一新は、排他主義ではなくできるだけ多数の大衆を動員しよう、共青団、反帝大同盟、プロレタリア芸術聯盟、文化聯友社などの組織は解散し、そのメンバーはそれぞれの分野の救国会に参加するようにしようと提案し、劉漱石の承認を経て実現した。各華校の学生・教員、夜校に学ぶ労働者、各業種の救国会メンバーを思い切って拡大する方針により、半月足らずの間に、工抗（工人）、文抗（文化界）、学抗（華校学生）、婦抗（婦人）、商抗（商人）の抗日救国会が成立した。各抗日救国会の代表による代表大会が開催され、抗聯が正式に発足した。大会は抗聯執行委員として、許一新、呉琳曼（文化界）、許侠、林鳴（労働界）、阿桂を選出し、許一新が抗聯主席に推薦された[164]。

---

161 廖承志は、日中戦争開始後の1937年10月初めに延安で毛沢東から、抗戦物資が極めて欠乏しているので、海外華僑の支援を得るために香港に八路軍の事務所を開くように命じられた。彼は1938年1月に香港に、お茶の販売店、粤華公司を装った、八路軍駐香港辦事処（八辦）を設立した。廖承志の香港における任務は、①海外に中国共産党と八路軍、新四軍の抗日の主張と実績を宣伝すること、②海外華僑と国外の友人からの支援物資を各抗日根拠地に送ること、③最新の国際動向について中共指導部に報告することなどであった。また、八辦は、回国服務する華僑青年の受入手配も行い、香港に来て八路軍や新四軍に参加することを希望する青年華僑、合計千人余を延安や抗日戦線に送った（王俊彦『廖承志伝』、人民出版社、北京、2006年、pp. 43-49）。八辦は1941年末に日本軍が香港に進攻するまで同地に存続した。

162 連貫［1906-1991］、広東人、当時八路軍駐香港辦事処党支部書記兼華僑工作委員。

163 この時、李華から聞いた話を、欧陽恵は「懐念抗聯主席許一新同志」、『泰国帰僑英魂録、第二巻』p. 84に書いている。

164 欧陽恵「懐念抗聯主席許一新同志」、『泰国帰僑英魂録、第二巻』p. 85。反帝大同盟が、抗聯に組織替えしたことを、黄耀寰は「芦溝橋事件後、日本帝国主義は全中国を支配する野心を明かにした。日本の中国侵略は他の帝国主義の利益と対立し、帝国主義間に矛盾が生じた。中華民族と日本帝国主義との間の矛盾が主要矛盾で、中華民族とその他の帝国主義の矛盾は二義的になった。その中で、反帝同盟という名称を続けることは策略に合わず、かつ反帝同盟の組織も形勢に合わなくなったので、反帝のスローガンを打倒日本帝国主義に変更し、反帝大同盟の組織を基礎に抗聯を作った」（前掲『永恒的懐念：暹羅啓明学校紀念文集　1935-1938』、p. 20）と述べている。

李華は、抗聯の募金は必ず、香港の廖承志か宋慶齢に送り、国民党側には送ってはならないこと。また。青年が軍人を志願して回国服務を希望する場合、国民党の軍隊に行くことは勧めず、香港の廖承志の事務所を紹介して、廖承志に行き先を決めてもらうようにすること、を指示した[165]。李華から国民党政府の救国国債を売ってはならないと注意された我々は、タイにおける救国国債販売の総責任者である中華総商会主席蟻光炎に、国債は売れなかったと嘘をついて返却した。

［許侠の回想では、抗聯では許一新が暹羅共産党との連携を担当し、呉琳曼は各分会との連絡担当。許侠は華僑上層分子との連絡を担当し、蟻光炎の仲介を得て洪門18幇会を抗日工作に団結させることに成功した。日貨ボイコット等の抗日に非協力的な漢奸を制裁する鋤奸団の長には、洪門諸派中の有力団体、三点会の首領江某が就いた。許侠は政治指導員の肩書で鋤奸団団長と連絡した。許侠は抗聯常委で文抗会主席でもあった[166]。］

抗聯全体の責任者は許一新で、彼は抗日戦争勃発前に、崇實学校の校長であった。李華は党から派遣された幹部なので、許一新より高い地位にあった。抗聯は独自の出版物を発行したことはなかった。

工抗の責任者は林鳴［1906-1982］だった

文抗で中心人物として動いたのは、呉琳曼、許侠。私も文抗に属していた。抗日戦争開始以前に、多数生まれた読書社を統率するため、文化聯友社が組織されたことは前述した。文化聯友社は、1936年10月に魯迅が死亡したのち、魯迅を記念するために設立されたもので、呉琳曼、許侠、黄病佛、邱心嬰[167]、それに欧陽恵の五名が執行部を構成していた。五人のうち、黄病佛以外は全員共産党関係者であったので、文化聯友社の主導権は共産党が握っていた。

七七事変（芦溝橋事件）勃発後、文化聯友社執行部の協議の結果、文化聯友社を「暹羅華僑文化界抗日救国聯合会」（略称は文抗）と名称変更した。私は、文抗の宣伝担当として働き、同時に、林鳴を手伝って広東人労働者の組織化、即ち暹羅華僑工人救国聯合会（工抗）の一つ分会の指導役を引き受けた。このほか、許侠の鋤奸団の仕事も手伝った。

学抗の代表者格の人物は何人もいた。庄江生、馬松（後に東北の軍事委員会で活躍した）、唐道民［1916-1991］[168]、林春（後に中華人民共和国広州公安局長を務めた）、桐来、陳展之

なお、1935年前半時点で、反帝大同盟のメンバー数は、165名、プロレタリア芸術聯盟は45名である（前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930-1936）」p. 163）。

165 『泰国帰僑英魂録、第二巻』pp. 84-85。

166 前掲『永恒的懐念：暹羅啓明学校紀念文集　1935-1938』、p. 45, 52の許侠の原稿。

167 邱心嬰は、1937年4月19日当時、華僑日報記者（『中華民報』1937.4.19）。

168 唐道民（唐民、かつて阿志、陳一平の名を使用）。1916年海南島文昌県生、1926年父と共に来タイ。1930年3月革命運動に参加、1932年崇實学校創立とともに同校工読生に、その後華僑中学、啓明学校でも工読生。1933年共青団員、1934年党員、1930年から1936年10月まで共産党交通員、学聯委員。1936年10月“紅十月活動”でバンコク街頭に赤旗を立て、ビラを貼った際に身分が暴露したので、劉漱石はナコンサワンの特支書記、夜校創立担当者に指名して避難させた［ナコンサワンは海南人が多い町。党組織は1932年以前は存在したが破壊され、1935年時点では党組織は存在していなかった］。1937年6月頃劉漱石が邢錦華を新しい特支書記として派遣してきたのでバンコクに戻る。学生の抗日運動を宣伝指導し、募金、募衣、募薬品活動を行い八路

（華南工学院、もしくは華南医学院の党書記）などである。彼らは全員共青団員であったが、後に人民中国で重要なポストに昇り詰めた。

婦抗で活躍した女性は、張慶川［1913–1997］の妻、陳桂華［1913–1994[169]］や私の恋人であった蘇蘭［1922–1997］などである。党から延安に派遣された最初の人物である張慶川については、別述する。その妻の陳桂華は、私と同じ樹人師範班の学生であり、女性解放を掲げた螺旋読書社（1936年末に創立）の責任者であり、抗日戦争が始まると婦抗の中心活動家であった。

商抗の担当者については、普段付き合いがなかったので、詳しくは知らない。今でもよく覚えている断片的なシーンは、その責任者がバンコク近郊の精米所で、タイ脱出を図る私たちを接待してくれた時の光景である。後述する抗聯総会の活動が失敗した後、警察の追跡から逃れるため、私たち一行はまずバンコクの郊外に身を隠し、そこからタイを脱出しようとした。その際、我々の世話をしてくれたのは商抗のメンバーで、家香という人物だった。家香は布の商売をする、口数の少ない商人であった。大失敗に終わった抗聯総会の映画上映会

軍、新四軍に送る。1938年初め庄江生、蘇青、張声良、馬松ら9人とともに、汕頭に回国服務、福建省龍岩県で新四軍二支隊に参加、そのまま新四軍下で青少年の教育担当、1950年海南島に転勤、党の経済関係部門勤務、文革の10年間“走資派”等と迫害され、文革後職場復帰（『泰国帰僑英魂録、第三巻』pp. 409–420）。

169 陳桂華は1913年10月4日バンコクで誕生。原籍は広東省梅県。1934年8月に設立準備が始まった婦女協会（暹羅共産党下の大衆組織）の宣伝委員。本書でもしばしば登場する黄覚生［1913–1969, 黄覚生は延安名、本名は黄碧玉］とともに初期暹羅共産党の主要な婦人指導者。1934年12月11日号の民国日報副刊に第1回が掲載され毎月一回、8回続いた婦女協会の論文集「歯輪」の編集責任者。この「歯輪」の刊行は、1935年初に暹羅共産党からコミンテルンに宛てた『報告』の中でも、成果として報告されている。

暹羅における共産党系の婦人運動活動家の草分けは、蘇恵［1909–1996］である。蘇恵は広東省海豊県に生まれ、同地で林務農の紹介で1925年4月共青団入団、同年8月広州の学習班に参加、1926年1月東江地区代表として国民党第二次代表大会に参加した。同年6月海陸豊団地委成立後、林務農書記の下で婦委書記。南昌起義軍が1927年10月に南下して潮汕に入るのに合わせて、海陸豊党組織は暴動を起し、11月ソビエト政権成立。蘇恵は、区ソビエト政府農婦部主任。国民党軍に鎮圧され、4カ月でソビエト政権崩壊。1928年3月に蘇恵も撤退し、農民赤衛隊の政治指導員として戦った。彼女は、1928年5月シンガポールに避難し、間もなく同地の党組織との連絡に成功し、［南洋共産党］臨時工委の秘書に。1929年にバンコクに移りいくつかの華校の教員。［1934年初に］彷徨学社を組織し、また華字紙副刊に「歯輪」を創刊した。彼女の教育により、多くの青少年が革命の道に導かれた。その一人が、1934年に入党した黄覚生である。1935年春［3月］劉漱石に随行してマカオに行きインドシナ共産党代表大会に出席。以後香港、広州、上海で地下活動（『泰国帰僑英魂録、第四巻』pp. 496–502）。

陳桂華は、1936年には欧陽恵らと共に、樹人中学師範班に学ぶ。婦人解放運動を掲げた螺旋読書社の責任者。螺旋読書社編『泡沫』の第1回は、1936年12月4日号の中華民報副刊に掲載され、月一回の割合で1937年5月まで継続した。螺旋読書社には、もう一人の婦人運動家林慕豪も参加した（『泰国帰僑英魂録、第三巻』p. 289）。陳桂華はその後、啓明学校夜学の工人学習班の教師。1937年抗日戦争が始まると、婦女抗日救国会の主要リーダー。1941年太平洋戦争開戦直後から終戦までチョンブリーの華僑工作の任務に派遣された。戦後は、バンコクで華校教師（『泰国帰僑英魂録、第四巻』pp. 252–255、前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930–1936）」、p. 163）。夫の張慶川は、初期暹羅共産党の主要リーダーの一人であり、彼は暹羅から延安に派遣された最初の人物である。但し、1941年末以後、李啓新・李華らによって共産党組織が再編される過程で、張慶川・陳桂華夫妻は党の指導部から外されたばかりでなく、党籍も失った。この点については後述する。

について、彼は「ちょっと焦りすぎたね」とコメントした。彼は商抗の仕事の難しさを説明してくれた。抗日のために、日本製品をボイコットしようと口にするのは容易だが、実行しようとすれば意外な困難に直面する。たとえば、仕入先の布が香港製か日本製かを見分けることは、簡単ではない、と。

私は文抗で一時期働いた外、許侠の下で鋤奸団の仕事を手掛け、その傍ら、工抗の第五分会の仕事をも引き受けた。第五分会はもともと国民党の第五支部であったが、私が鐘育民の指導下に勧誘し、メンバー全員を工抗に移籍させた。すなわち、私は国民党の第五支部を丸ごと吸収することに成功したのである。第五分会のメンバーの中で、私の勧誘を受けて、共産党に入党したのは譚亮濱、趙承隷、何樹燊、毓賢の四人である。

この四人を含む第五支部のメンバーは、もともと「八哥」(八路軍、即ち共産党の意）には参加しないことを前提に救国会に入ったのだが、私はまず譚亮濱を共産党に入党させて、彼の説得によって、あとの三人を共産党に入党させることができた。鐘育民は、第五分会のメンバーを技能工として八路軍、新四軍に派遣したが、譚亮濱もその一人である[170]。タイを離れる前、私が共産党に入党させたのは、この四人だけであった。必ずしも多いとは言えないが、それには訳がある。まず工抗の仕事を担当するに当たって、私は上司から共産党員を勧誘せよという指令を受けたことがなかった。そして、私を含む、多くの共産党幹部はみんな、いずれそのうちに延安に行けば、そこで希望者は簡単に入党できると考えていたので、共産党員に勧誘することには精を出さなかったのである。しかも、摘発されれば、共産党員は長い懲役刑を課されるという厳しい現実があった。全体的に言うと、党員勧誘の条件は熟していなかった。

第五分会の世話役をやっていた時に、同会の長であり、ヤワラートに源昌醤園有限公司という大きな醤油販売の店をもつ陸叔（葉栄誉）が経営する醤油工場に4カ月位泊まったことがある。陸叔は魯迅が好きで、自宅においてあった魯迅の作品はかなりの数に上った。また、エドガー・スノウ著『中国の赤い星』の中国語訳『西行漫記』などもあった。陸叔は工抗の活動には、終始献身的な態度で臨んでいたが、共産党の話になると、いつも「八哥の話は、よしてくれ」と私の話を遮った。当時一般の市民の日常会話では、共産党は「八哥」と呼ばれていた。哥とは、兄貴という意味だが、ここでは親しさというより、畏敬の念を表していると理解してよいだろう。とにかく、あの頃の陸叔は共産党と関わりを持つことを恐れていた。

1952年に北京で陸叔と再会した時、彼は「俺も今は八哥になったぞ」と、自慢した。というのは、彼は協力者として、中共に招かれて北京に赴いたのである。彼は、抗聯の仕事に専念するため、個人資産の管理と工場運営を、甥に任せたという。陸叔が1964年に他界した後、陸叔の未亡人が遺産を相続するためにタイに帰ったが、この甥から門前払いを喰わさ

---

[170] 『泰国帰僑英魂録、第一巻』p. 260。

れた。この甥は、すでに陸叔の全資産を名義変更して、自分のものにしていたのである。

抗聯の総メンバー数は10万人に上ると書いたものもあるようだが、あまりにも事実と乖離していると思われる。第1に、当時のきちんとした統計もないのに、何を根拠にこの数字が出てきたのか、疑問を持つ。抗聯は未曾有の急成長を遂げたが、メンバーの勧誘はほとんどの場合、一ケタ単位で行われた。一例を挙げると、陸叔が所属する第五分会のメンバー数は僅か18人だったが、タイの共産党活動の舵を握る李華が、この18人の勧誘に全力を尽くすようにと、わざわざ私に指示を出したのである。この18人を獲得するためだけでも、相当な時間と労力を費やしたことは、よく記憶に残っている。この事実に鑑みると、10万人とは、甚だ現実離れした数字だといわざるを得ない。

劉茂雲は彼が率いた青抗は、5千人のメンバーを擁していたと明言したが、これもあり得ない数字であると思う。

バンコクのチャローンクルン、ヤワラート、サンペンの唐人街では下層華僑からなるヤクザ[171]が多く、相互に縄張りをめぐって殺し合いを繰り返していた。抗聯はこれらヤクザ集団も抗日運動に取り込もうとした。許侠、江暁初［同済眼科医院主の眼科医］、それにヤクザ社会に顔が利く林玉興［1870-1949］の3名で鋤奸団の首脳部を作った。許侠は警告や暗殺の対象を選ぶ係り、江暁初は文筆が立つので警告文を書く係りを担当し、実際の暗殺はヤクザ組織が担った。私は、許侠の鋤奸活動面の秘書という役割を与えられ、江暁初、林玉興との連絡も担当した。

鋤奸団を設置した団体は抗聯、“青年抗日聯合会（青抗）”、“熱血青年”の三団体だけで、なかでも、抗聯の鋤奸団は規模が最も大きかった。

この三つの鋤奸団のほかにも、正体不明のいかがわしい鋤奸団が簇生した。彼等は、いずれも美味しそうな獲物、すなわち脅迫対象に対し、金銭を強要するような組織であった。中には、抗日の名で私腹を肥やす悪質なものあった。商売や私的トラブルに、鋤奸団の名を悪用することすらあった。例えば、当時華僑社会で大きく騒がれた商人劉玉元の死は、一時は、日本に協力した罪で救国会によって処刑されたのだと伝えられた。しかし、実際は、劉は不倫がばれて、不倫相手の夫が雇った殺し屋に殺されたもので、抗日運動とは何の関係もなかった。劉を殺した者たちが捜査を撹乱するため、劉は漢奸だから、鋤奸団に殺されたのだという噂を意図的に流したのだった。

こうした混乱から、華僑社会に鋤奸団が乱立している現状を何とかしてくれという声が次第に強くなった。これらの声はまず蟻光炎のような華僑社会において高い地位と人望を有す

[171] タイ語ではアンジー（漢字は、洪字または紅字）、中国語では通常「私派」と言われるヤクザ集団が華僑社会に巣くっていた。華僑中最も数の多い、潮州系の下層労働者を主要な構成員としており、相互に縄張りをめぐる利害対立や些細な争いから殺し合いが跡を絶たなかった。1925年に、当時の国民党暹羅特別党部（反蕭佛成派）がこれらのアンジーグループを統合し国民党組織下に置こうと試みたことがある。この時も林玉興がアンジーのまとめ役であった。アンジーには、三点、万興、万勝、福楽、寿和、花園など18団体、40万人の構成員がいたという（『励青日報』1927.3.11）。

る人物のところに届いた。

蟻光炎が鋤奸団といった類の地下秘密団体との間にパイプをもつことは華僑社会に広く知られていた。鋤奸団の好き放題の暗殺活動に悩まされたタイ政府も、蟻光炎に依頼して、鋤奸団にやり過ぎないように注意したことがあるという。要請を受けた蟻光炎は宴会を開き、集まった各団体のトップたちにタイ政府の意図を伝え、特に人殺しをやめるようにと力を込めて訴えた。宴会に出た許侠の話によると、蟻光炎の訴えを素直に受け入れたのは、ごく一部の団体に過ぎなかった。抗聯はきっぱりと撥ねつけた。抗聯からすれば、日本に協力した者を消すのは堂々とやるべき責務であり、やるべきことをきちんとやらないことの方が、かえっておかしいのだ。その時、抗聯をはじめとする多くの団体は、蟻光炎をブルジョアの代弁者だと考えた。

許侠は、蟻光炎が召集した宴会に出席した複数の中国人団体（そのほとんどは実はヤクザ的性格の強い団体である）の代表者と知り合いになった。これを機に、彼はこれらの勢力を自分側のコントロール下に収めるため、熱心な努力を開始した。10以上のヤクザ団体中から、許侠は最終的に三つの団体に絞った。抗聯における彼の経験が買われ、これらの団体から政治指導員を務めることを要請された。やがて許侠の努力が実り、各団体に抗聯の影響が次第に浸透した。

鋤奸は次の順序で実施された。鋤奸団は、日本商品の販売をして利敵行為をしている「漢奸」に対し、まず警告書を出して、日本商品の販売を中止するように厳重に警告する。これに従わない時は、2回目の警告書とともに罰金を課した。商人が罰金を納入したか否か、銀行振込書等を提出させて確認し、振込を拒否した場合には、最後の警告をして殺害した。

最後の警告書には「3カ月以内に」殺すと書くことが多かった。これは相手を油断させるためで、実際には警告書送付と同時に暗殺に着手した。鋤奸団は殺すと宣言すると必ず実行した。もし実行しないと、鋤奸団の威信が地に墜ち、凄みがなくなるからである。なお、警告した商人の銀行振込書確認は、捕らえられないように慎重にやる必要があったのは当然であるが、“熱血青年”のリーダーである林壁川は大胆にも商店に乗り込んで、自ら振込書を確認したこともある。

暗殺の指令は鋤奸団の政治指導員である許侠が出し、実行者は洪門メンバーであった。私は抗聯が暗殺した人数は知らない。多分記録も残されていないだろう。既に故人となった許侠は知っていたであろうが。

抗聯の鋤奸団が日本人を標的にしたことはなかったが、国民党員は標的にしたことがある。たとえば、コーンケーンの救国会主席を殺した国民党員を暗殺したことがある。

私がもたらした情報がもとで抗聯の鋤奸団が暗殺することになったケースを紹介したい。

私は、国民党員の陸叔（葉陸萍[172]）のグループに接近していたが、彼から一徳学校の校長

---

[172] 慕蘭「回憶與葉陸萍相処的日子」、『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 207−218。

写真 11-1　延安報道（『暹羅華僑日報星期刊』1938.9.11）

写真 11-2　八路軍報道（『暹羅華僑日報星期刊』1938.5.1）

写真 11-3　回国服務報道（『暹羅華僑日報星期刊』1939.5.7）

は、国民党の李憲[173]の下で特務として救国会の破壊を行っているという情報を得た。この情報を私は抗聯の鋤奸責任者許侠に伝えた。許侠はこの校長を暗殺することを決定した。

ピストルは大きな発射音によって人々の注意を惹き、警察に逮捕される危険性が高くなるので暗殺に用いる道具としては不適である。鋤奸団が用いた暗殺道具は、はさみの二枚刃をばらした片方の刃であった。刃先には殺鼠剤の毒を塗っていた。すれ違いざまに刺すと、深手ではなくても、毒のために命を奪うことができた。

この校長殺害を引き受けた殺し屋は、刺す時に慌て過ぎてハサミにかけていたカバーを外すのを忘れてしまったので、暗殺は失敗に終わった。殺し屋の失敗を聞いた李華が、こんな無様なことしかできないのか、と怒っている様子を、私は目撃した。命拾いをした校長は、同じ国民党仲間だと思っている陸叔を訪ねて、相談した。陸叔は何食わぬ顔で、多分国民党が校長を疑っているためだろう、と作り話をした。校長は逃げるように、タイから去っていったという。

第三節　共産党員を南僑総会に派遣

シンガポールで陳嘉庚指導下に「南洋各属華僑籌賑祖国難民代表大会」（南僑総会）の大会が［1938年10月10日に[174]］開かれる際、同会に抗聯が代表を送るべきかどうか、送ると

173　李憲の名が、曼谷日報（民国日報の姉妹紙）紙上に現れるのは、1937年6月14日である。同年6月13日号までの曼谷日報には、「社長兼経理呉景盛、総編輯方宜生」と記載されているが、6月14日号からは「総経理李憲、編輯方宜生」に変わっている（『曼谷日報』1937.6.14）。

174　この大会に出席した各地の代表者数は、香港3名、菲（フィリピン）3名、越南5名、X［シャムを意味する］4名、緬甸5名、荷属（蘭印）49名、英属馬来亜86名、である『中華民報』1938.10.16, 10.18）。

すれば誰を送るかが議論になった。南僑総会が集めた募金は、国民党政府に送金することが同会の規則に明記されていたので、抗聯は代表を送るべきではないという反対論もあった。李華の発言だと記憶しているが、彼は次のように言った。すなわち、「香港（廖承志）から出席せよという指令が届いたので、代表を送るべきだ。南僑総会の規則に、募金は国民党政府に送金すると定めていることは、陳嘉庚の真意ではあるまい。シンガポールのイギリス当局は反共なので、それに配慮したまでのことであろう。陳嘉庚を支えるためにも、我々は代表を派遣すべきである」、と。結局、余り顔を知られていない何孟基を抗聯の名ではなく、「曼谷華僑籌賑祖国難民委員会」という名で派遣した[175]。

前述のように何孟基は樹人学校師範班が開設された際、同校の教師に採用され、その後啓明学校に移ってきた。彼は呉琳曼と同世代で、呉琳曼同様に、啓明学校に住み込んで活動していた。彼は、許侠、呉琳曼が1938年2月に逮捕された時は、シンガポールに避難した。その後、啓明学校が新中華学校名で再開した時には、再び教員として戻ってきた。彼はタイ人とのつき合いが多く、その兄は商人であったので金回りがよかった。何孟基のその後については知らない[176]。

第四節　砂糖キビ畑での入党

1938年に私が暹羅共産党に入党するころには、共青団組織は既に消滅していたように思うが、共青団上層から団組織の解消について、明確な通知を受けた記憶はない。それ故、共青団がいつ解消したのか、正確な日時は知らない。

共産党入党当日、阿桂が立会い証明人の任を務めてくれた。入党式には、阿桂のほか、鐘育民[177]も立ち会った。鐘育民と初めて会ったのは、魯迅追悼会［1936年11月］前後のころで、読書社活動においてであった。彼は兄で共産党員の鐘若潮［1911-1944］と二人で、シーパヤー通りに理髪店を開いて理髪師をしていた。共青団員として阿桂と連絡する場合、阿桂は、鐘の理髪店をしばしば待ち合わせ場所として指定した。最近北京で鐘育民の妻から聞いたところでは、この理髪店は、現在は既になくなっているそうである。

175　欧陽恵はこの話を『泰国帰僑英魂録、第二巻』p. 86に記している。陳嘉庚『南僑回憶録』（草原出版社、香港、1979年）p. 59にも南僑総会の参加団体として「曼谷華僑籌賑祖国難民委員会」の名が見える。

176　1938年3月にタイから国外に追放され、サイゴンに移った呉琳曼は同地で全民日報を出版し、1939年に同紙の販売店も兼ねてプノンペンにカンボジア華僑の抗日宣伝拠点として、現地華僑の協力を得て中正書局を開設した。この書局の経理に、呉琳曼はタイ時代の友人何孟基を就職させた（前掲『呉敬業的一生』、p. 59）。

177　鐘育民［1915-1982］の経歴は、欧陽氏が「育民永遠活在我心理」というタイトルで『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 258-262に書いている。鐘育民は客家で広東省梅県の貧農の生まれ、小学3年まで学んだ後は、農業の手伝い。1929年に梅県のソビエト紅色政権に兵士として参加、1930年同政権は国民党に包囲され崩壊。タイにいる兄、鐘若潮を頼ってタイに渡ってきた。この経歴は同じく客家の林鳴［1906-1982］に似ている。1933年に林鳴が中心になって設立した、暹羅共産党系の「客属工会」に参加し、反帝大同盟にも加わった。1937年7月7日の日中戦争が始まった直後、鐘育民は林鳴とともに「暹羅華僑工人救国聯合会」を組織。

育民は彼の床屋で、私と阿桂とが交わす共産主義に関する談論を、最初は聞かないふりをしていた。阿桂はいつもひげを剃り終わると、先に帰ってしまうので、そのうちに私と育民とが話す機会が自然に増えた。お互いが親しくなるにつれて、共産主義についての話も徐々に話題に上った。私は、育民が意図的に私と親交を深めようとしていることにしばしば気づいた。

私は広東人、育民は客家、阿桂は潮州人であったが、我々三人はタイ語を使わず、潮州語で会話した。当然、お互いに中国名で呼び合っていた。三人の中で、阿桂のタイ語が最も流暢で、その次は育民だった。

ある日、育民は「では、共産党の居所を探してみよう。どちらか先に見つけた方が、相手に教えることにしよう」、と私に入党の話を切り出した。2、3日たって、育民は私に、「見つかったよ、ある人が私たちと会いたいそうだ」と話した。1938年5月1日、私は言われた通りマッカサン[178]という地域の砂糖キビ畑に育民と共に向かった。到着して間もなく、そこに阿桂が姿を現した。彼が入党式を取り仕切った。

「上級機関を代表して、われわれ暹羅共産党は、君の入党申請を正式に認める。ここに君を正式に共産党員として受け入れる。私と鐘育民同志があなたの入党紹介人である。私は君たちの小組長（細胞長）に任命された」と、阿桂は宣告した。

細胞のメンバーは阿桂、鐘育民、それに私の三人だけだった。阿桂は入党予備期間について言及しなかった。私は候補期間を経ることなく、直ちに正規の党員となったのである。友人との談笑のような雰囲気のなかで5分足らずのうちに入党式は終了した。

式とはいえ、赤旗も、宣誓式もなく、入党式らしいものは一切なかった。阿桂から、「私はあなたたちの小組長に任命された」という説明を受けたのみで、何らの書類も署名入りの文書も渡されなかった。それ故、私の入党を証明する文書は存在しない。1982年に北京で党歴審査の申請をして、調査を受けた際、鐘育民の証言により1938年5月1日の入党が確認された。この時に入党した党は、中国共産党ではなく暹羅共産党であったが、李華が欧陽恵は僑党で活動していたと証言してくれたので私の（中共の）党歴の始まりとして公式に承認されたのである。また暹羅共青団のメンバーであったことについては、入団紹介者は既に死亡していたが、張慶川の下で団員として活動していた庄江生が、私が団員であったことを証明してくれた。これで、1935年9月の入団申請時から私の「参加革命工作時間」は公式に開始することとなった。それ故、私の『老幹部離休栄誉証』（1982年10月26日発行）に、「参加革命工作時間」が1935年9月と記載されているのである。もし、このような古い党歴が、早くから承認されていたならば、私はもっとチャンスに恵まれていたであろうが、遅すぎて残念である。党歴の問題については後述する。

---

178 欧陽恵は、鐘育民を回想した文章では、自分の入党日は1938年8月5日で、場所は鐘育民の理髪店であったと記している（欧陽「育民永遠活在我心理」、『泰国帰僑英魂録、第一巻』p. 259）。なお、当時のマッカサン地区は未だバンコク郊外であり、道路沿いにショップハウスがあるが、その裏は畑であった。

党細胞成立後、阿桂は私に、「これから何かあれば、育民に連絡を取りなさい」と指示した。その後、阿桂が姿を現したことはほとんどなかった。私は阿桂の住所は全く知らぬまま、用がある場合のみ、育民の床屋に向かい、阿桂と連絡を取った。私が阿桂の住所を知らない理由は、当時の党内には、おしえられたこと以外のことを、自分の方から尋ねてはいけないという雰囲気があったからである。

鐘育民は1938年10月に、兄夫婦（鐘若潮、王麗）と共に延安に向かう予定でタイを出発したが、香港で連貫から広東省の東江地区に潜入するように求められ同地で抗日運動に従事し、後に東江縦隊に参加した。彼は東江で、元中国共産党政治局常務委員、元国家副主席である曾慶紅の父親曾山のガードマンを務めたこともある。新中国成立後、育民は、駐ベトナム大使館の二等書記官、駐ミャンマー大使館の一等書記官、また、迫害のためインドネシアやミャンマーから帰国した華僑の世話と仕事の配分を、広州と雲南で担当したことがある。彼は病気を患い、療養中に13万字から成る革命回想録を書いた。この回想録は、育民の死後、妻が出版したものと思うが、私は芦溝橋の抗日記念館に展示されているのを見た記憶がある。育民は、1982年11月26日に北京で他界したが、死亡する直前に、私の党歴証明に協力してくれた。

阿桂のその後の行方については二説がある。一つは、阿桂は新四軍に従軍したというもの。もう一つは育民から聞いたのだが、阿桂は上部との間に意見の食い違いが生じたため、共産党の活動から離脱したというものである。但し、その食い違いの具体的な内容について、育民は話さなかった。阿桂が新四軍に行った可能性はあまり高くないと思う。なぜなら、新四軍には私の知合いが多数参加しているが、彼等から阿桂の話を全く聞いたことがないからである[179]。

---

[179] チャオ・ポンピチットが2006年にソン・ノッパクン［1943年から1961年までタイ共産党総書記］から聞いたところでは、1939年に劉漱石暹羅共産党書記長が国外追放になった後、共産党トップの地位を代行したのは、阿桂であった。しかし阿桂はこの任務を遂行できなかったので、李華が代った（Chao Phongphichit, "Luk Chin Rak Chat（19）", *Matichon Sut Sapda*, 23 Jan. 2009, p. 43.）チャオは2009年8月5日に村嶋に次のように語った。チャオ自身も阿桂が共産党トップの地位を継続できなかった理由を把握してはいないが、阿桂の能力不足によるものではないかと推測している。阿桂は太平洋戦争時には既に党活動には参加しておらず、姿を消していた、と。また、2012年1月9日にチャオが村嶋に語ったところでは、阿桂は暹羅共産党の中央（スーン・クラーン）もしくはバンコク市委（カナ・カマカーン・ナコーン）の工部（労働者部門）担当の責任者であったという。

チャオは、1939年後半以降、1941年8月に李啓新が来タイし立て直しを図るまで、タイの共産主義運動の活動家が減少、活動が低迷した原因をつぎのように説明している。①1939年9月以降、華校の殆どがタイ文部省により登録を取消され強制的に廃校に追い込まれたことで、従来共産党、国民党を問わず華人の政治運動の基盤であった華校が消滅したこと、②1939年8月に共産党トップの劉漱石らが逮捕された後、新指導部樹立時の見解の対立［阿桂と李華のどちらをトップとするか？］、③1940年末のタイ仏印紛争に対する評価で、ピブーン政権の失地回復政策を日本の支持を受けたファシストの政策であると批判する多数派と、フランス植民地主義からの失地回復は民族の大義であると賛成した少数派とに党内が分裂したこと。李啓新は、来タイ後、李啓新、李華、邱及、林鳴、鄭堅からなる工作委員会を最高指導機関として創立し、分離していたメンバーとの話し合いを積極的に実施した。その結果、海南人労働者グループとの関係を修復し、タイ仏印紛争で見解の違いから一時運動を離れた黄君玉（Wirot Amphai）、兪任甫（Mani Sukhawirat）、李光（林学）

阿桂や華校教員など、先輩共産党員たちは、しばしば次のような言葉を口にした。「プロタリアに祖国なし」、「どこに居ても、共産主義革命を最後まで成し遂げることだ」、「党の組

を運動に復帰させ、党の統一を実現した。また、李華をトップする新指導部は、新しい世代の活動家の選抜と育成を第一の緊急課題とした。このため、邱及らを師としてダムリ・ルアンスタム、ウィット・ウドムプラサート、チャオ自身らが参加したエスペラント語学習班が組織され、また、ほぼ同一のメンバーに対して、別の場所で許亦曽を師とした政治経済学教室を開いた（Chao Phongphichit, "Luk Chin Rak Chat（24）", *Matichon Sut Sapda,* 27 Feb. 2009, p. 41）。2011年12月27日にバンコク郊外、ノーンケームの病院の一室にチャオ氏を見舞った際、付添の妻の世話を受けながら同氏は自分の経歴を初めて具体的に教えてくれた。それによれば、実父はバンコクのマッカサン国鉄工場の木工職人、実母の名はメー・オーイであり、1924年8月28日にバンコクで出生した。幼時に一時的に子供がいない母の姉の家に養子に出された際、出生年を一年繰り上げて1923年生まれと届けられた。それ故、登録されている出生年は1923年である。広東人なのでバンコクの広肇公学に学んだ。同校では、李佩恵（女性）、譚白光（黄埔士官学校第一期生といわれる）の二人の教師が進歩派であった。1935年の中国の大洪水の際、チャオは11歳に過ぎなかったが愛国心は芽生えており、その気持ちを李佩恵は、演説会に出して語らせた。この二人の教師が共産党員であったかどうかは判らない。抗日戦争が勃発した時は、未だ広肇公学に在学していた。その後、中華中学（中中）に進学し、同中学が廃校命令を受ける1939年9月まで二年間在学した。チャオは読書社の活動に参加したことはなく、共産党系の運動に参加した最初は、中華中学在学時代に民族解放先鋒隊（民先）のメンバーになったことである。チャオの民先の活動における上部の連絡者は、党バンコク市委から派遣されてきた朱南和（朱叟林の甥に当たる）であった。当時、既に共青団は存在せず、民先に参加することは共青団参加の代用的意味もあった。中華中学では教員の邱及が課外授業としてエスペラント語を学生たちに教えており、チャオも参加した。チャオはラテン化文字を自習したことがあるが、啓明学校とは全く関係がなかった。民先入会後、入党するまでの間にウィラット・アンカターウォンや李華と知り合った。ウィラットはソン・ノッパクンと同じ新民学校の卒業生で、知り合った頃は、共産党のバンコク市委委員（カマカーン・ナコン）レベルであった。ウィラットが学生時代に使用した氏名は、姓さえも知らない。李華は民先を指導していた。しかし、劉漱石には会ったことはない。1939年に中華中学廃校後、チャオの自宅で継続したエスペラント学習会に、ダムリやウィットが出席し、その時に両者と知り合った。しかし当時両者とは民先の活動を共にしたわけではない。中華中学が廃止された後、工場の見習工（徒弟）になったが、この時は民先のメンバーの立場で、周辺の労働者の組織化を行い、相当大きな成果を上げた。また、当時は共産主義関係の中国語書籍を熱心に読んだ。これらの書籍は、輸入は禁止されていたが、バンコクの書店が税関の役人を買収して持ち込まれていた。持ち込まれた後は、中華街のテキサス映画館周辺の複数の書店で公然と売られていた。1941年4月4日に、ダムリ、ウィットの3名で共産党に入党した。入党式は党の代表が立ち会ったが、誰であったかは覚えていない。3人の入党紹介者はそれぞれ異なり、チャオの紹介者は朱南和であった。チャオは労働者階級に分類されたので、候補期間はなく直ちに党員となった。ダムリとウィットは、学生（ダムリは当時親戚の質屋で働いており実際は既に学校には通っていなかったが）の知識分子身分とされたので4カ月の候補期間が付された。チャオが1950年に中国に派遣されたのち、中国で李啓新から聞いたところでは、入党には一名の紹介人では不十分で二名の紹介人を要するので、李啓新が1941年8月に来タイ後書類上もう一人の紹介人の役を務めたという。それまでチャオは、自分に二人目の紹介人がいたことさえも知らなかった。1941年4月の入党と同時にチャオ、ダムリ、ウィットの3名から成る党細胞が作られ、チャオがその長に就任した。この3名はタイ語で話し、タイ名を使用していた。タイ共産党の創立大会は、1942年11月末に開かれたが、その前の入党なので、入党した党は暹羅共産党である。チャオの細胞は、数か月後には再編解消され、3名はそれぞれ別々の細胞に移動した。チャオは太平洋戦争勃発前に、工場を退職し党の専従活動家となった。党の規則では、専従者には月3バーツが支給されることになっていたが、一度も支給を受けたことはなかった。タイ共産党創立大会は、バンコク市内のワット・ドーン地区で開催された。この時、チャオは会議場となった家屋の外で警備を担当した。大会の代表として参加した者には、トン・チェームシーや逮捕後釈放されて間もないソン・ノッパクンがいた。ソンが代表の一人であったことは明確に記憶している（村嶋注、ダムリは村嶋にソンは釈放後間もないので参加しなかったと語った）。タイ共産党の中に、ヌアイ・タイ（タイ人組織）が生まれたのは1943年のコミンテルン解散後のことである。ダムリは村嶋に、創立大会前

織を拡大することだ」、「われわれの祖国は、ソ連だ」、「ソ連が勝利さえすれば、世界革命は必ず実現する」、と。これらの宣伝の結果でもあるだろうが、私は、帝国主義諸国に包囲さ

にヌアイ・タイができ、ヌアイ・タイ代表としてトン・チェームシーが創立大会に出席したと語ったというが、ヌアイ・タイができたのは1943年以後のことであるからダムリの記憶違いである。チャオは、レン・ポーラーンウォン（Leng Poranwong、陳廷芳、戦中のタイ・イサラ事件で逮捕された党員）とともに1950年、中国共産党が作る研究所にタイ語資料整理の手伝いのために派遣された。しかし、謝光らタイ語ができる僑党メンバーが中国に戻って来たので御用済みとなり、北京のマルクス・レーニン学院に移って3年間学習した。タイ共産党は、1963年に北ベトナムのホア・ビンに幹部の政治軍事訓練のために党学校を開いた。軍事訓練を指導したのは、ベトナム側である。その初代校長はウィラット・アンカターウォンで、チャオは1964年から1966年まで同校の二代目の校長を担当した。この校長時代に、ベトナム語を学んだ。同校の最盛期には、600人近い男女幹部が訓練を受けた。ここで訓練を受けた者が、タイ共産党の軍事組織の中堅となり、タイ政府軍と戦った。同校は1966年に閉校し、それ以後のタイ共産党は、これほど大規模な党学校をもったことはなく、小規模のものを複数作り訓練した。

チャオは、欧陽氏とは全く面識がない。チャオは、タイ共産党の最後の総書記トン・チェームシーの時代を除けば、常に党中央部に近い位置で仕事をしてきたので、党内の情報は正確に把握しているつもりである。欧陽氏は、党中央の近くにいたことはないので、彼が党について語っていることは、必ずしも正確とは言えないだろう。張慶川のニックネームは、「阿牛」（A Gu）である。張慶川の息子とチャオの妻の弟のむすめは結婚しているので、親戚関係にある。欧陽氏は村嶋に、張慶川は延安からタイの戻ったのち、武力闘争に賛成しなかったので李啓新から無視されて党活動から離れた、と語ったというが、チャオの見るところ、張慶川が党活動を離れたのは、考えの違いではなく、張の性格の所為である。戦後、延安からタイに戻った共産党員は、ウドム・シースワン、ウドムの妻（タイ生まれ）、それにプラパン・ウィラサック（朱叟林）の3名のみである。チャオがウドムから直接聞いたところでは、終戦時中共中央はタイに共産党組織がどの程度残っているのかを把握しておらず、それを調べることもこの3名をタイに帰した理由であるという。ウドムが、延安に入ったのは偶然で、彼は延安に入る前にバンコクで活動した経歴もなく、党員でも共青団員でもなかった。彼は延安で入党したのである。

村嶋は前掲論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930–1936）」で、暹羅共産党の書記長を初代はNgo Chinh Quoc、1932年9月の第二回党代表者大会でNgo Chinh Quocは退任し、海南人と思われる人物（丁）が就任、1934年の第三回党代表者大会でTran Van Chanが就任し、Le Manh Trinhは副書記長格であったこと、1935年末にTran Van Chanは書記長のポストを逐われ、これにLe Manh Trinhが取って代わったこと、そのLe Manh Trinhも1936年4月には逮捕されたことを示した。村嶋が示した上記書記長歴任者名は、チャオの“Luk Chin Rak Chat”の記述とは異なっている。そこでこの点について、チャオに質すと、チャオは次のように答えた。1982年にチャオは夫婦で汕頭に伍治之（1930年4月の暹羅共産党創立に参加し、宣伝担当委員に任じられた）を訪ねた。その時、伍治之から直接聞いた話では、暹羅共産党の初代書記長（総書記）は、Ngo Chinh Quocであり、彼が1933年に逮捕されて後、Le Manh Trinhが二代目書記長に就任した。更に、Le Manh Trinhが1936年4月に逮捕されて後は、劉漱石が三代目書記長に就任した。伍治之は1930年10月にバンコクで逮捕された後、この期間を通じて獄中にあったが、獄外の共産党とも連絡があったので、伍治之の言うことは信用できる、と。

別の場所でチャオは1939年以後、僑党活動家が減少した理由として、抗日戦争参加のために中国に派遣したことを挙げている（Chao Phongphichit, “Luk Chin Rak Chat（25）”, *Matichon Sut Sapda*, 6 March 2009, p. 43.）チャオが村嶋のインタビューで語ったことから、チャオは2007年に李啓新が死亡するまで、常時李啓新と電話連絡を取っていたことが判る。故に、李啓新が1941年8月に来タイしたことや、工委のメンバー構成等は、李啓新から直接聞いたものと思われる。なお、本書からも判るように欧陽氏は、李啓新をトップとする海南出身者グループ（謝光、楊白冰など）とは人脈が異なる。欧陽氏は、海南グループと対立的であり、同グループが編集の主導権を握った『泰国帰僑英魂録、第三巻』には全く執筆していない。チャオは“Luk Chin Rak Chat”において、欧陽氏の『泰国帰僑英魂録』中の記録を最も多く引用しているにも拘わらず、同時に、欧陽氏に対して厳しい批判を書いている。チャオは、欧陽氏と同じく広東人ではあるが、海南グループと親密であるため、彼らに影響されて欧陽氏に対して厳しい見解を抱くようになったのかも知れない。

れているソ連を守るべきだという義務感を強く意識するようになった。

私がタイで革命の道を歩み始めて間もない1930年代半ば頃は、レーニンやスターリンの名は絶大で、彼らのことを知れば知るほど、強い敬意を抱いた。一方、毛沢東をはじめとする中国共産党については、ほとんど何も知らなかった。朱徳や毛沢東は、当時は未だ強い印象を与えるほどの存在ではなかった。プロレタリア革命家には国境なしという言葉が深く私たちの脳裏を支配し、すべての希望をソ連に託していたのである。また、私たちは、暹羅共産党の行方、作戦、あるいはタイ社会のことに関して真剣に議論することもほとんどなかった。私の頭はスターリンに占領されていたと言っても過言ではない。上部に指示されて、私はメーデーの日に、「ソ連を守ろう、ソ連万歳！」と書いてあるビラを繁華街で撒いたことがある。

第五節　抗日救国聯合総会設立

抗日戦争勃発後、タイ社会に数多くの抗日団体が雨後の筍のように姿を現した。当時、脅迫文に押す印鑑一つさえ作れば、いとも簡単に抗日団体を立ち上げることができたので、救国会や抗聯と名乗る組織が見渡せばどこにでもあるくらい、タイ社会に乱立した。これらの団体は、横の繋がりもなければ、統一した綱領もなく、各自の見解に基づいて好き放題にやり、社会の混乱の一大要因となった。

蟻光炎は中国に帰国して、廖承志と会見した際、タイの華僑社会の憂慮すべき現状を訴えた。廖承志は即座にタイの共産党リーダーである李華に対し、一本化するように指示を出した。それで、抗聯は各団体の一本化に向けて、正式に動き出した。

抗聯が華僑社会の各団体を統括しようとした、もう一つの意図は、華僑団体をまとめることによって、国民党系の団体を孤立させることにあった。

李華の指揮の下、陳雪玉、庄国英と私の三人は、一本化工作グループを立ち上げ、各団体と接触して、説得に努めた。説得工作を重ねた末、やっと各団体から賛同を得ることができ、各団体の代表者が参加する抗日救国聯合総会（抗聯総会）を設立した。

抗聯総会の結成に当たって、共産党系の抗聯と国民党系の後援会の間で、かなりの軋轢が生じた。

1930年代のバンコクの国民党勢力は、蕭佛成［1864-1939］、李憲、呉碧岩［1883?-1962?］、陳文添［1890-1950］などの人物がそれぞれ率いる複数の派閥に分かれた。蕭佛成はもともと孫文の下で活動した中国国民党の老幹部の一人である。李憲は南京で特別訓練を受けた後、蒋介石の南京政府によってタイに派遣された人物で、蒋介石政権との関係は最も緊密であった。陳文添は励志社という組織を率いていた。呉碧岩は、タイを追われた後、重慶に入り、戦後タイに戻って来た。これらの個々の派閥の中に、またいくつかの分会や支部といった下部組織があった。これらの各勢力は、いずれも国民党の海外部と連絡を取りながら、活動を行っていた。

彼らは、何人かの大資産家を勧誘して入党させ、彼等から国民党に対する寄付金を獲得することを常套手段としていた。金には困らないこれらの大資産家たちは、声をかけられると、大抵寄付に応じた。というのは、それによって、彼らの中国大陸に残る親族たちも国民党政権から何等かの便宜を図ってもらえたからである。

我々の一本化工作グループは、各団体に合同の話を持ちかけたが、その中には国民党の抗敵救国後援会もあった。抗敵救国後援会は、呉碧岩、李憲、陳書謀、の三人を中心とした、国民党の一組織である。そのうち、陳書謀は民国日報記者という肩書きを持ってはいたが、記者としての勤務実態はなかった。陳は、三民主義青年団（三青団）のメンバーで、李憲のもとで働いていた。李憲は党務工作に精通した、有能な国民党幹部で、強かなやり手でもあった。彼は国民党系の抗敵救国後援会を拠点に、秘密裏に募金活動を行っていた。後援会自体は、さほどの権威はなかったが、地元の華僑商人たちは国民党との関係悪化を恐れて、やむを得ずこの後援会に協力する者が多かった。タイ政府は公然たる党務工作に対しては、国民党と雖も厳しい取り締まりを行うため、李憲は自らの活動と身分を公開していなかった。

陳書謀は積極的に我々の方に近づいてきて、民国日報の社長李憲を紹介すると声をかけてきた。李華は、陳書謀が国民党の人間であることを把握した上で、我々に李憲とのチャネルがない現実に鑑みて、陳書謀に斡旋させることを決めた。

陳の斡旋で、私と庄国英は李憲を訪ねた。李憲は開口一番、「こちらは党の代表機関だが、君たちは一介の民間団体に過ぎないから、各団体をまとめた上で、こちらの指示に従うべきだ」と高飛車に言い放った。

「では、貴方のご希望を聞かせてください」、と私は一応聞くことだけは聞いてみようと考えた。

「まず、各団体の責任者の経歴、メンバーの詳細なリストを作成して、こちらに提出してもらいたい」と李は答えた。「そして、これまでの半年間の活動状況を報告書にまとめて、提出しなさい」…さらに、「これからの半年間についての活動計画も出しなさい」とどんどん要求を膨らました。

このような事態は事前にある程度は予想したものの、話を聞いているうちに、反発心を抑え切れなくなかった。

李憲に会う前に、李華から「庄国英は強硬な姿勢で向こうの提案に反対すること。一方、欧陽は柔軟な対応をして、相互の関係を悪化させないようにすること」という役割分担の指示を受けていたので、我々は次のように応戦した。

庄国英は、「あなたが本物の国民党であるのかどうか、私には判断がつきませんね」と根本のところで相手の言い分を撥ね付けた。

庄は呉碧岩を指差しながら、「本物の国民党に見える方もおられるが」と言い、続いて李憲を指差して、「こちらにはまやかしの国民党のように見える方もおられる。老国民党員の

蕭佛成もいる。一体誰が本物なのか、さっぱり見当がつかない」

更に庄は挑んだ。「あまり聞きたくない話だとは思うが、我々はどんな党であれ関わりたいとは思っていない。我々と談判するつもりならば、党ではなく後援会を通して連絡を下さい」

李憲は、「よかろう」と表面上淡々とした口調で応じた後、「でも、君たちは、タイ政府のお尋ね者になっていることは、忘れていないだろうな」と脅かした。

私は努めて笑顔で、穏やかな口調で李憲に反撃した。

「李社長、今回我々は個人としてではなく、抗聯の代表として伺ったのです。これを知っているのは、李社長だけです。ですから、私たちに何か不測の事態が起きたら、我々の仲間たちが黙っているはずはありません。抗聯の鋤奸団はただの飾り物ではないことは、よくご存知でしょう。お宅には高齢のご両親とお子様がいらっしゃるようですし、そちらこそ、発言を慎むべきではないでしょうか」

抗聯の鋤奸団は、対日協力者に対する一連の暗殺によって、巷で怖い存在となっていたので、李憲にそれなりのインパクトを与えたはずである。

結局、何らの合意も得られず、不快のうちに終わった。二日後、陳書謀は再びやってきて、我々に「李憲はとんでもないやつだ。彼のことは、ほっておきましょう。私が、後援会を代表して参加します」と豪語した。

しかし、彼一人で後援会を代表する資格などあるはずはない。この点は、我々もよく承知した上で、できるだけ多くの人々に参加してもらいたいという考えにより、陳の個人参加を受け入れた。

余談だが、後に陳書謀は、コメの加工機械の商人で、日本に協力した疑いがある李東龍という人物に脅迫状を出し、50万バーツを強要したことがある。李東龍からの通報を受けたタイ警察は脅迫状に書いた通りに、翌日ぬけぬけとお金を受け取りに現れた陳書謀らを逮捕した[180]。陳らは7年の懲役を言い渡された。日本が敗戦した後、彼は逸早くタイ政府に釈放され、中国本土に戻ったが、話しによると、陳書謀[181]は、中国共産党によって反革命分子として処刑されたという。

抗日救国聯合会（抗聯）の名称を踏襲して、新しい組織名を抗日救国聯合総会（抗聯総会）と決めた。総会に参加した救国団体は、九団体であり、以下のような団体であった。

---

[180] 陳書謀は1939年12月29日に逮捕された。彼の逮捕取調については、『中原報』1940.1.4, 1.6, 1.17。

[181] 在タイ中国共産党総支部の機関誌『真話報』新30号（1947年2月16日）で素林（李啓新の筆名）が、陳書謀は財物を強奪して4年8カ月の懲役の判決を受けた、三民主義青年団員であると記している。

暹羅華僑各界抗日救国聯合会（工人、婦女、文化界、商界、学生の各抗日救国聯合会より成る）
暹羅各界華僑青年抗日救国聯合総会“青抗”（責任者：劉茂雲）
暹羅華僑熱血青年抗日救国会“熱血青年”（責任者：林壁川）
暹羅華僑教師抗日総会（教師救国会、華抗、陳文添）
婦女慈善救国会（責任者：陳雪玉）
鉄血青年抗日会（責任者：庄国英）
暹羅華僑中華民族解放先鋒隊（民先）
暹羅華僑抗敵救国後援会（国民党系）

抗聯は抗聯総会をコントロールするため、総会傘下の各団体に自分側の人を送り込んだが、青抗と熱血青年の二組織だけは独立性が強く送り込むことができなかった。

総会の成立に際し、我々は、「総会成立告僑胞書」という宣伝文を公表して、総会の成立を宣言した。

総会創立前後、乱立している鋤奸団を如何にして一本化するかも議論した。議論は各団体の鋤奸団を一つの鋤奸団にまとめるか、それとも現状維持のままとするかの二つに分かれた。結局、総会の下に鋤奸団委員会を設置して、具体的な任務を担当させることになった。

「総会成立告僑胞書」公表の意図は、抗聯総会の成立だけではなく、鋤奸団の一本化を広く世間に知ってもらうことにあった。今後別の鋤奸団が姿を現すことがあっても、我々に公認されていない、まやかしの鋤奸団であることを知ってもらいたかったからである。

我々が予想した通り、総会の設立は日本公使館と国民党反動派に大きな衝撃を与えたようだである。また、タイ政府も我々の不意打ちに相当困ったようである。かくして、抗聯総会の設立と鋤奸団の一本化によって、情勢は沈静化に向かい、それ以降、鋤奸団の名を騙って脅迫状を出したり、人を強迫したりするような仕業は徐々に聞かれなくなった。

総会に参加した組織の一部について、説明しておきたい。

まず、暹羅華僑中華民族解放先鋒隊（民先）である。1938年［6月16日[182]］に、蒋介石は三民主義青年団を打ち出し、国民党は青年の組織化を開始した。一方、中国共産党中央も、青年を取り込もうとして、各地に中華民族解放先鋒隊（民先）を設けた。タイでも黄耀寰が私に、暹羅華僑中華民族解放先鋒隊（民先）を組織するように指示した[183]。これは私が共産党員になった頃（1938年半ば）のことである。当時、共青団は既に消滅していた。タイの民先は共青団的性格を持つものであった。また、加入者を華僑出身者に限定して、タイ人には公開しなかった。民先を通して、華僑学生をまとめようとしたのである。

182 『中華民報』1938.6.17-6.18。
183 中国においては、「中華民族解放先鋒隊」は三民主義青年団に先行して活動を開始している。たとえば、1938年5月2日号の中華民報に「中華民族解放先鋒隊告青年僑胞書」が掲載されている。

私は民先の書記に任じられ、庄国英が組織担当、陳雪玉が宣伝担当で、許方彬が副書記であった。中国共産党から香港経由で伝達された、本国の民先章程をほとんどそのまま使って、タイの民先組織の章程を作成した。

私は書記とは言え、民先組織全体のメンバー数は知らなかった。安全への考慮から、メンバーリストの作成や大会の開催は、意図的に回避していた。私が知っている民先のメンバーも、庄国英と陳雪玉など極めて限られていた。私が民先の書記として活動したのは1938年の末からタイを離れるまでの半年足らずの間であった。

タイを離れる直前、一応黄耀寰から指示を受け、後任の莫莎［呉艾文[184]1921-1981、莫莎は筆名］に引き継ぎのため仕事の内容を説明した。内容はあまりにも簡単で、莫莎への説明は黄耀寰からの指示を仰げという一言だけで終わった。タイを離れた以降は、その後の民先の行方について、把握できなくなったが、後に北京で莫莎と再会した際、彼からその後の民先に大きな変化はなかったと聞いた。

青抗の前身は1933年頃、林壁川、劉茂雲ら一部の青年によって始められた青年学習社であった。青年学習社は工員や店員、それに経営者の息子など30数人で設立した。設立のきっかけの一つは、満州事変後ある愛国青年が有名薬局の経営者を暗殺したことである[185]。この薬局は日本から薬剤用のビンや薬品自体を輸入していた。この愛国行為に、劉茂雲らは大きな刺戟を受けた。青年学習社のメンバーとなった大きな茶行の息子が、15バーツの資金を提供したので、立地のよいサンペン地区に2階長屋（ショップハウス）の一区画を借りた。家賃は月額1.5バーツであった。ここに仕事が終わった後、大体21時以後集まり、読書をしたり、字を知っている人が他のメンバーに漢字を教える共同学習をしたり、或いは卓球をしたりした。当初は教養と自己修養が主な目的であった。青年学習社の日常運営経費はメンバーの会費と外部からの募金収入で賄った。組織内部に明確な肩書きや上下関係などは見られなかった。抗日戦争期に入ると、青年学習社の活動の中心は救国活動の実際行動にシ

---

184 呉艾文（1921-1981原名は呉厥中、筆名莫莎）祖籍潮州澄海県、1921年タイで職工の家庭に生まれる。新民学校の初等中学を卒業。1939年『中原報』に就職、太平洋戦争中に共産党中国語機関誌『真話報』の編集員の一人、戦後［1945年10月］に創刊された、共産党系の『全民報』で1952年末の停刊まで副総編輯など、1953年11月帰国。帰国後新華社華僑広播部、廖承志辦公室などに勤務。文革中は免職下放、1973年北京に戻り、1975年社会科学院に職を得る。1979年東南アジア訪問団の随員としてタイ訪問、1981年病死（『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 225-233）。彼の妻である林謙（スリヤー）は、林慕豪（李華の妻）の妹。莫莎は、帰国後は重要な職を与えられることはなかった。在タイ時には、莫莎の文章は、華字紙の副刊に多数掲載されている。村嶋の調査では、莫莎の文章の初見は、思潮学社編『熱風』第2期（『民国日報』1936.7.18の「曼谷日報」第2面）に掲載された「悼高爾基」。彼の文章は、1937-38年時の『希望者（ESPERANTO）』（中華民報の副刊面に掲載）にも、しばしば見える。地下『真話報』での莫莎の役割は大きい。彼は、1943年2月16日から出版された地下真話報（活字版）の編集部に加わった。それまでの編集部は李啓新、邱及の二人であった。莫莎はモスクワ放送を聞く係りで、更にウィラット・アンカターウォンが他の部門に移った後は、ウィラットが担当したラジオ放送傍受部分も引き受けた（Chao Phongphichit, "Luk Chin Rak Chat (26)", *Matichon Sut Sapda* ,13 March 2009, p. 41）。

185 これは満州事変以前の済南事件の際に洪奇英が暗殺された事件のことと思われる。

フトしていった。

青年学習社の初代主任を務めたのは林壁川だった。劉茂雲と同年代の彼が、日中戦争開始後、熱血青年という組織を別に作って別れた後、劉茂雲が引き継いで二代目の主任を務めた。林壁川は我々より先に中国に帰って、新四軍に入隊したが、数年の戦争生活を経験した後、軍服を返上して、タイに戻ることにした。タイに戻った林は結婚をして、小さなホテルを経営していたが、酒の飲み過ぎで、37-8歳で若死にした[186]。

第六節　記念映画会の失敗

抗聯総会の成立を祝うため、我々は芦溝橋戯院という映画館[187]［現在の建物の番地は、ヤワラート路No.193-195で、現在は泰軍人銀行ヤワラート支店となっている。Soi Bamrungratの入口近く］で盛大な映画上映会を企画した。この芦溝橋戯院は、「風雲児女」と「大路」という二つの抗日題材の映画を上映した、バンコクの人気映画館であった。しかし、事前の準備段階で、思いがけない失敗が起きて、そのため私を含めて多くの抗聯総会関係者は逃亡せざるを得ない厳しい状況に置かれた。

経験不足もあって上映会企画段階において、総会下の各団体間の連絡は十分ではなかった。そのような状況の中、各団体はそれぞれのルートで上映会の切符を発売した。その結果、市場に出回った切符の総数が、映画館本来の収容人数（500人程度）を大幅に越えてしまった。上映会当日、映画館周辺は黒山の人だかりとなって、交通渋滞がなかなか解消できないほどの混雑が生じた。当時のヤワラート路は幅4メートルほどしかなく、現在よりも遙かに狭かった。その上、路面電車も走っていた。この狭い通りに、現在大華酒店ホテルが建っている十字路の方向に長蛇の列ができたのである。

急変はそこから始まった。李憲の密告なのか、それとも交通渋滞が警察の目を引いたのかはよく判らないが、急に大勢の警察が出動して来て、映画館を包囲したのである。その情報に接すると、私は直ちに李華に相談した。

李華はまず「上映イベントは誰の名で行っているのか」と確認した。

186　以上の部分は、劉茂雲（貫籍、広東省潮陽県）との村嶋のインタビュー（2004年8月8日、バンコク）による。欧陽恵氏は、壁川が新四軍に入隊したかどうか疑問だとコメントした。前掲村嶋論文「タイ華僑の政治活動―5.30運動から日中戦争まで―」、pp. 333-334参照。

187　1938年当時の華字紙には「広東銀行対面、芦溝橋戯院」の広告が載っている。『暹羅華僑日報星期刊』の「今天本洛各戯院戯目索引」欄で見ると、芦溝橋戯院では、1938年12月以前は、中国から来タイした「月明歌劇団」などの歌舞団と映画が交互に上演されている。1938年12月から1939年1月末は、暫停と記され、それ以後は索引から芦溝橋戯院の名が消えている。総会は、既に閉館となっていた芦溝橋戯院を借りて1939年3月か4月に映画上映会を計画したものと考えられる。なお、1939年正月までは数年間、新暦の正月から旧正月にかけて、バンコクの興行業者が中国の汕頭から歌舞団や技術団（曲芸団？）を招きバンコクで興行していた。その数は同時に4-5団にも達してした（『中原報』1939.12.29）。しかし、潮汕が陥落し、汕頭―バンコク直行便も中断し、香港乗り換えになったため、歌舞団等の来タイも中断した。1939年9月下旬に、三井船舶は明石山丸で汕頭―曼谷直航便を運航した（『中原報』1939.9.25）が、本格的に直行便が回復するのは1940年1月半ばである（『中原報』1940.1.20）。

「庄国英と、劉茂雲の友人の二人です」と私は答えた。その友人とは、大きな店を持つ資本家の息子で、彼と庄国英は代表者として、映画館を借り切ったのである。

李華は、庄国英とその資産家の息子だけを警察に出頭させ、そのほかは全員退去せよ、と指示した。

私は、指示通りに総会関係者に緊急撤退を要請し、庄国英とその友人だけを残した。一般観客に対しては、事件が突発したので、退去するようにアナウンスを流した。その結果、警察は庄国英ら二人を連行して、映画上映は中止となった。［なお、この事件は当時の華字紙にもバンコクタイムズにも報道がない］

それから一週間後、李華は、今後は黄耀寰に指示を仰げと言い残して姿を消した。李華がどこに行ったのかは判らなかったが、我々がウィエンチャンに着いた時、そこに李華がいた。

私たちは、警察内部の人間に頼んで賄賂を渡して、さらに「ただ金儲けのために、イベントを企画しただけで、別に抗日宣伝の意図はありません」と言い訳して、二人の保釈に成功した。劉茂雲の友人は親が資本家だから、お金のことは全く困っていなかった。上映会前に募金活動で集めたお金は、逮捕された庄国英や一般観客など20人あまりを救出するため使われ、警官の私腹を肥やすだけで終わった。

釈放の際、警察の担当者は「まだ終わりではない。自宅謹慎して、週に一回警察局に出頭しなさい。もし、起訴されたら、直ちに警察側に出頭しなさい」と釘を刺した。それから数日後、三日に一回に警察局に来なさいという命令に変更された。これをきっかけに、事態は一気に緊迫した。

庄国英らがすぐ釈放されたことは、何か裏がありそうで、却って不安が増した。警察は、庄国英は下っ端であると考え、彼を釈放して本当の共産党幹部たちを見つける糸口に使おうとしているのではないか、と。私は尾行されているかもしれないので、庄国英を訪ねないように注意した。黄耀寰（共産党バンコク市委員会書記）ら指導部は、高級幹部を守る必要から、警察に狙われている可能性が高い、私を含む中層幹部をタイから脱出させることを検討し始めた。

私が、このチャンスを絶対に見逃すはずはなかった。その時まで、私は一貫して延安行きを希望してきた。しかし、私は多くの職務を兼任していたので、「タイからいなくなれば、残された仕事をやる人がいなくて困る」と言われて、黄耀寰らの指導者からなかなか許可を得られず、延安行きは先伸ばしになっていた。

希望はいつも却下されたが、延安に行きたい気持ちは募る一方だった。実際に新華日報など共産党の出版物に掲載された延安の学生募集広告をメモして、密かに延安行きを計画したこともあった。

李華の最初の妻、黄覚生は私の気持ちをよく分かってくれた。彼女は時分が延安に向かってタイを離れる前に、自分の経験を踏まえて、私に次のように助言してくれたことがある。「あなたはばかじゃない。延安行きの希望理由は、向こうでしっかりと勉強して、知識や能

力を身につけてタイに戻り、タイの革命に貢献するためだとすれば、いいじゃないの」

そのような背景もあったので、私は黄耀寰のところに行って、私を含めて総会関係者を延安に派遣することを次のように提案した。「警察に狙われている以上、私が引き続きタイに居残ることは危険すぎます。万が一、警察に捕えられたら、ほかの同志たちに危険を及ぼす恐れもあります。ですから、今、私を延安に行かせるのが一番よい方法ではないでしょうか。向こうでの勉強が終わり次第、直ちにタイに戻ることをお約束します」、と。

黄耀寰はにこにこしながら、「では、劉漱石さんに聞いてみて」と言った。私は劉漱石が主宰した我們読書社に参加するなど、劉をよく知っていたが、それまで党員の立場で劉に接したことはなかった。後から判ったことだが、、劉漱石は暹羅共産党書記長の任にあったので、共産党バンコク市委書記であった黄耀寰は上司の劉漱石に尋ねるように言ったのである。黄耀寰がバンコク市委書記であったことも、中国で李華に聞いて初めて知ったことである。

私は1936年より、読書社の活動をきっかけに、劉漱石を知った。私は読書社の出版担当にされたので、劉漱石、呉琳曼、許侠など執筆者のところを、原稿受取りのためにしばしば訪ねた。劉漱石は優しい人間で、いつもお茶や果物などを出して暖かくもてなしてくれた。劉は原稿の執筆量が多く、かつ最終版のチェックもするので、私は劉の職場に頻繁に通った。劉は読書社内部で、きわめて高い権威があり、幅広く裁量することを任されていた。例えば、魯迅先生の記念会の追悼文を、複数の候補のなかから選んだのは、劉漱石自身であった。また、長い間入党の希望が果たせなかった邱心嬰の「なぜ入党が認められないのか」という問いに対し、呉琳曼はいつも劉に聞いて見なさいと対応していた。

劉漱石は私の希望を聞いてから、「前向きに検討してみる」と答えた。

私は自分の考えを強調した。「この機会に、なるべく多くの中堅幹部を延安に行かせ、鍛えさせるべきです。きっとタイの革命事業の重要な戦力になりますよ。」

劉漱石は、「では、庄国英も行かせてやろう」と賛同した。

「陳雪玉さん、そして劉茂雲さんも入れて下さい」と私は追加した。

劉茂雲は、共産党員ではないが、今回の活動に参加したことで、警察に狙われてしまったし、今までの積極的な態度も評価できるので、延安に連れて行ってもよいこととなった。劉漱石は、我々全員の延安行きを許可したのである。

タイを脱出することになった11名は、全員総会活動に参加した中堅幹部であった。抗日救国聯合総会は、1939年4月頃に成立した時点から、我々がタイを離れるまで、実質一カ月間しか存在しなかった。我々の離タイによって、総会の活動は停止した。その原因は、何といっても映画上映会の失敗にある。映画上映会の失敗で、多くの仲間は警察の追跡を逃れるため身を隠し、活動を中止せざるを得なくなった。総会が存在した一カ月間の唯一の活動と言えば、流産に終わった映画上映会だけである。今から振り返ると、中堅幹部である私たちの現状認識は、幼稚で甘かったと言うしかない。つい急進的なやり方に進んでしまったのである。一時の勝利に陶酔して、身のほどを忘れたということであろう。

第七章　延安へ（1939年半ば–41年）

第一節　タイを脱出

1939年5月16日、我々一行は緊迫した情勢のなか、バンコクを出発した。バンコクを出た時のメンバーは全部で11名、内訳は、欧陽恵グループが、私、張秋雲（婦抗で活動した人、後に劉茂雲と結婚した）、蔡秀春（女）、蔡秋影（女）、余軍英、庄国英、鄭辛、蘇蘭（女）の8人、劉茂雲グループが、劉茂雲、林淑華（女）と郭培華（女）の三人であった。私のグループはファラムポーン国鉄中央駅から乗車し、劉茂雲グループは、サームセーン駅から乗り込んだ。私をリーダーとする11人のメンバーは出発の時点では、意気揚々と全員で延安を目指していたが、最終的に延安に辿りつけたのは私、蘇蘭、庄国英の僅か三人だけだった。

一行の内、共産党員は私一人で、共青団員も余軍英一人だけであった。余は数年前にタイで亡くなった。庄国英はまだ党員ではなく、民族解放先鋒隊（民先）の隊員だった。私の恋人の蘇蘭は延安に着くまで党組織に所属していない一般人であった。彼女はタイを出る前は、主として抗聯の婦人救国会で活動していた。劉漱石は、私が党員であることは、電報で香港に知らせた、香港から延安に通知されるので問題はない、と語った。その他に劉漱石は、小紙片に書いた証明書をくれた。

以上の11名の外にウィエンチャンで、羅大年と林修華が加わった。羅大年はベトナム華僑で、ウィエンチャンの華僑公所で紹介された。林修華は一人で昆明に行こうとしていたが、途中で知り合いになり同行することになった。

延安の共産党に憧れを抱いていた羅大年は、昆明に着いた後、重慶への交通ルートを確保できず、途方に暮れ、結局国民党側に加わった。国民党軍人として羅大年は、その数年後黄河流域の国共内戦で共産党に捕えられて、首吊りにされて殺された、という。羅大年の話は、劉茂雲がほかの友人から聞いたことである。

一行全員はとても若かった。私は18歳（戸籍上の年齢）で、劉茂雲は21歳、少し老けたように見える翁向東（案内役）でも、せいぜい25歳位であっただろう。

従来、東南アジアの共産党関係者は海路香港に渡り、香港で八路軍駐香港辦事処の支援を得て、武漢を経て延安に入っていた。我々も同じコースを取ることができれば、比較的短時間に延安に到着できたはずである。しかし、我々は、いくつかの原因によってラオスとベトナム経由で陸路昆明に入り、更に中国の内陸部を延安に向かうという困難な新ルートを取らざるを得なかったのである。

1938年10月に広州、続いて武漢が陥落すると、香港の情勢は刻々厳しさを増した。一方、バンコクでは、数多くの共産党員が逮捕され、空気は一気に緊迫した。時は待ってはく

れない。香港への定期便を利用するなら、なお数日間待つ必要があった。しかも、このルートは敵に察知され易い。それで、我々は汽車を利用して、タイ脱出を図った。我々を捕えようとしていたのは、タイの警察だけではなかった。一部のメンバーの家族も、自分の子供を中国へ行かせたくなかった。たとえば、張秋雲の父親はバンコク駅や港に懸賞金つきの家出人探しのポスターを張り出して情報の提供を求めた。蘇蘭の父親も急いで田舎からバンコクにやってきて、娘の出国を止めようとした。

出発前の数日間、我々は船で香港にいくかのような偽装工作を行った。仲間に港で友人を見送るふりをさせる撹乱工作をしたのである。用意周到とはいえないが、一応の事前準備をして、1939年5月16日、我々は緊張の中、バンコク脱出に踏み切った。ここで一つの思い出がある。

蘇蘭の父親は開明的な考え方を持った個人経営者であった。共産党員である呉琳曼などの学校教員との個人的な関係もよかったし、学校関係の募金活動には常に協力的だった。そうではあっても、娘の帰国には反対した。彼はバンコクに二カ月位滞在して、娘の行方を捜していたが、結局我々がすでにバンコクを離れたことを知って、中部タイの地方都市ナコンサワンに帰った。

バンコクを出て二ヵ月後、ウィエンチャンに待機中の私は、暹羅共産党の本部を同地に移していた李華から指令を受けて、再びバンコクに密かに潜入した。この時、バンコク駅頭で田舎へ帰ろうとしている蘇蘭の父親に偶然出会った。彼は私と蘇蘭が婚約をしたことを知って、なぜ結婚しないのかとたずねた。私は外敵との戦いで国が危機に頻している中、とても結婚できる状況ではないと説明した。

「君たちは結婚するために、急いで国へ帰ろうとしたのではないのか」

彼は意外なようだった。

「いや、帰国は抗日救国のためです。」それを聞いて、彼はやや安心したようで、「何か困ることがあったら、遠慮しないで」と言って、500バーツとともに、蘇蘭へのメッセージを紙に書いて、渡してくれた。「蘭児、生命可以不要、名誉不可不保。一路順風、祝你勝利帰来」(我が娘蘭よ、命は捨ててもいいが、名誉は大事にしなければならない。道中順調に、凱旋を祈る)というメッセージだった。「生命可以不要、名誉不可不保」という文言は、彼女の父親が、我々二人の関係を認めたうえで、人から後ろ指を差されることなく、きちんとした形で結ばれるようにと、親心から念を押したものであろう。

二年後延安で私は蘇蘭と別れることになったので、彼を「お父さん」と呼ぶことは、遂にできなかったが、惜別の言葉は今でも私の脳裏に深く焼き付けられている。

バンコクからウドンまでは鉄道で行き、そこからノーンカーイまでは牛車、ノーンカーイで渡船に乗って、メコン河をウィエンチャン側に渡った[188]。[1939年2月11日にウドンまで

---

[188] 『華僑日報』1939.5.8, 5.9, 5.30に、丹心が寄稿した「由曼谷到昆明」の旅行記が掲載されている。丹心は祖国の抗戦時にタイで何もせず過ごしていることを悔やんで回国服務を決心した救亡活動

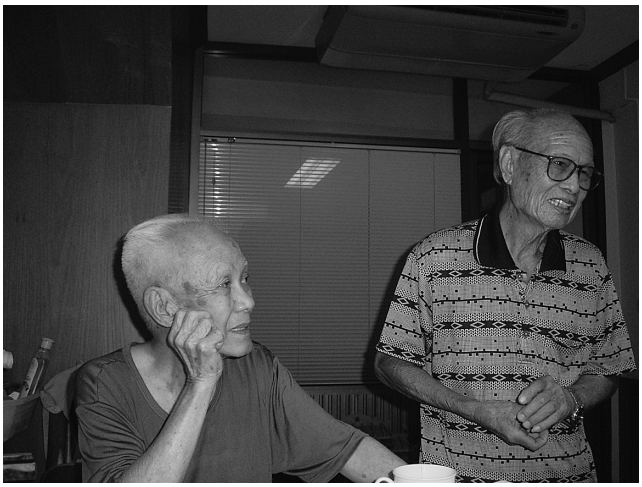


写真 12　欧陽恵氏と劉茂雲氏

鉄道が開通した。］

タイの国境までは順調だったが、ひとたびタイを離れると、多くの予想外の苦労を強いられた。結局延安までの旅は一年以上かかってしまい、その間に仲間たちの多くは、それぞれの理由で脱落してしまった。

旅費は、華僑の実力者、友人、親戚などからの援助で賄った。私の場合は、抗聯の会計担当の林慕豪から300バーツをもらった。当時、蟻光炎は帰国服務するすべての華僑青年に対して、自社の船便切符を一枚提供していた。我々は船便を利用しなかったので、その代わりに300バーツを帰国旅費として提供されたのである。このほか、莫莎、陸叔などの友人から餞別として3、4バーツ～10バーツほどを貰った。更に餞別として、蟻光炎が直接100バーツをくれた。劉茂雲は当時の中華総商会主席馮爾和[189]から500バーツと友人たちから少額の

家（タイでも活動しその仲間がコーラートなどに居た）。丹心は昆明へのルートを地図や、かつて華僑日報に掲載された高漢（ウドム・シースワン？）寄稿の「到雲南去」を参考にして決めた。1939年3月16日朝バンコクを汽車で出発、同日夜コーラートに到着し、翌日同地の救亡活動家仲間に会う。3月18日コーラート発、夜ウボン着。19日ウボンの町を歩くが通り二つほどの小さな町。3月20日自動車でパークセー（百細）へ、数日同地に滞在後、3月25日自動車でパークセー発、途中Stingを経てサイゴン着。3月28日サイゴンを鉄道で出発、30日午後ハノイ着。4月1日滇越鉄道で昆明に向かう。昆明まで3日を要した。4月2日午前2時半老街着、中国側の河口にて入国手続き（パスポート、学生証で証明）2日朝8時半再び鉄道で同夜は開遠で宿泊、4月3日午後5時、昆明着。コーラート、ウボン、パークセー、サイゴン、ハノイ、老街、河口、昆明ルートで途中見学したり友人に会ったりしながらでも、19日間で昆明に到着している。欧陽恵らはこのルートによらず、どうしてノーンカーイ、ウィエンチャン、ハノイのルートを採ったのだろうか。

189　劉茂雲は、中華総商会から資金援助を得ることができた理由を、次のように説明した。当時の中華総商会には回国服務する華僑青年に対し、旅費を支援するという規則があったが、総ての組織に与えるわけではなかった。劉茂雲の組織は、全華僑青年の組織というイメージが強く、中華民国政府の外郭団体である中華総商会から援助を得やすかった。一方、欧陽たちのものは地下組織的性格で、中華民国政府とはまったく無関係であったので援助の対象にはならなかった。

餞別を贈られた。劉茂雲が得た資金は、彼のグループの3名で使用した。当時の500バーツは大金で、使い切るまでには、かなり時間がかかったようである。

第二節　ウィエンチャン滞在

我々に同行してガイドを務めたのは翁向東という暹羅共産党員であった。彼はベトナムまで案内してくれた。翁向東はタイからラオスまでの地理に非常に詳しいので、タイからラオスそしてハノイまでの連絡員を担当する傍ら、通常は、李華のラオスにおける抗日基地建設に協力していた。

5月20日頃にウィエンチャン入りし、党の事務所に宿泊することになった。私たちは、パスポートを所持していなかったため、それ以上は進むことができず、ウィエンチャンでほぼ三カ月近く待機することを余儀なくされた。その頃のラオスでは、ベトナムからやってきた華僑の小規模な活動がいくらか見られるようになっていた。フランスの統治下にあったラオスでは、フランス当局は、自らの統治基盤を揺るがす、民衆の反仏活動は当然禁圧していたが、華僑の抗日活動に対しては、見てみぬふりをしており取締は緩かった。日仏間の利益は対立していたので、フランス当局のそのような態度は、極めて当然のことであろう。

私たちがウィエンチャンに到着した時には、バンコクでの取締を避けて、ウィエンチャンに新たな活動の拠点を作るために来ていた李華の外に、巫客峯［1913-1987］[190]、李光（客家、戦後、林学と称す）などの共産党員が滞在していた。コーンケーンで活動していた巫客峯は、タイ警察の逮捕を逃れて、李華より前にウィエンチャンに避難していた。李光は、当時の我々より少しばかり年長で25～26歳くらいであった。

李華は現地の状況を検討した結果、ラオス華僑の協力を得ることができ、同時にフランス当局の政策をうまく利用できれば、抗日工作を展開することは可能であると判断した。彼は巫客峯、李光などの客家出身の人物をはじめ、多くの共産党幹部と力を合わせてラオスで基盤を整え、将来の日本の侵略に備え、かつタイ政府に対抗できるための拠点作りを開始した。李華の統括の下で、寮都公学の設立に着手した。

私たちはラオスに入るやいなや、すぐに宣伝関係の仕事を割り当てられた。具体的には、『民先三日刊』という三日に一回発行するガリ版の中国語新聞の編集、民衆に対する抗日歌の指導、演劇形態での抗日宣伝、あるいは募金活動などであった。

私と庄国英が『民先三日刊』の編集を担当した。庄国英は一台しかないラジオを使って

190　巫客峯（巫峯）はタイ国ペッブリー県生。1932年バンコクの新民学校の美術音楽教員、1934年上海美専で絵画を学ぶ。1936年上海で共産党入党。1938年2月帰タイ、同年6月東北タイ抗聯の責任者。1939年東北タイ抗聯の本部は、コーンケーンからウィエンチャンに移動。1940年末タイ仏印紛争時には劉漱石、林鳴、黄耀寰とともに地方に避難。ウィエンチャンに寮都公学を創設し、黄耀寰校長の後任校長。1943年ターケークに寮東公学開く。ここには、タイ側の華僑も子弟を送ってきた。1946年バンコクで南洋中学創立に当る。1949年仲間と共に雲南の解放のため参加。雲南で死亡（『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 316-323）。1934年6月末時点では、巫客峯は新民学校暹文組初小3年下の担任教師である（『民国日報』1934.6.29）。

ニュースを受信し、BBCや国民党系の中央社や延安方面からの情報収集に精を出した。私はその情報をもとに新聞を編集した。新聞は主として戦況報道を扱い、時には日本軍の戦闘機や、中国側の戦闘機の型式など、軍事知識も掲載した。なお、八路軍関連の報道には触れないように注意した。この新聞は、市販はされず、ウィエンチャンの華僑総商会に無料で提供された。市販しなかったのは、安全への配慮からである。華僑総商会の関係者は、私たちがパスポートを所持していないこと、およびフランス植民地当局は共産党の活動を歓迎していないこと、を考慮して、私たちが表に出て活動するのは危険であると判断した。それ故、新聞に関する外部との連絡は、彼らが一手に引き受けた。華僑総商会会長が、毎日、新聞の草稿をフランス当局に提出して、出版許可を取ったのちに、印刷に付した。

なお、当時ラオスでは、タイ人はパスポートなしでも一日は滞在可能だったので、道で警察に職務質問されても、タイから来たばかりだと答えれば済んだ。

ウィエンチャンに滞在中、劉茂雲は主として演劇関係の文芸宣伝活動に従事した。彼は歌のうまい人を組織して、民衆の中で上演し募金を集めた。華僑からの寄付が主であったが、なかにはラーオ人からの寄付もあった。募金の目的は、活動の拠点としてウィエンチャンに寮都公学を設立するためであった。

ウィエンチャン滞在の間、食事やお金に困ったことは一度もなかった。毎食を、李華らと共にしたが、料理は、バンコク時代とは雲泥の豪華なもので、味もよかった。党事務所が雇っていたコックの腕前の御陰である。一回の食事に七、八品もがテーブルに載せられることもあった。私たちは、数多くの同胞が苦難を強いられている、抗日戦争の真っ只中で、豪勢な料理を享受するのは申し訳ない、という思いから、何度もコックに料理の品数を減らすように頼んだ。しかし、彼は「君たちは抗日という重要な任務を託されているのだから、食事くらいはきちんと取ってください」、と我々の申し出に耳を貸さなかった。食事のほか、映画館にも通った。この費用も李華が払ってくれた。バンコク時代には、想像もできなかったような生活を、ウィエンチャンでは享受したのである。

その資金源については、ウィエンチャンに滞在した当時、私は考えたことはなかった。余裕のある生活ができるのは、現地の華僑の援助によるものだと、理解していた。1995年にタイで劉茂雲と再会した際、私が劉に「あの時は、本当にいい生活だったね」という感想を漏らしたところ、劉は意味深長な笑いを浮かべながら、次のように答えた。「寄付金を横領したのは、国民党だけではないだろう」、と。彼が言わんとしたことは、国民党幹部は華僑が集めた抗日活動寄付金の一部を中国に送らず、着服しているとよく言われていたが、そのような行為に走ったのは国民党だけではなく、共産党にもあり得たということである。劉が共産党の名を明示しなかったのは、恐らく私の気持ちに配慮したためであろう。

私が知っている限り、この時期、華僑から集めた抗日寄付金は、一旦李華のところに集約された後、香港の廖承志に送金されていた。資金を受け取った廖承志は送金元の李華に領収書を発行して、寄付金が共産党本部に届いたことを証明した。ただし、今振り返って見れ

ば、李華は寄付金全額をそのまま香港に送金したのではなく一部は手許に残して、廖承志からは全額の領収書を出してもらっていた可能性も考えられる。それで浮かした資金を、現地組織の活動費に充てていたのかも知れない[191]。

第三節　再びバンコクに潜入

ウィエンチャンで約二カ月の滞在生活を送った頃のある日、李華から、白地の封筒数通のほか、服が数着入った小さな革製の鞄を渡され、この大事な書類が入った鞄をもってバンコクにもどり、指示された人に手渡すように命じられた。「いかなる場合でも、封筒は絶対になくさないように。バンコクに着いたら、どこにも立ち寄らず、真っ直ぐにワット・コ（越閣、中華街のサンパンタウォン寺地区）へ行き、許子奇［1907-1980］[192]に会ってこの鞄を渡すこと。許子奇は、ワット・コの有名な鶏飯屋の隣にある、自転車修理屋が入っている建物の三階にいる。それ以降の行動については、許子奇の指示に従うこと。もし許子奇と会えなかった場合には、慕豪にコンタクトを取れ」という詳しい指示を与えられた。

私は早速バンコクに潜入した。どうにか許子奇と会うことができて、例の鞄を渡した。許からは、劉漱石と黄耀寰が［1939年8月11日に[193]］逮捕されたことを伝えられた。その時、

191　このあり得る話を、村嶋がチャオ・ポンピチットにしたところ、かつて李華の連絡員をしたことがあり、北京の李華の自宅を訪ねたことがあるという彼は、李華は何十年も同じボロ椅子を使い続けるなど極めて質素な生活をしており、活動資金で贅沢をすることなどは絶対にありえないと憤然とした。注271も参照のこと。

192　潮州澄海県生、1925年上海恵霊英文専修学校在学中、故郷で5.30運動の宣伝。1926年故郷で教職、詹天錫校長の影響で農会の活動に参加、1927年入党。蒋介石反共クーデター後、1928年タイに、叔父の店で働く。1929-30年ウィエンチャンの養正学校の校長。1931年汕頭に戻るも依然として指名手配中で郷里に帰ることができず、ハノイで家庭教師をしながら嶺東小学を開く。1934年北京に出て中国大学哲教系に学ぶ。1935年華北学院政経系に転校、この夏潮州語ラテン化新文字を考案し、印刷して汕頭に送る。12月9日運動に参加するも病のため帰郷、1936年潮州潮陽の六都中学教員、潮州語ラテン化新文字運動を展開。この運動で黄声と知合い、黄声の紹介で1937年春バンコクの新民学校初中部教員に。日中戦争勃発後、抗聯の指導者の一人、潮州会館秘書、1940年『中原報』に毛沢東の著作を掲載。1941年末日本軍のタイ進攻後、ラオスのターケークに逃げる。1943年ハイフォンで商売、同地は東南アジアと雲南との間の党員移動の交通点として重要であり、党員の移動を援助。稼いだ資金を用いて太平洋戦争終結後に、安達公司を香港に開き董事長に。バンコクとハイフォンに支店を置いた。党の決定により南洋商業銀行の創立に関わり、同行経理、1964年中国銀行総管理処営業部副処長、その後中国人民銀行総行参事室参事、1973年北京で邱及らと汕頭大学の創立を計画、国内では許子奇、国外では庄世平が準備責任者となる。1980年死亡（『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 219-214）。

193　黄耀寰は、自分と劉漱石の被逮捕を次のように回想している。すなわち、「八・一三上海抗戦」記念ビラを、新中華学校（1938年2月12日の共産党手入れで啓明学校が廃校になった後、同一校舎・同一教員で新中華と改名して再建した学校）の炊事係が1939年8月11日夜に二人組で撒布したところ、警察に見つかり、そのうちの一人が新中華学校という持ち主が明記された自転車とともに逮捕された。逮捕を逃れたもう一人が学校に戻って報告したので、黄耀寰らは直ちに証拠となりそうな物を焼却した。間もなく警察隊に包囲され、黄耀寰ら3名が逮捕された。同じ晩に培民学校校長の劉漱石も逮捕された。警察は、起訴できるだけの十分な証拠を集めることができなかったので、10月14日に黄耀寰、劉漱石を国外追放処分にした（前掲『永恒的懐念：暹羅啓明学校紀念文集　1935-1938』、pp. 24-25）。両名の名及び校名は明記されていないが、ビラ配布が発端となって複数の華校教師が逮捕されたことは、*Bangkok Times* 1939.8.14に報道されている。

私は暹羅共産党が受けたダメージの深刻さを痛感した。許子奇は誰にも会わないようにと注意し、泊まるところは慕豪から世話してもらうように、と指示した。

私は、許のところを出て、慕豪の家を訪ねた。私は、慕豪の家に一泊し、翌朝、慕豪が李華宛てに準備した箱をもって、再びウィエンチャンに向かった。

林慕豪［1911–1989］は、春合興[194]という屋号の愛国大商人（林耀春）のむすめで、1930年に上海美専に留学し、音楽を学びピアノが上手かった。彼女はバンコクに戻って、陳桂華が指導する婦人運動の読書社、螺旋読書社［1936年12月–1937年5月］で活動した。新民学校の音楽教師でバイオリンが上手な巫客峯と結婚した。前述のように巫客峯は共産党員で、タイ警察に追われてウィエンチャンに避難した。

慕豪は、李華の最初の妻である黄覚生（1913–1969、黄覚生は延安名、本名は黄碧玉）とも、親しかった。黄覚生は延安に行く前［1938年初め］に、生まれて間もない男の子の世話を慕豪に頼んだ。その後、李華はタイ警察の裏をかくため、金持ちの慕豪宅に住みこんだ。当時、その店はバンコクの中華街であるヤワラートの「老市場」（タラート・ガオ）にあった。警察も、まさか金持ちの家に共産党幹部が潜んでいようとは思いつくまいと考えたのである。李華は、慕豪と夫婦を偽装して、共同生活を始めた。そしていつの間にか、二人は本物の夫婦となった。

慕豪は抗日戦争勃発後、抗聯の会計係として抗聯の経費出納を担当した。抗聯が経費の捻出に困った時、彼女が自分の家族のお金で賄うことも少なくなかった。

日本軍がタイに進攻後、［1943年に］林慕豪は日本の憲兵隊に逮捕され、抗日運動のリーダー名と居場所を吐くように強制されたが、同志の名を一人も吐かなかった[195]と聞いている。頑として革命部隊の秘密を守りぬいた彼女は、出獄後、周りの同志たちから厚い信頼を得た。彼女は何度も入党の希望を出したが、党の外の人間として活動した方が党の利益になるという理由で入党を許可されなかった。タイ共産党と僑党が分かれた後は、彼女は夫の李華とともに中国に帰国した。体が弱かったため、中国では何の活動もすることなく、家庭の主婦として人生を送った。林慕豪の妹である林謙（スリヤー）は呉艾文（筆名莫莎）の妻で、北京に住んでいる。

私は早い時期から、李華と慕豪の関係の変化に気付いていた。その数年後、黄覚生が住む延安に着いた時には、李華の最初の妻である彼女に対し、李華と慕豪の関係をいかに説明すればよいだろうかと相当に悩んだ。

1950年代に李華は中国大陸に戻り、外交部のアジア局長を務めたことがある。ある時期、彼に元気がないので、私は慕豪に事情を聞いてみた。「外交部から批判を受けているから、

---

194 春合興は中華街のソンワート通から河岸までの間の広い敷地を有し、米、植物油などを扱っていた。林耀春は民生燐寸会社の社長でもあった（村嶋のチャオ・ポンピチットとのインタビュー、2012年5月6日、バンコク）。

195 『泰国帰僑英魂録、第三巻』p. 288。Damri Ruangsutham『第二次大戦期に日本軍に抵抗したタイの労働運動』（タイ語）、Sukhaphapchai, Bangkok, 2001, pp. 133–135にも同一の記述がある。

最近機嫌がわるいの。タイの華僑工作で生じた間違いを、全部彼一人のせいにされているから…」という答えであった。その頃、李華からタイ共産党史の編纂に誘われたことがあるが、私は中ソ友好報の仕事が忙しかったので応じられなかった。

ウィエンチャンに3カ月間滞在した後、私たち一行は中国大陸を目指して出発した。まず、ラオスのターケークまで船でメコン河を南下した。ターケークからサワナケートに向かい、そこから仏印を横断して海岸に出た。ここで、案内人として同行した翁向東と別れた。我々は再び船で海路ハノイに向かった。ハノイに到着したのはウィエンチャンを出て1週間後であった。

ハノイに着くと、翁向東が紹介した呉田夫[196]を訪ねた。彼は翁向東の書いた紹介状に目を通すと、「よくいらっしゃいました。宿泊先はすでに準備できています」と暖かく迎えてくれた。田夫はハノイ華僑の救国会メンバーで、未だ党員ではなかった。田夫の父親はハノイで車関係の商売をしており、裕福であった。彼はハノイで我々のパスポート切替え関連手続きをやってくれた。ハノイに四日間滞在した後、列車で昆明に移動した。ハノイの滞在時間は短かったので、ベトナム人と接するチャンスはなかった。

鉄道で、ベトナム側国境のラオカイから、中国側国境の河口鎮に入った時は、1939年9月18日であった。9月18日は1931年の柳条湖事件の記念日である。感動した我々は「九・一八、九・一八、従那個悲惨的時候……」と『松花江上』を歌った。町の中で、先ず目に入ったものは、「莫談国事」(国事を談ずるなかれ）という4文字ポスターである。国が亡ぼうとしている此の期に及んで、国事を談ずるな、はないだろうに。私は強い反発を覚えた[197]。

第四節　昆明での党との連絡

いよいよ昆明に着いた。最初の数日は党との連絡が取れなくて、立ち往生した。もし香港に行くことができていたら、廖承志を通して党と簡単に連絡が取れたのに、と悔やんで見てもどうにもならない。とりあえずどこかの旅館に泊まることにした。

翌日、昆明の書店をのぞくことにした。進歩的な書籍を取り扱う書店では、なんらかの方法で党と連絡が取れるはずだと考えたからであった。そこで、生活書店という魯迅の作品や抗日題材の書籍を取り扱う本屋に目に付け、私は毎日、店に通い、ひたすら本を読むことにした。いつの間にか、鄭と名乗る店員との間に会話を交えるようになった。私は、進路に困っている、帰国したばかりの華僑青年であるかのように自己紹介した。鄭は、『スターリン伝』や『ソ聯共党史』のような共産党関係の書籍を勧めてくれた。私は本の内容から、彼は間違いなく共産党の人間だと感じた。

196　その後中共対外連絡部総務処処長

197　冷燕虎・欧陽恵著『赤子熱血―環球華僑抗日』(中国抗日戦争紀実叢書)、解放軍文芸出版社、北京、1995年7月刊、pp. 56–57。同書pp. 51–66に欧陽恵はバンコクを出てから延安に至る自分の経験を書いている。大筋では事実に即していると考えられるが、話しを劇的にするために潤色した部分も見られる。

お互いに親しくなるにつれて、私は思い切って、自分は重慶に行って勉強したいので、重慶行きバスの切符を手配できる友人を紹介してもらえないだろうか、と鄭に打ち明けた。鄭は、やってみようと答えた。

その後、鄭と再び会った時、彼は、黄栄灿という人からのプレゼントだから、上映会で本人に直接にお礼を言うようにと言って、西南聯合大学で開催される映画上映会の切符を二枚くれた。上映会で黄栄灿と会い、さらに彼の紹介で、雷石兪という当時有名だった詩人と知り合いになった。雷は私に在タイ華僑事情を尋ねて、「ぜひ我々の同志たちに、報告をお願いしたい」と強く求めた。私は喜んで承諾した。

報告会後、雷は彼の同士たちと歓迎会を開いてくれて、「実は、我々は民先です。あなたの祖国復帰を歓迎します」と熱く語った。この挨拶を聞いて、私はやっと同志に会えたのだと心から嬉しかった。そこで、私は自分の真の行き先は延安であることを告げ、彼らに協力を求めると、快く引き受けてくれた。

タイにおける個人的経験から、中国国内の民先も大体同じような状況にあったのではないかと推測する。要するに、民先、読書社、救国会の三組織は、中身、活動内容はほぼ同じで、どれもメンバーを立派な共産党員として養成しようという大雑把な目標を掲げていたのである。いずれも民間団体としての性格が強いので、共産党側からすれば、党の物差しを当てて、過度に期待をすることは禁物であった。しかし、各団体所属のメンバーに対して、交流ができる共通の空間を提供したという意味で、民先の設立の意義は大きいと思う。

ところで、タイで婦女慈善救国会の仕事に携わっていた陳雪玉は、我々とは別のルートでタイを脱出して、昆明入りを果たした。本来一緒に移動すればよかったのだが、私は恋人蘇蘭のことを考慮して、あえて別々にしたのである。タイにいた時、私は組織のルールに従って、雪玉と同じ民先組織で活動していることを蘇蘭に内緒にしていた。雪玉と蘇蘭は、ともに婦女抗日救国会（婦抗）のメンバーで、親しかった。ある日、私が雪玉と一緒にいたのを目撃した蘇蘭は、やきもちを焼き、「あなたたち二人はよく一緒にいるわね」と私を問い詰めたことがあった。

別のルートで昆明に入った雪玉は昆明に留まり、西南聯合大学英語学部に入学した。大学卒業後、雪玉は同級生と結婚してタイに戻った。新中国成立後、彼女は中国に帰国したが、文化大革命の迫害を逃れるために、香港に移り、そこで生涯英語教師として働き、人生の最後までを過ごした。

話を重慶へのルート探しに戻したい。

昆明についてからの、次の課題はいかにして重慶まで到達するかということであった。全員で相談した結果、10余人で集団移動することは周囲の目を引きやすく、また、重慶への交通事情は悪く、まとまった座席の一括確保は困難で各自がそれぞれに自力で交通手段を確保せざるを得ないという事情もあったので、個々別々に行動するという結論に達した。

私は早速情報の収集と、バスの切符探しに着手した。当時は、昆明と重慶の間には電車は

なく、長距離バスしかなかった。この長距離バスの切符の入手が、なかなか困難であった。予約を入れてから実際に入手できるまで、一年間かかるとまで言われていた。一方、国民党政府の官吏は、長距離バスといういわば希少資源を手中に握って、ひたすら「国難財」の金儲けに励んでいた。ガソリン代の高騰が、切符をとてつもなく高騰させた一因であった。一般人にとっては、金塊を使わない限り、切符を手に入れることは奇跡に近かった。

黄栄灿からの助言で、私は紹介状一通と金のオメガ時計一個を、国民党政府の僑務委員会にもって行くことに決めた。紹介状は、タイを離れる前に蟻光炎が自筆してくれたものである。蟻は、私は国に戻って、重慶での勉学を希望しているので、便宜を図って欲しいという主旨の僑務委員会宛の文面を綴っていた。オメガ時計は、当時相当高価な金無垢のタイプで、タイを離れる際に姉の夫が餞別としてくれたものである。

黄栄灿が予想したとおり、高価な時計を見ると、僑務委員会の担当者はすぐに愛想顔になった。

「華僑に便宜を提供するのは、我々の仕事です」と決まり文句を繰り返しながら、担当者は即座に運輸担当機関と連絡を取って、その場で切符を二枚確保してくれた。あの時計本来の値打ちでは、五枚の切符でも買えるはずであったが。

一方、庄国英も朝から晩まで出かけて、利用可能なルートを探してまわっていた。当時昆明を通過する重慶行きの軍事用貨物は、すべてミャンマーからのもので、軍のトラックで運送されていた。運輸に携わる運転手の多くは華僑出身であった。庄国英は自分自身が華僑である利点を活かして、運転手たちに話しかけたり、時には洗車の手伝いをしたりして、彼らと親しくなるように努めた。彼の努力は功を奏した。彼は、ついにある運転手から、重慶まで乗せてやるという約束を得た。

運転手自身は切符の販売はしていないために、切符取得はできなかったが、彼らなりのやり方があった。それはトラックが出発後、途中で車が故障したようなふりをして、切符持ちの乗客を降ろした後、別の場所で待合せの知り合いをピックアップするという手法である。庄国英もこの方法で乗せてもらったのである。混乱を極めたあの時代には、ようやく切符を入手できた乗客は、途中でこんな酷い目にあわされても、泣き寝入りするしかなかった。

私と恋人の蘇蘭、庄国英との三人は先に重慶に出発することになった。残りの人たちについては、中国共産党の昆明支部に世話をしてもらうことにした。当時の昆明には海外からの華僑が大勢集まっていたので、共産党の昆明支部は、劉茂雲らに華僑関係の仕事をさせる考えであったが、我々が先に昆明を離れたのち、何かの手違いで、劉茂雲らは何の援助も得ることができなかった。彼らは苦労を重ねた末、重慶に辿り着いた。

加えて、彼らが重慶に着いた時期は、周恩来が率いる八路軍弁事処の重慶からの撤退と重なって、八路軍からも何の援助も得ることができなかった。途方に暮れた彼ら一行は、遂に国民党の方に行ってしまった。このように二重三重に辛い目に会った劉が、自分たちが翻弄された原因を私のせいにしたのは自然であろう。彼は、私が自分と恋人のことだけを考え

て、仲間たちのことは全くかまわなかったと、憤慨した。しかし、中共昆明支部の担当者が、残りの人たちの世話を約束してくれたので、私は安心して重慶への道を踏み出したことは事実である。劉は未だに、この事実を理解してくれない。

結局、劉茂雲とは全く反対の人生の道を歩むことになってしまったが、バンコク時代の二人の愛国心の強さは伯仲していた。タイにいた時、一緒に募金活動を行ったことがある。私が、八路軍が経済的に非常に厳しい状況にあることを劉茂雲に説明すると、彼は躊躇せずに、すぐに募金した全額を八路軍に寄付してくれた。募金活動で、私たち二人は一時毎日大金を扱っていた時期があったが、どちらも一銭も自分のポケットに入れたことはなかった。

劉茂雲に対する昆明党支部の扱い方は無責任極まるものであった。これと似た例はほかにも多い。たとえば、華僑出身のある共産党員が党の命令を受けて、昆明に華僑の名義で書店を出した。ところが、昆明で進歩的書籍を扱うすべての書店は、国民党政府によって閉鎖されてしまった。彼の店もオープンして間もなく、閉鎖された上に、彼自身も逮捕される羽目になった。幸いに、彼は国民党の党員でもあったので、死だけは免れた。2004年7月、彼は北京を訪れ、自分の革命業績を担当部門に訴え、党側の追認を求めたが、却下されてしまった。理由は、関係者が全員亡くなっているので、事実の確認が不可能であるということであった。香港在住の彼に、最近会った時、彼は涙を流しながら、自分の心境をこう明かした。「金が欲しいというような卑賤な目的で訴えたのではない。ただ自分のやったことをきちんと認めてもらいたかっただけなのに」、と。

私たちは庄国英より二カ月遅れて重慶に到着した。その間、私たちは、貴陽、重慶の読書社の支部を通して、庄国英と連絡を保った。一番先に出発した庄国英は、貴陽、重慶の順に到着すると、地元の読書社支部にメッセージを残して、自分の状況や居場所を仲間に知らせたのだ。

私は昆明を出る前に、昆明に来た呉田夫に会った。田夫は、ハノイで私たちにパスポートを手配してくれた人物である。彼は、蔡興というタイからの華僑共産党員を同行していた。彼ら二人も延安を目指していた。田夫は父親がハノイで車の商売を手広くしていたので、昆明にも広い人脈があった。それで、昆明に到着して間もなく重慶行きの切符を入手できて、我々よりも先に出発することになった。彼らが出発する前に、これからはどこにいても、必ず仲間との連絡を怠らず、互いの状況を常に知らせ合おうと約束した。

また、昆明では、羅怡（別名：王魯心、後に国民党内部で王諾迺という名前を使用）にも出会った。彼と一緒に私の目の前に現れたのは、見覚えがない黄という男であった。私はこの二人の突然の出現に、いささか当惑した。なぜなら、これまでの羅怡は、救国会といった組織に参加したことすらなく、政治にはまったく無縁の人物であったからである。羅は有数の華僑作家としてタイでは知られていた。劉漱石は、羅怡の才能を買って、自分が教師をしている培民学校に、羅を教師として迎えた。劉が羅を誘ったもう一つの理由は、羅の文人風のイメージを、自分の学校を普通の学校のように見せるカモフラージュのために利用して、警察の注意をそらすためでもあった。

この二人は私たちが昆明に着いた時には、すでに重慶行きのバスの切符を入手していた。彼が所持していた紹介状は、蟻光炎に書いてもらったものであった。紹介状には、国民党僑務委員会宛に次のように記してあった。米商売をやっている羅の叔父である王之桂は、漢方薬も手がけている。漢方薬の原料を仕入れるため、甥の羅を四川と陝西地方へ視察に行かせたい、と。この二人が一番先に重慶に向かって出発した。

その翌日、庄国英グループの三名も昆明を発った。しかし、この三名は重慶に着いてから、延安までの切符をなかなか入手できず、途方に暮れた。そこで、八路軍弁事処の担当者は、彼らに二つの選択肢を提示した。一つは、新四軍に向かうことであり、もう一つは、第五戦区にある、山西省の軍閥閻錫山の民族革命大学に赴くことであった。この民族革命大学は、薄一波らの八路軍幹部の協力を得て、閻錫山が設立した機関である。当時、日本軍の山西省への進軍で、閻錫山と八路軍は接近していた。

第五節　重慶から延安へ

タイを出る前に、私は劉漱石から、マッチ箱サイズの紙片を一枚渡された。この小さな紹介状には、「欧恵雄は1938年5月1日に入党したことを、茲に証明する。延安方面へ報告伝達を願う。（劉漱石の自筆サイン）」と書いてあるだけで、宛先がなかった。

劉漱石は、私に、重慶で八路軍弁事処に紹介状を渡す時に、暹羅共産党はすでに私の党籍状況を電報で香港に報告している、と言うように指示した。彼はさらにこう付け加えた。安全のために、たとえこの一枚の紙を所持できなくなったとしても、自分の党籍関係はすでに香港に報告されていると君自身が説明すれば、大丈夫だろう、と。後になって判ったことだが、私の党籍情況は、タイから香港経由で間違いなく延安にまで転送されていた。

重慶に着くと、早速八路軍重慶弁事処を訪ね、弁事処主任の銭之光、副主任の廖似光[198]の二人と面会して、自分の党員身分を打ち明けるとともに、劉漱石が書いた証明書を提示した。二人は証明書を確認した後、「我々はすでに香港からの電報を延安に転送した。しかし、現在、延安までの交通の手配はとても出来ない。その理由は、共産党員であるかどうかということが問題なのではなく、蒋介石が延安に行く路を封鎖しているためだ。実は私たち自身も重慶からの撤退を検討中[199]のところだ」と、苦衷を漏らし、「今までも多くの人が延安に行く途中で逮捕されてしまった。君には、まだ新四軍と山西省の民族革命大学という二つの選択肢がある。どちらにするか、君自身がよく考えて、我々に言いなさい。私たちは君の決定と党籍を延安に報告するから」と解決策を提示してくれた。

張慶川は暹羅共産党員のうちで、最も早く延安で訓練を受けた人物である。彼が延安での

198　銭之光は「八路軍重慶弁事処」の要員だが、主任ではない。廖似光については不明。銭之光は、1937年12月−38年10月は「八路軍武漢弁事処処長」。

199　1941年1月4日に国民党軍が安徽省で新四軍（葉挺軍長）を攻撃し、壊滅的打撃を与えた、皖南事件が発生した際、延安の中共中央は重慶の中共南方局に至急重慶から撤退するように電令したことがある（重慶市『紅岩革命記念館』展示の解説による）。

一九三八年初，首批到延安去的泰华青年（前排左张庆川，右朱田；后排林柔（女）、王耀华）。

写真 13　延安の張慶川（『団結報』2002.7.6）

訓練を終え、タイへの帰路、途中の重慶を経由した際に、私は同地で彼と偶然に出会った。彼は私に「民族革命大学は危ないから、行かないほうがいい。別の道を探してあげよう」と語った。

重慶滞在中には、ホーチミン（胡志明）、葉剣英、周恩来[200]などの著名指導者に接する機会を得た。そのきっかけは、張慶川が私のことを彼らに話したからである。周恩来、ホーチミンらを訪問した当初、彼らから身許確認の質問を受けた。たとえば、はじめてホーチミンと会った時、私は自分が党員であることを明確に告げたほか、タイ時代のことを紹介する際、李華、黄耀寰、劉漱石などのことに触れた。これに対して、彼は、劉漱石の別名と「関帝廟事件」[201]の詳しい経緯について質問した。この確認質問に躊躇なく答えることができたので、それ以降は、私は党籍について確認されることはなかった。共産党幹部の信用を得たからだと思う。

周恩来は、民間ホテルは危険だと言って、葉剣英に私の宿泊先の再手配を指示した。これを受け、葉剣英は私に「明日君は読書生活社[202]に行って、そこで本を読むふりをして待機しなさい。そこに連絡人が現れたら、彼の合図に従って、行動しなさい」と、指示した。翌日、私は読書生活社で立ち読みをしながら、連絡人の出現を待っていた。そこに眼鏡をかけて、本革コートを着た30代後半の男が現れ、「さあ、行こう」と小さな声で私を誘った。二

200　欧陽恵は他の著書でも、重慶でこれらの指導者に会ったことを記している。しかし、当時ホーチミンが重慶に滞在していたとは思われない。葉剣英については、欧陽氏はバンコクを追放された呉琳曼がサイゴンで発刊していた『全民日報』に「葉剣英訪問記」を投稿したと書いている（前掲『呉敬業的一生』p. 38）。なお、当時、タイで発行されていた唯一の華字紙『中原報』にも、欧陽氏が重慶から送った次の二本の記事が掲載されている。即ち、慕蘭（本報重慶特訊）「春禮労軍運動在重慶」（『中原報』1940.2.21−2.22）（1940年2月10日の大会の様子を重慶から報告したもの）、および羅蘭（ママ）（本報重慶特訊）「陳波兜在巴蜀学校公開演講『我従華北帰来』」（『中原報』1940.3.18）。

201　1929年12月22日に中国共産党下の南洋共産党暹羅特別委員会の指導部22人がバンコクの中華街の関帝廟（進徳学校屋上）で集会中に逮捕された事件。

202　正しくは上海から重慶に移って来ていた「生活書店重慶分店」（鄒韜奮総経理）と思われる。『紅岩革命記念館』p. 38に同分店の紹介がある。

人で食堂に入った後、男はまず私たちの宿泊先の場所を確認してから、翌日午後1時に、旅館の前に待機している車に乗るようにと指示した。

翌日、私は旅館を出る際、旅館の主人から怪しまれないように、「旅費が足りないから、僑生招待所に移る」と説明した。旅館の主人は、「僑生招待所はとてもいい所だ。食事は無料だし」と合い槌を打った。僑生招待所とは、海外から来た華僑青年たちが共産党の勢力範囲に行くことを防ぐために、国民党政府が設けた、華僑青年に無料で食事を提供する宿泊施設である。

男は私と蘇蘭を車に乗せて、彼の自宅に連れていった。彼の自宅には二つの部屋があった。最初彼は奥の部屋を私たち二人の部屋に提供しようとしたが、私と蘇蘭はまだ結婚してはいないので、蘇蘭一人を奥の部屋に泊め、私は男とともに手前の部屋に泊まることにした。それから3カ月間は、私は男と同じベッドを使い、親しくなった。夜、ベッドで横になると、彼はいつも私にベトナム、タイ、マラヤについての見聞を語ってくれた。私は彼の豊富な経験と見聞に感嘆した。

彼の名は傅大慶（フ・タイケイ）と言い、1921年に劉少奇とともに、モスクワ東方大学に留学し、そこで中国共産党に入党した古参幹部であった。モスクワから中国に戻った後、傅はシンガポール、タイ、マラヤ、インドネシア、フィリピン、ミャンマーなどの南洋各地で共産党の活動を指導した。とりわけマラヤでは彼はコミンテルのもとで、マラヤ共産党の初代常務委員と宣伝部長を務めるなど、マラヤ共産党の創立に深くかかわった。

彼は19世紀のドイツの軍事理論家クラウゼウィッツの『戦争論』を中国語に訳したほど、英語もロシア語も堪能だった。1944年、傅はコミンテルンと連絡を取るようにという、党の任務を受けて、新婚の妻楊潔と北京に赴き、電信台を設立した際に、日本軍に捕まり、殺害された。傅大慶の娘は天安門事件で当局に投獄された戴晴女史である。彼女は葉剣英の家庭で育てられ、光明日報の記者として働き、1980年代の中国知識界を刺激した数々のルポや対談を出版した。天安門事件直後、数カ月間の監獄生活を強いられたが、葉剣英の養女なので、それ以上のひどい目には遭わずに済んだ。

私たちは重慶に都合5カ月ぐらい滞在を余儀なくされた。その大きな原因の一つは、当時八路軍の車が重慶から延安に出発するためには、まず国民党当局に申請して許可を得ることを要したからである。私たちの場合は、許可を得るまでに、かなり待たされた。私たちは、5カ月のうちの3カ月は傅大慶の家で過した。その間、私は地元重慶の共産党の組織生活に参加すべきかどうか、悩んだ。蘇蘭に相談して見ると、彼女は、「もしあなたがここ（重慶）の党組織生活に参加したら、彼らにそのまま引き止められてしまい、重慶に居残る可能性が高くなるでしょう。そうなると、いつ延安に行けるの」と、反対した。彼女と話して、私は延安に行くことを優先するためには、なるべく地元の党組織とは接触すべきではないと結論し、党支部の組織生活には一度も参加しなかった。

第八章　ついに延安に到着

第一節　華僑紡績工場の指導員

1941年春の2月、1年半の旅の末、ようやく憧れの革命聖地延安にたどり着いた[203]。

延安での受入れ手続きは、党の組織部の担当である。本人が共産党員である場合には、組織部は各支部からの電報や紹介状と本人とを照合した後、配属先に対して党内部紹介状を発行した。党員はこの紹介状を、配属先の党組織に提出した。無論、非党員はそれを提出する必要はなかった。

国民党に逮捕された経歴がある人物に対しては、組織部は逮捕の経緯について説明を求めた。必要に応じて、広い範囲の関係者から事情聴取を行うこともあった。その場合には、本人は配属先を提示されないままに、党組織部の宿泊施設に長期間滞在することを余儀なくされた[204]。

私は、延安に到着し手続きを終えたが、他の進歩青年たちとは違って、直ちにどこかの大学に配属されることはなかった。私にはその前に、果たすべき別の任務があったからである。それは、重慶で葉剣英から託された紡績の技術指導であった。

当時延安を中心とした共産党の解放区は、国民党政府の経済封鎖のために、外部から衣料品や食料など生活必需品の供給が激減し、未曾有の物資不足に追い込まれていた。このような厳しい状況を打開するため、毛沢東は延安代表大会で、革命をやめて故郷に帰るか、敵に投降するか、あるいは自力更生で物資を生産するか、という三つの選択肢を示した。無論、自力更生という選択肢しかなかったのだが。それ以降、延安の兵士や党幹部らは、農業生産

---

[203] 1941年春の延安は、人口3万8千人前後の町であった。国民党軍による第5次の包囲討伐から深刻な打撃を受け、根拠地の瑞金を放棄し、戦略的移動を余儀なくされた中共は、長い長征を経て、1935年10月に陝北にたどり着いて以来、すでに5年経っていた。中共は、1936年12月の西安事件を機に、国民党と二回目の国共合作を実現して、抗日の旗を掲げて、国内外から数多くの愛国青年と知識人を受け入れたため、延安はかつてない活気に溢れ、抗日の聖地と化した。同時期、中共は日本軍との膠着状態を利用して、各地で対日ゲリラ作戦を展開しながら、根拠地の開拓に力を入れた。一時、中共は軍事力や党員人数などに急速な成長が見られた。中共は根拠地の延安で、中共中央機関と辺区政府という二つのシステムを通して、各組織に号令を出し、組織全体の拡大を図った。1941年9月に開かれた中共政治局拡大会議で、毛沢東は博古、張聞天らの国際派政治局委員を糾弾して、中共指導部における支配的指導権を初めて獲得し、半年後の整風運動実施の基盤を築いた。

[204] 抗日戦争勃発後、全国各地から延安に赴く学生や若者が急増した。また国共合作によって、千人以上に上る共産党員が国民党政府から釈放され、延安を目指した。中共指導部はこうした人員急増を歓迎する一方で、国民党のスパイが混入することを懸念した。そこで、延安に来る者に対して、複数の審査を行った。審査担当機関は中央組織部であった。青年学生に対する審査基準は比較的簡易で、中共地下組織または関連組織の紹介状さえ提示すれば、国民党占領地域の八路軍弁事処が、延安行きのために手配を行った。しかし、国民党の監獄から釈放された中共党員は、入獄中に国民党に投降して、党組織の秘密を白状した疑いがあるので、慎重な審査を実施した。

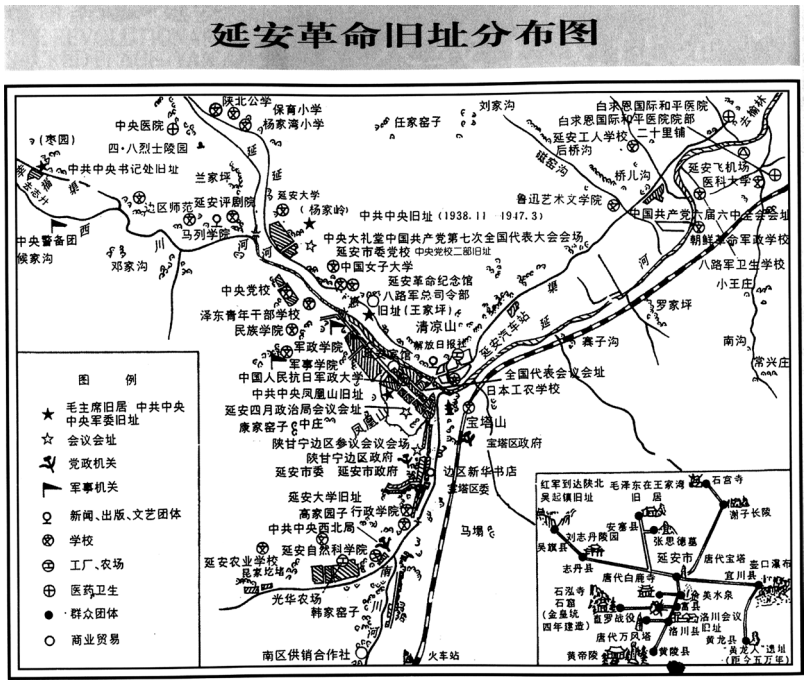


写真14　延安地図

に積極的に従事し、かつ工業製品の生産に励み、自力で生活必需品を確保しようというキャンペーンを展開した。一時は「発展生産、豊衣足食」というスローガンが延安の壁を覆った。

延安に着いたばかりの私も、紡績の技術指導員として自力生産運動に加わった。当時の延安で使われていた紡績機は、一本の糸しか紡げない旧式で、効率が悪かった。他方、国民党占領区の紡績工場では、32本の糸を同時に紡ぐことができる小型紡績機械が主流になっていた。重慶に駐在中の葉剣英は宋慶齢の人脈を通して、国民党占領区の先進的な小型紡績機械の設計図を入手した。さらに機械を延安に導入するため、共産党寄りの著名教育家黄炎培［1878-1965］の紹介で、延安に行く予定の私と蘇蘭を国民党財政部傘下の紡績工場に派遣して、技術を習得させた。私たち二人は華僑難民の身分で、紡績工場で50日間働いて、技能を身につけた。

私たちが、技術指導員として派遣されることになったのは、延安から徒歩で一週間かかるという安塞の華僑紡績工場であった。

安塞まで一週間の行程と聞いて、蘇蘭にできるだろうか、と私は心配になった。彼女は裕福な家庭の生まれで、私のように苦労した経験が少なかったからである。そこで、私は蘇蘭の技術は私ほどには完全ではない、私一人が安塞に行けば十分に対応できる、と訴えた。その結果、蘇蘭はそのまま延安に残り陝北公学に入学することが許可された。私は一人で安塞に向かった。途中は、険しい山道と峡谷であった。

安塞は、中国共産党中央指導部が延安に移る前に本部を構えた小さな町である[205]。延安と違い[206]、安塞の洞窟（窰洞）は石でできており、頑丈そのものであった。

派遣先の華僑紡績工場は、華僑という名を冠してはいたが、華僑が出資した事業ではなく、海外華僑に宣伝して寄付を集めるために、便宜上「華僑」を付したものであった[207]。安塞で紡績工場の技術指導員として二カ月間働いたのち、延安に戻ったのは、1941年6月であった。

第二節　魯迅芸術文学院（魯芸）

1940年代初め頃の延安には、中国人民抗日軍政大学（抗大、軍事訓練機関、1937年1月に二道街に設立）、陝北公学（政府行政関係人材の養成機関、1937年10月に楊家湾に設立）、中共中央党校（党幹部の養成機関、1935年11月に小溝坪に設立）、魯迅芸術文学院（文化宣伝要員の養成機関、1938年4月橋児溝に設立）などの高等学府があった[208]。全国からより多くの若者を延安に集めるため、毛沢東は延安の大学は誰にも門を広く開いている、難しい入学試験などは一切ない、と広く内外に宣伝していた。

延安には革命の情熱に燃えた若者が次々とやってきた。彼らの経歴を見ながら、受入担当

205　これは欧陽氏の誤解。1935年10月19日に長征軍が陝西省北部（陝北）呉起鎮に到着したのち、中共中央は瓦竈堡（ガソウホ、現在名、子長）に1935年12月–36年6月に、続いて保安（現在名、志丹）に1937年1月まであり、1937年1月に延安に移った。安塞県は、志丹県と子長県の中間に位置している。

206　延安の洞窟（窰洞、山腹に掘った横穴式住居）は石もあるが、大部分は茶色の黄土である。

207　抗日戦争中、海外華僑からの投資は主として国民政府が統治する西南地域に集中した。華僑の多くは、国民政府が中国の主権を代表する政府であると考えていたからである。投資のみならず、募金、物的援助、人的援助でも、海外華僑からの支援の多くは、国民政府に向けられた。『華僑与抗日戦争』に挙げられている共産党地域での華僑投資の例は、フィリピン華僑の募金で陝甘寧辺区に設立された紡績工場と、晋察冀辺区の太行山区に設立された織物工場だけに過ぎない。このような背景から、海外華僑の物的援助を引き出すために、「華僑」工場と称したものであろう。

208　中国人民抗日軍政大学（抗大）は、抗日戦争中多くの中共軍政幹部を養成した教育機関である。1933年に江西省瑞金に設立された中国紅軍大学を前身に、1936年に陝北保安に中国抗日紅軍軍政大学としてスタートした。翌1937年に中国人民抗日軍政大学に改名され、延安に移転した。1945年8月までの9年間、抗大は延安本校、10数箇所の分校を合わせて、10数万人の軍政幹部を出した。抗大の学生は中共軍幹部、全国各地からの知識青年、海外華僑によって構成された。陝北公学は1937年に中共が延安に設立した、主として根拠地政権建設と党の工作を担う幹部を育成する機関である。学生は主として国民党統治区からの知識人と青年学生であった。学習機関は短く、ほとんどの学生は3、4カ月で卒業した。1939年までに六千人余の学生を世に出した。後にその一部は延安魯迅芸術文学院、延安工人学校および安呉堡戦時青年訓練班と合併して、華北聯合大学となった。同大学は、中国人民大学の前身である。残りの一部は1941年に、中国女子大学、沢東青年幹部学校と合併して、延安大学となった。

抗大と陝北公学は、抗日戦争初期においては、国民党統治区と海外の知識人や青年学生を延安に引き付ける、最も知られた広告塔のような存在であった。このほか、当時の延安には延安馬列学院、中国女子大学、魯迅芸術文学院、沢東青年幹部学校、中央組織部訓練班、中央職工委員会訓練班、西北公学（棗園訓練班）、自然科学院、民族学院、軍事学院、西北行政学院、新文字幹部学校などの各種の学校があり、学園都市的様相も呈していた。これらの学校の在学期間は比較的短く、専門教育と同時にイデオロギー教化の場であった。一方、1933年3月に「馬克思共産主義学校」という名称で瑞金に設立された中共中央党校は、党内の中層、上層レベルの幹部を対象としたマルクス主義教育と幹部育成の機関であった。入学者は現役の中共幹部に限定されていた。

者が、配属先を決めた。各人に希望を尋ねることはなかった。若者たちは、党の指令に忠実に従うことが第一であるという教育を受けていたので、たとえ割当てられた配属先に少々の不満があったとしても、せいぜい小言を漏らすだけで、配属先に赴いた。

私は文学に強い関心を持っており、前々から魯迅芸術文学院［魯芸、日本では「魯迅芸術学院」と表記されていることが多い］の存在を知っていた。1941年6月に安塞から延安に戻った時、魯芸に入学したいと強く希望した。文学、音楽、美術、演劇の専攻をもつ魯芸は、軍事訓練を中心科目とする抗大とは違い正規の入学試験があった。タイで革命活動に明け暮れた私は、難しい入学試験を通過しなければならないと聞かされて萎縮してしまった。

それでも、私の心を励ましてくれたものが二つあった。一つは、延安に来る前の葉剣英との会話である。私がタイ華僑社会の文学レベルは低いので、延安で自分の文学的素質を高めたいという考えを話したところ、彼は「それは君の努力次第だ」と私の気持ちを認めてくれたこと、もう一つは、私より先に延安に来て、すでに魯芸に入学していた牧軍が、頑張れば、魯芸にだって入れないことはない、と手紙で励ましてくれたことである。

1941年6月に、延安に戻ってきた時、魯芸は開講から丸一カ月を経過したところだった。本来なら、入学を断念せざるを得ないのだが、周恩来から書いてもらった紹介状が役に立った。紹介状には、欧陽恵の魯芸受験が希望に添えるようにと書かれていた。中央組織部の担当者は紹介状を検討した後、「学校は始まっているが、君は直ちに周揚校長に連絡しなさい。合格できるかどうかは君次第だ」と、私に言った。

魯芸の入学試験は全部で三日間を要した。学歴は、初等中学レベル止まりで、高中［高等学校］には学んだこともない私にとって、入学試験は大きな試練であった。試験一日目の科目は文学常識だった。試験官の何其芳［1912-1977］は問答形式で、私になぜ文学の道を希望するのかと質問した。私は文学がとても好きなので、一生をかけて文学を武器に革命活動に従事したい、と熱っぽく答えた。ついで、魯迅、巴金、丁玲などの作家の名前を挙げながら、最も印象深い作品は、魯迅の『阿Q正伝』と巴金の『家』、『春』、『秋』のシリーズであり、特に『家』の主人公の運命に深く感動した、と述べた。何先生は、巴金の作品に対するコメントを求めた。私は、巴金は主人公覚慧の運命を通して、中国の封建家庭の保守性や非人間的な一面をありのままに描き出したと答えた。

二日目は、世界文学の試験で、試験官は周立波［1908-1979］に代わった。私は、同じく今まで読んだ印象深い作品を挙げて、自分のコメントをするように求められた。

三日目は、何其芳がタイトル、ジャンル自由という条件で、作文を命じた。いきなり言われたので、最初当惑したが、タイから延安までの出来事を辛うじて時間内にまとめることができた。

約一週間後、党の組織部から合格通知が届いた。私の二年間の魯芸生活がスタートした。

写真 15　魯芸校舎として利用されたカトリック教会跡（2007 年 1 月）

抗大與魯藝院

給偉大的戰士

写真 16　魯芸在学中の梁傳燊（牧軍）のバンコクへの手紙（『華僑日報』1938.11.3）

魯芸の日々

魯芸の講義はほとんど午前中に青空教室で行われた。学生全員が小さな腰掛を持参して、講義に出席した。幸い延安地方のある陝北省は雨が少ないため、雨天休講になることはほとんどなかった。それでも、青空教室では、どうしても解決できない、いくつかの問題が存在した。一つは講義をする教師の声が聞き取りにくいことである。これは、広い開放的な空間で大勢の人に向かって話しをする場合にはよく生じる問題である。とりわけ、人気の高い講義のとき、例えば、周立波担当の世界文学読解講義になると、文学専攻の学生だけではなく、他の専攻の学生も多数聴講に来て、広場を埋め尽くし、講師の声は一層聞き取れなかった。より多くの人に聞こえるように懸命に叫ぶような大声で、講義する授業がしばしばあった。

午後は、通常、作品についての学生間の討論の時間であった。

学生寮は、8人か9人定員の洞窟（窑洞）であった。洞窟内の黄土を削って、ベッドの形にして、その上に枯れ草や毛布を敷いていた。学生の個人財産は毛布一枚、枕一つ、布袋（中に数着の衣類）一つ、草鞋一足ぐらいのものであった。持ち物が少ないので、すぐに、どこにでも移動することができた。

夜は電気がないため、植物油を用いた微かな灯火の中、一人が解放日報を読み上げ、洞窟内のほかの7、8人の学生は聞くことにしていた。9時の就寝時間になると、一斉に床についた。翌朝起床、朝食をとり、小さな木製腰掛を手にして青空教室に向かう。単調ではあるが、充実した毎日だった。

1940年までは、学生は月一元、教師には月三元の手当が支給されていた。しかし、私が1941年半ばに入学した時には、国民党の経済封鎖発動のため手当はなくなり、主食の米も入手できなくなっていた。一番厳しい時は木の皮、木の葉、豆のむき殻を食料にして、なんとか乗り越えた。

魯芸で履修した科目は、名著読解、創作問題、中国新文学論などである。名著読解の担当者も周立波であった。授業では曹雪芹の『紅楼夢』、魯迅の『阿Q正伝』、トルストイの『戦争と平和』、ショーロホフの『開かれた処女地』と『静かなるドン』、プーシキンやレールモントフの詩作、ゴーゴリの『死せる魂』など、当時進歩的文学とされていた各国の代表的作品の熟読と作品分析が行われた。日本の文学作品では、小林多喜二の『蟹工船』を読んだことがある。授業前に学生は、教師の推薦作品を読んでおかねばならなかった。授業では、その作品について学生がディスカッションを行い、最後に周立波が総括する、という形をとった。

あらゆる物質が極端に不足しており、教科書も例外ではなかった。『紅楼夢』の読解の時には、一冊しかなかったので回し読みをした。クラスの全学生が読むことができるようにするためには、時間を決めて次の洞窟に回さなければならず、与えられた時間内に読み終えようと懸命に努力した。その光景はいまだに鮮明に脳裏に残っている。

『金瓶梅』を読んだ時には、魯芸は一冊も所蔵していなかったので、毛沢東の個人図書室から借用した。毛沢東は、「『金瓶梅』は淫書だと言われることが多いが、この本をしっかり読まないと、中国封建社会の本質を見抜くことは出来ない」と、熟読を勧めた。

魯芸では、名著読解の作品を革命文学作品に限定することはなかった[209]。学生たちは、常に授業で熱を込めて自分の解釈を語り、作品の書き方について同級生と討論した。文学作品がいかに登場人物の性格を簡潔に、しかも読者に印象深く描くことができるかについては、いまだに次のような例をよく覚えている。たとえば、トルストイが『アンナ・カレーニナ』で、主人公アンナの女性的魅力を描き出すために、彼女の美貌を直接的には描写せずに、舞踏会のホールの入り口に彼女が姿を現した瞬間、全員が一斉に彼女に視線を注いだシーンを

---

[209] 従来の文学を封建文学やブルジョア文学として一蹴した整風運動が発動されるまで、魯芸は毛沢東指導部から大きくは干渉されず、伝統的な文学を講義、研究の対象としていた時期があった。

描いていることとか、あるいは、曹雪芹が『紅楼夢』で、賈宝玉に対する父親の厳しい体罰に、登場人物のそれぞれの反応を克明に描いて、個々の性格を生き生きと行間に浮かび上がらせていること、など。このような学生間の討論を重視する学習方法は、非常に役に立つと私は実感したが、後になって毛沢東に容赦なく否定されてしまった。

創作方法の授業では、何其芳魯芸文学系主任の主宰の下に、丁玲［1904-1986］が小説、周立波がノンフィクション、艾青［1910-1996］が詩歌、蕭軍［1907-1988］が長編小説、厳文井［1915-2005］が児童文学、陳荒煤［1913-1996］が映画脚本というように、それぞれ得意分野について講義を担当した。周揚［1908-1989］が担当した中国新文学論は、詩経から現在の左聯文学まで中国の文学史を概説するものであった。

学生が自ら文学作品の創作に挑むという科目もあった。これらの専門科目のほかに、中国革命史、社会発展史、哲学などのような、全校生共通科目もあった。

いずれの専攻を問わず、試験と成績評価は一切なかった。

おそらく、当時の延安では、魯芸生自身を除く一般の人々が抱いていた魯芸のイメージは必ずしも芳しいものではなかった。魯芸の学生は、規則を遵守しないという定評があった。集会が開催される時、抗大や他校の学生たちは、いつも行列を作り整然と、かつ時間的な余裕をもって会場に集合していたが、我々魯芸生は開始直前になってばらばらと会場に入ってきて、しかも集会中にもよく私語をしていた。魯芸生にしてみれば、何十分も前から会場でじっと待つほどばかばかしいことはない。それに、集会で無味乾燥な訓話に耳を傾けるよりも、気の合う友人との会話の方がよほど楽しかったからである。後述する整風運動では、これらは魯芸生の欠点として大いに取り上げられ、批判された。

整風運動が始まると、講義は休止され、大多数の学生は農耕や紡績関係の労働、残りの者は特務スパイの摘発運動に従事した。また、一部の学生は地元の祭りの際に、寺の周辺などのような人出が多い場所で、演劇や歌を上演したこともあった。

魯芸の卒業生は500人くらいで、人数は多くはないが、彼らのほとんどは建国後政府の各レベルの文芸文化部門の責任者になった。

第三節　党籍問題：再入党

再入党を迫られる

延安到着後、私は党籍関連の手続きを行おうとした。私はタイで暹羅共産党に入党しており、延安に来る前から共産党員であった。私は暹羅共産党トップの劉漱石の自筆党員証明書を持参して、延安の中央組織部に提出した。中央組織部秘書長の武競天［1908-1977］は、中国共産党と国外の共産党との関係を如何に処理するかについて、党中央は未だ明確な決定をしていないので、まず、中国共産党に入党申請手続きをして組織生活を始めるように助言した[210]。

---

[210] 『泰国帰僑英魂録、第二巻』p. 162。

私は、タイで暹羅共産党に入党したという経歴を有するにも拘わらず、中国共産党党員の資格を認定されなかったのである。当時の中国共産党は、兄弟党党員の共産党籍の承認や党歴期間算定などについて、規則を設けていなかった。私は不本意ながら、党籍の問題を棚上げにして、とりあえず「群衆」(非党員の一般大衆）の身分で魯芸に入学したのである。

魯芸では穆青（1921-2003、後に新華社社長）と王康（後の中国社会科学院書記）の二人の党員学生が、私に「君はまだ入党していないのか、もし入党する意思があれば、我々が入党紹介人になってもよい」と、もう一度入党するように勧めてくれた。

延安の華僑同志の大多数は、延安で再入党した。しかし、数は少ないが再入党手続きに疑問を呈する者もいた。その一人に、バンコクの啓明学校で教員をしたことがあり、私より先に延安に来て陝北公学に入学していた余丁如がいる。私の到来を知って喜んだ彼は、会いに来てくれた。久闊を叙したのち、すぐに私は党籍問題を持ち出して、彼の意見を尋ねてみた。

「老余、あなたの党籍問題はどうなっているのですか」

「陝北公学の党支部から、もう一度入党するように勧められた。しかし私は応じなかった。私は別に何の過ちを犯したこともなければ、逮捕されたこともないのだ。それなのにどうして、もう一度入党し直す必要があるのだ。大体、一生のうちに、何度も入党するようなことなどあってよいはずはない」

「今、再入党しようとすれば、すぐに出来るだろう。しかし、今後何らかの問題が起こった時には、とても複雑面倒なことになる。どうしてあの時もう一度入党し直したのだと叩かれても、うまく説明できないだろう。だから、もう一度入党するようなことは絶対にしないのだ」

彼は、激しい口調で締めくくった。

「人間の一生で、何度も入党するようなことなどあってよいはずはない」という、彼の一言は、私の脳裏に突き刺さった。彼の意見に共感を覚えた私は、あやふやなまま再入党することは絶対にしまいと心に決めた。

黄覚生からの助言

およそ半年後［1942年2月頃］、中国人民抗日軍政大学（抗大）を卒業して中国女子大学で学んでいる黄覚生から一通の手紙が届いた。ぜひ会いに来るようにという内容だった。

延安に来て半年間、ほとんどの旧友たちには会ったが、黄覚生だけは、会うのを避けてきた。彼女の夫である李華のことを尋ねられると困るからであった。約束した日の朝、延安の川原で黄覚生と久しぶりに再会した。まず私は「李華同志とお子さんは共に元気です。林慕豪同志は李華同志の面倒をよく見ているので、すべては順調です」と、彼女の家族の状況を伝えた。本当は、私がタイを離れる前から、黄覚生の子供はすでに慕豪のことを「メー、メー［タイ語で「お母さん」の意)］と呼んでおり、李華と慕豪は結ばれていた。しかし、

私の方から言い出すべきことではない。
「判っているのよ、党が損害を蒙ることがなくて、何よりだわ。慕豪の立場も難しかったから」と、黄覚生は淡々と言った。
彼女の言葉から、私は、彼女が李華と慕豪の関係をすでに察知しているように感じた。
「ところで、今日あなたをわざわざ呼び出したのは、私の家庭のことを相談するためではありません。最近、あなたが落ち込んでいると聞いたので…」と、黄覚生は切り出した。
「そんなことはないですよ。ようやく延安に辿りついて、しかも念願の学校へ入学がかなって、これ以上嬉しいことはないです」と、私は明るい顔を作ろうとした。
「蘇蘭から聞いたのだけど、あなたの党籍問題は、まだ、解決していないのですってね」
「私自身が解決を拒んでいるわけではないのです。組織がなかなか解決してくれないのです」
黄覚生は真顔になった。「あなたは、もう一度入党すべきです。これはあなただけが直面している問題ではなく、ここに来ている同志たちはみんな同じ難題にぶつかっているのよ」
続けて、彼女は次の理由を挙げた。「せっかく延安に来たのに、党の組織生活に参加しなければ、党の内部書類の閲覧、党内の会議への出席、レベルの高い教育を受けることなどすべてができず、政治上重大な損失よ。このことを、少し真剣に考え直してみて」
「再入党を拒否しているのは私一人だけではありません。余丁如も…」と、私は余の例を挙げ、自分の立場を守ろうとした。
「彼の態度は間違っています。彼は彼、あなたはあなたです」
実は黄覚生を含め、タイから延安に着いた多くの共産党員は、再入党手続きを余儀なくされた。延安での再入党手続を免除された者は、香港に長く滞在する間に、廖承志の共産党支部で組織生活を継続し、しかも香港支部からの証明を得られた党員だけに限られていた。
黄覚生の話を聞いていると、私の心は次第に変化して、再入党してもよいという気持ちになった。
黄覚生は別の話題に変えた。「蘇蘭とは、最近はどう？」
「お互いに忙しいので、最近はほとんど会っていませんが、手紙で連絡しています」
当時、私と蘇蘭の住む場所は8キロほど離れており、訪問すれば半日かかった。自由な休日は日曜日しかなく、しばしば訪問することはできなかった。
「どうしてまだ結婚しないの」
「あなたがご存知でないわけはないでしょう。私たちは新婚蜜月を過ごすために、延安に来たのではありません。学校で立派な成績を修めることなく、子供だけを作ってタイに帰ったら、人はどう見るでしょうか」
私は、蘇蘭と延安までの途中、二人だけで長時間を過ごしたが、それでも一線を越えたことはなかった。
「だからと言って、ずっと一生結婚しないつもり？」

「それは先のことです。今の延安は物資が大変不足しています。ミルクも部屋も、何もありません。こんな状況で子供を産むなんて、とても大変なことです」

「最近はあまり会っていないと言ったけど」と、黄覚生は話題を元に戻した。

「そうです。会う回数は減っていますが、手紙のやり取りで連絡は保っているので、特に問題はないと思います」

「それなら、いいのだけど」

黄覚生はまだ何か言おうとしたようだが、口ごもったままやめてしまった。実は、その頃［1942年初め］、黄覚生は、蘇蘭が将来の夫となる男性と付き合い始めたことに気付いていた。しかし、その時は、なぜか私には何も言わなかった。

最後に、黄覚生は、「今度会う時には、あなたの組織問題が解決しているように」と念を押した。黄覚生と別れると、私は直ちに担当者を訪ね、入党申請書を提出した。黄覚生と会ってから2カ月ほど経った頃、私は彼女に再入党したことを手紙で報告した。彼女からは、再入党を祝う返事が届いた。

私の共産党歴はこれ以後、再入党［1942年前半］の時から計算されることになった。タイで共産主義青年団に入団した1935年[211]に遡って、やっと党歴が認められたのは1982年になってからである。これについては最終章で述べる。

再入党の手続きを拒み続けた余丁如は、そのためか、後の整風運動でスパイの容疑をかけられた。ある日、彼が宿泊所を留守にした間に、無断で彼の私物が検査された。検査の痕跡に気づいた余は、「もうやめた。タイに帰る！」と叫んで、無断検査に非常に憤慨した様子だった。陝北公学を卒業したあとも、彼は配属されることを拒否し続けた。

タイに帰りたい一心の彼は、所属を党の中央組織部に置いたまま、日本降伏の日まで、組織部の宿泊所をねぐらに、まる三年間を何らの勤務もせずに過ごした。自分一人の力だけで、解放区を包囲する国民党の封鎖を突破して帰国することは、到底、無理な相談なので、彼に出来ることは一日三回の食事と辛抱強く待つことだけであった。日本降伏後、大勢の党幹部や部隊が延安から東北に派遣された際に、余も東北行きを希望して許可された。しかし、ハルビンの中共東北局に到着した後、彼は、そこに居座って、党が割当てた仕事には一切応じなかった。説得を頼まれた私は、彼に声をかけてみたが、まったく聞く耳を持たなかった。それどころか、余は今までの党の仕打ちに対する鬱憤を爆発させた。

伝聞によると、その後の余は、行商人のふりをして行商人の輪に混り、疑われることなく易々と東北の戦場を通過して、北京を経て、南洋に向かった。中国南部の国境で進路を阻まれた彼は、雲南に定住して、現地で国民党政府の小役人の職を得たが、間もなく病死したという。同時期に南下を命じられて試みたが、その糸口を見出せなかった私から見れば、余が

---

[211] 欧陽氏が、暹羅共産党に入党したのは、1938年5月若しくは8月であり、1935年は共青団に入団した年である。しかし、欧陽氏によれば、老幹部の場合は共青団に参加した年月日が入党の日と見なされるという。

混乱を極めていた大陸を一人で飄々と縦断できたことは、本当に不思議に思われる。長年の理想を放棄して、危険に満ちた戦地にあえて立ち向かう道を選択させるほどに、延安の海外党員に対する扱いと整風運動は彼に深刻な傷を残したのだ。

一方、蘇蘭の入党は全く別の形で展開した。タイにいた時も、蘇蘭は共青団入団を勧誘されるほどに革命活動に熱心だったが、本人のお嬢様的性格のせいで、入党は実現できなかった。中共指導部は1941年（ママ）から、知識人、若者の大量吸収政策を打ち出した。候補期間を設けて、入党希望者を十分に観察して、合格者だけを入党させるという従来の方式は適用されなくなった。そのため、解放区の共産党員数は急増した。

1941年のある日、久しぶりに会った蘇蘭は、いきなり「私、入党したわよ」と興奮気味に私に告げた。

「ウソだろう」俄かの話に、私は半信半疑だった。

「本当だわ。しかもトイレで入党したのよ、うふふふ」

「ばかな、何を言っているんだい」

「本当だわ。仲間たちと一緒にトイレに入ったら、そこで用を足していた支部の書記から、『皆さんは入党したい？　入党した方がいいよ。私が皆さんの入党紹介人になるから』と、声を掛けられたの。その次の日、入党式が行われ、あの日一緒にトイレに行った仲間たちと宣誓式を行い、全員光栄なる共産党員となったのよ」

「……」[212]

---

[212] 抗日戦争初期、長征を経て、ようやく延安にたどりついた中共党員はわずか3万人に満たなかった。しかもそのほとんどは軍人であった。勢力増強のため、1939年3月5日に、中共中央は「関於大量発展党員的決定」を発表した。全国各地から延安およびその他の各根拠地に入った青年知識人に対して、勧誘工作に力を入れた。一時は「拉伕主義」（やたらに人を自らの陣営に引っ張っていくという意味）とも言われるような様相を呈した。結果として、大量の青年知識人を中共党内に獲得したが、その後、中共中央は再び入党基準を前の厳しいものに戻した。1939年8月25日に中共中央は「関於巩固党的決定」を公布して、各級の党幹部及び党員の階級的出身を審査することを決めた。とりわけ1940年に入ると、延安全体で大規模の幹部審査工作を実施した。こうしたやり方から、異質分子の侵入を防ぎながら、党員数を確実に増大させたいという中共指導部の思惑が窺える。

1941年に蘇蘭が入党した状況から、青年知識人に対する勧誘工作は継続されていたことが判る。入党経験がない者に対して積極的に入党を勧める姿勢と、海外の党組織に入党した者の党籍の継続は認めないという姿勢とは、極めて対照的である。

第九章　延安整風運動

第一節　整風運動の発端

1942年に整風運動[213]が発動された。運動開始当初の主な標的は、王明や周恩来、葉剣英などの中央レベルの人物だった。王明は教条主義だと批判された。周恩来は、経験主義だと糾弾され、新四軍の失敗の責任までも問われた。やがて、上層部レベルから徐々に一般の幹部層にまで広がった。

運動はまず、国民党占領区から来た人たちを小資産階級出身という理由で、批判の俎上に上げた。彼らに対し、「両条心」と「半条心」というレッテルを貼って、集中的批判が行わ

213　整風運動は、中共指導部が延安をはじめ、中共勢力支配の各根拠地で行った、思想教育改造、幹部審査、粛清運動を主とした政治的キャンペーンであり、以下のように1942年2月から1945年4月まで続いた。すなわち、先ず、1941年9月の政治局拡大会議で、博古、洛甫ら国際派の代表的人物の歴史問題を批判するなど、一連の周到な準備をしたのち、1942年2月に毛沢東は中央党校の入学式で「整頓党的作風」という講演を行い、整風運動の幕を開いた。当時、中共幹部の大部分は抗日戦争初期に革命に参加した人々であり、そのうちの相当部分は、学生や知識人の出身であった。彼らは、マルクス主義や中国革命の現実に対して正しい認識を十分には持っていないとみなされた。中共幹部は、毛沢東が指定した文書の輪読と自己批判、反省を求められた。同時に、今まで党内で絶大な影響力を持ったソ連留学組の国際派に対して、毛沢東は「反対党八股」を発表して、彼らを「宗派主義」、「教条主義」として強く批判し、その影響を中共から徹底的に排除しようと努めた。さらに文芸面では、1942年5月に毛沢東は「在延安文芸座談会上的講話」を発表し、文芸は政治に奉仕するというプロレタリア文芸論を提唱した。「王実味五人反党集団」の摘発を機に、同年10月より、整風運動は従来の文書輪読、自己批判、反省という運動形式から幹部審査、スパイ・特務の粛清へ方向転換した。1943年に入ると、運動は徐々にエスカレートして、多くの無実の人間がスパイ容疑をかけられて自白を強要され、時には自殺に追い込まれるまでに至った。同年末になると、むやみに事実無根の容疑をかける、行きすぎた行動は下火になった。それ以降、整風運動は中共第6回7中全会と中共第7回大会などの会議を通して、成果が確認され、中共党内における毛沢東個人の絶対的権威が確立されて、1945年4月には幕を閉じた。4年間の整風運動が中共にもたらしたものとしては、ソ連留学組国際派の失脚、中共党内における毛沢東の絶対的権威の確立、中共の大衆工作方法の定着のほかに、中共党内の結束強化を挙げることができる。中共の整風運動の評価は、整風運動は当時の中共にとっては必要なことであり、整風運動を通して不純な動機で革命隊伍に混入した者を排除し、同時に中共党員すべてに深く思想教育を授け、中共幹部全員の認識を一新させ、中共部隊の士気を一層高め、国共内戦勝利に確固たる精神的基盤を築いたというものである。1990年代に入ると、延安整風運動に関する研究が活発になった。中でも、陳永発の『延安的陰影』（延安の影）と高華の『紅太陽是怎様昇起的』（太陽はいかにして昇ったか）は、毛沢東の強力なイニシアティブの下で、整風運動がいかに発動され、展開されたかを、詳細な史料を用いて解明した。これらによって、上層部の権力闘争や思想改造運動の仕組みが明らかにされた。整風運動の光の部分のみを取りあげ、歴史的意義を強調する中共の公式見解とは対照的に、両氏の研究は、特定の政治目的のために、無実の人間までも恣意的に迫害した、整風運動の所謂恥部にも光を当て、それ以後の運動との関連性をも強く意識しながら、整風運動全体を歴史的考察の対象にした点で注目される。

半世紀も以上前の出来事である整風運動を述懐する欧陽氏は、時には激しい怒りの気持ちを露わにし、時には寂しい表情を見せた。多くの関係者が整風運動で酷い経験をさせられたにもかかわらず、回想録では称賛し、あるいは、行き過ぎの原因を毛沢東の側近であった康生一人の責任にして片付けているが、欧陽氏は、多大な苦難を人々にもたらした根源は、毛沢東にあったことを指摘した。

れた。「両条心」とは、革命の聖地延安に来ているにもかかわらず、国民党に対して希望を抱いていること。「半条心」とは、延安にいながら、半分だけしか共産党に心を許していないこと、すなわち共産党への忠誠心が不足していること。

運動の目標は、これらの「両条心」と「半条心」を「一条心」に改造することにあった。言い換えれば、すべての人間を党の指令を無条件に実行する道具に変えることにあった。その時点から中共の性質は変質しはじめた。一人ひとりの人間をそれぞれの感情や価値観を持つ人間としてではなく、歯車の一つとしてしか取り扱わなくなってしまったのだ。

整風運動中、延安の真ん中を流れる川の岸で行われた連続講演の中で、如何にすれば共産党員として合格できるかを説いた陳雲［1905-1995］の講話は、いまだに印象深く記憶している。陳は「党の指令を無条件に、忠実に実行することができて、はじめて共産党員として合格である」と力をこめて強調していた。党内で大きな影響力を持つ劉少奇が行った講話「共産党員の修養について」もその類のものだった。総じて言えば、これらの講話の趣旨は、共産党員として合格するためには、まず党の従順な道具になれという意味であった。

同じ時期の延安では自由と民主についての議論も盛んに行われていた。党内部に自由と民主があるべきかどうかという問題について、熱烈な討論が繰り返されたのだ。議論の最後に、毛沢東は次のように総括した。「党の内部にも、自由があるべきだ。しかし、自由はあくまでも手段に過ぎず、目的ではない。意見を統一し、集中するのが本来の目的だ。民主とは、党に向かって好き勝手に文句を言うことではない。我々の民主の目的は、みんなの考えを最終的に党の意見にまとめていくことだ。すなわち党の命令に従うようにすることだ」

この講話を聴いて我々は、大きな感銘を受けた。なるほど、内部の意見さえ統一できていなくて、どうして敵と戦うことができるだろうか。個々の兵士が、ばらばらの考えと打算を持ったまま、戦場に赴くような軍隊では、戦闘力を発揮できるはずはない、と。しかし、内部意見統一の重要性が強調される一方、違う意見がいかに党に反映されるかについては、ほとんど議論されることはなかった。結果として、個人の意見を尊重しない奴隷思想風土を党内に形成するきっかけとなったのである[214]。

整風運動は、指導者の講話を中心とした段階から、個人の経歴を審査する段階に進んだ。この段階では、疑わしい人間について、国民党に逮捕された経歴があるかどうかが、綿密に調査された。

多くの一般幹部、党員が整風運動に巻き込まれるにつれて、運動全体の雰囲気は険しさを増した。延安への忠誠が無条件に強調される一方で、ほんの少しでも豊かな外部世界を思う

---

[214] 毛沢東が整風運動を発動した目的の一つは、党内における彼個人の権威を樹立することにあった。ライバルである国際派のメンバーたちは、当然、この運動に協力しなかった。陳雲や劉少奇の講演は、毛に対する一種の援護射撃の役割を果たした。無論、彼らの講演は抗日戦争初期の間に大量に増えた党員の考えを是正し、党への忠誠を強めたという客観的な効果を収めたことも事実ではあるが。毛沢東に同調して、国際派に対して猛烈な批判を行った劉少奇は、地位が急速に上昇し、整風運動後は毛沢東に次ぐナンバー・ツーとなった。

気持ちも許されなくなった。その頃はちょうど、国民党による経済封鎖期に当たり、食糧事情は非常に悪く、一時は木の皮を食料に充てたほどの時期であった。

この時期のことで記憶に鮮やかなのは、昼間の暖かい日差しの中で、綿入れの蚕取りをしながら、クラスメートと愉快に文学談義を行った光景である。ただし、仲間との談笑の中で昔の豊かな生活に触れたりすると、すぐさまプチ・ブル趣味だとか、心がみんなと一つになっていないだとか、批判の矢を浴びせられた。そうしたなかで、劉少奇が発表した次の講話が人々に強いインパクトを与えた[215]。

「皆さんの中には、タイから帰ってきた人もいれば、大都市の上海からやってきた人もいる。上海のビルは高いだろうか。勿論高い。しかも、電気や水道などすべて完備されている。我々の洞窟よりもずっと住み心地は快適だ。しかし、あれは我々プロレタリアートのものだろうか。違う！ あれはブルジョア階級のものだ。我々プロレタリアートには全く無縁のものだ」

我々は普段、延安での質素な生活に懸命に耐えていた。上海のビルや、かつて堪能した美食を思いだし、時々話題にした。せめてこうした空想の会食によって、現実の空腹感をこらえようとするつもりであった。劉の講話は、そんな我々に大きなショックを与えた。自分の革命闘志はまだ不十分であり純粋なものではないのだと、みんなそれぞれに猛反省する気持になった。今から見れば、これは本当の奴隷化教育である。

毛沢東曰く、敵はすべてが悪いから、そうした敵は容赦なく徹底的に打倒しなければならない。異議を唱えること自体が反革命的行為である。大きな革命目標を実現するためには、共産党員は党の命令に無条件に従わなければならない。そうでないと、党は戦闘力ゼロの組織に陥ってしまう、と。あの時代には、こうした考え方は理に適ったように見えて、多くの人々に無批判に受け入れられた。それはさらに劉少奇などの指導者の訓話によって、いっそう強化され、人々の心の中に定着した。党内部の様々な声は段々と一つに統一されていった。

毛沢東指導部が発動した整風運動の矛先は、徐々に文学・芸術の分野にも向けられてきた。私が学ぶ魯芸でも、今までの教育は本当に正しかったのだろうかという疑問の声が聞かれるようになった。毛沢東は魯芸の教育方法を「ドアを閉めて、部屋にこもりながら、『洋教条』（西洋の教条）ばかりを勉強する」と、強く批判した。毛は、旧ロシアの貴族文学は吸収すればするほど、大衆から遊離するだけだと警鐘を鳴らし、「小魯芸を出て、大魯芸に入る」（大衆の中に入って、大衆に好まれる文芸をつくるべきだという意）というスローガンを唱えた。

これを受けて、魯芸の学生は専攻を問わず、数多くの秧歌隊（中国北方の民間舞踊の一

---

[215] 1930年代末延安に戻った劉少奇は党内において様々な機会に講話を行い、党内の理論家として頭角を現した。劉は王明らの国際派を批判したり、党組織の秩序建設に関する講話を行い、毛沢東と同一歩調をとった。

種）を作って、解放区の各地域に赴き、地元の人々と衣食住をともにしながら、文学創作の材料を収集した。『白毛女』（1945年前半作）や『小二黒結婚』（1943年3月作）などの作品は、この時期の代表作である。

毛沢東は魯迅の作品に対しても、控えめではあるが、次のような批判を断行した。魯迅の作品は確かに素晴らしい。しかし、それはあくまでも国民党占領区に限って言えることであり、我々の解放区では、魯迅のような作品は必要としない、と。

延安でいわゆる社会の醜悪さを暴露するものを書くことは、党への攻撃に外ならなかった。つまり、魯迅の時代はもう過去のものになったというのである。仮に魯迅が1940年代まで生きのびていたとすれば、恐らく共産党に粛清された王実味［1906-1947］と同様な人生の結末を迎えたであろう。

毛沢東の意図を受け、整風運動の中で、魯芸の教員たちは率先して今までの文芸思想を反省し、路線転換を図った。

最初、魯芸側は、不定期に休講をして、運動の進行状況を学生に報告する会を開いた。例えば、だれだれが摘発されたとか、王明はすでに過ちを認めたとか、毛沢東は整風運動の舵を切ったとか。運動中に何か大きな展開があるたびに、学校側から学生に知らされた。

運動の進行につれて、人々が周囲の友人や同僚を疑うようになり、相互不信、猜疑の空気は癌細胞のように延安の隅々まで蔓延した。夫婦の間でさえ相互に疑いあって、相手を当局に密告することも珍しくはなくなった。党指導部は『ソ聯共党史』の理論を用いて、運動の必要性と正当性を唱えた。それは、革命が最後の勝利に近づけば近づくほど、階級敵は人類の舞台から消える運命から逃れようと悪あがきをして、従来以上の残酷さに走るので、過酷な戦いを覚悟せよ、というものであった。このような宣伝の下で、潜伏している強敵を、手段を問わず徹底して隅々まで洗い出せという緊張した空気が延安を支配していた。

第二節　毛沢東の思想改造手法と延安川の水を飲んだ文芸幹部

いつも特定の問題を提起して、それを素材に議論を重ねるというやり方で、知識分子の思想改造を図るのが、毛沢東の常套手段であった。彼が、創作の源泉は理論と現実生活のどちらにあるのだろうかという問題を提起した当初は、極めて実践的な問いなので、多くの人々が争って自分の意見を発表した。現実生活が芸術創作の源泉であることは自明のようだが、毛沢東に言わせると、それは間違いだった。正しい指導思想が最も重要であり、プロレタリアの文学創作は、プロレタリアの指導思想を基にしなければならない、というのが彼の見解であった。毛沢東はさらに次のように付け加えた。ブルジョア階級には、彼らの生活様式がある。しかし、それは我々の生活ではなく、あくまでもブルジョア階級のものだ。それを文学の源泉にするのは大間違いだ、と。

議論が進んでいくうちに、学術的討論は、いわゆるブルジョア傾向のある芸術家に対する批判へといつの間にか転じ、勉強会は次第に闘争会へと変化した。総括の時、参加者一人一

人が、自分は勉強会によって、目から鱗が落ちた思いだ、これからは陰に潜む敵の摘発に全力を注ぐと、こぞって勉強の成果をアピールした。このような立場表明からは、もはや創作源泉をめぐる討論会ではなくなっていることだけは明白であった。

我々魯芸の文芸路線の学習活動にも、毛沢東はよく参加した。彼は時々「白毛女」や「雷雨」や「日出」といった魯芸で上演される演劇も見に来た。上演前、観衆席に座った毛はいつも何気ないように周りの人々と雑談を交した。

「最近、どんな作品を書いているの。どこで実地調査をしたの。最近の出来事をどう思う」等々、淡々とした口調で創作の状況について興味深げに質問した。

上演作品に対して、毛沢東は時々短くコメントした。「君たちの『雷雨』は、普通の農民は見て判るかな。老幹部たちからの評価はどう？」

ほとんどが農民出身の老幹部や農民の観客にとっては、「雷雨」は、確かに理解しにくい作品だった。すると、毛沢東は「君たちの文芸は一体どんな人間を相手にしているのだ」と、問題を提起した。ここまで来ると、大抵の人は、自分は間違っていた、これからは労働大衆を意識して、労働大衆向けの作品を作らなければならないと考えるようになった[216]。

毛沢東の文芸思想が短い間に延安で支配的になったのには、魯芸の教員たちを含む延安の文芸人が果した役割が大きい。彼らは率先して、自分たちは大衆離れしたブルジョア的文学趣味を持っていたことを反省し、いち早く毛沢東の大衆文芸政策に賛同を表明した。彼らは、建国後においても引き続き先頭に立って、全国文芸界の指揮を取り、文芸界における毛沢東の追随者として忠実に使命を果たした。

その代表的な人物として、周揚と何其芳を挙げることができる。周揚は魯芸院長で新中国成立後、中国作家協会の副主席、文化部副部長などの要職を務めた。彼は毛沢東の文芸思想の代弁者として、文壇から異端児を追放することに尽力した。しかし、文化大革命期には、彼自身が造反派によって監禁され、八年間の牢獄生活を送る破目に陥った。この辛い経験から、周揚は過去における自分の行き過ぎを認識したのだろう。復帰後の彼は、自分が迫害した人と再会すると、まず謝罪をして、許しを求めた。周揚に対し、怨念を抱く人は少なくなかったが、彼の謝罪ぶりを見て、「周揚がここまで涙を流せるなんて、大したことだ」と、恨みに一応の結末を付けた。

何其芳は魯芸文学系主任で、花や少女などの抒情詩歌が上手い詩人であったが、整風運動

---

216 欧陽氏の回想では、毛沢東は新劇「雷雨」は一般の労働者には理解できない、魯芸の芸術は労働大衆とかけ離れていると批判した。これは、文芸を政治に奉仕させる毛沢東の方針の一環であると考えれば理解できる。しかし、そもそもこれらの新劇を延安に登場させたのは毛沢東であることも指摘しておくことが必要であろう。艾克恩「『在延安文芸座談会上的講話』与延安文芸運動」（艾克恩『延安文芸回憶録』北京　中国社会科学出版社　1992年　pp. 408-409）の記述によれば、1939年末、毛沢東が魯芸新劇学部主任の張庚と話した時に、延安の文化活動が豊かではないので、曹禺の「日出」をやるように指示した。張庚らは、急いで準備に取り掛かり、翌年の元旦に初めて「日出」を上演した。その後、毛沢東の政治秘書胡喬木の指示のもとに、「雷雨」などの新劇が次々と上演され、毛沢東や幹部、知識人の好評を得た、という。

中に自ら反省を表明するや否や、すぐにプロレタリア気取りで振舞いはじめた。詩人の艾青は、何其芳の姿を次のように痛烈に風刺した。「微風がどこかの少女のスカートを吹き上げたとか、我が詩人の心はまた動かされた」などと現代詩風の表現を使い、ロマンチック志向が人一倍強かったのに、延安の洞窟で数日間を過ごしただけで、忽然とプロレタリアの代表を標榜して、まるで作家たちに君臨する皇帝であるかの如く振舞おうとした、と。

例外がないわけではない。蕭軍は、「私は魯迅を尊敬します。プロレタリア階級にだってまったく欠点がないというわけではない」という発言を堂々と行い物議を醸した。その後、彼が党中央の猛烈な批判の的になったことは言うまでもない。

共産党指導部の最大の過ちは、中国現代文学を国統区文学（国民党統治区文学）と解放区文学に分けただけではなく、作家たちについても国統区出身者と解放区出身者とを区別したことである。このやり方は国統区で戦ってきた作家の反感、不平の原因となった。同じ中国革命のために自分の身の安全も顧みずに尽力してきたのに、ただ戦う場所が国統区にあったというだけで、差別されたのでは、納得できないのは当然である。

一方、延安の文芸幹部は、自分たちだけが延安川の水を飲んで、延安整風運動の洗礼を受けた、正真正銘のプロレタリア闘士であると自負して、居丈高な態度で国統区の作家たちを人間改造しようとした。

多くの文化人は共産党の文芸幹部になった後は、人々の心に長く残るような作品を書くことはなかった。作家というのは自分自身の作品によって評価を受けるものである。見るべき作品をもたない作家では話にならない。解放前、国統区で「雷雨」（1934年作）など秀逸な脚本を世に出した曹禺［1910-1996］は、新中国建国後、毛沢東らの指導者から大衆向けの作品を書くようにと度重なる指示を受けた。しかし、農民や一般労働者の生活になじみのない曹禺は結局党の任務を遂行できず、後半生の長い時間を不毛のまま過ごした。

党の指導部が、文芸題材を労働者、農民、解放軍兵士だけに限定して、また、書き方と表現方法についても多くの制限を課すなど厳しい創作環境を作ってしまうと、文学創作活動は衰退の一途を辿ることは必至であった。

王実味、丁玲、陳企霞［1913-1988］などの著名な知識人は、延安の現状に疑問を投げかけるような作品を発表したため、毛沢東の批判を受けた。王実味は『野百合花』（1942年3月13日解放日報副刊面掲載）という作品によって、延安に存在する等級制度、不平等現象を、痛烈に諷刺した。王実味は、反党分子だとして打倒され、恐怖の審査、批判を強いられた末に、1947年7月に処刑された。一方、女性作家丁玲は、延安の上層部は牛乳を飲んでいるのに出産した女性には牛乳が与えられないと不平等を批判したが、党からの強い圧力に屈して反省の意を表明したので、政治的不幸から免れることができた。

第三節　整風運動の常套手段

毛沢東は、延安には蚊の数ほどもスパイが潜伏しているという警告を発して、党報（党の

発行する新聞紙)、墻報（壁新聞)、と小広播（口コミ）という三つレベルで党への不満を漏らした人物を徹底的な摘発する運動を呼びかけた。摘発運動では、多くのスローガンが作られ、緊張した雰囲気の醸成に一役を買った。その中には「擦亮眼睛」というキャッチフレーズがあった。「目を光らせよ」というのが字面の意味だが、延安には無数の敵が思いがけないところに潜伏しているので、常にアンテナを張って、注意深く回りの人間を観察しろ、誰でも疑え！ という強いニュアンスが込められていた。

一般幹部や民衆の間に口コミで広がっている党への不平不満は「小広播」と言われた。「小広播」の摘発に当たっては、当局が調査票を配布して、一人一人に今まで自分が発したことがあるか、あるいは自分の耳に入ったことがある、意見や不満を調査票に記入させた。これと並行して、康生は、幹部集会で幾度となく「言者無罪、聞者足戒」(たとえ批判が不当でも批判者を咎めてはならず、聞く者はその中から自分に対する戒めをくみ取るべきである）という諺を使って、幹部全員に向って遠慮なく意見を出すように呼びかけて、発言しやすい雰囲気の醸成に腐心した。

しかし、党の呼びかけに応じて、自分の過去の発言を馬鹿正直に調査票に記入すれば、間違いなく大変な目に遭う。まず、調査票に記入した不適切な発言について、徹底的な白状を強要され、次は、友人や同僚たちの不適切と思われる発言、とりわけ「放毒（党を攻撃する)」的性格の発言を調査票に記入するように命じられる。

各人は、今までの自分の話しや、友人または同僚の話の中に、反党的要素がなかったかどうかを神経質なまでに懸命に点検せざるを得なくなった。中には、友人や同僚の話を断片的に捉えて、党に告発する者も少なくなかった。配偶者の不謹慎な発言を反党発言として党に報告したケースも珍しくはない。いつの間にか、自分も誰かによって党に告発されたのではあるまいか、彼のこの前の発言は党のことを攻撃したものではなかろうか、などと無性に回りの人々を疑う心理が人々を支配し、根拠のない告発が頻発した。革命の同志たちは、次第に不信、猜疑、疑心暗鬼の雰囲気に包まれた[217]。

ここで三つの実話を紹介したい。

まず、同じ洞窟に住んでいた王光震の話。彼は後に黒龍江省ハルビン市の書記を務めた。長く付き合った恋人の蘇蘭が、1942年5月に突然別の人と結婚したので、私が意気消沈していたところ、王光震は私をこう慰めた。「老欧、ずっと前から、君に出来るだけ早く彼女と結婚するように勧めたではないか。ここ延安では、恋愛に長い時間をかけることは、賢いやり方ではない。延安は男18人に、女は1人という男女比率だから[218]、男たちはみんなイラ

[217] 調査票を配布して「小広播」を記入させ、または同志間、友人間、夫婦間で告発させて、大量のスパイ容疑者を作り出し、これらの容疑者に対して残酷な尋問を行ったり、処罰を課した。これらの高圧的な手法によって、一種の恐怖社会的な雰囲気を作り、人々をより容易にコントロールしようという狙いがあったものと考えられる。

[218] 男18人に女1人という男女比率は、当時の延安幹部の共通認識であったようである。多くの古参幹部が、結婚相手がいない現実に直面した。例えば、1929年に入隊して、翌年に入党した軍の古参幹部である竇尚初は、延安中央党校に入学時に、30歳を過ぎていたが、まだ結婚できな

イラしている。話によると、延安の男は、三つの条件さえ揃っていれば、誰でも嫁さんにするという。すなわち、人間であること。そして女であること。最後に生きている女であること。君の彼女は可愛い子なのに、結婚せずに放置したので、他人に奪われてしまったのだ。それは何の不思議もないことだ」

王光震が言ったことは、誇張ではなく延安の実情であった。男女比率の極端な不均衡のため、男たちは誰もが嫁探しに、血眼になっていた。自分の掌中の権力を利用して、配偶者を確保した者もいると聞く。

ところが、「小広播」への取り締まりが始まると、王の話は告発されて、彼は厳しい尋問をうけた。尋問担当者は、王光震を激しく批判した。「こんな暴言を放った時、一体お前の頭の中に、階級観念というものはきちんとあったのか。我々革命同志は、同じ志を持つ同志を配偶者として選択しなければならない。我々は資産階級の女性などは、まったく眼中においていないのに、どうしてお前は、生きた人間でさえあれば誰でもかまわないなどと断言したのだ。我々大勢の善良かつ純朴な共産党員を中傷し、侮辱した、極めて悪質な発言だ」、と。

尋問担当者は、さらに私を含む周囲の人間にも証言を求めた。私は自分の良心に反して偽りの告発をすることには賛成できなかったので、「いや聞いた記憶はありません」と曖昧な答えでごまかしたが、脇から「はい、私は聞きました」という証言者が出てきた。批判会は、俄かにエスカレートして、糾弾はいっそう激しいものとなった。容赦なき批判が繰り返された末、王光震は破壊分子であると宣告された。

また、林衍という女性の知合いがいた。ある日、私と同級生の石涛は、道端の高粱畑から現れた彼女に偶々出くわした。当時の延安には公衆便所はあまりなかったので、女性が高粱畑の奥で用を足すことはよくあることだった。私たち二人はそれを知りながら、わざと「おい、君が農民の高粱を盗んでいるところを見つけたぞ」と冗談めかして彼女をからかった。さすがに「違う。私はあそこで……」とは言いにくかったのか、彼女は「あんな野高粱［野生高粱の意］など、どうってことはないでしょう」と言い返した。

よくある日常生活の一こまに過ぎないが、整風運動になると、それは格好の批判材料とし

かった。彼は、結婚相手探しを最重要課題とした。当時の心境を、彼は次のように回想している。「私は半分冗談でこう放言したことがある。私の条件は三だけ、一つ、人間。二つ、生きている人。三つ、女の人、と。冗談ではあったが、確かにかなり焦っていた」。率直な竇は、結婚問題を解決するため、仕事上の機会を利用して、いろいろ画策したことを素直に吐露している。例えば、「抗大第二分校の時、私は婦女救国会の主任クラスの人を結婚相手として見つけたくて、霊寿県政府に行ったことがある。そのため、仕事や自分の勉強にはなかなか集中できなかった。中央党校第二部に来ると、整風運動に関する文書を読みながら、心の中には様々な考えが浮かんだ。新四軍に配属されれば、蘇州や杭州の美女を選び放題になるのではないかとか、故郷の安徽省にも女性は多いので、もし延安に来てなかったら、結婚問題はすでに解決済だったかもしれないとか、と」（竇尚初「学風学習初歩総結」、延安中央党校整風運動編写組編『延安中央党校的整風学習』第一集　中共中央党校出版社　1988年、pp. 233-235）。革命のために延安に来たとは言え、青年たちは結婚という切実な問題も抱えていた。多くの幹部は竇のように焦り、自分の職権を利用して解決しようと試みた。欧陽氏が遭遇したケースにも、等級制度の影が見える。

て誰かによって掘り出された。批判会の責任者は、林衍が、労働人民が汗を流して植えた作物を「野生のもの」と決め付けたことは、人民の労働を尊重せず、高粱が労働人民の結晶であることを根本から否定して、誰でも持ち帰ってもよいというメッセージを流し、延安の社会秩序を乱そうという意図があったためであると結論づけ、彼女を「この恥知らずの女！」と罵倒した。

いきなり罵言を浴びた林衍は、何の反論もできなかった。更にひどいことには、責任者は、ダンス好きの林衍はダンスをするふりをして、密かに情報交換を図っていたと言い放った。

もう一例。タイ華僑の出身で陝北公学に学んでいる周介文［1917-1968］は、狗肉を好物としていた。ある日彼は運よく野良犬を捕らえた。学校の準備が忙しいので日曜日になるまで、洞窟の中に密かに隠して、日曜日に料理することにした。学校からの支給品は、洗面兼洗濯用の素焼きの桶一つで、料理用の適当な鍋がなくて困った。同じ洞窟に住むタイ華僑の葉駝は、黄覚生が銅製の鉢を持っていることを知っていたので、すぐに借りに行った。好都合にも、黄覚生は留守だったので、「生活改善」に来るようにと置き書きを残して、銅鉢を無断借用して持ち帰った。出来上がった久しぶりの狗肉料理はあまりにも美味そうなので、彼ら数人は黄覚生を待ちきれず、先に舌鼓を打って平らげてしまった。ちょうど食べ終り、肉の後味を悠然と堪能している頃、伝言を見た黄覚生が銅鉢を取り返しに来た。僅かな肉片と数滴の肉汁しか残っていなかった。彼らは空腹のあまり先に食べてしまったことを詫びた。彼女は、肉片に全く手を付けないばかりか、何も言わなかった。彼らが、銅鉢を洗って返した時、黄覚生は口を開いた。「この銅鉢は何を洗うのかを知っているの。これは私たち女性が生理中に使うものよ。汚いことも、規律違反も恐れずに、あなたたちは、農民から盗んだ狗をこの銅鉢で煮て食べるなんて。華僑の面子が失われてしまう」、と。この後、狗肉を食べた人は何回か自己批判書を書く破目になった[219]。延安では生理用のナプキンは支給されることになってはいたが、常に不足していた。夏は川で下半身を洗うことができるが、川が凍てつく冬は洗えないので、そのための容器として、この銅鉢は使用されていた。

整風運動が起こってから、彼女が所属するグループの人が私たちのところに来て、黄覚生の銅鉢を使って狗肉を煮たかどうかを確認した。これは黄覚生を批判する材料の一つとされた。彼女が我々に銅鉢を提供して、狗肉料理に協力したことは、軍民関係を著しく損なう原因になったと批判されたのである。なぜならば、私たちが食べた犬は、農民の飼い犬に違いなく、野良犬であるはずはなかったからである。

ちなみに、この銅鉢は、黄覚生がバンコクを離れる前に、夫の李華が用意したものである。李華は衛生紙（紙質が粗末な女性用の生理用ナプキン）一袋と銅製の鉢一個を用意して、私に港で渡してくれと頼んだ。私はこの二つのものを持って港へ向かった。そこで出港

---

[219] 欧陽氏は『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 60-61 にも、この話を書いている。

する黄覚生に会って、預かったものを彼女に渡したのであった。

上記の三つの実話は、まだ笑える要素もあるが、尋問のやり方は聞いただけでも鳥肌が立つほど恐ろしいものであった。尋問担当者は、昨日までは同志であった被疑者に対して、満足できる結果が出るまで、文字通り手段を選ばずに、残酷な仕打ちを続けた。身内に対して、敵側の人間に対する以上に非情かつ残酷の限りを尽くしたのである。私が幹部審査のため軟禁された時も、連続して丸四日間眠らせてもらえなかったこともある。

苛酷な尋問による肉体的、精神的苦痛に耐えられなくなって、一時的な逃避のために、無関係の人を架空の共謀者として白状したケースも珍しくはなかった。尋問担当者の脅しに屈して、無関係な誰かを自分のボスであると「自白供述」することは、無論良心に反することではある。かといって、断固として拒否し続ければ、もっと酷い目に遭うことは目に見ている。私は、一度どうしても耐えられなくなって、自分が所属する支部の書記を共謀者として偽りの告発をしようかと動揺したことがある。しかし、互いの出身地（私はタイの出身であるが、書記は中国北方の出身であった）がかけ離れ過ぎていることに気がつき、話をうまく取り繕うことは無理だと考え直して、「自白」は止めにした。

第四節　一年二ヶ月の隔離審査

1942年のメーデーの前、突如、最愛の人、蘇蘭は他の男性（趙安博）と結婚することになった。趙安博は東大卒で日本語、ドイツ語に堪能、延安の日本工農学校で、校長の岡野進（野坂参三）の下で副校長をしていた。［蘇蘭は、1941年初め（ママ）に共産党に入党。1941年8月に陝北公学を卒業し、延安から数十キロ離れた安塞県八路軍参謀部で任務に就いた。1942年メーデーの日の前夜に趙安博と結婚した[220]。］

黄覚生から、私の再入党を祝福する返事が届いた数日後、蘇蘭からメーデーの前夜に結婚式をするので参加して欲しいという招待状が郵送されて来た。メーデーの休みに私とデートの約束をするために、蘇蘭はいたずらの手紙を書いてきたものだと、私は思い、本気にはしなかった。ところが、メーデー前夜の晩に、庄国英が駆けつけて来て、蘇蘭は所属組織の上司と結婚したと告げた。青天の霹靂のような、彼女の結婚を耳にした瞬間、私は言葉を失い、茫然自失した。翌日のメーデーの日に黄覚生が訪ねてきて慰めてはくれたが、心は全く晴れなかった。心情的にどん底に落ち込んだ私は「我不愛西北的春天」（西北の春は愛せない）という800字ぐらいの短いエッセイを書いて、壁新聞として張り出した[221]。

220　呉田夫「緬懐蘇蘭同志」、『泰国帰僑英魂録、第五巻』p. 268。

221　現代中国革命史は、壁新聞の役割を抜きにしては語れない。現代中国の人々が壁新聞について持っている最も鮮烈な記憶は文化大革命時代のものであろう。文化大革命時代を経験しなかった人でも、その時代を題材にした映画を見れば、赤一色の壁新聞に圧倒されることがしばしばである。毛沢東が大衆を発動して、「プロレタリア文化革命」を進めた時代に、人々は壁新聞を使って、職場の同僚を告発したり、幹部を打倒したり、指導部の最高指示を伝えたりした。政治生活における壁新聞は、延安整風運動まで遡ることができる。整風運動初期に、毛沢東は学生や一般知識人が、国際派の各機関の責任者や正統派のマルクス主義理論家を告発することを奨励した。

写真 17　延安の陝北公学跡（2007 年 1 月）

エッセイの内容は、次のようなものであった。つまり、延安のある陝西省の北部、即ち「西北」は、凍てついた長い冬が終わると、そのまま真夏に入る。春らしい日はほとんどなく、新緑の気配も少ない。そんな西北の春はとても好きになれない、と。無論、明るい文章ではなかった。

読んだ学友たちは、すぐに「西北」とは陝北のことであり、「春天」とは共産党を暗に指していると批判した。私がいくら詳しく説明しても、彼らは納得しなかった。私は彼らに黄覚生に真相を尋ねてくれと言うしかなかった。幸い黄覚生が明瞭に説明してくれたので、学友たちは私を許した。しかし、私のこの「罪証」は、私の档案袋の中に永久に保存されるこ

これを受けて、官僚化、等級化しつつあった延安の現状に不満を持つ、王実味らの知識人が解放日報にエッセイを発表したり、壁新聞で所属機関の責任者の官僚主義を告発したりした。一時、延安はこのような壁新聞に覆われた。しかし、このような告発は、中共上層幹部の利益に抵触し、毛沢東本来の意図にも反したので、「自由主義」と批判され粛清された。「自由主義」として批判を受けた王実味は、やがて特務・スパイ・トロツキストの容疑をかけられ、1947 年に処刑された。整風運動の第一段階は、毛沢東が指定した 22 本の公式文書を輪読して、自分の理解、認識を報告書にまとめて上司に提出する段階。1943 年半ばに第二段階に入ると、党幹部、一般の人々が審査の対象とされ、厳しい幹部審査が実施された。この時期には、他人から少しでも不審に思われる言動があった者や、以前国民党側の人間となんらかの関係も持った者が、告発され審査された。不審の度合が高いと思われる場合は、隔離され延々と尋問されることが少なくなかった。欧陽氏のエッセイは、プライベートな事件に起因した情緒的なものに過ぎないが、魔女狩の風潮がエスカレートしていくなかで、中共を中傷するものだとして糾弾されたのである。

とになり、整党のたびに、特に反右派闘争や文革の時に、暴き出されて清算を求められた。その度に、事情を知っている黄覚生に証言を頼んだ。もし、あのメーデーの日に、黄覚生が訪問してくれてはいなかったら、私の潔白を証明してくれる者は誰もいなかったであろう。

この文章が、「罪証」として私に悲劇を招いた最初のケースは、延安の整風運動においてである。

私は、この文章を根拠に党の路線に反対する野心分子であると無実の罪を着せられて幹部審査の対象となり、社会情報部に1年2カ月間も軟禁され絶え間なく尋問を受ける羽目になった。社会情報部とは、機密情報工作のトップである康生が牛耳っており、反党分子や特務の被疑者を軟禁して取調べる機関である。当時、康生が統轄する安全機密工作部門は三つあった。一つは棗園（ソウエン）にある、主にスパイ容疑者を収容して取調べる施設。もう一つは、陝北公学（ママ）に置かれた、逮捕歴がある人物を取り扱う施設。第三番目は、私が送致された社会情報部であり、三つの施設のなかでは、容疑が最も軽微な人たちの収容機関であった[222]。

私は1941年半ばから魯芸で二年間学んだ。1944年近くになると、日本の敗北が明確になったので、延安では戦後のソ連との連携を念頭において、華僑出身者を延安大学に入学させ、ロシア語を学習させることになった。私もその一人に選ばれ、ロシア語学習を開始した。

延安大学ロシア語学部で8カ月間近く学習して、ロシア語の醍醐味を覚えはじめた頃のことである。ある日、新しい勉学任務があるので、社会科学院の社会情報部に出頭するようにという通知が届いた。自分の好きなロシア語の習得からいきなり外されて、大きな困惑と不満を覚えた私は、普段から仲のよかったロシア語教官の黄正光に自分の気持ちをぶつけた。黄正光は、スペイン内戦に国際縦隊の一人として参加した経験をもつベトナム華僑であった。

「成績は常に上位4、5番以内で、成績のことで先生の面子をつぶすようなことは一度もしていないのに、どうして社会科学院への異動を命じられたのですか」という私の質問に、黄正光は「これは幹部課が決めたことだから」と答えるだけであった。彼の顔には、無力感が漂っていた。幹部課とは、各単位の党委員会の組織部に設置された、人事異動を担当する部署のことである。

党員である以上、党の決定に服従するしかないことは判っていたが、心は重く苦痛に満ちていた。ロシア語の勉強をもっと続けたいと念じながらも、数少ない私物を抱えて延安大学

---

222 高華によれば、整風運動期間中、スパイ容疑者の拘置施設として以下の四つがあった。社会情報部看守所、西北公学、陝甘寧保安処、西北行政学院。高華氏によると、社会情報部看守所に収容された者は罪が最も重い者であり、王実味もここに3年近く監禁された。一方、欧陽氏は、社会情報部に収容された者は罪が軽微な者と回想しており、両者間に齟齬がある。延安整風運動における人員監禁は、現在でも政権にタブー視されているので、公開された文書中には関連の記述がほとんど見当たらない。高華の記述も、主として関係者たちの回想に依っている。

を後にして、5キロ離れた社会情報部に向かった。悔しさとやり場のない怒りが心中を去来して、途中何度も立ち止っては、山道の黄土の塊を握り潰した。

社会情報部に着いた途端、「活動範囲を自己の洞窟だけに限り、ほかの同志との接触は一切禁止する。隣の洞窟を訪ねることも禁ずる。審査に備えて、自分の問題を徹底的に反省して置くように」と、宣告された。私は頭の中が真っ白になった。一体何が生じたのか皆目見当がつかなかった。その日から薄暗い洞窟の独房で、反省と自白を強いられる1年2カ月が始まった[223]。

尋問を担当する幹部審査班は、陝北すなわち地元出身の農民もしくは長征前後に入隊した紅軍兵士から成っていた。彼らがこのような重要任務を任せられていたのは、党に対する忠誠心が極めて高いからであった。外部世界についての彼らの知識は極端に欠如しており、尋問においても驚くべき常識不足を曝け出した。しかし、無知が、逆に彼らの純朴さの証として上層部から信頼される原因であったことが、後になって判った。

尋問担当グループはどれも「規勧小組」という名称で呼ばれていた。過ちを犯した同志を諫め勧告して救済するという意味ではあるが、名称とは裏腹に、彼らがやったことは無理やりに事実無根の自白を強い、無実の人間に罪を着せることに外ならなかった。

私の尋問を担当したのは陝北出身の農民幹部から成る三人組であった。尋問が始まると、担当者はまず、「我々は過ちを犯した同志を救う運動を行っているのだ。犯した罪自体は、もはやそれほど重要なことではない。より大事なことは、自分の過ちをどのように認識しているかということだ。自分の過ちを隠さずに党に白状すれば、党から寛大な扱いを受けることができる」と、切り出した。

自分がここまで疑われていたとは想像さえしていなかったので、返す言葉に詰まり咄嗟には返答ができなかった。私の胸中の不平は高まる一方であった。

「では、お前は当初どうやって入党したのだ、あの文章（「我不愛西北的春天」）は、誰の指示で書いたのだ、タイ政府からどんな指令を受けているのだ。このあたりの話を聞かせてもらおう。まず、タイからここまでの『路条』は、誰に発行してもらったのだ」

「路条」とは、共産党が支配する解放区において、共産党が発行する通行許可証であるから、国民党の勢力範囲には存在するはずもないのである。

「国民党が『路条』を発行することはありませんが」と、私は答えた。

「よし。では、パスポートは持っているのか」

「もちろんです。パスポートがなければ、ここに来ることはできません。私はまず、タイで蟻光炎に紹介状を書いてもらい、その後国民党の教育部から、華僑学生である欧陽は重慶

---

223 社会情報部などの看守所に監禁された者は、比較的罪が重いとされる人たちである。整風運動に入ると、看守所の収容人数が急上昇し、各看守所当り少なくとも五百人に達した。各看守所は山の斜面に数十個また数百個の洞窟を掘って、収容スペースを拡大した。これらの監禁専用施設に収容された者は容疑が重いとされた人々で、厳しい尋問を受けた。より多くの人たちは、各自の所属機関内に拘置されて、移動の自由を制限されたまま批判や尋問を受けた。

で進学したいという旨の紹介状を発行してもらいました」
「もういい」と担当者は私の説明を制止した。「俺が尋ねたのは、パスポートのことだけだ。それは国民党政府が発行したパスポートだろう」
「そうです」
「では、ここに国民党の『路条』と自分で書け」と尋問者は調書を指して、有無を言わさずに命じた。
「まずい！」と直感した私は、誤解が生じないように、説明に努めようとした。「パスポートがないと、国民党の勢力区を通過することは、不可能です。必ず捕らえられるので」
「こちらが聞きもしないことを勝手にしゃべるな。質問だけに答えろ。それからどんな紙幣を使っていたのだ」
「国民党当局が発行した紙幣、すなわち法幣です」
「発行元は？」
依然として高飛車な態度である。
「国民党政府財政部です」
あえて述べる必要がないほどに常識的なことだと思いながらも、私は反発心を押さえて答えた。
「そうか。国民党政府の財政部が出している金だな。次に、お前がここに来る時に利用した交通手段は？」
「長距離バスです」
「もちろんそれくらいは知っている。問題なのは、どちら側の長距離バスだったかだ」担当者の口調は一層険しさを増した。
「国民党政府管理下にある会社の長距離バスです」
「ここに国民党の交通手段を利用したと自分で書け」
「よし、お前、自分の目で今書いたことをよく読め。国民党の路条と国民党の紙幣、そして国民党の交通手段を利用してお前は延安に入った。お前は本当に革命のためにここに来たのか」
罠であると判ったその瞬間、私は怒り心頭に発した。と同時に、脱力感すら感じた。いくらこちらがまともに説明に努めても、相手はまったく聞く耳をもたない。それどころか、故意に話しをすり替えて、強引に無実の罪を着せようとしていることは馬鹿にでも判った。
彼らの目的は、私に有無を言わさず特務容疑を認めさせることにある。
「お前のボスと手下の名前さえ言ってくれれば、いいのだ」というのが、彼らの決まり文句だった。このような荒唐無稽な尋問ばかりでは、一体いつになったら、無実が晴れるのだろうか。激しい怒り、強い不安、二つの気持ちが私の心中で絶えず渦巻いた。苦悶の果てに、私は自分の上着を破った。
陝北地方出身の三人の尋問員は、驚くほど常識に欠けていた。私は「輪船」[汽船の意]

でメコン河を渡ってラオスに着いたと説明したら、船を見たことがない内陸出身の彼らは「輪船」という言葉の「輪」の字に気を取られて、「何の『輪船』だ、車輪はいくつ付いているのだ？」と的外れな質問を投げかけてきた。呆気にとられた私は、なぜかすんなりと「四つ」と答えた。こんな連中とはまともな話はできないと思うしかなかった。

私がタイから帰ってきた華僑であることから、三人の尋問者は次のストーリーを編み出した。

「お前はタイの親日派ピブーン首相から派遣されて、中国に戻ってきたスパイ（特務）ではないのか。本を正せば、裏の大ボスは日本だろう。日本は共産党を一番嫌っているから、きっとお前を手先として派遣したのだ。ただ、そのままお前を送り込むことはできないから、ピブーン首相を通して、華僑の名を使って延安に潜入させたのだ。そうだろう！」

欧州で第二次世界大戦が終結する前、当局は被疑者たちを集合させて、ソ連軍の攻勢を聞かせた。その前にはいつも「お前らの大ボスのヒットラーはもうおしまいだぞ。お前らはまだ頑として抵抗するつもりなのか。早く覚悟して、白状しろ」という訓話をした。60年後の今だから笑って言えることだが、当時の心情は怒りという言葉だけでは言い表せない[224]。

整風運動の対象とされた人々は、無実の容疑をかけられただけではなく、人格に対する侮辱も受けた。たとえば、食堂などでは「特務野郎」と呼ばれた。自由に歌うことも許されなかった。我々が歌ってよいのは、ゴーリキーの歌だけで、インターナショナルも許可されなかった。このような非人間的な扱いに耐えられなくて、黄土の崖から飛び降り自殺を図った人は少なくなかった。

私は苦しい長旅の末、ようやく憧れの延安に到着したのに、最愛の人は奪われ、その上、国民党のスパイだと決め付けられたのだ。入党した時には、こんな扱いを受ける日があろうなどとは、到底想像さえできなかった。今まで命をかけてやってきた活動とは一体何だったのだろうか。

友人や同僚の名前を白状させて、スパイの集団摘発につなげることが尋問担当者の目的であった[225]。整風運動が終わったのち、我々華僑出身者が誇りに感じたことは、自らの保身の

---

[224] 欧陽氏が受けた尋問詳細は、党内同志に対する審査というよりも、敵陣営のスパイであると見なされた人間に対する尋問そのものである。荒唐無稽な質問は、時には人の笑いを誘ったであろうが、多くの場合質問を受けた人は窮地に追い込まれた。この種の質問は、欧陽氏が運悪く、たまたま質の低い尋問者に当っただけである、ということではない。むしろ、当時では普通の光景であった。高華『紅太陽是怎様昇起的』（香港、中文大学出版社、2000年）は、尋問前に確証もないのに無理に容疑を決めて、その容疑を前提として尋問するという当時のやり方を明らかにしている。

[225] 毛沢東の政治秘書胡喬木によると、延安整風運動によって摘発された特務・スパイ被疑者の数は1万5千人以上である。当時の延安には、僅か3万人余の幹部しかいなかったなかで、この人数である。1万5千人の被疑者のほとんどは無実であり、後に冤罪を晴らされることになった（「整風運動：1943年“九月会議”前後」、『胡喬木回憶毛沢東』、北京、人民出版社、1994年、p. 280）。これだけ多数の人々が巻き込まれた理由は、審査、尋問の担当者が被審査者に対して、誘導したり、自白を強要したり、場合によっては拷問を加えたからだと考えられる。過酷な尋問に耐えられなかった人たちは、尋問担当者の言いなりになり、まったく関係ない同僚や友人をスパイだと

ために、仲間を売り渡した人は一人もいなかったことである。

共産党のこのようなやり方は、いうまでもなく華僑出身の共産党員を大きく傷付けた。

第五節　共産党の華僑不信：失敗に終わった華僑工作

延安の華僑工作は基本的に失敗に終わったと私は考えている。

党は我々華僑が延安に到着した当初から、常に猜疑の目を私たちに向けて信頼しようとはしなかった。延安の地元幹部は、外国での豊かな生活を捨てて、どうして遙か延安にまで来たのかを理解できなかったようである。彼らは、我々の純粋な愛国的情熱を素直に受け止めることはなかった。

私が最も強い衝撃を受けた事件は、最愛の人と二人で苦労して、ようやく辿りついた延安で、彼女を奪われたことである[226]。何故私の最愛の人を私から奪うことが出来るのだ！　旧社会[227]でも、「朋友妻不可欺（友人の妻に手を出してはいけない）」という社会的道徳はあったのに。それ以降、私は、党が宣伝することは、何も考えずに何でも受け入れるということはなくなった。心の奥のどこかに、何か違うのではないかという疑問が時々生じた。

私は、延安で多くのことを経験した結果、党の方針の一部には疑問を覚え、距離を置いて党を客観視しようと努めるようになった。

黄覚生［1913-1969］も自分の経験から醒めた目で党を見るようになった一人である。彼女は、文字通り自分のすべてを党に捧げた。さらに自分を高めようと、延安にまでやってきたのだが、整風運動の幹部審査で特務容疑をかけられた。

彼女が幹部審査の対象となる発端を作った責任は、私にある。私が幹部審査で軟禁されて、誰に指示されて延安の闘志を挫くために「我不愛西北的春天」を書いたのだとか、1938年2月にバンコクで呉琳曼と許侠が逮捕された時に、一緒にいたお前はどうして逮捕されなかったのだ、とか追及された際に、証人として彼女の名を挙げた。これが彼女に大変迷惑をかけることになった。

彼女の幹部審査班の尋問員は、黄覚生は汕頭でどんなふうに逮捕されたのだ、どうして出獄できたのだと、私に尋ねた。彼女が逮捕された当時は、私はまだ子どもであり、また汕頭にも一度も行ったことはないと述べたうえで、李華から聞いた話だとしてつぎのように答えた。黄覚生は、1932年に汕頭で初等中学在学時代に、工農革命軍を支持する学生ストを指導して当局に逮捕された。しかし、彼女は未だ共産党員ではなく、かつ経済的に裕福な親族

告発した。巻き添えにされた無実の人が、同様に尋問に耐えられずにさらに別の無関係の人を告発し巻き添えにしたので、被疑者数は途方もなく増大した。

226　生涯の伴侶となることはできなかった60年前の恋人の名前を口にして、86歳の欧陽氏の目が潤んだ時は、インタビュアーの村嶋と鄭成は深い印象と感慨を覚えた。欧陽氏は、彼女の裏切りは全く口にしなかった。

227　中国では、1949年共産党政権樹立以降の時期を「新社会」と呼び、それ以前の時代は一律に「旧社会」と呼ぶ。この「旧」は単なる時期が古いということだけでなく、醜悪な社会現象はすべて過去のものだというニュアンスが込められている。

が釈放のために金を積んだので、一応事なきを得た。その直後にバンコクに避難して来た、と。

尋問員は私の答えを信用せず、私と黄覚生はスパイ仲間であると疑った。このことは、私に対する尋問でも重点の一つとされた。「お前達は一味だ。逃げることはできないぞ」と、彼らに何回も脅された。

私は1982年に退職後、延安で黄覚生を審査した幹部審査班員であった、タイ華僑の譚亮濱［1917-1988］からつぎのような話を聴いた。幹部審査で尋問員は、黄覚生が自ら好んで革命のために、バンコクの世界的に有名な白米の美味しい飯を捨てて、わざわざ陝北にまで来て不味い粟飯を食べているとは信じなかった、また、彼女が1歳の愛児をバンコクに残して、家庭生活の幸せをも捨てて、革命のために寒い延安に来たことも信じなかった。尋問員は、彼女は汕頭で逮捕された時にスパイにされたのだと見て、彼女に何度も説明を求めた。千人を誤殺したとしたとしても共産党員は一人も逃がすなという反動派が、どうして彼女を殺さなかったのだと問い詰めた。彼女は、母の兄弟がバンコクに居るので組織の方で調査して欲しいと求めたが、尋問員は、彼女は狡猾だと言って憚らなかった。尋問員は彼女に、彼女と私それに何人かの同郷者との関係を詳述させようとした。彼女はどの人も善良な同志であり、地下組織の掟により誰も自分のことを多くは語らなかったので詳しいことは知らないと答えるに留めた。

尋問員は成果がでないので手を替えて、自分が最もよく知っている人、また、自分のことを最もよく知っている人の名前を挙げるだけでよいと誘導した。彼女は、安易に人の名前を言えば、その人にとんでもない迷惑をかけることになると直感した。しかし何も言わずには済まされないので、「母が私のことをよく知っているが、もう亡くなった」と答えた。この後、譚亮濱は彼女の審査班員から外されたという。審査班は、彼女の夫であった李華を、紅旗を掲げて党に反対する「紅旗党」である、と疑っていた。李華はかつて譚亮濱を指導したことがあったので、譚亮濱が彼女の審査員を続けることは不適切であると考えられたからであろう。

尋問員は、暹羅共産党の幹部である劉漱石、黄耀寰［両者は1939年8月11日に逮捕された］、呉琳曼、許一新、許侠［この3名は1938年2月12日に逮捕された］をはじめ、20〜30人もが逮捕されたのに、どうして李華だけは逮捕を免れて盛り場で遊び回っているのだと黄覚生に質問した。怒った彼女は、「ひょっとしたら李華は特別に逃げ足が早いんじゃない。逮捕されて初めて真の革命家と言うの？逮捕されなかったら、紅旗党なの」と切り返した。彼女は鋼鉄のような強い性格の持主だった。延安では、妻を訴える夫や父を告発する子もいた。もし、黄覚生が自分はスパイであり、李華は紅旗党であると「自白」していたら、バンコクから来た全同志は、「自分の誤りを認め生まれ変わる」しかなかったであろう。

延安の大礼堂で、毛沢東が党中央を代表して、被害者に帽子を脱いで詫びて、整風運動の終わりを宣言した後、私はやっと自由を得て黄覚生を訪ねた。顔を合わせた時、彼女は感情

を高ぶらせることもなく、また恨み言をいうこともなく、「スパイ（失足者）になるくらいなら死ぬ方がましだ」と言った。平静な話し振りであったが、言葉の含蓄は重かった。整風運動当時、自殺する者が少なくなかったからである。彼女は「よかった！ 幹部審査を受けたので、私の経歴に汚れがないことが証明された。汕頭で逮捕されて入獄した問題にも結論が出た」と、安堵したように言った。彼女は、この結論が文革時には何の価値もないことになろうとは予想だにしなかった[228]。

整風運動の悲痛な経験から、党のあり方や、やり方に疑問をもち、党について真剣に省察しようとした人物は、私が知っている華僑出身者の中では、黄覚生が最初の人である。彼女がタイに帰らず、東北に残る道を選んだ理由も、共産党のやり方がタイで実行された場合、タイの人々に良い結果をもたらすかどうかに不安感を覚えたからであった。

私が大きな衝撃を受けた、もう一つの華僑の事例として、張慶川［1913–1997］[229]のケースがある。張慶川は、タイの共産党幹部の中で最も早く延安に赴いた一人であるが、最も早く党籍を失った一人でもある。暹羅共産党が、最初に延安に派遣した共産党員は、張慶川、林柔［1916–1989、潮州人、バンコクではマッチ工場女性労働者］、朱田、王躍華［1918–2006、中国で軍長レベルの軍人になった］の4名である。

張慶川は、延安で整風運動が始まる前にタイに戻ったので、整風運動の被害者ではない。

彼はタイでの学生オルグに功績があったので、将来のタイにおける幹部として延安に訓練のため派遣されたものと思う。彼は延安帰りとして重みがあり、タイに戻った1939年頃には中央委員クラスであったはずである。彼の妻、陳桂華［1913–1994］も古い女性活動家であった。しかし、張慶川は、太平洋戦争中に共産党の最高権力者であった李啓新あるいは李華と対立して、党との関係が途絶えてしまった。

---

228 黄覚生に対する尋問部分は、欧陽恵「碧玉之歌」、『泰国帰僑英魂録、第二巻』pp. 165–168による。後述のように黄覚生は文革中に自殺に追い込まれた。

229 張慶川は、潮州系で1913年に中部タイのペッブリー県で生まれた。生家が貧困であったため、15才になって、革命者の支援を得て半工半読の形で初めて就学することができた。新民学校の学生運動指導者であった1933年（20歳時）に暹羅共産党に加わり、学生運動担当として赤色学聯の活動を指導した。彼の下で、庄江生、馬松などが活動した。1934年には、暹羅共産党バンコク市委員会の指導メンバー。1937年に党により延安の中国人民抗日軍政大学での学習に派遣され、1938年に卒業、タイに戻った。1939年に暹羅共産党組織のリーダーの一人に選出される。1943年から1948年は、光明印務局、華僑公学に勤務。1953年11月に中国へ。汕頭市の第五中学教員、1975年退職、197年死亡（『泰国帰僑英魂録、第五巻』pp. 229–234）1946年11月、バンコクのプラトゥーナムにあった華僑公学の校長時代に、蒋介石批判を生徒にしたため、同校の校董会によって免職された（『真話報』新第15号、1946.11.3）。トン・チェームシー（タイ共産党第4代目総書記）は2004年4月22日のインタビューの未刊行部分で「劉漱石暹羅共産党書記長が1939年に逮捕され、残った幹部は李華とTa Phingのみとなった」と述べている。タイ共産党元政治局員ダムリ・ルアンスタムによれば、「Ta Phingは大平と書き、張慶川のことである。Ta Phingは延安にまでいった人である。タイに帰国後、党内がいくつかの派に別れて権力闘争があった時に敗れた」（村嶋のダムリ・ルアンスタムとのインタビュー、2005年6月13日、バンコク）。中共よりタイ共産党再建の最高責任者の任を託された李啓新が、1941年8月にタイに着任した。李啓新のお眼鏡に適わなかった、何人かのタイ共産党幹部が党活動から排除されたが、張慶川もその一人だと思われる。同じような運命を辿った人物として、欧陽氏の共青団入団や共産党入党に立ち会った阿桂や、本稿にも登場する兪任甫らがいる。

私が彼に対する批判を初めて耳にしたのは、1945年8月15日に日本が降伏して、我々華僑隊が東北地方に向かう途中のことであった。華僑隊は延安を出発して、東北に行軍する途中、河北省の張家口を通過したところで一休みすることになった。華僑隊の一員として、共にここまで来た黄覚生はなぜか荷物を片付けて、所属する華僑隊から離れようとした。彼女に理由を尋ねると、「私は、もうタイ行きは止めたのよ。これからは正規部隊と一緒に行動するから」という答えが返ってきた。つまり華僑隊から離脱して、正規部隊に参加するということである。さらに彼女はこう続けた。

「私が南方に戻らないのは、幹部人材を必要としている東北に行きたいからよ。あなたも東北に行くつもりなら、簡単に行けるわよ」

東北三省は大きな面積のわりには幹部の数が少なかった。現場の幹部人材需要に答えるために、東北各地における中共組織は、幹部を喉から手が出るほどに必要としていた。そのため自発的に東北地方での勤務を希望する者は大歓迎された。

出身地が北京周辺である私の妻は、南方行きには気が進まず、私を東北へ行かせようとして黄覚生に説得を頼み込んだ。

黄覚生は私の考えを確かめた。「あなたはどうしても南方に帰りたいの。帰ったら、張慶川と連絡を取るつもり？」

「もちろんです」

張慶川は、延安で鍛えられた大先輩の華僑幹部であるから、彼と連絡を取るのは当然のことだと、私は思っていた。

「張慶川は、もう、裏切り者になってしまった」。黄覚生は私に警告した。

「しかし、タイに戻らなければ、折角延安で訓練を受けた意味がなくなるのではないでしょうか」。私は切り返した。

「中国のやり方は、タイでは通用しないと思うの」と彼女は真顔で答えた。

その時の私は、黄覚生がタイに帰りたくない理由は、単に夫の李華に別の妻ができたからだと考えて、彼女が言及した党の路線のことについては、真剣には受けとめなかった。私は妻に黄覚生の話は無視していい、我々はやはり南方に帰るべきだと言い張った。そうは言いながらも、頭の中には「張慶川はどうして裏切り者になったのだろうか、どんな経緯があったのだろうか」、という疑問が残った。

1952年、北京で元暹羅共産党員の林明傑と再会した時、私は彼に「張慶川は本当に革命を裏切ったのか」と質問した。林明傑は曖昧に笑って、「いや、俺にはよく判からん」と答えただけだった。

同じ頃北京に戻った李華に質問したところ、李華は「張慶川は卑怯者で、抗日戦争時に、タイに遊撃戦の基地を作ることに積極的ではなかった。党活動から遠ざかったのは、陳桂華と結婚するために金が必要となって、商売をするためだった」と淡々と答えた。中国に引き上げて来た黄耀寰に聞いても同様の回答であった。

李華と黄耀寰の説明では、張慶川は結婚するために、ひたすら金稼ぎに走り出したというのだ。しかし、私は張慶川の結婚相手である陳桂華をよく知っていた。彼女は質素で、豪華な結婚式や贅沢な生活を求めるような人間ではない。私は大いに困惑した。

1954年になって私は、汕頭に戻って来た張慶川・陳桂華夫婦とようやく再会することができた。張夫妻は、汕頭の地元の小学校で教職に就いていた。私は張夫婦を食事に誘った。食事中、私はまず、1939年に張慶川が延安まで導いてくれたことに対して、感謝の気持ちを述べた。それから、どうして革命をやめたのかと単刀直入に聞いてみた。

「私が自分からやめたのではない。ただ見捨てられただけだ」

「どういうこと？」

私の問いに対して、彼は嘆息するだけで、はっきりとは答えなかった。

私は執拗に、彼の妻の陳桂華から真相を聞きだそうとした。

「結婚準備のために、革命をやめて商売を手がけたと聞いたが」

「それを信じているの？」

「いや、本当のことを知らないので、今、こうして聞いているのだが」

1982年になって私は再び、汕頭で張慶川夫婦に会う機会があった。

その時、張慶川は、「自分が卑怯者であるはずはない。タイから最初に延安に行ったのは自分だ。延安では戦闘にも参加した。ただ、1939年にタイに帰った後、自分なりに考えを整理して、次のような報告書を中央委員会に提出した。すなわち、我々は既に十年余も活動を続けてきたのでタイのことはよく理解している。中国式の武力闘争によって政権を奪取しようという方法は、タイには通用しない。その主な理由の一つは、中国とタイでは国土の大きさに極端な差があることである。中国は広大な面積を擁する巨大国で、地方間の懸隔が大きい。一方、タイは、どこかで発砲すると、銃弾が隣国に落ちてしまうくらいの小国であり、進退の余裕がないので、武力闘争には適さない。本当にタイの民衆のためを考えるならば、他の方法を探さなければならない、と。」

これをめぐって、張慶川は党の会議で同志たちと激論した。自説を明確に述べた後、彼は孤立し、次第に党の会議にも呼ばれなくなった。最後には実質上の除名扱いになってしまった。それは、抗日戦争後期、1943年か1944年のことである。共産党執行部が正式な手続きを踏まずに、張慶川を除名した理由は、公然と除名して彼を刺激すれば、彼がタイ政府側に寝返るかもしれない、と危惧したためであろう。私は、除名はせずに連絡を絶つという姑息なやり方は李啓新の手法だと思う。李華も、この黙殺のやり方に賛成していたらしい。

張慶川夫妻は、党の不当な扱いを正すため、1982年頃北京の李華に相談したことがある。この時、李華はまず党に入党して汚名を雪げとアドバイスしたという。このように李華は張慶川に同情的なので、張慶川と真っ向から対立したのは李華というよりは李啓新の方だと思われる。

1982年に、張慶川夫妻と別れて、北京に戻った後、私は張慶川から一通の手紙をもらっ

た。手紙によると、彼夫妻の党籍問題は一応解決した。ただし、党齢（入党年数）は、1954年を入党時期とし、それ以前の党齢については今後の話し合いによるというものであった。

張慶川が亡くなった後、私は『泰国帰僑英魂録、第五巻』に掲載するために、「一対被党除名的夫妻」というタイトルで張慶川夫妻追悼の原稿を書いた。党の中に存在した意見の違いや不満をありのままに書き残して、後世の人の評価を俟とうというつもりであったが、大部分は編集者に削られてしまった[230]。

張慶川は1930年代半ばにタイ華僑の学生運動をリードした人物である。当時彼の下にいた人々は、彼に同情的で、タイ共産党の武闘路線は結局失敗に終わったことを見て張慶川の見解は正しかったではないか、と言っている。

華僑の共産党不信を示す例は、他にも多数ある。延安で中央海外工作委員会（海委）の副主任にもなり、後に廖承志のアシスタントであった、ベトナム華僑の蕭林［1957年3月26日に国務院華僑事務委員会委員に任命された］がアメリカに亡命したのはその一例である。彼の逃亡は多くの中共海外工作員の摘発につながり、党に対して大きな損失を与えた。彼がアメリカ逃亡を決意した理由は、党内の暗部を辟易するほど目撃したからではないだろうか。それが事実であるかどうかは、定かではないが、彼の海外逃亡は、少なくとも中共の華僑政策の成功例ではあるまい。

第六節　曖昧なままに終息した整風運動

1945年初、整風運動は徐々に沈静化の方向に転じた。私のケースでは、日課であった尋問の回数が突然減少した。

整風運動の締めくくりとして、各部門、単位の代表者を中央の大会堂に招集して、「延安党政軍民大会」が開かれた。整風運動で根拠もないままにスパイの嫌疑をかけられた人たちも全員大会に招集された。毛沢東と陳伯達が、社会科学院を行政学院に改名したことを祝う挨拶を行った。毛沢東は挨拶のなかで次のように述べた。「我々は混戦を強いられた。多くの同志たちに辛い思いをさせてしまい、大変申し訳ない気持ちである。ここに、諸氏に敬礼をして、お詫びをしたい」。こう言って、毛沢東は席から立ち上がり、会場の出席者に向かって敬礼をしたまま、立ち尽くした。「諸氏は私を許してくれるか。諸氏が何も答えなければ、私はずっと立ったままでいる」

毛沢東が自ら進んで他人の責任までも負うような姿勢を示したので、私を含め、多くの参加者は、嫌疑がやっと晴れたことを知った。その瞬間、私は深い感動を覚えた。会場のあちこちから拍手が沸きあがった。

230　張慶川の追悼文は、『泰国帰僑英魂録、第五巻』pp. 229–234に、慶川のむすめ張海燕と欧陽恵の共著として「両代人対張慶川的懐念」というタイトルで掲載されているが、党内の問題に言及した部分はない。

私は随分後になるまで、私たちに対する事実無根の嫌疑や非人間的な扱いは、社会科学院の実務を担当する幹部たちの職権乱用によるものだと思い込み、党中央の毛沢東らの指導者の指示によるものだとは想像さえもしなかった[231]。

毛沢東の総括によって、整風運動は一応終息した。しかし、各行政機関の内部では、かつての被疑者と尋問担当者との間の紛争が激化した。私と同様にスパイ扱いを受けた学生が、食堂など公の場所で尋問担当者とすれ違った時に、怨念と遺恨をぶつける姿がしばしば見られた。担当者たちは、上級機関の指示によるものであったと弁解するばかりで、自分の過ちを素直に認めることはなかった。こうした態度は被疑者たちの不満をいっそう刺激し、両者間の口論は絶えなかった。

印象深い出来事もある。社会情報部の党書記に就任早々の何幹之［1906-1969］[232]が、大勢の前で蕭英という陝西省出身の学生にびんたを食らわしたことがあった。整風運動の最中であったので、殴られた蕭英は泣き寝入りするしかなかった。毛沢東の謝罪で整風運動に終止符が打たれた後に、蕭英を含む多くの学生たちは集団で、何幹之に謝罪を要求した。

被疑者として受けた屈辱、不当な扱いを思い出して、涙が止まらない学生たちも少なくなかった。何幹之は緊張した面持ちで、いつもよりも吃りがひどくなった。しかし、自分の非は頑として認めなかった。それどころか、学校当局が学生に自白を強要したことは間違いではあったが、容疑を認めた本人にも責任がある、と学生を刺激するような発言をした。

「それでは、強姦された女性にも、責任があるということなのか」と学生の憤慨は一気に爆発した。

「いやいや、そうではなくて。まあまあ、落ち着いて。抗日戦争は間もなく勝利を迎える段階に入る。これからは一致団結して、革命に全力を尽くそうではないか」

何幹之は何とか誤魔化そうとした。

「いや当面の問題はどうするのだ、我々が蒙った冤罪は、どうしてくれるのだ」

学生たちは一歩も譲らなかった。

---

231 欧陽氏が回想するように、多くの幹部は毛沢東の謝罪を受けいれた。彼らの認識では、整風運動の多くの不幸や誤りは、整風運動政策を打ち出した毛沢東本人ではなく、政策の実施者であった康生や何幹之らの責任である。数十年を経た後に刊行された、体験者の回想録の多くでも、整風運動で受けた迫害は康生の所為だとしている。欧陽氏は、その後の数十年間の苦難に満ちた人生の中で、整風運動の経験を繰り返し思い出さざるを得なかったためか、異なる結論に行き着いたものと思われる。

232 何幹之はマルクス主義理論家、中共党史研究者。何は、1930年代に上海で、マルクス主義理論の諸著書を活発に出版したので、知名度が上がった。1937年の盧溝橋事件後、中共中央の指示で延安に赴き、陝北公学で理論教員を務めた。毛沢東は何の才能を買って、理論秘書に就任するように打診をしたという。学者肌の何は著作活動に専念したいという理由で断ったというが、毛側に言わせれば、何は著作こそ多いが、質的に検討する余地があったので招聘を断念したということになる。中華人民共和国成立後、何幹之は、伝統的な中国読書人の出世パターン（「学而優則仕」）とは異なり、政府の要職には就かなかった。中国人民大学教授という地味なポストに就いた彼は、中共イデオロギーに基づく中国現代革命史と中共党史という学術分野の樹立に貢献した。そのような学者肌の何でさえも、整風運動のピーク時には、同志であるはずの人間に対して暴力を行使してしまうようになるところが、整風運動の恐ろしさである。

「皆さん、今までのことを前向きに受けとめようではないか。ある意味では良かったとも言えるかもしれないのだ。これで皆さんの歴史問題に決着がついて、今後入党に際しては、審査を受けなくても済むわけだから。なかなかめでたいことではないか」

延安に来る前から、共産党員であった我々にとって、これほど腹立たしい発言はなかった。

あとから考えて見ると、何幹之の言い訳にも理由があった。なぜなら毛沢東を中心とする党中央は、スパイ摘発運動では、「逼供信」（脅しや暴力などで強迫して無理矢理に自白させ、その自白だけに頼ること）はいけないと言ってはいたが、同時に、毛沢東は、社会情報部には、馬丁[233]一名を除き全員にスパイの疑いがあるとも公言していた。毛沢東の公言と辻褄を合わせるためには、社会情報部の責任者は、無理矢理にでもスパイが多数存在していることを示さねばならなかった。数多くの幹部に容疑を認めさせるためには、苛酷な手段を駆使するしかなかった。しかし、何れにしても、そのような背景を明かすことは出来ないから、我々の抗議に曖昧な態度で対応したのである。

何幹之が曖昧な回答に終始したので、被疑者にされて、ひどい目に遭ったのは、やはり彼のような基層組織の責任者たちに非があったからだという私たちの見方はますます強化され、その一方、党中央に対する不満は殆ど生じなかった。私が、整風運動がもたらした被害状況の全容を把握することができたのは、だいぶ後になってからのことであり、一連の理不尽な扱いを経験した直後の私は、自分をこう慰めた。今回、党は間違いを犯したかも知れないが、それは我々をより立派な革命人間にしようとする過程での、行き過ぎであったと理解すべきである、と。

社会科学院では、頻繁に内部闘争が生じ、通常の講義がしばしば中止されたので、上級機関は社会科学院を行政学院と改名して、学校組織の再編を図った。再スタートした行政学院には、教育学部、財政学部、行政学部などが設置され、学生は一応自分の希望通りの専攻に進むことが出来るようになった。私は学業再開のために、行政学院で学ぶことには嫌悪感を覚えた。それで、延安大学に戻って、ロシア語クラスに復帰したいという希望を上級機関に出して許可を得た。

第七節　農村での宣伝活動、妻との出会い

冤罪が晴れ、私は延安大学に復帰することが可能になった。軟禁されていた1年2カ月の間に、ソ連赤軍の中国進駐はより現実味を増し、更に多くのロシア語人材を効率よく育成する必要が生じた。そこで、延安大学ロシア語学部は大学本部から切り離されて、ロシア語学院として独立し、八路軍政治部の直轄下に入っていた。私が復学の手続きに行くと、ロシア語学院は、私に半年間、紡績作業に従事するように指令した。

---

[233] この馬丁は、個人資料が揃っていなかったので、被疑者扱いをされなかっただけであるという。

自分の潔白が証明され、やっと好きな勉強を再開できることになったのに、再びこのような理不尽な扱いを受けて、到底耐えられない思いだった。それに、一年余の間に、ロシア語の授業は速いペースで進行していたので、クラスに復帰できたとしても、同級生のレベルに追いつくことは不可能に思われた。

私は復学を断念し、基層組織の宣伝チームで働くことを申し出て、許可された。最初に所属したのは、田植え踊りチームである。このチームで、妻となる女性に出会った。

彼女は、河北省易県出身で名前を王羽といい、13歳で唐山の紡績工場で働き始めた苦労人であった。十代の彼女は年上の従兄王甘英の紹介で、華北解放区に入り、中国共産党とかかわりができた。当時、王甘英は河北省共産党委員会の彭真系統の幹部で、北京の進歩派青年を華北解放区へ送り込む仕事を担当していた。その後、日本軍の大掃討作戦と正面衝突することを避けるため、王甘英は王羽らの青年男女を連れて華北前線から延安に移った。

王羽らが延安に入った頃、私が所属する田植え踊りチームでは、女性メンバーが極端に不足していたため、王羽を含む10人の若い女性をチームに加えた。田植え踊りチームが解散した後も、私は延安の官僚主義に嫌気がさして、延安に戻る気持ちはなかったので、みんなと一緒に引き続き農村部に残り、文盲撲滅キャンペーンに従事した。一時は甘粛省滝東解放区の県委宣伝幹事も務めた。

そのうちに華僑を呼び戻す命令が延安から届いた。太平洋戦争終結直前の頃で、戦争の帰趨はすでにはっきりしていた。中共指導部は、華僑幹部を南方へ派遣する計画を立てて、そのために延安周辺地域に散在していた華僑を延安に呼び戻したのである。同じ頃、中共指導部は、国民党との対決に備えて、大量の幹部を延安から全国各地に送り出し、党組織、軍事力の強化を図っていた。延安に戻った華僑たちは、担当部門の指示を受けて、簡単な荷造りをしたのち、上述の全国各地へ赴く幹部たちの流れに加わって、延安を後にした。

今まで毎日同じ釜の飯を食べていた友人や恋人同士たちが、命令一つで、わずかの所持品を片付けて、お互いに「お達者に」と別れの挨拶を交わして、それぞれの派遣先に赴くのは日常茶飯事であった。混乱を極めた時代で、通信も不便であったから、一度別れるといつ再会できるのかは、誰にも判らなかった。別れた後、相手の住所が不明で、生きているにも拘わらず、連絡が取れないことも珍しいことではなかった。当時、急成長を遂げていた、巨大な新生組織の中で、どれくらいの生き別れの人間ドラマが繰り返されたのだろうか。

私と王羽との付き合いは、直ちに結婚できるレベルまでには達していなかったが、ある程度の合意には達していた。当時、党が夫婦を別々の場所に派遣した場合、いずれ時勢が安定すれば、二人の勤務地を同一地に調整するという不文律が存在した。一方、恋人同士の場合には、党は一々世話を見切れないので、夫婦同士のような優遇措置はなかった。こうした事情を考慮に入れて、私たち二人は、本来の成り行きよりは少し早すぎるとは感じながらも、とりあえず結婚登録をした。私たちの結婚登録は夫婦という法的地位を獲得することに重点があり、また、共同生活ができるような物的条件も整っていなかったので、その後も暫く別

居生活を続けた。

第八節　華僑幹部養成と華僑隊の発足

ここで、華僑青年が、どのようにして延安に到来し、どういう訓練を受けたのかを見ておきたい。日本軍が中国本土の主要部分を占領する前までは、東南アジアから中国に帰る共産党系華僑同志たちは、主として香港経由のコースをとった。香港では、廖承志の補佐を務めていた連貫が連絡役を担当した。

東南アジアから同志たちが香港に到着すると、その引率者は、まず全員の名簿を連貫に渡した。名簿の情報をもとに、連貫は一人ひとりの経歴や特徴などを考慮に入れて、行き先を決めた。入党期間が長い党員は延安に行かせ、新米党員は新四軍に配属した。他方、一般大衆は、東江縦隊、華南縦隊（華南縦隊は、香港と広東省の境界で活動していたが、後に東江縦隊に編入された）、もしくは海南島の五指山で活動する遊撃隊に配属した。東江縦隊の活動地域では、地盤争いを目的とした小規模な戦闘が頻発していたので、まとまった訓練を受けられるような状態ではなかった。一方、安定した延安では共産党の革命理論を落ち着いて学ぶことができた。後者には、将来それぞれの出身国で革命指導の大任を担うことになるはずの希望の星たちが送り込まれたのである。

延安は、華僑出身者に各学校で専門知識を教え込み、更に中央海外工作委員会（海委）で特殊訓練を受けさせた後に、それぞれの出身国に送り返して、現地政権の奪取に命を懸けさせようという考えであった。華僑共産党員側も誰もが、延安で革命理論を一通り学習し、訓練を受けたのちは、党の指令に従い、それぞれの出身国に戻って革命に従事し、現地政権を奪取しようという心構えを最初からもっていた。私もその一人であった。

延安に派遣された者のうち、最も将来を嘱目された者は三段階の訓練を受けた。

第一段階：学校での訓練。学校は、①中共中央党校（党の幹部になる人材向け、党歴の古い党員のみが入校可能）、②中国人民抗日軍政大学（軍事訓練が主）、③陝北公学（大衆工作訓練）、④魯迅芸術文学院（文化界で活動する人向け）。どの学校に進学するかに関しては、本人の希望はほとんど考慮されず、党の組織部が本人の経歴を参考にして決めた。

第二段階：海委訓練班での訓練。上記の学校を卒業した華僑出身者は、中央海外工作委員会[234]（海委）訓練班に参加する。海委の長は、朱徳で、同訓練班は華僑の特別育成機関で

[234] 1938年9月に、中共中央は、八路軍総司令朱徳を主任として、海外工作団を設立した（前掲、王俊彦『廖承志伝』p. 110）。海外工作委員会（海委）は、1942年初頭に設立され、朱徳が書記を務めた。同時期に、海外工作学習班と海外工作研究小組が設立された。マレーシア華僑で国務院僑務弁公室秘書長や全国政協委員の任にあった彭光涵は次のように記している。即ち、抗日戦争前後に延安で学習もしくは活動した華僑は、600人前後で、延安で学習後出身地などに戻って抗日活動をすることを希望した。例えば、新嘉坡マラヤで抗敵後援会の責任者をしていた呉江、郭凌、曾昭生の3人は1938年に延安に来たが、学習終了後直ちにマラヤに戻って活動することを希望した。しかし、国民党の反共封鎖政策のため、マラヤに戻ることができず、敵の何重もの封鎖を突破して華中の抗日根拠地に辿り着き活動を行った。上海の暨南大学の学生であったベトナム華僑の海南人符克は1938年に延安で学び、1939年にはベトナムに戻って43名の海南人愛国青

あった。訓練班に参加した華僑学生は、出身国別にグループに分けられゼミナール形式で、出身国の国情研究、現地の革命活動についての批判的検討、および現地の政権奪取を目標とした学習を行った。朱徳が、海委の主任を務めていたという人事からも、中央が海委をいかに重要視していたかが判る。

第三段階：毛沢東の住居の近くに位置した中央情報部（部長は康生）は、通常棗園（そうえん）と呼ばれた。ここに達した華僑出身者たちは、それぞれの帰国ルート、現地の党組織との連絡方法、あるいは帰国後の任務などについて、すべて個別に指示を受けた。情報漏洩防止のため、学生間の接触は、慎重に防止されていた。

この三段階の訓練を終了したのち、各人毎に担当国に派遣された。

この訓練方式は抗日戦争の半ばまで実施されたが、末期に近くなると華僑青年から成る集

年を率いて香港に至り、瓊崖（海南島）華僑服務団に参加した。彼は1940年に国民党によって殺害された。

延安の中央機関や陝甘寧辺区の県で働く華僑や、マルクス・レーニン学院、中央党校、魯芸、外国語学院で学ぶ華僑数を、延安華僑救国聯合会（僑聯）の1942年6月時点の会員統計で見れば、延安の中央機関もしくは学校に所属している華僑は220人、延安以外の各県で勤務している華僑は60人である。この280人中、マラヤとタイ国の華僑が最も多く、次いでベトナム華僑が多かった。学生と労働者が多くを占めており、教育レベルについては、中等教育を受けた者が多数を占めた。延安の僑聯は、1940年9月5日に成立し、国外の華僑と延安の帰僑とを繋ぐ役割を担った。

1941年6月のヒットラーのソ連侵攻、同年12月の日本の太平洋戦争開始により、情勢は大きく変化した。一切の反ファシズム勢力を団結させ国際統一戦線を作るため、1942年初めに中央は朱徳を書記とする中共中央海外工作委員会（海委）の設立を決定した。海委の委員は、朱徳、葉剣英、何英、李初梨、林仲、黄華、武亭、朱徳海、庄然、蕭林であった。海委の主要任務は、南進した日本帝国主義に対して、国際反日統一戦線を組織するために戦略および戦術を討論研究すること、連合国軍との軍事協力を勝ち取って侵略日本を打倒するための具体的問題について討論研究することであった。会議で最も多く討論されたのは、東南アジア情勢と同地華僑の抗日武装闘争の戦略と戦術であった。同時に東南アジアから中国に逃げ帰った華僑の救済と生活安定についても討論した。海委の会議では討論を深めるために、日本共産党責任者の岡野進とインドネシア共産党の王大才にも毎回出席を求めた。

海委の外に、中央政策研究室は、朱徳を組長とし、何英、林仲、李初梨、余光生、庄然、蕭林を組員とする海外工作研究小組も設けた。国外の愛国華僑が繰り返し求めている、日本占領地の華僑を支援するために中央から幹部を派遣することを実現し、武装部隊を組織して華僑の生命を守り、あるいは華僑が抗日武装部隊を組織することを支援し、さらに各国の反日武装勢力と共同して日本帝国主義に抗するために、中央海委は延安の機関および学校から39名の華僑幹部を選抜して、1942年春に海外工作学習班を作り、幹部を訓練して将来出身地に派遣して活動させる準備をした。この学習班の総指令は朱徳で、葉剣英が同班の学習と活動を自ら指導し、岡野進に同班の指導員を兼務してもらった。副指導員は林仲（フィリピン華僑）、同班主任は何英、支部書記は庄然、総務は羅道譲。整風運動が最も緊張した時期は、葉剣英が同班支部書記を兼務して華僑幹部政策に誤りがないように努めた。海外学習班は7組からなり、このうち第2組のメンバーは、組長蕭魯、組員は譚亮濱、高漢、羅道譲、黄覚生、韓英朴、海豊であった（彭光涵「華僑青年与延安」、全国政協文史資料研究委員会華僑組編『崢嶸歳月：華僑青年回国参加抗戦紀実』（中国文史出版社、北京、1988年）pp. 163-169所収、なお、本書は文思編『回国抗戦　奔赴延安』（中国文史出版社、北京、2005年）として再版。また、この部分は、沙健孫主編『中国共産党通史、第四巻』、湖南教育出版社、1999年、564頁にも引用されている）。第二組の、譚亮濱、高漢［Udom Sisuwan,1921-1993］、羅道譲（元中南海保衛局副局長）、黄覚生はタイ華僑であるので、第二組はタイ華僑組だと思われる。高漢については、村嶋英治「カンボジア共産党ナンバー・ツー、ヌオン・チア（Nuon Chea）のバンコク時代（1942年-1950年）」、『アジア太平洋討究』（早稲田大学）第11号（2008年）pp. 117-118の注15参照。

団を編成しての実地訓練に変更された。この集団は華僑隊と言われた。華僑隊を設立し、南下作戦に同行させる計画を提案したのは朱徳であったという。彼は、教室で勉強するよりも現場で体得させた方がよいという持論の持ち主であった。

華僑隊に編成された私は、まず中央党校で三カ月の集中訓練を受けたのち、海委の講義を駆け足で一通り受講した。海委でのゼミナールの部分は省略された。

「延安から中原を開き、湖南、湖北、江西、広東、広西などの日本軍占領地区に南下して根拠地を建設するため[235]」、党から従軍南下を命じられた華僑たちは、任務の内容を家族にも秘匿した。特別訓練を受けるために海委へ行く時には、口実を設けて配偶者にも知られないように努めた。訓練が終わりを迎えた時、朱徳は陣頭に立って力強く次の訓話を行った。

「同志諸君、君たちは先に出発して、そこで足場を固め、我が大軍の到来を迎えるための準備を全うせよ」、と。

海委特別訓練班修了を祝う会で、ベトナム華僑の黄正光が、明日の革命について周囲の仲間たちに熱を込めて語った、次のような話が印象に残っている。

「中ソ国境のソ連側には、多数のトラックが待機している。時機が熟すや、これらのトラックは直ちに戦車に改造される。そして、一挙に中国に入ることになるのだ」

華僑隊のメンバーは、現地で大軍の到来を待とうと、あたかも既に勝利を手にしたかの如く語り合った。革命の種はもう至る所に根を張り、全面開花は時間の問題だけであるという、きわめて楽観的なムードが支配していたのだ。

華僑隊は、王震［1908-1993］将軍指揮下の第359旅団の南下に同行することが命じられた。毛沢東本人がわざわざ同旅団の出陣前の歓送式典に出席した。これは毎日夥しい幹部が続々と延安を後にしていた当時では異例とも言える特別な扱いだった。中共指導部が華僑隊を重視していたためだと思われる。

この華僑隊に所属した華僑青年の人数は380人に上り、彼らのリーダーを務めたのは、何英［1914-1993、当時海委委員、1972-82年中国外交部副部長］と蕭林の二人であった。蕭林は、ベトナム共産党の出身で、ホーチミンの助手も務めたことがあるという人物である。庄国英、周介文、葉駝（1916-1945葉章梓、タイ名Siang）[236]などのタイからの華僑たちも、

---

235 『泰国帰僑英魂録、第一巻』p. 61, 65。

236 欧陽氏は、葉駝が陝北公学在学中に初めて知合い、その後1945年に華僑隊で彼と訓練を共にした。359旅団の南下作戦に参加した葉駝は1945年9月に、国民党軍に包囲されて戦死した。欧陽恵は凌燕の筆名で『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 58-63に、葉駝追悼文を載せている。この追悼文が掲載された英魂録第一巻は、1992年に50年ぶりにタイ国を訪問した、葉駝の元同志、呂咪によって葉駝の末妹（Kanjana Srikalasin元シーナカリン、プラサーンミット大学准教授）にもたらされた。末妹はダムリ・ルアンスタム元タイ共産党政治局員に依頼して追悼文をタイ語訳し、『兄、祖国のために命を捧げた人』というタイトルの小冊子を出版した。葉駝は、1916年にラヨーン県の裕福な商家に10人兄弟姉妹の3番目として生まれた。母はタイ人。バンコクに出て国民党の黄魂学校に入学、後に共産党の崇實学校に転校。1938年に抗日戦参加のために中国に渡った。なお、エスペラント語の大家であった呂咪は、1930年代後半、葉駝の家族がラヨーンに開いていた華校で教師をしたこともある。

華僑隊に編入された。第359旅団に同行したので、華僑隊員は全員が指導員、連長［中隊長］もしくは排長［小隊長］といった肩書きを与えられ、各連隊に配属された。

第359旅団は軍隊であり、同行した華僑隊員は誰もが実際の戦闘に加わった。南下中において、何英は華僑隊のリーダーとして同隊員に対する人事権を有したが、軍事指揮権は王震にあった。同旅団は日本敗北後、南下を止めて東北解放のため北上するように命じられた。

私も華僑隊員として第359旅団に同行するはずであったが、出発直前に、マレーシア華僑彭光涵［1918生］などの五人とともに、健康検査で落とされてしまった。肺結核のため長距離行軍に適さないという診断を受けたためである。私は即座に中央組織部に不服を申し立てた。健康であることを証明する書類さえ提出できれば、同行できるという回答を得たが、結局この華僑隊従軍は断念せざるをえなかった。

肺結核と診断されたものの、なぜか実感はまったくなかった。後になってからのことだが、健康診断を受けた際、医者から肺結核に罹ったことがあるでしょうと尋ねられたことがある。延安を離れた後、私の肺結核はいつの間にか、自分の体の治癒力で直ったということかもしれない。

第十章　大連での実話報記者時代

第一節　華僑部隊の一員として東北ハルビンへ

1945年8月15日、日本降伏の大ニュースが延安に伝わると同時に延安全体が狂喜乱舞した。興奮と感激の余り、私たちは一張羅の綿入れを破って残り僅かの灯油をかけて燃やして祝った。綿入れなくして、真冬をどうするかなどはまったく考えなかった。間もなく、日本軍の武器弾薬等接収のため荷物をまとめ出発せよ、という指令が出た。

沿路の各兵站（行軍中の軍隊に給養を提供する拠点）の収容人数を考慮して、東北に向かう部隊は一日に数回に分けて、延安を出発した。華僑出身者は、同行する部隊の番号と東北に行けという指令が与えられただけで、詳しい行き先は教えられなかった。

私は定操の武装部隊に同行して出発する華僑部隊に加わった。［1978年1月に成立した］国務院僑務弁公室の秘書長を務めた彭光涵（マレーシア華僑）が、この華僑部隊の責任者で、メンバーは2〜3百人ほどであった。メンバーの多くは私と同様、武装部隊について東北に行き、そこからなんらかの方法で、それぞれの出身国に戻り、現地で革命活動を再開するという任務を帯びていた。私は、延安を出発する際に、タイへ帰国せよ、タイ到着後、タイ共産党に連絡しその指示を仰げと命じられていた。

命令は、東北に進軍せよというだけで、具体的な行き方については言及がなかった。当時、延安と東北との間に横たわる地域の大部分は、国民党の支配下にあり、国民党軍隊の動静についての情報が入り乱れていたために、延安を出発した時点では全コースや具体的な通過地を定めることは不可能であった。東北へ向けて進んでいる途中で、沿路の兵站から得た情報をもとに、次の行軍計画を立てるしかなかった。行軍時の食料は、兵站のスタッフが延安からのリストと照合して提供した。

正規部隊がある地域を収用すると、地方政権の発足と維持のため、一部の兵力をそこに残して駐屯させた。主流部隊はさらに次に進んだ。我々の華僑部隊は、南下のルートを探すために主流部隊について進んだ。

国民党軍隊との正面衝突回避のために迂回し、紆余曲折した進軍を強いられたので、予想以上の長旅となった。特に、国民党の傅作義［1895-1974］部隊、東北に空輸されて来た国民党精鋭部隊の新一軍および新六軍、それに国民党の軍隊に吸収された傀儡軍、これらの三武装勢力が、中共軍の進軍に大きな障害となった。

北京に駐屯する傅作義部隊は、河北省の張家口周辺で我々の進軍を妨害した。我々の部隊は同省の承徳を通過する時、国民党軍隊の攻撃を受け幾度も悪戦苦闘を繰り返した結果、承徳に四カ月間も留まらざるを得なかった。その間に、たまたま新華社の承徳支社のスタッフに会ったところ、「とにかく承徳にいる間は、こちらを手伝ってほしい」と強く要望され、

私は一時新華社の承徳支社で記者として働いた。

145頁に前述した黄覚生が、張家口に着いた後、華僑部隊を離れて、地方政権の設立を担当する部隊に移ることにしたのは、この時のことだった。彼女は部隊とともに、東北に留まり、地方政権の樹立に尽力して、後に遼寧省共産党委員会の宣伝部長を務めた。

当時、農村幹部を含め、延安から東北に派遣可能な幹部は、3万5千人前後しかいなかった。少ない数ではないが、それでも広大な東北地方を接収するためには、十分な数とは言えない。例えば、一つの学校を接収するだけでも、少なくとも数名の幹部を要する。これから計算すると、いくつもの学校をもつ県を一つ接収するだけでも、相当多数の接収幹部が必要となる。警察局、役所などの県レベルの行政機関の接収は更に重要なので、一県の接収だけでも、計算上では少なくとも数百人の幹部が必要であった。

しかし、実際には、8人の幹部だけで一つの県の接収に当たった事例もあった。偽政権側の警官の武装が未だ解除されていない状態で、8人だけで入城することは、飢えている狼の群れの中に子羊を投じるに等しい無謀行為である。彼ら8人は、せいぜい城の外を徘徊しながら城内の様子を窺うしかなかった。この時期には、接収に行った6人の幹部が殺害される事件も発生した。

このように、接収幹部の人数確保は、東北の中共機関にとって焦眉の急を要する問題であった。接収担当者が焦燥の色を浮かべながら、県城の外の大路を通過する中共部隊に「幹部はいませんか」と尋ねる光景は珍しくなかった。

時には、遠路を来たばかりの幹部に対し、「おう、よく来てくれた。早くこちらへ」とまるで待ちわびた友人のように振る舞い、暖かい挨拶をかけてくる者もいた。

突然声をかけられた人は、ほとんどの場合、どう進むのか見当も付かない、五里霧中の状態にあった。その虚を衝くかのように、「中央からの指令で、君は当地への配属がすでに決まっている」と促すのである。これは、幹部の確保を目的とした全くの作り話であったが、万一、後になって中央から批判されるようなことがあったとしても、「接収幹部の人員不足によりやむを得ずこの方法をとった」と釈明すれば済ますことができた。

幹部の採用に当たっては、採用される者の適性を考慮すべきことは言うまでもなかったが、人手不足が深刻な当時は、そのような余裕などあるはずもなかった。どの機関もみな、喉から手が出るほどに人手がほしかった。深刻な人手不足に悩まされた各地方の責任者は、延安から来た指導者陳雲に窮状を訴え、幹部の補充を要請した。陳雲は、自分も苦慮しているのだと答えて、各地方の責任者に次のように指示した。

「町に入ったら、まず県長や警察局長、工会主任、農会主任、民兵隊長などの要職者をしっかりと掴むこと。我々の側は人数が少ないので、町のなかに長居すれば必ず危険な目に遭う。身の安全のために、夜間は町の外に必ず出て、畑の中などに野営すること。町にいる間は、住民に対して積極的に革命宣伝活動を行うこと」、と。

上記の革命宣伝活動としては、通常一日に三回の演説を行った。演説の主な内容は、共産

党と国民党との相違、資本家と労働者の関係、武力闘争の必要性などであった。共産党こそが人民を暗黒の生活から救い出すことができること、資本家の贅沢な生活は労働者に対する搾取の上に成り立っていること、労働者が自分自身を解放するためには武力闘争に立ち上がらなければならないこと、などを説明した。演説が終わると、接収当局は町を住民に任せて、次の町に移動した。

国民党に対する軍事的優位が高まるにつれて、中共には多くの兵力を接収工作にまわすことができる余裕がでてきた。そのため、接収工作で痛い目に遭っていた各地の共産党機関は、町を接収する際には、性急さを避け必ず千人前後の兵力の援護を整えてから着手するように変化した。

我々華僑部隊は東北に至るまでの間は軍事部隊と行動を共にした。しかし、いったん東北に入ってしまうと、華僑部隊は接収部隊とは目的を異にするので、一直線に東北局の所在地であるハルビンに向かい、同地で中央からの指令を待った。

我々が到着する以前に、東北局には海委からの名簿が届いていた。延安で中央組織部に託した私物も東北局に到着していた。その中には、私が周恩来や葉剣英からもらった直筆の文書も含まれていた。しかし、これらの文書を最終目的地のタイまでの長い道程を携行して行くことは、危険過ぎる。私は再び、これらの文書を東北局の担当者に預けざるを得なかった。その後、担当者の死亡によって、私の貴重な記念品は行方不明となってしまい、私の手許に戻ることはなかった。

ハルビンの東北局に到着した華僑は、ここでそれぞれに指令を受け、別々に分かれて南下の道をとることになった。東北局は華僑に対して、出国ルートを個別的に示し、必要な手配もしてくれた。私と妻が受けた指令は、北朝鮮を経て南朝鮮に入り、南朝鮮の華僑に扮して香港に渡り、香港では南方局の支援を得てタイに渡航せよ、というものであった。そのために、まず、図們市（吉林省、中国と北朝鮮最北部の国境沿いに位置する）に向かい、同地の市委員会の協力を得て、北朝鮮側に入るように命じられた。

第二節　ソ連軍の実話報に勤務

私は旅費として支給された金塊を懐に、早速図們に向かった。図們市に到着して間もなく、関係者との連絡に成功した。その後数日間待機して、いよいよ出発の日となった。夜7時、我々一行六人は八路軍の軍服をスーツに着替えて、案内人の後ろについて、国境の河、図們江を渡った。現地の案内人が図們江の警備に当たっているソ連軍から事前に了解を得ていたとみえて、何の問題も生じなかった。北朝鮮側で迎えに来てくれた人は「よくおいでになりました」と簡単な挨拶をして、我々を平壌へ向かう列車の発車駅まで案内した。我々一行六人は同時に乗車したが、私も妻も他の四人とは、まったく面識がなく、お互いに重要な任務を負っているのだろうと考えて、声をかけることを控えた。

平壌に着いて、現地の案内人の話しを聞くと、南北分断線の38度線を越えて南朝鮮側に

入るのは、非常に難しいということであった。しかし、一応様子を見るために、平壌で三カ月近く待機した。結局、南朝鮮経由で香港に向かう計画は中止して大連に行け、大連の市委に連絡して大連から香港に渡航せよという指令を受けた。

1946年の春、私と妻の二人は平壌を発ち、大連に向かった。最初に足を向けたのは、平壌の外港、南浦である。南浦に到着したのは、真っ暗になった夜十時頃であった。待合せの人は軍服姿で、何もしゃべらずに、ジェスチャーで我々を船内に案内した。明かりがついた船内に入って初めて、案内人はソ連の軍人であることが判った。彼は無言のまま我々を船室に案内した。

一夜明けて、船はどこかの港に到着した。ソ連軍人が再び現れて、大連に着いたと言って、港から大連市内への道順を教えた。私は延安大学で学んだロシア語を思い出してお礼を言うと、妻と二人で下船した。朝日の眩しい光が、ソ連軍艦の逞しい姿をくっきりと浮び上がらせていた。中共一般幹部に過ぎない私を、重要な軍事任務をもつ軍艦に乗船させた事実から考えて、ソ連と中国共産党の間には、かなり親密な関係が出来ているようだと、直感した[237]。

実話報に入社

早速共産党大連市委員会の組織部の下にある社会部を訪ね、東北局からの紹介状を提示した。当時は、各地の党組織部には、情報収集や人員派遣を担当する社会部という部署が設置されており、大連では、社会部が華僑事務も担当していた。

社会部の担当者は、夏陽という名の上海出身の人で、我々の紹介状を読むや、開口一番、「いや、よくこの大変な時期においでになりました」と挨拶した。1946年春頃の東北は、共産党と国民党がいよいよ決戦態勢に入った時期であった。今、警戒線を突破するのは困難なので、暫く大連で待機するようにと言われ、用意されたホテルで待つことになった。

夏陽は時々我々の様子を見に宿泊先を訪れ、最新のニュースを伝えてくれた。1946年の5月か6月頃に、彼は、ソ連軍は現在、国民党軍の進撃に備えて兵力を増強している、大連から香港行きのフェリーは既になくなった、と話した。この時期、国民党軍は営口に上陸し、止まることを知らぬ勢いで大連に迫っていた。どんな代価を払ってでも大連を死守する方針を持つソ連軍は、対国民党戦の準備のために香港との間の往復フェリーも廃止したのであった。

私たちの香港渡航は当面不可能となった。しかし、私はタイ行きを諦めたわけではなかっ

---

237 ソ連軍は、東北全地域を1945年8月中旬より1946年5月まで占領下に置いた。東北地域のソ連軍は、旅順、大連地域（以下、旅大地域）の1万人強の駐屯軍を除いて、1946年5月までにソ連国内へ撤退した。これ以降、東北におけるソ連軍の存在は旅大地域に限られた。1946年5月の撤兵を境として、ソ連の対東北占領政策は、前半、後半の二期に分けることができる。前半期は、中共と国民党の両派の間でソ連の政策は動揺したが、後半期には、中共を支持する立場が明確になった。欧陽氏が朝鮮半島からソ連海軍の軍艦に乗って大連に入ったのは、1946年春で、東北全域におけるソ連軍の対中姿勢が二転三転して、きわめて不明瞭な時期であった。ただ、大連に駐屯するソ連軍は、1945年8月に進駐して間もなく中共勢力に現地政権樹立の大任を渡して、一貫して表では中立的、実質的には中共寄りの立場をとっていた。

た。大連で知り合ったインドネシア華僑の謝司基と周明軒から、山東半島の石島に行けば、そこから香港に行くことができると聞き、彼らとともに小さな密航船を雇って石島渡航を計画した。しかし、妻の猛烈な反対に遭って取りやめた。取り敢えず、私は新華社と旅大人民日報の両方の記者を兼務することにした。

ある日、夏陽は、中央から「発展南方、巩固北方（南方へ勢力を伸ばし、北方の基盤を固める）」という従来の戦略を「搶占北方、放棄南方（北方を先を争って勢力範囲に収め、南方は放棄する）」に変更するという指令が来たので、私は南方行きを当面中止してハルビン、または大連に留まってよい、と話した。そして彼は、ロシア語ができる私に大連で働くように、次のように強く勧めた。現在、大連防衛が最優先課題である。なぜなら、大連を掌握し続けることができれば、東北を国民党に奪われることはないからだ。ソ連軍は、世界大戦を起さない範囲内でなら、アメリカとの対決も辞さないという強い姿勢を見せているので、最後まで大連を守るだろう。あなたは、ロシア語ができるのだから、それを活かしてソ連軍に協力することが、最も貢献できる道である。それに、あなたには新華社地方記者の経験があるので、ソ連軍が［1946年8月14日に］創刊した実話報[238]で働くのが一番よいだろう、といった具合に。実話報は、スターリンが創刊を指令した、ソ連宣伝用の中国語新聞紙であり、中ソ友好宣伝のための重要な媒体であった。

更に、夏陽は次のように力説した。あなたの妻も延安から来た幹部として、政治的に信頼されている。夫婦でソ連軍の実話報で働けば、二人揃って中ソ友好に貢献できるのだ。また、ソ連軍の新聞社で働いた実績があれば、将来タイに行く場合にも、ソ連側の協力を得やすくなるだろう、と。

夏陽の話を聞いているうちに、私の心の中にソ連軍で働いてみたいという気持ちが徐々に湧いてきた。結局、私は南方行きのために支給にされていた金塊を組織部に返却し、大連で

---

238 実話報はソ連軍が旅大に進駐して一年後の1946年8月14日に創刊された。実話報の発刊は、ソ連共産党中央委員会政治局の承認を得ている事実から見て、同新聞社の創立はソ連当局の極東戦略の一環であったと考えられる。ソ連共産党中央委員会書記局の決議によって実話報の販売地域は旅大地域に限定されていたが、少数ではあるが、中共支配下の各解放区や、上海などの国民党政権支配下の大都市でも流通した。発行部数はピーク時には2万部に上った。同時期における旅大地域の他の新聞社の発行部数と大差はなかった。実話報の記事内容は、ソ連国内、国際情勢、旅大地域の地方ニュース速報及び中国国内情勢という大きく四つのセクションに分かれていた。この中、ソ連国内ニュースが、紙面全体の半分を占めており、最も分量が多かった。このセクションは主として中国人読者に、ソ連を政治、経済から人民の日常生活に至るまで紹介して、ソ連社会主義制度の優越性を宣伝することに力点が置かれていた。国際情勢面は、全体の3分の1を占め、ソ連国内報道に次ぐ比重をもち、西側陣営に対する世論攻勢の姿勢が鮮明である。中国国内情勢に関する報道では、中共と国民政府の双方に中立的なスタンスを取っている。1951年8月に廃刊されるまで、同報は5年間刊行された。『実話報』の創刊に当たって、中共側はソ連側に物質面や人員面で、多くの支援を与えた。関係者の回想によると、大連中共は深刻な人手不足にも拘わらず、5年間に合計40名前後の幹部を派遣した。『実話報』に関する考察は、鄭成「国共内戦期における中共とソ連の相互接近と協力―大連の『実話報』を中心に―」、『アジア太平洋討究』（早稲田大学）第8号、2005年および鄭成博士論文「国共内戦期の地方レベルにおける中共・ソ連協力関係：旅順・大連地区を中心に」（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士学位論文 、2009年）参照。

働くことにした。当時、実話報には、すでに延安から来たスタッフ六名が配属されていた。その中で、まとめ役を務めていたのは、秋江というシンガポール出身の華僑であった。彼は大連市委組織部のなかにある社会部の工作員であり、中国共産党側から名目は通訳として派遣されていたが、実際は新聞社の保安工作を担当していた。当時旅大では、国民党のスパイが横行していた。ソ連軍の情報が漏れないように、中国共産党側は数人の幹部を実話報に送り込んで、情報収集や警備に当たらせていた。私が実話報に派遣されることになった理由も、彼の保安工作と関連があった[239]。彼は私と同じく延安大学ロシア語学部の出身者で、私たち二人は、延安大学時代からの親しい友人であったからである。

私より前に、妻が秋江の紹介で実話報で働き始めた。彼女の仕事は、文芸副刊の編集のほかに、地元新聞の検閲であった。このようにソ連側が地元新聞を検閲したことに関しては、当時「中国の中で中国人の地元新聞を一々チェックするのは、どういうつもりだ」という不満の声が少なくなかった。ソ連軍当局の新聞規則では、大連で発行する新聞は、国民党政権を批判する記事を掲載してはならないと定めていた。この規則に不満の持つ中共幹部に対して、ソ連軍は次のように説明した。国民党政権の批判記事を新聞に掲載しただけで、同政権を倒すことはできない。かえってソ連軍が共産党を支持しているという印象を内外に与えて、国民党政権に東北地域への軍隊派遣の口実を与えかねないではないか、と。

妻の実話報勤務をきっかけに、私は時々実話報編集部に立ち寄るようになった。南方へ行くことに消極的な妻は、私も実話報に就職させたいと考えて、秋江に実話報の責任者を紹介するように頼んだ。秋江は、私をロシア語が出来る延安の友人として、実話報の中国部部長のザハロフ（扎哈洛夫）に紹介した。ザハロフ部長は歌劇『白毛女』などを翻訳した、中国語が堪能な人物であった。

彼との初対面の場面は、今でも昨日のことように思い出す。私が挨拶をしながら「どちらから、いらっしゃったのですか」とたずねると、彼は「余自遠方来」と古文調の中国語で応じた。私は「あなたの中国語古文は、我々よりずっと上手ですね」と感心して、彼の中国語を褒めた。続いて私は社長の謝徳明[240]に紹介された。「明日から来てもらいます」と即座に採用を告げられた。1946年10月の頃であった。

---

239 この部分の記述と一致しない部分もあるが、欧陽氏は、実話報における保安工作について次のようにも語った。「共産党の旅大党地委に保衛部という組織があり、そこに属する安全委員が造船工場や実話報などの各要所部門の保安警備を担当した。実話報には、保衛部から派遣された安全委員が一名常駐していた。彼は通常は、他の中国人スタッフと同じような事務関係の仕事を担当していた。彼の安全委員という身分を知る者は、中共党支部書記以外には誰もいなかった。彼は実話報社内の中国共産党支部の活動に参加したが、新聞社の保安警備関連の仕事については、直接に派遣元の保衛部に報告し、指示を仰いでいた。彼の仕事の内容について、党支部の方から干渉することは全くなかったが、彼が求めれば、協力した。例えば、容疑者を尾行するために、彼が仕事を一日休まざるを得なくなった際には、党支部はできるだけの便宜を図った」。

240 1946年から1948年まで社長を務めたシェドゥーリン（中国名：謝徳明）は、ウラジオストク国立極東大学東洋学部で中国語を学んだ人物である。1945年9月にソ連軍司令官の手紙を携えて、延安に入り、中共の指導者たちと面会したウェイスビエフ大佐の通訳を担当したのも彼である（前掲鄭成博士論文）。

ГОЛОС ПРАВДЫ

實話報

1950年10月 1 星期日 第1170 1171期

今天中國人民慶祝自己的偉大國慶節—中華人民共和國開國第一週年紀念！

中華人民共和國開國一週年萬歲！

斯大林電賀毛澤東

聯共中央電賀中共中央

中國人民的偉大節日

孫中山先生　　毛澤東主席

爲鞏固和發展人民的勝利而奮鬪

周　恩　來

人民解放戰爭的大勝利

中華人民共和國的外交政策

写真18　実話報（1950年10月1日号）

結果的に、私はこの時からソ連軍が旅大を撤退し、1951年8月に実話報が廃刊になるまで実話報で働くこととなった。私は全力投球で働いたので、その勤務態度はソ連側からも評価されたものと思う。

さて、翌朝、私は言われたとおりに初出勤した。謝徳明は私の着任を喜んでくれた様子だった。「よく来てくださいました。あなたの月給はルーブルで支給します」と、暖かい口調であった。しかし、私はその「月給」という言葉に引っ掛かった。

「謝徳明同志、私の実話報勤務は、党委から私に任務として与えられたものです。月給を頂くような話は、一切聞いておりませんが」と、自分の困惑を直ちに口にした。

「それはあなたの方の事情です。当方はソ連の規則に則って、被雇用者としてあなたに勤務してもらうことにしています」と、謝徳明は口元に微笑を浮かべながらも、きっぱりと返答した。そして、彼はロシア語の「被雇用者」という言葉を紙に書いて、私に見せた。

謝徳明は、「あなたには被雇用者として働いてもらいます。これに対して異存がなければ、ここに残って下さい。もし同意できない場合は、残念ながら帰ってもらうしかありません」と答えた。その後、彼は表情を少し緩めて、「もちろんあなたがソ連を好きで、スターリン同志を敬愛していることはよく判っています。ただし、手続き自体は規則に従わねばならないのです」と補足した。

ここまで来た以上、もう戻る道はない。しかし、最初の三カ月間は仮契約であるという契約書の条項が目に入ると、私の不満は再び高まった。

「三カ月の仮契約期間を設けることは、侮辱だと受け止めます」と不服を表明した。

「これが我々の規則です。我々ソ連軍全体がこの規則で運営されており、誰に対しても、この三カ月の試用期間条項が適用されるのです」と、謝徳明はまたしても一歩も譲らなかった。

結局私はこの条項を契約書に入れることに同意せざるを得なかった。

「これから末長く協力できるように」と、挨拶を交わして、両者は雇用契約書にサインした。

実話報社内の中ソ関係

私は共産党員であるから、実話報社においても、ソ連側の共産党員と同じ扱いを受けるだろうと予想していた。ところが、実際はまったくの期待外れで、実話報社には、中国共産党とソ連共産党の支部が別々に設けられており、相互の不干渉主義が貫徹されていた。

実話報社で勤務を始める前に、夏陽から次のような指示を受けていた。実話報社では、秋江を中心とする中国共産党支部組織の中で党生活を行い、党からの指令を受けること、しかし、日常業務については、ソ連側が直接指示するので、それに従うこと、と。党務関係では、ソ連側のことは考えなくてよいと言われたので、当初私はかなりの困惑を覚えた。

実話報でしばらく働くうちに、中共とソ連共産党との組織活動が、一つの新聞社の中で分離並行して行われている仕組みがようやく理解できた。例えば、上司のザハロフがソ連側の党支部会議に出席する日に、彼と重要記事について話し合いをしても、彼は党支部会議を話題にすることはなかった。いつも「今日は用事があるので、早めに帰ります」と言って退出した。一方、私が党の支部会議に出席するために席を空ける場合も、ザハロフに対して会議の内容について何の説明もしなくても、簡単に許可が得られた。つまり、相互に不干渉で詮索しないという暗黙の了解があった。

実話報におけるソ連側スタッフ[241]の中に中国人が一人いた。副社長の李必新[242]という人物

[241] 1946年の創刊から1951年の廃刊まで、ソ連側スタッフは、前後合わせて20数名が在籍した。タイピストなどのような技術員を民間人から雇った少数の例外を除くと、ソ連側スタッフは全員が現役のソ連軍人であった。彼らが、新聞社の社長、副社長から各部門責任者に至るまでの要職を独占した。彼らのほとんどはソ連国内の大学の外国語学部で、本格的な中国語教育を受けており、中国語が堪能であった。

[242] 副社長、副編集長を務めた李必新少佐（のちに中佐に昇進）は、中国四川省の出身で、1926年にソ連へ留学して、1939年にソ連共産党に入党した（前掲鄭成博士論文）。

である。彼は一番付き合いにくい人間であった。李必新の妻はロシア人で、彼自身も完全にロシア化されていた。彼は中国人スタッフとの個人的付き合いを控え、新聞社を退社すると真っ直ぐに自宅に直行した。社長の謝徳明らのように、中国人スタッフを自宅へ招いたり、レストランへ食事に誘ったりすることは一度もなかった。中国人スタッフだけでなく、ソ連側スタッフとも、彼は必要以上の話しはしないように見えた。ただ、柳亜楼などの中共高級幹部とは、親交に努めているようだった。

後述する秋江辞職事件での、李必新の対応は適切であったとは言いがたい。少なくとも、激した秋江の過剰な反発を理由にして、彼を辞職にまで追い込むべきではなかった。この辞職事件後、秋江は大連中共トップの韓光［1912-2008］、欧陽欽［1900-1978］に事情を説明して、何とか職場復帰をしようと努めたが、中共大連市委は、自分たちの方から申出るのは不適切だと考えて、本件に関与しない方針を採った。

李必新は学究タイプの人間ではないが、仕事に対する姿勢はまじめそのもので、デスクに向ってひたすら原稿チェックに没頭している姿が印象に残っている。彼は、周りの人々との付き合いを避けていたので、実話報社内においてはいつも孤独な存在であった。実話報の解散後、実話報で働いたことがある中国人スタッフが集まるたびに、一緒に働いたソ連側スタッフのことを、よく話題にしたが、ただ李必新だけは話題になることが殆どなかった。

実話報の中国人スタッフの殆どは、延安からやってきた幹部たちであったが、共産党に対して強い憧憬を持つ「進歩人士」の地元青年も何人か採用された。当時、数少ない「進歩人士」を除くと、大連の住民の大半は、中国共産党を立派な政党として高く評価するよりも、むしろ恐れていた。日本が大連を統治した40年の間、共産党の存在はまったく許されなかったので、普通の大連市民は共産党の実像を知らなかった。当局の一方的な宣伝によって、大連市民の間には、共産党は人殺し集団であるというイメージが浸透していった。それに、40年間の植民地の歴史と奴隷化教育のために、彼らには、日本はすごい、アメリカも立派な国だ、一方ソ連はダサい、中国共産党に至ってはもう論外だという価値観が強かった。それ故、日本が戦争に負けた時、大連市民が期待したものは、ソ連軍ではなく、アメリカの後ろ盾のある国民党政府であった。ぼろ服を纏った共産党幹部を目の当たりにした彼らの中に、立派な軍服を着用している国民党部隊やアメリカ軍に来てほしいという気持ちが強かったとしても、何ら不思議ではない。旅大のこのような雰囲気は、我々の仕事に大きな妨げとなった。

とは言え、実話報が相当の知名度と信用を博していたことも事実である。実話報の中国人スタッフは政治的に信頼できる、かつ能力の高い人物だと考えられていた。なぜなら、実話報は、ソ連共産党中央委員会が作った対外報道機関紙なので、優秀な人間でなければ、働くことはできないと思われていたからである。

中国人スタッフは待遇面でも相当に恵まれていた。給料の額ははっきり覚えてはいないが、私たちはソ連軍駐屯地内の店で一般市場価格よりも安い値段で、しかも外でなかなか手

に入らないような日常生活用品までも購入することができた。また、一般人の立入りは禁止されていた旅大軍港にも自由に出入することができた。こうした特別な待遇を享受できる我々はある意味で一種の特権階層であった。

実話報の編集・販売

実話報では、分野毎の記事の掲載本数は、事前に計画が立てられていた。例えば、メーデーの日のソ連国内行事の報道については、写真や記事の割付をどうするか、数週間前から詳しく計画を立てていた。

記事は、まず初稿を担当記者が書いた。それは各部署の責任者に提出され、許可を得たのち、初めて印刷に回された。売れ行きがよくて既定印刷部数では実需に応じられない時もあったが、計画経済体制のソ連では、印刷部数の枠がきちんと決められおり、臨機応変に印刷部数を増やすことは一度もなかった。

ソ連軍指導部は、大連の地方ニュースには、重要性を与えなかった。実話報で重視されたのは、ソ連社会主義の先進性の宣伝であった。例えば、ソ連の労働者たちは風光明媚な療養地で悠然と休暇を過しているとか、集団農場が未曾有の生産性をあげたとか、ソ連の民主制度は人民の意思を代表しているとか、といった類の記事が実話報のかなりの紙幅を占めた。

実話報の販売地域は、原則として旅大地域に限られていた。この地域内では、住民は自由に新聞を購入することができ、地域外に持ち出すことも、禁止されてはいなかった。そのため、上海や香港など大連以外の地域でも実話報を読むことは可能であった。中共にとって、旅大は欠かすことができない重要な兵器調達基地であったので、兵器調達のために幹部たちがしばしば大連を訪れた。彼らが、そのついでに実話報を買い集めて各々の解放区に持ち帰ることもあった。

実話報が各解放区で歓迎された理由は、各解放区には印刷設備が少なく、また、まとまった理論学習資料が極端に不足していたからである。大連の新華書店では、ソ連共産党の党組織生活、組合活動など、実話報の記事から抜粋して、テーマ毎に編集した小冊子が販売されていた。これらの小冊子はどれも好評で、長期間に亘って発行されたが、残念ながら今日ではどこにも保存されていないのではないだろうか。小冊子には、文章の出所は一切明記されていなかった。実話報は無断借用の事実を知ってはいたが、黙認していた。

報道方針をめぐる中ソの衝突、秋江辞職事件

実話報の編集権はすべてソ連側の掌中にあった。中国側スタッフは、編集について全く口を挟む余地がなかった。個人としてできることは、せいぜい担当部署の責任者に自分の考えを述べること留まりであった。例えば、魯迅の特集をやってみてはどうかという提案をしたとしても、その採否の決定には、まったく関与することができなかった。しかも、このような提案ができるのは私的レベルでの意見交換の時に止まり、会議などの公の場では無理だった。

我々中国人スタッフはそれぞれ延安の解放日報、または新華社からやってきた新聞のプロであるという自負心を持っていたので、もし編集に参加できれば、新聞全体の質の向上に貢献できるのに、という悔しい思いがあった。

国民党政権を批判してはいけないという、ソ連側の最初の頃の編集方針に対し、我々は相当の不満を抱いた。旅大の住民たちには実話報の読者よりも、旅大報の読者の方が多かった。その一因は、旅大報は国民党反動派を真正面から糾弾していることにあった。私は何度もザハロフに国民党政府批判を強め、国共内戦報道を増やすように求めた。ソ連側の同志たちは中国の事情をよく知らないから、国民党政権を批判しないという編集方針を採っているのだろうと考えていたからである。ソ連の外交政策上の理由によるものであるとは、当時は思いもしなかった。

ソ連側の圧力で1947年10月に辞めさせられた旅大党地委第二書記の劉順元［1903-1996］が、「どうして我々はソ連の指示に従わなければならないのだ。ここは中国ではないのか」という発言をしたことがあった。それを聞いて、国民党政府を批判しようとしないザハロフへの不満が急に膨らんだ覚えがある。

実話報の仕事にやりがいを感じることができず、不満を募らせた私たち中国人スタッフは、ソ連側へ意見書を提出することに決めた。実話報社内の中共党支部とソ連側との間には正式のチャネルがないので、意見書は旅大党地委書記韓光を通してソ連側へ渡すことにした。意見書を持って地委に韓光を訪ねた日、彼はたまたま留守だった。代わって応対した地委副書記の劉順元は「このような意見書を地委の方から転送するのは、大袈裟すぎる。実話報社内の話だから、君たちが直接ソ連側に出せばよいではないか」と、述べた。そこで、彼に言われたとおりに私たちは謝徳明社長に意見書を提出した。

数日後、ソ連側スタッフの李必新副社長が新聞社を代表して、中国人スタッフに新聞社側の見解を次のように表明した。「実話報では、中共系統の新聞社のやり方をそのまま用いることはできない。なぜなら我々はソ連軍の新聞であるからだ。我々の新聞の論調とスタイルは、タス通信社とプラウダに一致させなければならない」

続けて、李必新は、中国人スタッフの意見書提出はソ連に対する内政干渉に等しいと戒めた。それを聞いて秋江は、ついに切れた。「善意から少々進言しただけなのに、内政干渉とは料簡違いも甚だしい。それならば、そちらの意見に従うやつだけにやらせればいい。俺は、もう、辞める」、と。李必新は「結構です。雇用契約を解除します。会計のほうで給料の清算手続きをしてください」と、冷ややかに応じた。結局、秋江は実話報を辞めるはめになった。

韓光は後にこの一件を知ると、実話報はソ連軍の機関であるから、決して我々が意見を云々できるところではないのだ、と厳しく戒めた。私を含め、実話報に残った中国人スタッフは、旅大地委からどうしてソ連同志たちに同調しなかったのだと厳しく責任を追及され、何度も反省会の開催を強いられた。

それ以降、我々がソ連側に対して真正面から意見を出すようなことは二度となかった。勿論、一部の同志はソ連側のやり方に対して、引き続き不満を抱いていた。そのうちの何人かはチャンスを見て、南下部隊に参加した。実話報の中国人スタッフは南下部隊へ編入されることはないという原則であったので、本人たちが強く希望して南下部隊参加となったものであろう。

日が経つにつれて、ソ連側も我々の意見にも汲むべきところがあることに気づいたのか、従来のやり方を部分的に改めた。まず、各部に中国人スタッフから任命する副部長ポストを新設し、延安から来た信頼できる中共幹部をこのポストに就けた。同時に、一人の中国人スタッフを李必新副社長のアシスタントに任じた。私は地方部の副部長に任じられ、時には上司のザハロフの指示がなくても物事を決めることができるようになった。具体的に言えば、ザハロフが、私の所に来て、何か決めかねている原稿はないかと尋ね、私がないと答えれば、そのまま記事として出すことができるようになったのである。このように、ソ連側は編集権の一部を徐々に我々現場の人間に任せる方向に変化した。このような動きは、秋江が実話報を去ってから2、3カ月後に始まった。

秋江辞職事件のようなこともあったが、総じて言えば、私たち中国人スタッフとソ連側スタッフとの仲はよかった。

ソ連側が、人手を必要とする時は、旅大党地委に声をかけさえすれば、同地委は常に迅速に対処した。例えば、ソ連側が、通訳が足りないと地委に申し出た時、地委は直ちに、実話報の中国人女性スタッフに、紹介状を持たせて華北大学へ出張させた。華北大学は協力要請に対して、12名のロシア語専攻学生を派遣して来た。同大学は、実話報で勤務するのは卒業生にとっても訓練のよいチャンスだと考えたのであろう。実話報の受入れ枠は6名しかなかったので、残りの6学生は他の機関に配属された。

朝鮮戦争時の実話報

朝鮮戦争の時だった。ソ連人スタッフは、いつもは軍服着用ではなかったのに、ある日、突然全員が軍靴、ベルト、ピストルという出立で新聞社に現れた。私は、彼らは毎月一度の定例射撃訓練のために軍服で出社したのであろうと推測したが、間もなく自分の推測は外れていたことに気がついた。当時は中国軍が鴨緑江を渡ろうとしていた頃［1950年10月末］で、東北の全情勢は緊迫度を増していた。ソ連人スタッフはソ連軍の情報と指示により、突発事態に備えるために、軍服姿で新聞社に出てきたものらしい。このように緊迫度が日々増大していたにも拘わらず、私の記憶では、朝鮮戦争の戦況をめぐって、中ソスタッフ間で情報交換をしたことは一度もなかった。

朝鮮戦争が拡大するにつれて、私は一刻も早く戦地記者として戦場へ赴きたいという気持ちが沸いてきた。私が自分の希望を述べるや否や、上司ザハロフの顔色が暗くなった。

「もうここで働きたくないのか、うちの待遇が悪いから辞めたいということなのか」と、

彼は私の真意を探ろうとした。

「そういうことではありません。私はただ、戦地記者を必要としているところで働きたいだけです」

私は、自分がいかに戦地記者としての素質を備えているかをアピールし、さらに派遣が認められれば、責任を持って適当な後任者を紹介するとまで言って懸命に説得した。

「すまないが、君は別に過ちを犯したわけではないので、君を異動させる権限は、私にはない。どうしても実話報を辞めたいということなら、社長に直接相談するように」と、ザハロフは答えた。

早速社長のところに行って、事情を説明した。彼の返答は、「抗米援朝は中国側の戦略である。実話報は戦地に記者を送り出す必要はないし、私は君を派遣する権限も持っていない」と、ザハロフと似たような回答であった。

しかし、私は簡単に希望を捨てたくはなかった。「私は中国共産党員ですので、私の所属する党の許可さえもらえれば十分ということですか」と確かめた。

「それは君自身の判断次第だ。私に出来ることは、君の辞職願を受理することだけで、それ以外の権限は何も持っていない」

しかし、話しているうちに、社長は私の気持ちを理解したようで、まず一カ月の休暇を利用して戦地に赴くことを、所属する中共の組織部に相談してみてはどうかとアドバイスしてくれた。また、組織部から同意を得られた場合には、実話報は私を引き止めるようなことはしないと約束してくれた。

彼のアドバイスを聞いて、戦地記者として戦場に赴くことができるだろうと一安心した。当時実話報の職員は待遇面では大変恵まれていた。例えば、私の場合は、大佐クラスなので、豊富なメニューのあるソ連軍将校クラブで食事を取ることができたし、映画館の特等座席券などの支給も受けることもできた。私のポストは羨望の的であり、本来なら、自ら簡単に手放すには惜しいポストではあった。実話報に就職したい者は大勢いるので、私が去っても、さほど大きな迷惑にはならないだろうと考えていた。

以上の事例から判るように、中ソ双方は互いに内部事項には干渉しない方針を取っていた。ソ連が中共側の会議に強引に立ち入って傍聴したと書いている本もあるが、それは事実と合致しない。中国共産党がソ連側の意見やアドバイスを求めるために、代表者の列席を要請した場合を除けば、ソ連側が一方的に中共の会議に出席することはなかったからである。

社長のアドバイスと了解を得て、私は早速所属する党支部の責任者に相談してみた。責任者は、本件は自分一人の判断では決めることはできないから、北京に行って、直接に党中央宣伝部の陸定一［1906-1996］部長から指示を仰ぐようにと答えた。私はカメラマンの劉東鰲を連れて、直ちに北京に向かった。陸定一は顔を合わすや否や、一刻も早く大連に戻れと厳しい口調で私を戒めた。「我々が最優先にすべきことは、無条件にソ連軍に協力することだ。君の仕事はソ連軍に協力して、旅大を守ることだ。劉東鰲同志は中ソ友好協会の中国側

の職員だから、彼が朝鮮戦場に行くことを希望するなら、可能性はあるが、君は即刻大連の職場に復帰せよ！」

第三節　大連のソ連駐屯軍と中共組織

ソ連軍の現地占領政策

もしソ連軍の中国東北進駐がなかったならば、今日の中国は相当違う様相を呈していたことは間違いない。ところで、今日、なぜか多くの人はソ連軍の東北進駐をソ連の一方的な大国主義とショービニズムの発露であると認識しているようである。大国主義という語は、時代とともに中身が変わってきたことに注意すべきだと思う。

私は、ソ連軍の東北進駐が、ソ連自身の利益を度外視した行動であったと主張するつもりはない。ソ連の行動が自国の利益を計算したものであったことは、言うまでもない。ただ、私が強調したいのは、第二次世界大戦後のソ連と中共両者の利益は緊密に結合していたこと、したがってソ連の軍事行動は、自らの利益に適合すると同時に、中国共産党の利益にも合致していたということである。

その後中ソ両国の同盟関係がどうして決裂したのかについては、今日でもまだ十分には明らかになっていないようである。鄧小平は中ソ紛争について、中ソ両国が度を越えた発言をしたためだという意味のコメントをしたことがある。しかし、あと一歩で、核戦争に突入するほどの危機一髪の事態に陥った両国関係を、それだけでは説明しきれないのは当然であろう。

ソ連軍の東北進駐時、ソ連は極東における自己の利益を確保するためには、各勢力に挟まれた東北地域を軍事占領する必要性を痛感していたはずである。一方、中国共産党は、天下を取るためには、中国国民党の機先を制して、東北を自己の掌中に収める必要があった。同様に、アメリカも、中国を共産主義勢力に奪われないためには、東北を占領する必要に迫られていた。東北獲得のために、ソ連、アメリカ、中国共産党、中国国民党の各勢力は、全力を投入した。そこで展開された熾烈な闘争は実に興味深いものがある。

ソ連軍の婦女暴行

ソ連赤軍が中国の東北で、多くの中国人婦女を暴行凌辱したという説に対して、中国、ソ連の双方はともに強く否定している。しかし、私が知っている限りでも、このような事実は間違いなく存在した[243]。

これは、元を正せば、人間性が戦争という怪物によって歪められた結果にほかならない。

---

[243] ソ連軍人による暴行は、従来中共政権がタブー視してきたため、今日に至っても被害状況の全容は公開されていない。混乱を極めた当時の状況を考えると、中共側が、事態を完全には把握していたかどうかも疑問である。なお、ソ連軍人の暴行は、張国萍・恵兆倫「東北抗聯大連工作組配合蘇軍接管大連」、大連市史志弁公室編『蘇聯紅軍在旅大』、中共大連党史叢書（十）、1995年 p. 227 などに記録されている。

ドイツ軍がソ連を侵略した際に、無数のソ連女性を凌辱し、しかも数多くの女性をドイツに連行したことは周知の事実である。ドイツは、ソ連の肥沃な黒土地帯まで侵攻して、夥しい物質を略奪した。それ故に、ドイツ軍に対して、ソ連人が抱いている憎悪は尋常のものではなかった。ソ連軍がようやく反撃に転じると、ソ連当局は兵士たちの士気を高めるために、至る所に、「ソ連赤軍よ！ 早く助けて、助けて！」と悲鳴を上げている、ドイツ軍に縛られたソ連女性の無残な姿を描いたポスターを貼った。このポスターは、これ以上にないほどに激しい怒りを喚起し、戦意高揚に貢献した。おそらくソ連軍上層部は、このような過激な手法を使わない限り、軍隊の士気を高揚させることはできず、ドイツ軍の戦線を突破することは容易ではないと考えたのであろう。特に対独反撃の後半期に入ると、ドイツ軍の手強い抵抗に遭って、一部のソ連軍部隊は軍隊として態をなさないほどに総崩れとなった。それにも拘わらず、ばらばらとなったソ連軍兵士は一人ひとり、血眼になってひたすらにドイツの方に向かった。彼らを駆り立てたものは、極点に達したドイツ軍への憎悪であった。

苦戦の末、ドイツを陥落させたソ連赤軍は休む間もなく、中国東北に転戦してきた。彼らがドイツ軍に対して見せた、制止できない激昂の余韻は残っており、それを中国東北の人々にも向けた。ソ連赤軍が中国民衆をレイプし、あるいは略奪したことは間違いない事実である。戦争は普通の人間をここまで変えてしまうものなのだ。

こうした醜い現象は、単にソ連赤軍に限らず、実は延安の中共軍隊にも見られた。本来、中国紅軍の規律は相当に厳しかった。しかし抗日戦争が勃発し、地方から多くの若者が延安にやってきて以後は、兵士による一般女性への暴行事件が延安でも散発的に起きるようになった。これらの事件は報道されることはなかったので、一般の中国人にはあまり知られていない。

ここで私が強調したいことは、こうした暴行はあくまでも一部の軍人の仕業に過ぎず、決して当時のソ連軍主流の行為ではなかったことである。比喩的に言えば、現在の中国社会に公金横領、汚職が横行しているからといって、すべての中国共産党員が不正を行っていると結論づけることはできないことと同じである。ソ連軍主流は、中国人民に対して友好的であり、我々中国の解放のために尽力してくれたと評価できる。

ただ、最初の段階においては、相互の立場の違いや意思疎通の不足などにより、中ソ間にかなりの誤解や対立があったことも事実である。この点を説明するため、大連市長の選任をめぐって生じた中ソ間の対立を紹介したい。

ソ連が漢奸遅子祥を大連市長に

ソ連側は大連の現地政権を樹立するために、遅子祥［1884–1951］[244]という地元商人を市

[244] 遅子祥は、山東省生まれで大連に移ってきた。商業で成功し、1916年大連雑貨業同業会会長、更に山東同郷会会長にも就任。1945年10月末、ソ連軍によって大連市長に任命され、1947年4月に成立した関東公署の主席に転じた。1951年8月に反革命罪で中共政権によって処刑された。

長に推した。しかし、遅子祥は日本植民地時代には対日協力者であったので、中共幹部の殆どは、最初から強く反発した。旅大党地委第二書記の劉順元は、「俺にでもやらせればよいのに、こともあろうに、なぜ、漢奸を出してきたのだ」と不満を露わにした。

「ソ連の指導部が大連の現地事情を把握していないから、このような非現実的な人選を押しつけて来たのだ。大漢奸の下で働くことに、耐えられるものか！」と、私たちは憤った。国際関係の大局に通じていなかった私たちにとっては、このような措置は到底受け入れられるものではなかった。

本件に関して、中国共産党中央と出先の意見は分かれた。毛沢東らの中共指導者のそれは、ソ連側の指令に服従して、何でもソ連の指示通りに動くべきだというものであった。これに対して我々現地幹部は、ソ連側の指令は理解し難く、とても追随できるものではないと不満を表明した。時間が経つにつれて、現地幹部たちの憤怒と反対の声は終息するどころか、かえって高まる一方であった。現地の中共幹部の賛同を取り付けられなかったソ連軍当局は、この人選に同意しなければ、中共組織全部を旅大から追い出すと最後通牒を突きつけた。

ソ連がここまで大連市長の人選に固執したのは次のような背景があってのことであることを、後になって知った。

ヤルタ会談［1945年2月前半］の時点では、原子爆弾を開発中であったが、未だ完成の目途が立っていなかったアメリカは、戦争に勝つためには、さらに百万人の軍隊を投入する必要があると計算していた。そこで、アメリカ側は、自らの犠牲を軽減させるために、なるべく早くソ連軍を中国戦場に参戦させて日本軍を消耗させたいと考えていた。チャーチルがスターリンに、ソ連赤軍を欧州戦場から中国東北戦場に移動させるにはどれくらい時間を要するかと質問したところ、ドイツを陥落させてから三カ月という回答であったという。スターリンはソ連の対日参戦の見返りとして、旅順、大連の軍港化、日本の北方領土の領有、それに、中国東北の鉄道の支配権といった権益を求めたという。

後世、スターリンは大勢の人に罵倒された。スターリンが多くの過ちを犯したことは、否定できない。しかし、東北問題に限って言えば、彼の戦略は非常に卓越したものであったと認めざるを得ない。チャーチルとルーズベルトは、スターリンの上記要求に、東北を中国共産党には渡さないことという条件を付けた。スターリンは、東北は中国の内部問題であるから、ソ連は一切関与しないと答えた。

その後、スターリンとアメリカおよび国民党政府との間に、次のような約束が交わされたという。すなわち、ソ連は、東北の現地政権を国民党に移譲して現地の新政権樹立には関与しないこと、およびソ連占領地域も共産党には渡さないことを約束し、一方、アメリカと国民政府は、ソ連軍による旅順、大連の占領と治安維持を承認し、同地域には国民党軍隊を駐屯させないことを約した。

この約束後、スターリンはソ連赤軍上層部に対して、中国共産党にあからさまに接近して

友好的な姿勢を示すことは慎むべきこと、および東北地域においてはソ連赤軍の軍事占領を続け国民党軍やアメリカ軍の介入は徹底して排除すべきこと、という二つの方針を強調した。この方針を決めたスターリンは、直ちにソ連極東軍区の政治部主任を延安に派遣して中国共産党側に通知した。その際、ソ連側の通訳を担当したのが、後に実話報の社長を務めた謝徳明であったという。丁度、毛沢東は重慶談判［1945年8月28日に毛沢東重慶到着、10月10日に国民党政権との間に双十協定成立］に出かけて不在であったので、代わりに劉少奇が応対した。政治部主任は劉少奇にスターリンからの伝言として、「急いで、どこにも立ち寄らずに、東北入りをして欲しい。何も持って行く必要はない。武器はソ連が提供する」と語り、更に「できれば、私が乗ってきた飛行機でまず数名の中共中央委員を東北に同伴したい。彼らが中心になって、東北地域を統括する最高組織として東北局をハルビンに設立して欲しい」[245]と語ったという。

トラブルを避けるため、中共部隊は八路軍とは名乗らずに、東北民主連軍という名称を用いて東北入りした。異変に気付いた国民党政府は、ソ連側に抗議したが、スターリンは、これは中国の内政問題であり、ソ連には一切関係ないことだと抗議を退けた。

話しを大連市長人選に戻すと、頑としてソ連の戦略に従わない旅大の中共幹部は少なくなかった。ソ連軍の総司令は、劉順元らの旅大中共地委トップを呼び出して、ソ連側の命令への服従を迫った。中共幹部らは、積もり重なっていた不満を爆発させた。しかし、ソ連軍当局はそれ以上の迫力で次のように強制した。命令はスターリン指導部から出されたものであり、百パーセント遵守せよ、と。

とは言え、現地ソ連軍幹部が命令の意味を理解していたかどうかは疑わしい。彼らは上からの命令をただ鵜呑みにして、忠実に履行しようとしただけのようである。それで中共幹部に説得的な説明をすることはできず、中共幹部の非協力的姿勢に遭うと、一層高飛車な態度で迫ったようだ。

遅子祥の大連市長就任後、地元で盛大な祝賀大会が開かれた。現地の中共幹部だけではなく、遠く南方にいる蒋介石も喜ぶはずはなかった。国民党政府が、ソ連側にクレームをつけたところ、「それはあなた方の問題であり、我方とは関係ない」と一蹴されてしまった。

「現地政権が解散されない限り、当方が接収工作員を派遣したとしても、何もできないではないか」と、国民政府が問い詰めると、ソ連側は「国民党政府の接収工作員がなかなか来なかったので、現地の民衆が自主的に政権を立ち上げただけである。我方は、これは中国の国内問題だと理解しており、一切関わらないようにしてきた。不満があるなら、あなた方で

---

[245] 1945年9月15日、東北に進駐したソ連軍はベロルソフ大佐を延安に派遣して、中共の東北進軍に関するソ連側の意見を中共指導部に伝えた。その時、謝徳明（当時中佐）は通訳を担当した。中国社会科学院近代史研究所薛銜天研究員が行った謝徳明本人とのインタビューによると、ソ連側の代表は中共の東北進軍を黙認すると理解されるようなメッセージを確かに伝えた。但し、欧陽氏が回想するような、中共に対して東北進軍を勧めたことはなかったようである（「駐東北蘇軍代表飛赴延安内情」、『炎黄春秋』2003年第2期　pp. 48–51）。

適宜対応して頂きたい」と、答えるのみであった。その後、蒋介石は息子の蒋経国をソ連に派遣して、旅順、大連を中国共産党に渡したのは約束違反ではないかと、スターリンと交渉させた。しかし、ソ連側は、遅子祥はただの地元商人であり、中国共産党とは何の関係もないと、はねつけた。

同じ頃、ソ連軍は我々中共幹部に対して、早く工会や農会などの組織を作るように催促した。ぐずぐずしている中共幹部たちに対して、これらの組織を掌中にできれば現地政権を把握したことと同じではないか。名目上のポストに過ぎない市長を誰にするかで馬鹿げた争いをしている暇などないのだ、とソ連軍の責任者は一喝した。

やっと意味が判りはじめた旅大の幹部たちは、早速基層政権機関の設立に取りかかった。最初は、地主の土地を貧民に分配する土地改革から着手しようとしたが、すぐにソ連軍から共産党色が出過ぎるという理由で制止された。

土地改革の活発化は、同地の中共勢力の存在の大きさを示すことになり、ソ連側が旅大で中共の活動を後押ししていると疑われることは避けられない。それは、国民党政府にソ連軍批判の恰好の材料をわざわざ提供してやるに等しい。したがって、ソ連軍は旅大の中共幹部に対して、土地改革のような過激な活動は控えよ、という強い姿勢で臨んだのだ。中共幹部が土地改革断行のために地主糾弾大会を開こうとした際に、ソ連軍が軍隊を出して強制的に中止させたことが何度かあった。代わりに、ソ連軍が勧めたのは、日本が残した不動産の分配であった。

ソ連が大局的情勢を見据えて、採用した一連の政策は、直ぐには地元市民や中共幹部の理解を得ることはできなかった。しかし、今から考えると、兄貴分であるソ連軍のやり方はさすがにうまかったと感心する。

一方、アメリカも傍観しているはずはなかった。アメリカと国民党の間には、遅子祥を青島に待機中のアメリカ軍艦に連れ出したのち国連に出席させて、彼にソ連の計画、手口などの内幕を徹底的に暴露させようという計画があったようである。

遅子祥がアメリカと国民党によって連れ出され、国連で証言するようなことになれば、ソ連と中国共産党の面子はまるつぶれとなる。ソ連軍は、遅子祥の身の安全と身柄の確保を中共幹部に厳しく求めた。ソ連軍は、大連市政府を大連から旅順軍港の中に移し、完全な監視下に置いた。市長室には、三つの部屋から成るワンフロアの一番奥の部屋を充て、入口に一番近い部屋と二つ目の部屋にはそれぞれ旅大党地委の仲夷と韓光が入った。ソ連と旅大中共幹部から許可を得ない限り、誰も遅子祥市長にアクセスできなくなった。市政府機関を軍事統制区域に移すことは、民衆との接点を切断することになるのではないかと心配する幹部も存在したが、市政府と遅子祥市長を確保するためには効果的な方法であった。遅市長にできることは、わずかに公の場でソ連の偉大さと中ソ友好を唱えることだけになった。

大連市政府が発足して間もなく、国民党側によって任命された別の市長が大連にやってきた。ソ連は、この国民党市長を市政府各部門に形式的に案内をしただけで、政権の国民党側

への移譲は完了したと見なした。国民党市長は、警備担当の小部隊を大連に駐屯させようとしたが、ソ連側に拒まれた。ソ連側の言い分は、合意に従い責任を持って治安維持に努めているのであるから、中国側が武装勢力を置くことはできないというものであった。国民党市長および数人の同行者は、形式上移譲された地方政府各部門を前にして、なす術を知らなかった。国民党市長は遅子祥と会食した際に、あなたの任務は終わったから、引退しろと遅に迫ったが、遅は自分こそが民主選挙で選ばれた市長であると反論した。

また、国民党市長は、旧警察の解散、新たな警察部隊の編成を指示したが、ソ連軍はまったく協力しなかった。ソ連軍は、これは中国の国内問題であるから関与しない、できるなら好きにやるがよいという態度で傍観した。実際は、東北に入った八路軍が、秘かに現地の警官と入れ替わっており、いつの間にか現地の警察はすべて八路軍の兵士で構成されていた。警察の長も、ほかでもない八路軍の旅長が担当していた。

ソ連側の巧妙な策謀の意図する所を、毛沢東はよく理解していた。毛沢東は次のような意見を発表したことがある。中国革命を、ソ連は必ず援助する。ソ連側の援助なくしては、革命が成功する見込みはない。それ故、ソ連側が明確な見解を示さない場合でも、我々はソ連側の考えを察して進んで協力すべきである、と。要するに、毛沢東が強調したことは、ソ連軍の戦略をよく理解した上での、ソ連軍への絶対的服従であった。

今日いまだに数多く見られるソ連を罵倒する文章の中には、ソ連が漢奸を日本敗戦後の大連市長に就任させた理由は、ソ連自身が不正を働くための方便であったという類の記述が見られる。これが事実に反することは、上記より明かである。

ソ連が旅大でとった大胆な方策は、ソ連と中共双方の利益に適うものであった。しかし、その意図を同地の中共幹部全員に明白に開示することはできなかった。それ故、事情に通じていない共産党一般幹部は、八年間の抗日戦によってどうにか日本軍を追放したばかりなのに、今度はソ連軍が我が物顔に入って来て偉そうに号令しているのはどういうことなのか、一歩譲って共同管理であることは認めたとしても、どうしてソ連軍が上に立って、漢奸市長と組んで支配者のように振舞い、我々に指令を出しているのだ、と思ったのであった。

このような行き違いがあったために、共産党一般幹部とソ連軍の間の対立感情はかなり激しいものがあり、一時は、大連から退去させるぞと、ソ連軍が共産党に警告するほどにまで緊張した。

ソ連軍からの武器援助

ソ連軍が東北地方にある工場設備を自国に持ち帰ったことは事実である。その主な原因は、ドイツとの長期にわたる熾烈な戦いで国力が極度に疲弊していたソ連に、新たにアメリカとの対立に備える必要が生じ、一日も早い工業生産の再開を迫られたためであろう。このほかにも、ソ連側には、中国共産党に東北で政権基盤を固めることができる実力があるかどうか確信がなかったことも考えられる。もし東北を国民党が掌握すると、東北の重工業設備

はすべて国民党のものになる、それならば、自国に持ち帰ったほうが賢明ではないかという計算が、ソ連側にあったのかもしれない。このような背景があったにも拘わらず、のちに中ソ関係が悪化すると、ソ連軍による工場設備持ち去りは、ソ連を罵倒する格好の材料となった。

実際には、ソ連軍は中共に対して相当の武器援助を行った。当時、共産党の武装は貧弱で、国民党軍には比肩できなかった。東北入りをした八路軍を見て、地元住民には「なんというオンボロ軍隊だ」という感想を漏らす者が多かったと言う。一方、国民党の方は、最新鋭のアメリカ製武器で装備された新一軍と新六軍を空輸して東北に投入した。これに対抗して、ソ連は、旧日本軍の武器だけではなく、旧ドイツ軍の武器も大量に中共の東北軍に与えた。援助は、中国共産党のためでもあるとともに、ソ連自身の利益のためでもあった。仮に、東北がアメリカか蒋介石の勢力範囲に入ってしまったなら、ソ連の極東における利益は大きく脅かされるだけではなく、兵力を極東に移動させる必要が生じ、欧州方面が手薄になる。ソ連にとっては、どうしても避けたいシナリオであったろう。このような背景があって、ソ連は中国共産党を積極的に援助したのであろう。

このように複雑な利害関係を考慮に入れると、当時のソ連の行動は、自国だけの利益のためであったとか、逆に専ら中国共産党の利益のためであったとか、単純な二分法では説明し切れないのである。正しくは、中国共産党とソ連の利益は、当時は見事に一致しており、本当の意味での「志同道合」、「一心同体」が具現していたと見るべきであろう。

スターリンは、中国共産党に対して東北で全面戦争を始める前に、まず国民党の新一軍と新六軍を潰すようにと助言した。これを受けて、中国共産党内や軍隊には次のような表現が流行った。「吃菜先吃白菜心、打仗先打新六军」(白菜はその芯から食べ、戦いは新六軍をまず打てという意)。

第十一章　ソ連への幻滅

第一節　北京中ソ友好協会総会へ転勤

1949年10月1日に成立した中華人民共和国は、対ソ一辺倒の政策を採った。中国の国力を向上させるためには、ソ連との協力が絶対であるという認識が国全体に浸透していた。

実話報は1951年8月に突如廃刊になった。当時東北局は瀋陽に移転していたが、そのトップ、高崗［1905-1954］の命を受けて、私は東北局の下にある中ソ友好協会が発行する

中苏友好协会总会机关报

中苏友好报

第235号　1956年10月27日　星期六

向共产主义迈进的苏联

700个太陽浴室

去年在阿塞拜疆共和国首都巴庫附近設立的兩个太陽浴室（就是利用太陽的热力来燒水的澡堂），經过一年来的試驗，証明效果很好。在夏天的时候，水的温度可以达到攝氏48度 到56度；即使在冬天，也可以达到攝氏43度。

阿塞拜疆共和国部長会議已經作出决定：要在今年內建立200个这样的太陽浴室，明年再增設500个太陽浴室。这些浴室主要將設立在机器拖拉机站、国营农場、少先队夏令营和疗养中心。

小小建議价值大

苏联的一个合理化建議者文丘納斯建議用紙漿的廢料複制綫筒来代替用木料制制綫筒。据估計，如果苏联原来計划在一年中所生产的20亿个木質綫筒，利用这种方法在自动流水作業綫上来制造的話，那就可以节省好几十万立方公尺的木料，并至少节省一亿盧布。

新的煤矿

在离國境城不远的地方，沿着东西伯利亞鉄路綫，苏联的地質学家們發現了新的煤矿——阿捷斯克煤矿。这里的煤田伸展約有820多平方里，它分兩層蘊藏在45—60尺深的地下，煤的厚度从9尺到21尺。煤的質量非常好。不久，这里即將开始开采工作，估計一年可以开采1,600万吨煤。

叶尼塞河上的大桥

在克拉斯諾雅尔斯克附近的叶尼塞河上，現在正在兴建一座3,100公尺（合4里多）長的大桥。筑桥的工人将挖掘50万立方公尺的土方，从河底移挪几万吨重的河泥，并灌注8万立方公尺的水泥。大桥的每兩个桥墩之間的距离是24公尺；每节桥身的構件共重1,600吨。

打渔季节开始了

冬天来臨了，苏联遠东森林地帶的打漁季节就要开始了。許多集体农庄的漁手已穿上靴和的冬裝，帶着漁槍出發到遠东原始森林中打獵。許多集体农庄的漁手还准备深入到人迹罕至的森林深处獵取珍品。伯力边区的獵人并向沿海边区的獵人提出了冬季打獵的竞賽。

莫斯科州农民的新保証

10月17日莫斯科州的农民勞动者举行了几千人的群众大会，庆祝本年度社会主义竞賽的巨大胜利。本經济年度各集体农庄平均每头奶牛的挤奶量为2,712公斤，超过保証212公斤，各国营农場平均为3,446公斤，比上一經济年度多255公斤，馬鈴薯产量等于去年的2.6倍，蔬菜产量比去年增加了50%。参加大会者最后一致通过，爭取在明年使各种主要农产品达到1960年的生产指标。

建立核子物理研究所

在烏兹别克共和国首都塔什干，正在建立一个核子物理研究所。这个研究所包括一个供实驗用的原子反应堆和許多实驗室，它們將形成一个小小的市鎮。研究所除了进行理論方面的研究工作以外，还將对原子能在国民經济各个方面的和不利用进行全面的研究和实驗，并把研究結果供給苏联中亞細亞的各个科学机关和科学家；研究所还將接受各科学机关所委托的研究实驗任务。

全世界的人民都为苏联今年获得了空前未有的谷物大丰收而欢欣鼓舞。

这一次大丰收，标志着苏联在农業生产上获得了新的重大胜利。在苏联第六个五年計划中，谷物的增产任务是巨大的；到1960年，谷物的年产量要达到110亿吉特（合3,000多亿斤），假定把这些谷物裝上火車，如果每这些火車挂成一字長蛇陣，就可以环繞地球一周。按9亿人口来計算，到1960年每个苏联人一年可以分到1,800斤粮食。因为只有这样，才能充分滿足苏联人民对食品的不断增長的需要，才能滿足輕工業和食品工業对原料的需要。要是沒有农業的高產，就不能胜利地解决共产主义建設的任务。沒有丰裕的粮食、肉类、奶类、油脂、蔬菜及其他农产品，共产主义就会是不能建成的。

苏联共产党曾一再指出，增加谷物生产的一个最可靠的源泉就是开垦生荒地和熟荒地。

而訪問过苏联的一个美国农業代表团的团員赫斯特却带着譏諷的口吻对新聞記者說，苏联的开墾荒地的計划"是一場賭博"，他还說，"分析一下这个計划，它不像可能从表面上看来那样有效的"。但事实証明，赫斯特的"預言"破产了。

今年春天，我們坐飞机从莫斯科飞到哈薩克共和国的首都阿拉木圖，我們从飞机上看到無边的草原上出現一片片广闊的耕耘过的黑色的土地。我們在偉大詩人江布尔的故乡訪問过新垦地的阿克罕格尔大型谷物农場，在那里，我們会見了从莫斯科自願到新垦区来的青年娜吉和来自乌克蘭的姚有列宁格勒的青年祖工伊凡諾夫同志，他們离开城市到荒地来，并不是为了"賭博"，而是响应党的号召，要把机械的草原变成谷倉。怀着像伊凡諾夫和娜吉这种崇高的願望到新垦地来的青年有几十万，他們在最近这3年来开垦的和播种的荒地，比美国在1910年到1950年間播种面积增加的数量还要多。伊凡諾夫同志滿怀信心地說，"我們不但能够达到第六个五年計划中規定的谷物产量的指标，并且，我們準备明年就达到这个指标！"

为了提前完成这个任务，苏联各地都加强了党的領导。魯哈薩克斯坦共产党中央委員会解除了夏西赫麦托夫同志和阿弗諾夫同志的書記职务，波諾馬連科同志被选为哈薩克斯坦党中央委員会第一書記，布列日涅夫同志被选为第二書記。为了谷物增产，我們看到許多党校都把社会主义农業的技术、經济和組織等問題列为重要課程；为了谷物增产，許多科学家都組成小組到新垦地去帶動青年正在們研究播种和耕作的問題，在哈薩克地区，有許多科学家就在新垦区建立了培养优良种籽的研究所。为了谷物增产，我們看到苏联工人給新垦地制造了大批新型拖拉机，像250匹馬力的"C 290"牌拖拉机，是开垦荒地强大的机器。仅在1954年和1956年的兩年內，苏联工業就供給新垦地区20万台拖拉机和大量的其他农業机器。

7月間，当我回国的时候，我們又路过哈薩克斯坦共和国，我們沿途看到田野上一片綠色的麦浪迎風招展，預示着今年將是一个丰年。过了几个月，現在，丰收的捷报相繼傳来了，到目前为止，苏联南大产粮区——俄罗斯联邦共和国和哈薩克共和国——已向国家交售了90亿零434万吉特（合984亿2,000多万市斤）的粮食，这是一个偉大的丰收，哈薩克过去每年只能向国家交售5,000万到一亿吉特谷物，而今年，却交售了10亿多吉特谷物，比过去增加了9倍。这些谷物差不多够苏联一半人口吃一年！

苏联共产党第20次代表大会的决議在苏联人民当中掀起了空前高涨的劳动热潮，偉大的苏联人民在提高农業生产方面已創造了惊人的奇迹。辛勤的劳动，增产了大批的粮食，而粮食保証了苏联人民更快地建成共产主义社会。

（本报記者　欧阳惠）

苏联主要垦区图

写真19　中ソ友好報（1956年10月27日号）

『東北中ソ友好』という月刊誌の編集部勤務となり、瀋陽に移った。その後、宋慶齢[246]会長下の北京の中ソ友好協会総会へ転勤して、機関報『中蘇友好報』（中国語）の編集室主任[247]に任命され、同報の編集全般を担当した。中蘇（ソ）友好報は、ソ連の偉大さを中国国民に宣伝する雑誌であった。

1949年［10月5日］に設立された中ソ友好総会を皮切りに、全国各地で行政単位ごとに中ソ友好協会が雨後の筍のように生まれた。対ソ一辺倒という対外政策の下、中国は国を挙げて対ソ友好活動に力を注いでいた。

同じ時期に、中共は、東南アジア諸国の共産党の強化も重視していた。当時は、多数の華僑が、東南アジアから中国に派遣されて訓練を受けた後、それぞれの出身国での革命のために帰途についていた。そういう時勢からか、私が北京の中ソ友好協会総会に入った頃には、華僑は出身国に戻って革命活動に従事すべきであるという意見を時々耳にした。ただし、私は、東北中ソ友好協会に勤務した経験と実績が評価されて、北京の中ソ友好総会に必要な人材と見なされたためか、タイに戻る話は起こらなかった。1957年に右派分子として打倒されるまで、私は同総会に5年間勤務した。

第二節　ソ連訪問

1956年［5-6月］、私は中ソ友好協会の訪ソ代表団（40名）の一員として、はじめて憧れの大地に足を踏み入れた[248]。それまでの私は、ソ連の実態をなにも知らないままに、ソ連の

246　宋慶齢は、1954年12月29日に開催された中ソ友好協会第二次全国代表大会で会長に選出された。それ以前は副会長。もし欧陽氏が中ソ友好協会総会に転勤した時の会長が宋慶齢であれば、彼の転勤は1955年初以降となる。これは中ソ友好報に5年間勤務したという欧陽氏の話とは一致しない。転勤の時期か勤務年数かのいずれかが記憶違いでる。

247　北京の国家図書館所蔵の『中蘇友好報』を調べたところ、同報は1952年10月5日に発刊され、1953年末までは月三回の出版であった。1954年1月6日号から毎週3回の出版となり、更に1956年1月4日から1957年の廃刊まで週6回発行された。同報の1956年8月22日号、同年10月6日、10日、27日号に「本報記者欧陽恵」という記載がある。

248　この中ソ友好協会訪ソ代表団の活動に関して副団長の千家駒が次のように記している。「ソ連対外文化協会の招待で、中ソ友好協会訪ソ代表団は今年の5、6月に、我々の偉大な盟邦ソ連を訪問した。代表団は訪ソ期間中、モスクワの赤の広場のメーデー式典で観礼台に立った外に、参観・訪問によってソ連人民から学習し、報告座談によってソ連人民に我国一年来の社会主義建設と社会主義改造事業の成果を紹介し、同時にソ連各界人士との接触によって中ソ両国人民の相互理解と兄弟的友誼とを増進した。我々代表団はソ連に合計50日滞在し、モスクワ、レニングラードの二つの美しい都市を訪問しただけではなく、カザフスタン、キルギス、ラトビアの3ソビエト社会主義共和国を訪問した。我々は13工場、3国営農場、5集団農場、6科学研究機関、9高等教育機関と若干の歴史的名勝旧跡を参観した。我々はソ連の労働者、集団農場農民、知識分子および各界人民と広範に接触し、ソ連人民に37回に渡って、中国の社会主義工業化、農業合作化、資本主義工商業の改造、漢字改革および中ソ両国人民の文化交流に関して報告し、ソ連人民の広範な関心と歓迎を受けた。ソ連に加盟する共和国を訪問した際、各共和国の党・政府の責任者が我々に会い、彼等の建設情況を紹介した。また代表団は訪問先の到る処で、ソ連人民すべてから熱烈なる歓待と歓迎を受けた。このような兄弟のような深厚な友誼に代表団のすべての同志は深く感動し、永久に忘れることはできない。代表団のソ連滞在は短かったが、ソ連人民が我々に与えた印象は極めて深いものがあった。代表団のソ連訪問時は、ソ連共産党の第20回代表大会開催から間もない時機であり、我々はソ連人民が、第20回代表大会決議の実現と第6次

家庭には電気製品があり、2階には電話がある、という具合に、ソ連の生活の豊かさを宣伝してきた。1カ月余の滞在で体験した一連の出来事は、私のソ連観を大きく変えた。

長い旅を経て、ようやくモスクワに到着した第一日目、私たち訪ソ代表団はまず在ソ中国大使館を訪れた。そこの担当者が代表団全員に次のような注意をした。私は、その内容から異様な雰囲気を感じ取った。

「訪ソ代表団の諸氏は、ソ連の同志と交流する時、中ソ友好をあまり口にしないように十分に注意して欲しい。なぜならば、現在ソ連共産党とわが党との間には、意見の相違が生じているからである。フルシチョフは、平和が今後の世界の趨勢であると主張しているが、わが党の認識との間には大きなずれがある。北京からの具体的な指示はまだ届いてはいないが、とにかく、ソ連の同志と交流する際には、自分の意見を表に出すことがないように注意して欲しい。特に、ソ連側の政府要人の発言や新聞の社説などに対しては、何らの意見表明もしないように。もし向こう側からコメントを求められた場合には、まだ文章を詳しく読んでいないからと言訳して避けるように。それから、今までよく用いた、『多くの貴重な示唆を頂いた』という常套句の使用も、今後は避けるように」、云々。

中ソ間の対立がここまで深刻化していたとは大使館員の注意を聞くまでは、思いもよらなかった[249]。代表団一行は、こうしたすっきりしない雰囲気の中で視察交流を始めた。

ある集団農場を訪れた時、私は新聞記者という職業柄、代表団に用意されていたお仕着せのルートを離れて、一人で農場内を見て回った。知らないうちに、私は前日の歓迎会で会った「英雄労働者」の名誉称号を持つ人物の自宅の前に来ていた。そこで見た光景は私を驚かせた。自宅の前にキリスト像が堂々と置かれていたのである。念のため、「その方は誰ですか」と私は像を指しながら確かめた。

「イエス様だよ」と無造作な答えが返ってきた。

「あなた方はまだイエスを信じているのですか？」

私の質問を聞くと、労働者はただ微笑して自分の胸を指す仕草をした。どうして社会主義国家で、しかも「英雄労働者」の人間がまだイエスを信じているのだろうか。私は不思議な感にとらわれた。

もう少し質問してみたかったが、後からついて来た団長の戈宝権［1913-2000］に引っ張られてその場を離れざるを得なかった。戈宝権は、私の記者としての習性をよく知っていた

五カ年計画の実現のために、一致団結している様を実見した」（千家駒「向着共産主義社会勝利前進的蘇聯人民」『中蘇友好報』1956年8月22日号所収）。欧陽氏の、訪ソ中に撮影した写真、もしくは訪ソに取材した記事で、中蘇友好報に掲載されたものに、次のようなものがある。「阿拉美丁国営種畜農場場長斯特利羅尼柯娃向代表団的同志們介紹種畜農場的情況（本報記者　欧陽恵摂」（同報1956年8月22日号）、「訪問無人售飯的餐庁、本報記者欧陽恵」（同報1956年10月6日号）、「一次能掘25-27噸土的自動強力堀土機」（同報1956年10月10日号）、「歴史上最大的一次豊収、本報記者欧陽恵」（同報1956年10月27日号）。

249 1956年2月に開催されたソ連共産党第20回代表大会で、フルシチョフがスターリン批判を行ったことで、中ソ共産党間に亀裂が生じた。

ので、ソ連に来て以来、常に用心深く私の行動を観察していたのである。見学中の代表団から私が一人で抜け出したことに気付いた彼はすぐに後から追いかけてきたのであった。彼は、その頃、既に詩人として注目され始めていた。ソ連育ちの彼は、代表団メンバーの誰よりもソ連を愛し、ソ連の素晴らしさを宣伝することを自らの使命としていた。

戈宝権の後について、集団農場事務所が置かれている農家に戻ると、一台の新品のピアノが目に留まった。私は雰囲気を盛り上げるために、その農家の主人に一曲お願いした。ところが、なぜか、主人は困った顔をした。通訳を務めていた、作家の高蟒は私の袖を引っ張って「老欧、向こうが困っているではないか」と小さな声で私をたしなめた。

「いや、僕はただ盛り上げたいだけなのだが」

「ほら、あのピアノのシールに気づいていないのか。まだ外されてはいないよ」

「ということは？」

「ひょっとしたら我々に見せるために、急いでここに運び込まれたのかもしれない。ここには弾ける人はいないのでは」

「……」

また、集団農場の農家で、農民がジャガイモを赤ん坊に食べさせているのを見て、「どうして牛乳や卵を食べさせないのですか」とたずねると、「そんな上等なものはない」という答えが返ってきた。見学した農家では、美味しい料理が次々と出されたが、よく見てみると、食器やテーブル掛けには、モスクワのどこかのレストランのラベルらしきものが付いていた。

すべては演出だったのだ。

訪ソ日程の中には、名門モスクワ大学見学があった。かつて実話報で、モスクワ大学の入学式を、ソ連の共産主義がさらに大きく前進したという見出しで大々的に報じたことがあったので、大学に向かう前は、私の心は期待で弾んだ。見学の日はあいにく雨天であった。数年前写真で見た、荘厳で巨大な校舎に入ると、建物の中はなんと雨漏りしているではないか。その惨状を目のあたりにして、私は思わず首を傾げた。代表団を迎えてくれた中国人留学生のなかには、早く帰国したいと漏らす者もいた。ソ連に長く生活した分、彼らは様々な不便や、ソ連側の傲慢さに辟易していたのであろう。

滞在したホテルで、私たち宿泊客は衣服の洗濯をホテルに依頼した。洗濯料金の精算方法は、その都度現金払いする方法と、チェックアウトの際にまとめて一括払いする方法の二通りがあった。受け入れ先であるソ連の対外文化協会がすべての費用を負担するので、私たちは一括払いを選んだ。それが、思いがけない事態を招いた。洗濯済みの服はきちんと畳んで客室に返されたのではなく、数十枚が客室のドアの前の廊下に放置されて散乱していた。ところが、欧米や日本からの宿泊客は、その都度現金で洗濯料を支払うので、洗濯物は乱暴な扱いを受けることはなく、服務員の笑顔も享受していた。

トイレを利用した場合も同じであった。一回目は丁寧なサービスだが、二回目には急に冷

たい対応に変わった。手を洗っている時、蛇口を閉められたことさえある。

洗濯物の散乱もトイレでの冷遇も、私たちがチップを出さなかったことが原因であったらしい。しかし、代表団の規則には、チップは与えないこととあったし、そもそもチップというのは、金銭至上主義の資本主義国家の悪弊ではなかったのか。

それだけではなかった。ホテルの料理はいつもまずく、カビが生えていることも一度や二度ではなかった。さすがに接待側のソ連人にも相当食べづらいことが判ったらしく、ホテル側にクレームをつけたようだ。また、行く先々で乞食に粘られた。いつもソ連側の同行者が追い払った。

生活面の不便以上に、我々の反感をそそったのはソ連側の高飛車な態度である。ソ連側は、ソ連の有名ブランドである「勝利」という腕時計を中ソ友好の記念として贈呈した。その際、担当者は、丁寧に贈呈の趣旨を説明するどころか、「おい、中国同志、腕時計を受け取りに来い！」と横柄な態度で私たちに指図をした。この無礼な扱いに、千家駒［1909–2002］をはじめとする多くのメンバーは屈辱感を覚え、「何という態度だ！」と立腹した。

千家駒は当時民盟のリーダーを務めており、後［1989年6月］には、アメリカに亡命した人物である。彼は訪問途中で健康悪化を理由に帰国したいと申し出た。おそらく上記のような不愉快なことをいくつも経験したためであろう。戈宝権と王起華の二人の責任者は、帰国に反対したが、結局、千家駒は他の代表団メンバーよりも先に帰国の途に着いた。

短い滞在ではあったが、代表団が経験したことは、社会主義国家のイメージとは似ても似つかないものであった。ソ連に対する憧憬の気持ちはしぼみ、幻滅に変わった。

その少し前まで、私はスターリンこそ世界人民の救世主であると心から信じていた。スターリンが亡くなった時［1953年3月］、私は涙を流して心から悲しんだ。スターリンに対する気持ちが徐々に変化し始めたのは、中ソ友好協会のロシア語版友好報［1955年創刊］の総編輯を務めていた林朗が新華社ルートで入手したフルシチョフのスターリン批判の講話［1956年2月］を貸してくれたのがきっかけであった。普通の幹部ではアクセスできないこの文献を読んで、スターリンは本質的にはヒットラーと変わるところがない独裁者ではないか、という疑問をもち始めた。その後ストランというアメリカ人記者の手になる、スターリンの残虐行為を暴露した『ソ連の時代』という本を黄覚生から借りて読んで、そのような見方が一層強くなった。

その頃から、中ソ関係は険悪化し始め、周りの人の中には、指導部に同調してフルシチョフを社会修正主義の大ボスだとなじり、人を罵倒する本領を余すところ無く発揮する者も現れた。しかし、私は懐疑的な気持ちをどうしても禁じ得なかった。仮にフルシチョフが間違っているとしても、彼の背後にいる数十万人のソ連共産党幹部すべてが間違っているはずはないだろう、と。

この時期の中ソ友好報の編集において、最も頭の痛い問題は、いかに毎日の紙面を埋めるかということであった。掲載できるものはほぼ尽きてしまって、これ以上フルシチョフの言

動を掲載せずに避けて通ることは難しくなってきた。そこで我々が考えたことは、読者の要望に答えるという言訳をして、中ソ友好報を新聞から雑誌へとリニューアルすることであった。雑誌に切り替えれば、原稿の量を大幅に減らすことができる。しかし、一方でソ連側がそれにどう反応するかも気になった。

私は引き続き同報の編集を担当した。政治分野で中ソ両国間の軋轢が深刻化していることを考慮して、私は編集会議で、今後の報道の重点を政治から経済分野にシフトすることを提案して各コラムの担当者に協力を求めた。その後、高蟒の提案で文芸作品コラムに、1956年前後に発表された『農机站的農技師（農機センターの技師）』や『血濃于水（血は水よりも濃し）』、『只不過是面包（パンだけだ）』という一連のソ連の作品を掲載した。『農機センターの技師』は、官僚主義的慣行を風刺した作品であり、掲載当初はかなりの好評を博した。間もなくすると、党中央の幹部たちが、これらフルシチョフ時代の作品を掲載したことを理由にして、我々はフルシチョフの代弁者であるという批判を始めた。特に中央宣伝部の胡偉徳副部長は私に対して、今後許可なしにこの種の作品を掲載することを禁止すると警告した。

間もなく反右派闘争キャンペーンの幕が開かれた。中ソ友好報には、総責任者の戈宝権のほかに、李と廖経天（インドネシア華僑、延安で野坂参三の下で学習した人）という二人の編集主任がおり、この3名が同報の上層部であった。戈は詩人、翻訳家として有名であったが、人に尊敬されるような人格の持ち主ではなかった。戈と李は結託して、廖経天を排除しようとした。

李は編集主任とはいえ、外国視察のチャンスを如何に自分のものにするかといった類の役得ばかりに関心を持ち、編集本来の仕事には何の熱意もない男であった。彼は、中ソ友好報編集部内の様子を絶えず監視して熱心に報告するので、胡偉徳ら中央宣伝部の高官たちの覚えが目出たかった。胡偉徳は戈宝権や李を信用し、中央宣伝部の工作会議で、李からの一方的な話だけを根拠に、廖経天や私を「計画的かつ組織的に反党活動の動きをしている」と決め付けた。

私は、中ソ友好報の質の向上のために、ロシア語ができない同報編集部員を対象にして毎日2時間、ロシア語学習会を開いていた。このような私の仕事への熱意も、李主任の手にかかると「只専不紅」（技能だけを重んじ、政治的要素を疎かにする）と批判するための材料になった。

第十二章　右派分子として労働改造の三年

第一節　右派分子として打倒される

反右派運動が始まって間もなく、私は右派分子だと決め付けられた。それからは、大衆教育の一環として大衆大会に引きずり出され、右派分子になった経緯を大衆の前で白状させられた。組織の決定に納得できなかった私は、直接に党委を訪ねて不満を訴えた。「私がどうして右派なのか、どう考えても理由が判りません。私は党に反対したようなことはまったくありません」

「ではお前は自分が右派分子だと批判されていることを、どのように考えているのだ、言ってみよ」と責任者は聞いた。

「正直言って、私は、自分自身のほうが皆さん方より革命精神に富んでいると考えています。皆さん方の多くは農民出身で、革命以外には生き残る道はありませんでした。しかし、私の場合は、もともとタイで裕福な生活を送っていたのです。それでも、あえて革命に身を投じたのは、世界人民のために革命をやりたかったからです」

私は、思いのたけをありのままに言ってしまうと、ますます激昂した。

「あなたは、何で私を反党と決め付けられるのだ。私はあなたより党を愛しているのに！」

「よし、今の話で、お前の『尻尾』が出た。さあ、続けよ。後で徹底的に論駁するから」と責任者が口をはさんだ。

中国語の「尻尾」とは、善人のふりをしていた悪者が、思わぬ所でその本性を露顕させ、人に見破られた時に使われる表現である。

「また、わが党がフルシチョフ修正主義を批判する以前から、私はソ連の国内問題を批判していました。今になって、党中央はフルシチョフ修正主義に対する批判の立場を明確にした。それなのに、私はかえって親ソ分子だとして打倒の対象にされている。どうして私が親ソ分子になるのですか」

「まず、お前に言っておくが、お前は無実ではない。理由を知りたいなら、教えてやろう。簡単なことだ。確かに、農民や労働者出身の我々は、革命をやらなければ飯すら食えなかった。我々は自分の意識、社会的地位、出身階級から党に従ったのだ」

責任者の口調が徐々に険しくなった。

「しかし、お前は違う。お前はブルジョアだ。これから何事か変なことが起こったら、お前が一番先に逃げ出すに決まっている」

彼はさらに続けた。「お前が延安に潜入したのも、ただの機会主義分子の行動に過ぎなかったのだ」

こうして、右派分子にされた私は弁解の機会を与えられることもなく打倒されてしまっ

た。通常右派分子とされた人間の行き着く先は、解雇、労働改造、あるいは監獄のどれかしかない。私は労働改造に送られることになった。農村に送られる直前に、関係部門が我々右派分子を集合させて、つぎの訓話を与えた。

「我が党は、お前たちを大切に思っているからこそ今回のチャンスを与えるのだ。お前たちの問題は、人民の敵という重大な問題である。毛主席が言われたように、お前たちを殺してもよいし、殺さなくてもよい。監獄に入れてもよいし、入れなくてもよい。どうなるかは、お前たち次第だ。今お前たちに用意された道は、自分自身を徹底的に改造して更生を図ることだ。我が党の寛大さに感謝し、二度とはないこの機会を利用して自分を徹底的に改造し、再び人民の中に戻って来い。我が党は、お前たちの復帰を望んでいる」

訓話では、労働改造後、党籍が回復されるかどうかに関する話しは全くなかった。長い訓話を聞いて一層暗澹たる気持ちになったが、ただ心の片隅には未だ一抹の希望は残っていた。自分は党の路線に対して過ちを犯しただけである。それは、犯罪とはまったく別次元のことだ。党も私たちの復帰を望んでいるので、労働改造期間は長くても一年だろう、と。その時は、自分を待っているものは20年間もの、出口のない農村下放生活であるとは想像だにしなかった。

中央宣伝部系統で右派分子とされた者は48人であった。新華社、中ソ友好協会、作家協会、あるいは作家協会傘下にある『新観察』(作家出版社)、『文学青年』、『大衆読物』などの人たちである。48人はそれぞれ東北や西北などの各地に送致された。私が送られた先は河北省唐山にある柏各庄農場であった。

第二節　唐山の柏各庄農場

柏各庄農場は、軍の管理下にあり、五つの分場から成る大型農場であった。反右派闘争が始まってから、ここに180名ほどの右派分子が送致されてきた。彼らは、3分場に分けられて労働改造を強制され忘れがたい歳月を過ごした。その中には、精神的、肉体的に過酷な生活に耐えられず、帰らぬ人となった者も少なくなかった。

1957年7月某日朝9時、私たち中ソ友好協会の右派分子は協会に集合させられた。全員持ち物はわずか、互いに声をかけることもなかった。誰にも家族の見送りはなかった。バスに黙々と乗り込んだ私たちは、北京駅に送られて汽車に乗り換えさせられた。

汽車が唐山駅に到着した途端、一層険悪な雰囲気に包まれた。まず軍隊式の点呼を受け休憩もないまま、直ちに大衆批判大会場に連れていかれたのだ。批判大会の参加者は農場を管理する軍人のほかに地元の農民たちであった。

私たち右派分子は一人ずつ壇上に上げられ、大衆に向かって自分の罪を告白し厳しい監督をお願いしたいという反省の表明を強制された。

この告白が終わると、農場党委書記は鋭い目を光らせながら、大会場の大衆に「反党分子は、特段に厳しく管理せよ」と指示を出し、右派分子に対しては、「お前たちの間で『同志』

という語を用いて呼び合うことを禁ずる。互いに呼び合う時には、『へい、へい』と言って合図せよ」と命令した。

囚人に等しい扱いの下で毎日過酷な労働と反省を強いられる労働改造生活がはじまった。早朝から野良仕事に出されて、ようやく一日の重労働を終えて宿舎に戻ってくると、今度は、思想反省文書きを強制される。思想反省文では、なぜ党を攻撃して人民に対する罪を犯すに至ったのかを、自分の誤った行為を列挙しながらその原因を説明しなければならない。まったくなかった架空の話を、自分の良心に反しない限りで、あたかも本当にあったかの如くに書かなければならないという意味で、思想反省文書きの方が昼間の重労働よりも辛かった。

思想反省文書きは、一回書けば終わりになるのではない。毎晩欠かさずに思想改造の進捗状況について作文しなければならないのである。毎晩の書面報告のほかに、週に一回の口頭報告、月一回の総括報告、そして、年末に年度思想反省会がある。たいていの人はすっかり観念して、言われたとおりに反省を口にするようになるが、「丁玲・陳企霞反党小集団」の一員とされた作家の陳企霞だけは、労働にはそれがどんなに重くとも従事したが、一方思想面では、いつも「私は反党なんかをしたことはありません」と、断固として妥協しなかった。

北京の家に一時的にでも帰ることは全く望めなかった。年末の学習会で、隊長は全員に「お前たちは家に帰りたいか」と聞いた。誰も答えなかった。そこで隊長は陳企霞を指名した。陳企霞は、「そもそもここに来たこと自体、自らが希望したことではない」と言い返した。それを聞いた隊長は「お前、その口ぶりは何だ！」と激怒した。

同じ農場の右派分子の中に、第二次世界大戦中、中国の作家代表団を率いて欧州戦場を取材して名を馳せた作家の蕭乾［1910-1999］がいた。肥満体の彼は、鎌を手にして両足を開いて立ったままかがみこむ姿勢で稲刈りをするのは辛いので、両膝を地面に着けてひざまずくような格好で作業をしていた。普通なら、よく頑張っている、大変だなと同情される姿だが、意外にも、これがまた張という小隊長に批判材料を与えた。

張小隊長は普段から絶えず耳をそば立てて、右派分子の言動を注意深く監視して上級機関に報告していた。その日、張は突然、稲刈りをしていた蕭乾を指差して、「全員、止め！」と甲高い声を上げ、「鎌をおいて、ここに集まれ。蕭乾を見てみろ。こいつは一体何をしているのだ！」と怒鳴った。さらに、蕭乾に向かって、「おまえがこんな姿勢で農作業をするのは、社会主義を侮辱しているからだ！ 労働人民を侮辱しているのだ！ 貴様は共産党を侮辱しているのだぞ！」と口汚く罵声を浴びせた。

怒鳴られるだけなら、まだましな方である。私は24時間以上もまったく休みなしで重労働を強いられたことがある。当時は大飢饉で、食糧増加対策の一環として、稲藁を塩気のある水で糊の状態になるまで煮つめ、それを濾過した後に乾燥させ、最後に出来上がった粉を普通の小麦粉に混ぜて食料として利用していた。私はその労働を担当させられた。この作業

は、大変な重労働であるだけでなく、途中で一時停止することはできないので、通常は数人一組で4時間ごとに交代しながらやっていた。ある日私が担当した時、隊長は故意に引継ぎの交代者を送ってこなかった。そのため、私は24時間以上も連続して働くことを強いられた。

右派分子は普通の人間なみの扱いさえ受けることができず、管理者たちの恣意的な権力運用の下で日常的に侮辱を受けた。農場を管理する軍側の組織部部長は、我々一人一人を執念深い敵だと見て、いつも目を光らせていた。次のようなこともあった。

農場の兵士と一般労働者には休日であった某日、私たちが一日の仕事を終えて、やっと一息ついて食事に行こうとしていた時、隊長が私たちに向って叫んだ。「お前たち！ ここでいつもサボっているな。今日はお前たちに餃子を食わしてやるから、さっさと食堂に行って、自分たちで餃子を作れ！」

私たちは命令されたとおり、食堂の厨房に入り黙々と餃子作りをはじめた。その時、例の組織部部長が外から入ってきた。私たちを見た途端、彼はすさまじい罵声を発した。

「誰が、お前たちをここに入れたのだ！」

「隊長です。私たちに餃子を作れと命じました」

「手の中のものを全部下に置け！ お前たちに毒を料理に入れられたら、一体どうするつもりなのだ。出て行け！」

これだけではない。稲藁を煮つめる夜番が女性に回ってきた時、彼女たちは農場の兵士たちからしばしば暴行を受けた。しかし、加害者が判っているのに、偉大なる軍隊の名誉・面目をつぶすという理由で、告発すらできず、泣き寝入りするしかなかった。

右派分子にもいろいろな人間がいた。中には、自分の主張を持たず、ただ権力者に迎合するだけの、いわゆる明哲保身の人もいた。管理者側から好まれたのは、自分がいかにも深い罪を犯したかのように号泣して見せるなど、見せかけの深い反省をする連中であった。このような連中が四、五人おり、彼らは、周りの仲間の不満に耳をそば立てて絶えず農場側に密告していた。農場側は、農具仕入に北京出張の必要が生じた時などに、褒美として彼らを出張させた。右派分子は、改造中は帰省することはできないという原則であったので、このような褒美は、手先を確保するために非常に効果があった。

このような状況の下では、醜くも、美しくも、人それぞれの本性が丸出しになる。妻のなかには、夫を平気で見捨てる者もいれば、一方、上からの圧力に耐え、周りの白眼視に耐えながらも、苦労して夫を農場まで見舞いに来る妻もいた。例えば、蕭乾の妻文潔若［1927年生、日本文学の翻訳者として知られる］はいつも「夫は悪い人間ではないことを確信している」と言い切っていた。文潔若が農場を訪ねて来た日の夜、レンガ数枚を使って簡易ストーブを作り、仲間数人と共に小さな「慰労会」を開いた。

唐達成［1928-1999, 1985年に中国作家協会党組書記］の妻も勇気ある女性の一人であった。彼女は農場に到着するとすぐに餃子を作って夫を慰めた。彼女は夫を励ますために、数

冊の本を持ち込んだ。『唐詩三百首』のほかに、苦難の中にあって自由への強い憧憬を唱った、ロシアの詩人プーシキンの詩集、それに革命家の夫とともに裕福な生活を捨てて毅然としてシベリアに向う妻たちの姿を描いた、ネクラーソフの『デカブリストの妻』など。農場の管理者たちは文学作品について無知なので、これらの政治色の強い書籍でも難なく持ち込むことができた。

農場当局は、右派分子の妻たちは善悪や是非の観念を欠き、敵を温存していると厳しく批判し、彼女らに離婚を迫った。妻たちが離婚の意思を少しでも示せば、当局は直ちに夫たちの元勤務先に連絡して離婚の手続きを取らせた。

他人の妻を狙っている幹部が、掌中の職権を悪用して夫婦を離婚させようと仕組んだケースもある。私自身がよく知っているのは、人民日報の国際部部長を務めた胡奇のことである。胡は「お前の妻が離婚届けを出した。どうする」と離婚届けを突きつけられた時、事も無げに離婚届けにサインし、特に落ち込んだ様子を見せなかった。私が彼に「子供のことを考えると、離婚に応じないほうがよいのではないか」と助言すると、彼は「老欧、俺の政治生命は、すべておしまいだ。家庭のことなど、もうどうでもいい。党からの指示である以上、従わないと」と答えた。

実はその時、彼は留守中の妻が他の幹部と関係を持ってしまったことを知っていた。しかし、胡奇は生来楽天的性格で、絶望に陥ることなく、すべての情熱を農具の改良に注いだ。よい人間はどんな状況下でも評価されるということなのであろうか、胡奇の才能と努力を認めた農場の組織部長は、胡を自宅に招いた。それがきっかけとなって、組織部長の妹が胡奇に好意を持ちはじめた。私は胡奇より先に農場を出たので、二人の関係がその後どうなったかは知らないが、うまくいったことを祈るばかりである。文化大革命後、人民日報に勤務する知人から、胡奇が文化大革命中に暴行を加えられて亡くなったことを聞いた。

私たちは、すべての自由を剥奪されたうえ、日々人間本来の尊厳、人格を蹂躙され続け、その上、それがいつまで続くのか判らないという過酷な環境のなかで過ごした。家族団欒の時期であるはずの年末になっても、右派には自分の家に帰って家族に会う自由もない。服役中の囚人でもさえも、懲役期間が明示されていることを考えると、私たち右派分子は犯罪者にも及ばない境遇であった。このような労働改造キャンプと、ユダヤ人を大量に収容したナチスのキャンプとの間に、何か本質的な違いがあるのかどうか、私には判らない。

そのような絶望的な境遇にある人間に、唯一出来る反抗は、自殺という手段を用いることであった。川に飛び込もうとする瞬間、子供のことが脳裏に浮かんで生き延びる道を選んだ者も、私が知っているだけでも何人もいる。自殺者の中には自分を虐げた人間を殺してから、自分の命を絶った者もいた。柏各庄農場でも農場幹部を殺し後、川に飛び込み自殺した事件が二件ほど生じたと聞いた。

私は、延安で最愛の人を奪われ洞窟の壁に手で体を支えてどうにか卒倒を防いだほどの辛い経験していたおかげか、突如降りかかってくる不幸や災難に対して、ある程度の免疫力を

備えていたようだ。私は、自ら命を絶つようなことは考えなかった。

そうした中で、農場周辺の住民たちは、いつも私たちに心優しく接してくれた。過酷な労働改造の中で数少ない心温まる思い出である。農場に向かう右派分子は、品質が良い洋服の着用および持参を禁止された。農場まで持ってきた衣類は作業服としても使ったので、農場に来て暫くすると破れてしまった。地元の住民たちは、季節ごとに私たちの衣類を無料奉仕で繕い修理してくれた。右派分子が農場の店を利用することは当局が禁止していたにも拘わらず、タバコが不足していたこの時期、店の人たちは、いつもいち早く入荷情報を愛煙家の陳企霞に知らせてくれた。

当時の状況を考えると、同情的な住民に出来ることもせいぜいこれくらいのことであったろう。しかし、人間扱いをされていなかった私たちにとっては、それだけでも本当に感謝と感激の極みだった。

私は柏各庄農場で、3年間の労働改造生活を送った。この3年間のうちに、私たちの気持や考えは次第に変わってしまった。

一年目は、私たちは反党の罪を真摯に受け止め、その罪を償うために、昼間は体の限界まで労働に従事し、夜は思想反省文書きで自分を徹底的に追い詰めた。しかし、年末の年度思想反省会では、それらの努力が評価されるどころか、「お前らの怠惰な改造姿勢のままで、家に帰れるなどという甘ったるい夢は見るな」と一喝された。

二年目に入ると、いくら頑張っても所詮同じだと判ってきたので、楽をしたほうがよいと考えるようになった。監視者たちが視線を向けている時だけは、まじめに働き、それ以外はサボった。ところが、年末の思想反省会では、また意外な評価を聞かされた。「今年お前たちはよく頑張った。来年は党の期待に答えられるようにさらに努力せよ！」思わず顔を見合わせた。みんな困惑した表情だった。宿舎に戻ると、私は自分の疑問を陳企霞にぶつけた。

「俺たちは今年は、まったく力を入れなかったのに、かえって評価されたのはどういうことなのだろうか」

陳は、「君は単純な人間だな。農場当局にとっては、一年以上をかけても我々右派分子を改造できなかったということになれば、面目が立たないではないか。だから、二年経った今、格好だけでも改造は成功を収めつつあると言わなければならないのだ。つまり、俺たちの働きぶりは客観的評価ではなく、すべてあいつらの必要で決まるのだ」

納得した私は、労働の手を一層緩めたが、農場当局からの評価はますます良いものとなった。

苦難の歳月に、唯一頼れるものは、右派分子同士間の友情しかなかった。陳企霞との友情はまさにこうした苦難の連続の中で育まれたものである。当時農場はソ連向け輸出用にアヒル（家鴨）を大量に飼っていた。輸出用の基準に合格しなかったアヒルは、塩水で煮込んで「鹵鴨」にして農場の労働者に販売された。私は、「鹵鴨」生産にも従事させられた。私は、時々周りに人気がない時を見計らって、陳企霞を自分の方にまねいて素早く、アヒルの肉、

内臓の入ったスープを容器に移して彼に渡した。栄養のある食事にまともにありつけなかった、あの時期には、これはまたとない貴重な食料であった。このような行為は私が友人にできる、せめてもの協力であった。後に私と陳企霞の右派分子の冤罪が晴れ名誉回復をした時、友人たちと祝いの会を開いた。陳は酒杯を私に差し出し、「あの時の家鴨スープのために、この一杯の酒を君に乾杯する」と言って、ぐっと飲み干した。「あの頃、老欧は本当に大変な危険を冒して、私に家鴨スープをくれた。万が一やつらに見つけられていれたら…」

私が農場にいた三年の間、家族は一度も見舞いに来なかった。妻は心から私を信じてくれてはいたが、人から後ろ指をさされるのを嫌う気まじめな性格で、見舞いを控えたのだ。手紙のやりとりは禁じられていたので、彼女にできたことは、せいぜい農場を訪ねる知り合いに、「家族のほうはすべて順調なので、安心して思想改造に専念してください」と伝言を頼むことぐらいだった。

私の様子について、妻は組織を通じて知らされる情報以外には何も知る術はなく、すべては組織の決定に従わなければならなかった。後に妻から聞いたところでは、ようやく年末が来て、今年こそ夫が家に帰ってきて家族一緒に旧正月を過ごせるだろうと心待ちにしていたが、組織からは「欧陽恵は帰れない」という冷たい知らせしかなかった。しかし、妻はすぐに「組織の決定に従います」と答える以外にはなかった。

三年の間、一回も見舞いに来てくれなかった妻に対して、私は特に不満を覚えたり心配したりすることはなかった。気にならなかったというより、気にする余裕がなかったと言った方が正しい。来る日も来る日も、延々と終ることない重労働、政治学習、思想反省会、右派同士間の潰し合い、すべてが私を体力的にも、精神的にも限界にまで追い詰めた。明日はどうなるのかを考えるような気力は完全に奪われて、ただ動物として生き延びていただけであった。もうこれ以上、悪くなろうにもなりようのない極限の状態であった。

政治生命や人生がここまで台無しになった以上は、もうあとはどうでもいい。私は、妻が離婚話を持ち出すかもしれないことも十分に覚悟していた。それ故、離婚に応じた右派分子仲間の絶望的な心境もよく判った。

第十三章　吉林省での下放生活二〇年

第一節　吉林省の農村への下放

右派分子は、労働改造という名の強制労働収容所生活から解放されても、元勤務先への復帰はまず望めなかった。彼らの多くは、1960年前後に全国各地の農村に送られて、そこで一介の農民として残りの人生を送らされた。私も三年間の労働改造の後、中ソ友好協会の職場に復帰することは叶わず、1960年5月に吉林省楡樹県の農村に下放された。

香港に親戚がいるという理由で、香港への渡航を希望した右派分子の知識人がいた。最初みんなは、共産党の嫌悪を招くだけで、実現は無理だろうと見ていた。ところが意外にも、彼は許可を得て大陸を脱出できたようだ。私も北京に戻って来た最初の一時期、タイに帰ることも考えた。しかし、もはや中国共産党党員ではないので、当然タイ共産党から面倒は見てもらえない。また、タイを離れてすでに20年以上になり、頼れる親戚もほとんどいない。これらを考慮すると、私はタイに帰ることを断念するしかなかった。

農村に下放される前、私はすでに農民として残りの人生を送ることを覚悟していた。どうせ農民として死ぬまで農村で過ごすのなら、寒い東北の地より、暖かい南方のほうがよさそうだ。広東省の農村で生産隊長を務める年下の親戚からは、来てもよいという連絡が届いた。そこで、私は南方へ行きたいという希望を担当部門に提出した。その場では了承を得たが、翌日になると事態が急変した。私一人だけを対象にした批判大会が開かれた。批判大会の組織者は「香港に亡命して、海外で反党活動を続けるために、広東省行きを希望したのだろう、吐け！」と私を激しく糾弾した。

元勤務先の中ソ友好協会から、私の個人档案、組織関係は吉林省民政部に移管したので、吉林省民政部が決めた受け入れ先へ移住するようにという指示を受けた。私にとって、いくらか幸運であったのは、家族が同行してくれたことである。東北農村への下放が決まった日に、組織部は妻に離婚するか、それとも家族全員で東北にいくかという選択を迫った。彼女は子供三人を連れて、私について東北に行く道を選んでくれた。彼女はいわゆる右派分子ではないので、東北に来た当初、楡樹県で定職を配分された。

陳企霞は杭州大学図書館に送られ、雑務担当の用務員となった。あのように才気煥発の作家が一介の掃除夫にされたことは、本当に悲しい話であるが、農村に送られた私たちよりは幸運であったと言える。

私は、今まで以上に思想改造を徹底することで、党と人民から認められ、再度社会に復帰したい、しかし、そのような日は果してくるのだろうか、という不安を胸に東北に向かった。

下放先の吉林省楡樹県は東北に位置する。東北は物産が豊富であると言われるものの、私

が下放された時期は、東北も全国各地なみに未曾有の大飢饉に見舞われていた。農民はやむを得ず人目を盗んで、成熟していない農作物にまで手を出して自宅に持ち帰った。私は東北到着後、地元の農民たちとともに農作業に従事させられたが、間もなく隊長は私を畑の農作物の見張り役にかえた。よそ者の私なら、農作物を盗みに来た地元民に対して厳しい態度で対応できるから、適役だと思われたためだろうと私は推測した。しかし、間もなく完全な思い違いであったことが判った。

見張りの仕事にかわって、夜間当直の順番が回って来た日、隊長から犬を一匹渡され、「この犬を番犬として使いなさい。君は寝ていてもよい」と指示された。深夜、ぐっすり眠っていたところ、犬の吠え声で目が覚めた。慌てて服を羽織って、畑の様子を見に部屋から飛び出した。何人かの人間が盗んだ作物を入れた大きな袋を持って逃げていく姿が目に入った。その先頭にいたのは、なんと隊長本人ではないか。無論私にも見てみぬふりをする人生の知恵はあった。その後、隊長から別の畑の見張りを命じられたが、結果は想像できるようなものだった。人民公社に供出される食糧の量は一段と少なくなった。

第二節　タイ華僑出身吉林省党高官とのコネ

臨機応変の対応が買われたためか、私は徐々に隊長から信頼を得た。更にその後大きな手柄をたてたことによって、右派というレッテルを外してもらうことができた。

その手柄とは、私が自分のコネを使って、当時入手が極めて困難であった変圧器を入手して、楡樹県の深刻な電力不足の緩和に貢献したことである。この話は、タイ華僑の出身である省レベルの共産党高官、黄覚生と周介文から始まる。

1960年の末頃、私は長女を連れて北京に一時的にもどった。長女の病気治療のためと、自分は右派ではなく無実であるという訴状を中央組織部に提出するためであった。北京の同仁堂という病院で、偶然に黄覚生に出会った。彼女に会うのは、久しぶりである。既に白髪が混じっていたが、とても健康そうであった。右派分子として打倒されて以来、多くの戦友から見捨てられる苦い経験を味わってきた私は、黄覚生が目に入ると条件反射的に見えなかったふりをした。しかし、私に気づいた彼女は、私の腕をつかんで、「何で見えないふりをするのよ」と怒った。さらに、うつむき小さくなって歩く私の姿を見て、彼女は、「どうして胸を張って堂々と歩かないの」と背中を叩いた。彼女は昔通りで、私に親切であった。

彼女は「李華と林慕豪が北京に住んでいる。彼らの家に行って夕食をしましょう」と、どうしても私を連れて行きたい様子だ。その時、彼女の元夫である李華は林慕豪と正式に結婚しており、外交部で東南アジア総括の職務に就いていた。黄覚生もほかの人と再婚したが、李華・慕豪夫婦とは友人として付き合いを続けているらしい。右派分子にされて以来、自分の惨めな境遇が恥ずかしく、私は旧知の人には誰とも会いたくはなかった。私は「薬を買わなければならないので」と断った。しかし、彼女は「必ず、来て！ 慕豪はあなたが中国に帰ってから、一度も会っていないと言っているわ」と促した。

それでも私が躊躇していると、彼女は小声で「来てちょうだい。慕豪は何回もあなたのことを話題にしたのよ。彼女はあなたのことが判っている。あなたが反党だなんて信じていないわ」

黄覚生の言葉に私は大変驚いた。彼女は林慕豪の言葉を借りて、私に同情を示してくれたのだ。このような同志間の友愛に、私は久しい間飢えていた。更に得難いことは、遼寧省の省委員会宣伝部長という要職にある彼女が、反右派闘争に対する自分の見解を示してくれたことである。

李華の自宅に行くと、李華も慕豪も私を他人扱いすることはなかった。黄覚生と慕豪は、二人で厨房に立って、料理をしながら子どもの教育を話題にしていた。二人はずっと前から始終行き来しているようであった。食事の時も、食べながら同志のことや党内の問題などを話題とした。私を警戒している様子は全くなかったが、私は会話に口を挿まなかった。結局、私はこの場にいるのは不都合だと感じて、食事が終わるや早々に立ち去ることにした。黄覚生は、私が寂しい思いをしているのではと心配してくれたのか、庄国英の家まで同行した。その途中の路上で、彼女は「周介文はあなたのことをよく理解している。彼は今吉林省委員会の秘書長兼統戦部副部長だから、何か困ったことがあったら訪ねてみなさい」と含めるように話した。周介文はタイ華僑出身で、1940年に延安に来て陝北公学に学び、1942年に入党した。私は陝北公学に蘇蘭を訪ねた時に、彼女の同級生の周介文と知合いになった。彼とは日本の敗戦前に359旅団華僑隊の訓練でも一緒だった。しかし、私は苦笑して頭を振った。彼女には言わなかったが、今回の北京訪問で経験したことが頭にあった。

北京に来た当初、私は華僑向けサービスの総合施設である華僑大厦に泊まった。以前私の部下であった華僑大厦の支配人が、華僑大厦の一番よい部屋を用意してくれた。無論部屋代も結構なもので、三泊もすると、相当の額に上った。私は安い部屋に換えてもらおうかとも考えたが、迷惑をかけるのではと思い直して何も言わなかった。

三日間後、「ここに、右派は泊まれないから、早く出ていって下さい！」と、服務員が突然通告にきた。

その前に、私を訪ねてきた中ソ友好報の同僚であった友人が、部屋を見て「こんなに高い部屋に泊まらせたのは、わざとあなたを困らせるためではないのか」と疑問の声を上げた。あの支配人は、本当は私を宿泊させたくはなかったのだが、昔の上司なので面と向かっては断りにくいので、私のほうから辞退するのを待とうという狙いで、料金の高い部屋に泊まらせたのだろう。ほかに行く場所もないので、私が無理して三日間も泊まり続けたことは、彼の誤算であった。そこで、遂に彼は強硬手段に出て、私を追い出したのだ。

私を訪ねてきた友人は、呉田夫[250]の電話番号をおしえ、彼に助けを求めるように助言し

[250] 劉戦英・周建主編『中国僑聯主席名典』（中国人事出版社、北京、1996年）589頁の呉田夫の項目は、彼の経歴を次のように記している。「呉田夫（1919−）広東潮安人、越南帰僑。1939年回国参加抗戦。1941年在陝甘寧辺区政府工作、兼延安僑聯分会主任。1946年調中央軍委外事組任僑聯専職工作。為延安華僑聯合会常務理事兼秘書。1948年調中央統戦部華僑組工作、為解放区僑聯常務

た。田夫は私が右派分子にされ打倒されたことに対して同情的であった。連絡すると田夫はすぐに「では、私のところに来なさい」と快く誘ってくれた。彼の住まいは、中央対外連絡部の宿舎であると聞いて、私はやや躊躇した。ところが、実際に住んでみると、私の心配は杞憂に過ぎないことがわかった。中連部の宿舎の住人のほとんどは、海外長期赴任中の幹部の家族で、私はそこに一カ月間も泊まったが、身分がばれてトラブルになったことは一度もなかった。一カ月の後、右派ではないと無実を訴えた、私の訴状は却下されてしまった。

北京に滞在中に、快く接してくれたのは、黄覚生のほかは、庄国英と田夫の二人だけであった。他の知り合いはみんな知らぬ顔をした。

北京で華僑仲間から受けた仕打ちのため、私は二度と誰にも援助を求めまいと心に決めた。黄覚生が折角紹介してくれた周介文を訪ねることもなかった。

ところが1962年の秋頃、周介文は吉林省の民主人士を率いて楡樹県を視察した際に、同県の李明徳県書記に私との面会を希望した。彼は右派として打倒された私が、楡樹県に住んでいることを黄覚生から聞いて知っていたのである。

私が県委招待所に駆けつけると、楡樹県幹部たちを前に、周は手を差し伸べて私と握手をした。更に、李書記と共に私を昼食に誘った。簡単な食事を取りながら、周は李書記に、私はバンコクで抗日運動の猛者であり、彼よりも大部早く革命運動に参加した先輩であると紹介した。食事の後、周は私の結婚と家庭について尋ね、自分の家庭のことも話した。彼の妻は、彼が吉林省延辺汪清県で武装部長をしていた時に知り合った朝鮮族の女性で、その父は小商人で韓国に住んでいるという。

父親が韓国にいることに、周は少し不安感を抱いているように見えた。「延安の整風運動の幹部審査の時、海外から帰国したというだけで大問題になったことが忘れられない」と、彼は話した。

彼は別れる時に、「北京の会議で黄覚生に会ったが、彼女はあなたが尻込みをせずに困難に立ち向かうことを求めていた。彼女は、我々が中国に帰国した目的は、革命をするためなのだからと言った」と、黄覚生の激励の言葉を伝えた。この贈言には、単なる同郷人の同情や慰藉以上の重みがあった。これは二人の省委委員という要職にある人物が、“反右派闘争”に対する自己の見解を明白に示したものであった。現在は、反右派運動は行過ぎであったと当局も認めているが、文革の前に黄覚生と周介文が、公然と“右派分子”の私は革命をするために帰国しのだと認めてくれたことは、ただ事ではない。この二人の話で、私は“右派分子”という冤罪は必ず雪ぐことができると確信した。

無念なことに、私が右派の汚名を雪がれた時、黄覚生も周介文も既にこの世の人ではなかった。二人とも文革中に自殺に追い込まれたのだ。1960年末の李華の家での夕食が、黄

理事、為僑聯籌委会委員、北京市僑聯委員。為中華全国僑聯第二届、第三届常委、第四届名誉委員。為広東省僑聯常委、顧問。1979年任中共広州市委副秘書長。1979年為広州市僑聯主席、1983年為名誉主席至今」。この経歴記載は僑聯関係の経歴のみに限られているようである。

覚生との最後の別れとなった。ちょうど20年間の下放の後、1979年初めに胡耀邦の御陰で名誉回復が実現した私は北京に帰り、朗報を知らせるために李華の家を訪ねた時、妻の林慕豪から黄覚生の自殺を知らされた[251]。

さて、私に周介文のような大物の知人がいることを知って、楡樹県の李書記が放置するはずはなかった。地元に十分な発電設備があるのに、大型変圧器がないばかりに、楡樹県は地方政府と党機関でも夜の九時までしか電灯が使えず、九時以降は全県暗闇であった。彼は県の電力供給不足解決のために、私のコネで大型変圧器二台をなんとか調達して欲しいと頼んできた。当時は、全国どこでも物質が極端に不足しており、いくら金があってもコネがなければ、稀少物質は手に入らない時代であった。県の幹部たちは変圧器が確保できるなら、金に糸目は付けないと約束した。李書記の懇請は断り難く、私は「できるかどうか判らないが、やってみます」と答える以外になかった。

県が発行した紹介状を胸のポケットに入れて、私は周介文が勤務する省都、長春に向った。思い切って周に自分の任務を打ち明けてみると、「変圧器たった二台でしょう。大したことではありません。適当に手配しますから」と周はすぐに承諾してくれた。周は私の来訪を喜んでくれたようで、私を長春最高の春誼賓館に三泊させ、自ら溥儀の宮殿まで案内してくれた。

この返事に接して楡樹県当局は大喜びをした。即座に、大量の新鮮な豚肉、牛肉を、直接変圧器工場に届けた。ちょうど、同時に、上部からは農業大県である楡樹県の工業生産を支援せよという指令が変圧器工場に下りてきた。それで両者間の物々交換はスムーズに行われた。やがて変圧器が届き、楡樹県全域で電気使用が可能になった。

変圧器の分配にあたっては、元来地域間の優先順位が決められていたが、順番を待つだけでは、いつまで待っても実現できないというのが実情であったため、物質的実力を有する県はコネを使って実現を図っていた。

県の幹部は、私の省委秘書長とのコネが役に立つことに味をしめて、それを更に活用しようとして、私を県庁所在地にある五金公司に配属した。五金公司とは自転車から電気コードまで、いわゆる日常生活とかかわりのある金属製品を取り扱っている国営商店であったが、実際に店頭で販売されていた商品は両手の指で数えられるほど少なかった。出勤した店員は、毎日雑談や新聞読みで暇を潰していた。当時は計画経済体制で、国家が立派な経済計画を立て商品をきちんと国民一人ひとりに届ける、という宣伝が常時行われていた。しかし、実情はまったくの正反対であり、深刻な物不足のために、コネがなければ何も入手できなかった。

五金公司に配属されると、私はラジオや自転車などの品揃えを求められた。おまけにタバ

[251] 欧陽氏は黄覚生と周介文を追悼する次の文を書いている。すなわち、黄覚生について、欧陽恵「碧玉之歌」、『泰国帰僑英魂録、第二巻』pp. 168-170、及び、周介文について、凌燕（欧陽恵）「5月16日哀介文」、『泰国帰僑英魂録、第四巻』pp. 34-39。但し、欧陽氏がインタビューで語ったことと上記の2作品の間には、年月日や職務などに関して少々異同がある。

コの仕入れまでも頼まれた。東北地方では紫貂（クロテン）という銘柄のタバコに人気があった。私のコネで入荷できた紫貂タバコは、いつも一瞬のうちに県の幹部たちに分配されてなくなった。ちなみに、このタバコとは縁がない庶民たちは、このタバコを紫貂ではなく「狗貂」と呼んでいた。

こうして私はたちまち県の人気者となった。五金公司書記の譚義は、「君はよく努力している。もう右派分子の帽子を取ってもよいだろう」と言って、右派レッテルはがしのための申請書類を提出することを約束してくれた。ただ、彼は文章を書くのが苦手なので、私自身が下書きした申請書類を、彼が別の紙に写すことになった。ペーパーワークには、いつも尻込みがちの譚義だが、人気商品が入荷すると、たちまち有頂天になり、大きな声を発して、まるで人が変わったようであった。入荷した直後の数時間はいつも彼の大声が店内に響き渡った。「おい、いい知らせだ。今、自転車が三台入荷したばかりだ。取りに来ていいぞ。ただ、この前約束した鶏を忘れるな」と、彼は関係部門や支店に電話をかけまくった。

第三節　文革の犠牲者：周介文、黄覚生の自殺

文化大革命の風雲が1966年半ばに巻き起こると、周介文は吉林省の大実権派の一人にされてしまった。当時、吉林で軍の政治部主任であり、“左派”リーダーの一人であった馬松［1920-1993］[252]は、タイ華僑出身で、私とはバンコクの樹人中学師範班の学友であった。馬松が、こっそりと私につぎのように教えてくれた。「周介文は韓国のスパイだ。彼は朝鮮族出身の女房を通じて韓国と関係を続けていた。バンコク時代にも政治問題があったようだ。周は劉少奇反動外交路線の実施者であり、中央が特捜事件として調べている」、と。

四人組が失脚して十数年後、全国僑聯代表大会に出席のため北京に来た馬松は、周介文の事件について詳しく話をしてくれた[253]。彼によれば、周の自殺の原因は、長白山の半分を北

---

[252] 1920年バンコクのバーンランプー（新城門）に潮州人の父、タイ人で熱心な仏教徒の母の長男として生まれる。父は装飾品店を開いていたが、借金のため1931年に売却して帰国し結核のため死亡。その際、沙弥に半月出家した。母や3人の姉、2人の妹は新城門の市場で物売りをして生計。最初に入学した学校は、新城門の協益学校。同校の教員である共産党指導者劉漱石や楊雪濤（李華）から教育を受けた。高小時代の1934年に李華の紹介で反帝大同盟会員に。1934年9月に協益学校がタイ文部省の廃校処分を受け、1935年9月に培民学校として再開されるまでの間、崇實学校に学ぶ。1935年に培民学校で高小を卒業。1936年樹人中学師範班に進学、黄耀寰、呉琳曼から教育を受ける。この時朱南和の紹介で共青団員に。1937年啓明学校師範班に転校。学生抗日救国会（学抗会）で活動。1938年1月末の旧正月に救国獅子舞などで募金活動。1938年2月庄江生、蘇青、唐道民の3名をリーダーとする9人で回国服務。タイを発つまで共産党指導者劉漱石、黄耀寰の連絡員を務める。汕頭到着後、蘇恵に会い福建省龍岩県で新四軍二支隊に参加し南昌まで行軍。ここで庄江生、蘇青、張声良、馬松の4人に、黄覚生が加わり、5人で延安に向かう。武漢八路軍辦事処の手配で西安を経て延安に1938年4月末到着。抗大で学習。1960年大佐（大校）、東北軍区後勤部で様々な役職を務める。1969年10月吉林省生産指揮部副主任。最後は、沈陽軍区後勤部副政委、遼寧省僑聯主席、全国僑聯常委（馬松「功績載史冊　銘刻在心間―紀念啓明母校」、前掲『永恒的懐念：暹羅啓明学校紀念文集　1935-1938』pp. 70-77所収、庄江生・蘇青・張声良「中泰人民的良児子―揮涙悼馬松」、『泰国帰僑英魂録、第四巻』pp. 219-227）。

[253] 凌燕（欧陽恵）「5月16日哀介文」、『泰国帰僑英魂録、第四巻』p. 38。

朝鮮側に移譲するという劉少奇の決定を記した文書に、周が吉林省秘書長として署名したことだった。政策を決めたのは劉少奇であり、周は単に上から命じられた職務を遂行したに過ぎなかったのだが、毛沢東の造反派に「劉少奇の手先、走狗」として槍玉に挙げられた。これは周を売国集団とすることで、その矛先を劉少奇に向けるためであった。

周介文は、特捜班の手下どもからの厳しい追及を受けても、自分と妻は潔白だと主張して、非を認めなかった。2年近い監禁後、彼は1968年5月16日に、「毛主席万歳！」と叫びながら、監禁された中共吉林省委ビルの5階から飛び降りて命を絶った。延安時代に整風運動の被害者でもあった周は、華僑に対する毛沢東の不信感を察知して、毛沢東の政策への不満を私に漏らしたことがあった。そのような彼が、自ら命を絶つ際にも、「毛主席万歳」を口にしなければならなかったのは、自分の家族へ危害が及ぶことを恐れたためであろう。毎年5月16日の命日になると、私は旧友周介文を偲んでいる。

黄覚生は周の死を知った時、「自分が悪かった」と嘆いた、と聞く。タイに戻らず東北に残る道を選んだ彼女に、周は影響を受けたからである。絶望した周は、進路の選択を誤ったと憾んだであろうと彼女は考え、自分を責めたのである。その黄覚生も、文化大革命の最中に、自らこの世を去る道を選んだ。

黄覚生［遼寧省委宣伝部副部長］が自殺に追い込まれたのは、女性幹部の張志新［1930–1975］が部下であったためである。張志新は、黄が率いる遼寧省宣伝部の女性幹部であった。文化大革命時、張志新は権力の座についた四人組の正当性に関して疑問の声を上げたため、遼寧省の四人組の手先によって［1975年4月4日に］殺された。四人組が失脚した後には、彼女は四人組と戦った英雄として大々的に喧伝された[254]。

黄覚生は部下の張志新を弁護したため、中共遼寧省委の紅衛兵によって、張志新とともに監禁された。1913年に汕頭で生まれ、同地で14歳の高等小学校時代に共青団に参加、1932年の初中時代に学生ストを指導して逮捕され、親族が警察に金を渡してどうにか救出した、という彼女の輝かしい革命経歴は、監禁中の尋問では、革命を裏切った証拠だとされて糾弾された。1969年の大晦日の夜、張志新が批判大会に引きずり出された間に、黄覚生は大木に首を吊って自殺した。

第四節　三年間のオンドル焚き労働

文化大革命の時、私の右派分子の帽子は一応取れて、「摘帽右派」（右派分子のレッテルを外された右派）という身分であった。私が、楡樹県の幹部にとって利用価値がなくなってしまうと、彼らは私を県の文化館へ転勤させた。文化館には、図書室もあれば、一般大衆に対する文芸活動の指導・組織を行う部門もあるので、図書資料管理や文芸活動の指導といった職種もあるのだが、それらは私には無縁であった。

---

[254] 張志遠は、1969年9月18日に逮捕された。監禁中、毛沢東を批判するという「反革命」の態度を改めなかったとして、残虐にも身体を害された後処刑された。

50歳間近の私に命じられた仕事は、オンドル焚きという力仕事であった。文化館の建物には、全部で13個のオンドル、6枚の二重壁があった。これらを暖めることは、文句なしに重労働であった。一個のオンドルを暖めるには、まず70キロ前後の石炭を室内に運び込まねばならない。燃えカスは少し軽くはなるが、それでも50キロはある。石炭とその燃え殻の運搬以上に大変な仕事は、二重壁のトラブル防止であった。

東北地方の建物の暖房システムは、オンドルから出た熱気が二重構造の壁の間の通気管を通りながら、部屋全体を暖めるという仕組みである。このシステムには構造上問題があった。通気管内部に大量の灰が溜まり、この灰は熱効率を低下させるだけではなく、気体の出口を塞ぐ。出口がなくなった気体は壁の弱い所を突き破って爆発した。年に一度くらい二重壁を部分的に解体して通気管を掃除すれば解決するのだが、経費がないので解体清掃は疎かにされていた。

爆発が起こると、常に反革命分子の仕業ではないかと大騒ぎになり、まず右派が疑われた。オンドル担当の私は、爆発事故で人身に被害が出ることを心配するだけではなく、私自身が反革命分子にされるのではないかという不安をもって毎日を過ごした。

石炭を存分に入れて燃やしたら、爆発が起こる危険がある。かと言って、部屋が暖かくならないと、罵声が飛んでくる。また、風邪などで体がだるくて作業のペースが落ちると、部屋全体の温度も下がってしまう。すると、どこからかすぐに罵声が飛んできた。

肉体的にも精神的にもきつい、嫌なオンドル焚きを3年間もやらされた。文化館の仕事は、町の中に住むことができる点ではよかったが、農村のほうが、気軽で居心地がよかった。

私が農村にいた時、右派分子ではない妻は、人民公社の調査員の仕事を与えられていた。私が文化館でオンドル焚きをした時は、妻は町の病院へ転勤した。

第五節　治療できず早世した長女

私が、1960年に東北に下放された時、三人の子供はそれぞれ小学校6年生（長女）、5年生（長男）、4年生（次女）だった。私たち夫婦の東北行にともない、三人は転校して東北の大地で過ごした。三人の子どもの中で、一番可哀相なのは、長年の病苦ののち28歳で早世した長女である。

彼女の短い人生は、苦難の連続そのものと言ってよい。中学校を卒業した頃、原因不明の病気に襲われて視力が低下しはじめた。そこで一時、北京の義理の母のところに預けた。義理の母は、長女を病院に連れて行って医者に見てもらったものの、農民出身で知識教養が十分ではなかったので、病気の深刻さを理解できなかった。適切な治療を受けられないまま、長女の病状は深刻化して、ついに完全失明に至ってしまった。

その時点になってやっと組織が長女の病状を、東北の私たちに知らせてきた。慌てた私たち二人は、前後して北京に戻った。右派分子である私は、長期に北京に滞在することは不可

能であった。長女の患部は目だけであると軽く考えて、とりあえず長女を東北の下放先に連れて帰ることにした。東北に戻ってから、私は出来るだけ彼女を下放先近くの病院で診てもらったが、病状は一向に好転しなかった。

ある人のアドバイスに従い妻が長女を北京に連れて帰って、改めて北京で診て貰うことにした。人目を避けるため、二人は吉林省の省都長春を経由せずにわざわざチチハルまで遠回りした。北京の病院で診察を受けた結果は、ショッキングなことに脳腫瘍であった。視神経は長い間圧迫されていたために、完全に萎縮していた。手術して視力を回復させようにも既に手遅れであった。担当医師の見立ては、手術によって視力を回復させることは望めないが、病状の悪化を防ぐために手術が必要だというものであった。手術を施す場合、両親の合意と署名が必要なので、妻は東北にいた私に至急手紙をよこし、北京に来るように求めた。

急いで北京に駆けつけた私は、病院で手術の同意書にサインをしたのち幾ばくもなく紅衛兵に拘束された。義理の母の自宅周辺に住んでいるこれらの紅衛兵たちは、義理の母の一家を厳重に監視していた。下放先発行の身元証明文書など何一つ持たないままに急遽北京に戻り、義理の母の自宅に泊まっていた私は、彼らに見つけられてしまったのである。造反有理の若者たちは、長女の手術の翌日に、有無を言わせず妻と私の二人を病院から連行して、東北の下放先へ強制送還した。病院に残された長女の世話は義理の母に頼んだ。長女は、2、3カ月北京に滞在した後、東北に帰ってきた。もし、私たち夫婦が、紅衛兵にすぐに連行されていなかったなら、長女は術後の手当てをきちんと受けることができて完全に治癒したかも知れない。

東北に戻った長女にまもなく脳腫瘍の症状が再発した。彼女は生命の最後まで病魔に苛められつづけた。文化大革命終息後、私の冤罪が晴れ、ようやく北京での職場復帰が実現する直前、長女の病状は急変した。慌てて再手術を受けたが、すでに手遅れだった。長女は28歳という若さで私たちのそばから永遠に去った。

いまでも思い出すと、胸が千切れるように痛む。北京で娘に視力低下が現れた時に、直ちに組織が私たち夫婦に知らせてくれていれば、私たちは北京に駆けつけて長女にきちんとした治療を受けさせることができたであろう。そうすれば、脳腫瘍の早期発見と治療、適切な術後ケアが可能になったかもしれない。少なくとも、彼女の苦痛はかなり軽減できたはずである。妻は党に対して忠誠を尽くし、党のやり方に対して不平不満の声を上げたことがない人間である。ただ、長女の件に関してだけは、数十年後の今日でも、「まったく人間味がなかった」と心に深い傷を負っている。

下放先の20年間は、右派分子のレッテルを張られてはいない妻にとっても決して楽な年月ではなかった。私が批判大会に引きずり出された時、妻はいつもその隣に立たされた。全員が「打倒欧陽！」と叫び出すと、妻も大声で「打倒欧陽！」と従わなければならなかった。

文化大革命中、私たち夫婦はしばしば連行されたり監禁されたりした。その間、完全失明

の長女が二人の弟妹の面倒を見た。

下放先の人々が私たちの境遇に同情して、農村合作社農具倉庫管理員の仕事を私に与えてくれた。私たちが監禁されている間、職場の仲間たちは代わりに子供の様子を見に来てくれた。これを見た公社の幹部は「お前らは欧陽とどんな関係なのだ」と陰湿な口調で彼らに問い質した。仲間たちは「老欧は私たち職場の人間だ。彼の子供の世話をしてどこが悪い」とはねつけた。仲間からの手伝いはあったものの、親がいない三人は自力で生き抜くしかなかった。

ある年末、彼女は新年を祝うため、弟妹に久しぶりに美味しいものを食べさせようと餃子を作った。目が見えないので、具を作るときに、塩と砂糖を取り違えてしまい、出来上がった餃子は今までで一番塩辛い餃子になってしまった。東北地方では、長ネギは屋根の上で乾燥させるという習慣がある。長女はいつも一人で屋根にはい上って、長ネギを干す作業をした。

地元の農民たちは公社から割り当てられた食糧では足りないため、収穫後のたんぼにわずかに残っている落ち穂を拾って食糧に充てていた。目が見えない長女は、すべて手の感覚に頼って、落ち穂を拾うしかない。いくら寒くても、地面を這いながら、しもやけで腫れ上がった素手で満遍なく土に触り、落ち穂を集める娘の姿は見るに耐えられるものではなかった。彼女の手にはたくさんの火傷跡が残っていた。東北の厳寒をしのぐために室内のオンドルで火を焚く時に出来たものであった。

長男は私が職場復帰できるまで、大学進学や就職の機会を剥奪され、一般の無職青年として下放先の楡樹県で青春を過すことを強いられた。村では、屋根の修理などのような作業は通常「地・富・反・悪」（すなわち地主、富農、反革命、悪覇）の四種類の人間とその子弟が、無報酬で行うべき義務とされていた。

脱出したい、一日も早く脱出したいという気持ちが、長男と次女の心の中に募った。彼らにできることは、人の数倍精を出して勉学に励むことだけだった。そうした彼らの努力は報われて、大学入試が復活した時、長男と次女は吉林大学生物学部と吉林師範大学にそれぞれ入学することができた。

第十四章　名誉回復、再就職、退職後の出版活動

第一節　名誉回復、民政部に就職

1978年、右派分子の冤罪の疑いについて調査するという胡耀邦講話が全国津々浦々にまで届いた。講話の内容を知った私は直ちに北京に戻って、関係部門に自分の冤罪を訴えた。全国各地から冤罪を訴えに、北京に集まってきた右派分子が余りにも多かったので、政府は個々の問題はそれぞれの元所属先に解決させる、という原則を出した。私の場合は、元の所属先である中ソ友好協会は、中ソ関係の決裂後［1969年に］解散されて存在していなかったので、中央宣伝部内の特別調査小組が調査を担当した。同調査小組は複数の関係者から当時の事情を聴取して報告書にとりまとめた。それを検討した上で、「歴史結論」の判定が下された。判定する側の恣意性をできるだけ排除するために、調査者は事前に明確な判断基準を定めていた。全国各地で実施された調査の結果、かつて右派分子とされた人の殆どは、実際は上司の不十分な点や問題点を指摘しただけに過ぎず、党の指導に反対するという次元の問題ではなかったことが判明した。これは、調査するまでもなく、誰にも明白なことであったのだが。この後、数十万の右派分子は名誉を回復し、職場復帰することができた。

私は名誉回復後、新たな就職先を探さなければならなかった。私の行政待遇クラスが高いことが、新たな就職の大きなネックとなった。1949年に全国幹部を対象にして行政待遇の格付が行われた際、実話報に勤務していた私は工資行政級別12級と定められた。この12級は、司長レベル（日本の局長レベルに相当）という相当に高いランクである。北京で数々の機関の間を、足を棒にして奔走してみたが、自分の行政待遇資格を告げると、大体決まって相手側から敬遠された。自分よりランクが高い人には来てほしくないと思うのは人情というものであろう。

北京での再就職先探しは難航した。北京には居場所はないと悟った私は、吉林省に戻ることに決めた。冤罪を訴えて二度目の上京をする前に、吉林大学の友人から文学部の教授をやらないかという打診を受けていたからである。

1979年の某日、北京を発つ日の午後、発車時刻まで、私は駅近くの本屋で時間をつぶしていた。その時、民政部部長の陳子華にばったり出会った。1945年末に陳が河北省周辺の冀察熱遼寧軍区の司令官を務めていた時、私は新華社承徳支社の記者として彼と知り合い、仕事上の関係で付き合いがあった。久ぶりの再会に、二人は大感激した。私の事情を聞いた陳は、民政部は文化大革命後の整理整頓のために人手が大変不足している、民政部に是非来てほしいと強く誘ってくれた。陳の暖かい誘いを受けて、私はその場で北京に止まることを決意した。

それから1982年の退職までの3年間、民政部の一職員として人生最後の公職に就くこと

になった。そこでは、またしても、思いもしなかった出来事を経験した。意気込んで民政部の人事部門に出頭したところ、受け入れ責任者の安という年配の女性官僚が「また華僑か」と、つぶやいた。この一言に私は強い違和感を覚えた。彼女の目には、華僑という人種はスパイ候補者か、資本主義思想の持ち主で、いずれにしても社会主義に対して忠誠心を持っていない人間のように映っていたようだ。

不運なことに、正統派を以て自任するこの女性官僚が、私が退職するまでの三年間民政部の人事を牛耳っていた。中国には、マルクス主義理論を教条的にやたらと振り回す女性幹部を揶揄して「馬列主義老太太」（マルクス主義婆さん）という言い方がある。安はまさにそういうタイプの幹部で、いつも何事にでも革命理論を唱えて人に説教することを人生の唯一の楽しみにしているようであった。彼女は、周囲から「安老太」と呼ばれていた。私を民政部に誘った陳部長は、健康問題もあって民政部内の日常業務には関与していなかった。陳部長が民政部に来ないので、民政部政治主任を務める安老太は、一人で民政部内の業務を取り仕切り、恰も部長のように振舞っていた。

安老太は私を歓迎しなかった。部長が引っ張って来た人間なので、ある程度の対応はしてくれたが、正式のポストは一向に与えてくれなかった。そのため、民政部の3年間は最後まで一般幹部の身分のままで革命史料研究室に勤務することになった[255]。

革命史料研究室で、私は中国共産党建党以後に死亡した共産党幹部の個別史料の整理と名簿編纂を担当した。その仕事は中央組織部の方では評価してくれたようだが、安老太はそ知らぬ顔をして、依然として正式のポストを与えてはくれなかった。

逮捕された文革四人組の裁判［1980年末−81年初］では、江青などの四人への判決をめぐって議論が白熱化した。ある日、安老太は私に、「四人組は殺さないほうがいい。みんなにそう説得しなさい」と頭ごなしに指図した。

「四人組を殺すか、殺さないかは、我々が決めることではなく、彼らが犯した罪の度合いによって決められるべきものではないでしょうか」と、私は反論をした。

「四人組を処刑すべきだという一般大衆の声がかなり強い。それが中央への圧力にならないように、みんなに説明してもらいたいということだ」

中央が四人組を処刑しない方針を固めたことを私は知らなかった。幹部大会で、安老太が江青に対する死刑執行猶予判決を読み上げた時、私は直ちに席を立って会場を離れた。翌日安老太は私を呼び出して、昨日の退場を糾弾した。「この判決結果に対して強い不満があります。私を責める前に、私の意見を上級部門に伝えていただきたい」と私も譲らなかった。

意見の食い違いは、これだけに止まらなかった。幹部の昇進に関しても対立した。当時民政部では幹部8人に対して昇進枠は一つしかなかった。8倍の競争率である。民政部の幹部

---

255 前掲『呉敬業的一生』に欧陽氏も「遙祭琳曼」という一文を寄せているが、肩書は「民政部幹部、現離休」と記されている。他の寄稿者の多くは、「長」や「主任」等の役職名が記されており欧陽氏の肩書と対照的である。

には、20年間の下放生活から職場復帰したばかり者が多かった。20年間昇進の機会がなかった彼らは、誰もが昇進を期待していた。しかし、昇進の枠が極端に少ないため、幹部たちは熾烈な争奪戦を強いられた。昇進枠を多目に確保できなかったのは、人事部門の落ち度であるのに、安老太は自分の責任は棚上げにして昇進評価総括大会で「みんなが一致団結して互いに譲り合ったので、今回の大会は成功裏に終わった」と、事実とは異なる総括をした。安老太に対して、私は次のような意見を述べた。

「安主任、党はいつも我々に嘘を付いてはいけないと指導しているではありませんか。安主任は、なぜこうまで平然と嘘をつくことができるのですか。今回の昇進評価では、同志たちの間にいつ殺しあいが起ってもおかしくないほどの潰しあいがあったのに、安主任は『一致団結』という美辞麗句をよくも口にすることができたものです」

物事をストレートに言う私は、当然安老太のご機嫌を大きく損ねた。そのため、何回も衝突した後、安老太は私が所属する革命史料研究室の主任廖経天を通して、私に「おとなしくしろ」と圧力をかけるようになった。廖経天は、もともと人民日報の副編集長であり、中ソ友好協会の副秘書長でもあった。民政部では、当然副部長クラスであるべきなのだが司長レベルに止まっていた。彼にも、安老太らをはじめとする実力者に対して不満が充満していた。彼は、私に次のように注意した。

「老欧、安老太のご機嫌を損なわないように気をつけたほうがいい。実は、今まで君の待遇改善については、彼女に何度も相談してきたが、どれも君が公の場で不満を述べたり、党を攻撃するような発言をしたりしたことを理由にして却下されてしまった」

私は廖経天を通して安老太に自分の気持ちを明確に伝えてもらった。「自分は目上の人に諂うタイプの人間ではない。ポストや肩書を得んがために、良心に反することはできない」、と。

第二節　革命史料研究室勤務

革命史料研究室の同僚たちと最初に手掛けた仕事は、中共成立以降、革命に命を捧げた共産党幹部の名簿の作成である。中国では、革命に命を捧げた人物を「革命烈士」と敬意を込めてよぶ。この事業は、中央組織部が延安時代にも検討したことがあったようだが、資料不足や交通不便などのために着手できないままになっていた。その後の建国期から私が民政部に入った時期に至るまで、一度も実施されたことはなかった。そのため、革命烈士の定義は明確ではなく、革命烈士として認められる基準も曖昧であった。中央組織部には、多数の革命烈士の情報が保存されていたが、いずれも詳細さや正確さに欠けており、事実の照合や確認が必要なものが多かった。

こうした実情は、かえって私たちのやる気をそそった。私たちは、中国共産党創立から新中国成立までの間に亡くなった革命烈士の人数、プロフィールを全国規模で把握することを目標にした。そこで、まず中央レベルから調査を開始して、順次、省、軍団、地方、師団へ

と下った。一年後、私たちは中央レベルの幹部の名簿を完成させた。

続く、地方レベルの革命烈士の名簿作成においては、民政部の名で、まず各レベルの地方政府に烈士候補者の推薦を依頼した。地方政府にとっては、烈士として公認される人数が多いことは郷土の名誉であるばかりか、全国的な知名度を高めることになるので協力を惜しまなかった。地方政府から上がって来た候補者について、私たちは学者や専門家と組んで中央組織部に保存されている名簿を参考にしながら、革命への貢献度、党内の地位などを基準に慎重に検討と議論を重ねた。

これをもとに、大規模な学術研究会を開き候補者を決め、中央組織部に上申した。こうした慎重な選考作業を経て作成された烈士名簿は恣意的判断をある程度は排除することができたと思う。しかし、今から顧みれば、この烈士人選には当時の左寄り風潮を看取できる。例えば、陳独秀をはじめ、トロツキストというレッテルを貼られた人たちは、『中共党史人物伝』に一人も収録されていない。但し、1990年代以降、陳独秀は過ちを犯したが、中共の創始者という歴史的役割を担った人物として次第に語られることが多くなっている。

名簿の編集成果は、内部通信という方式により定期的に中央組織部に報告した。中央組織部は中共党史人物研究会を作り、我々の成果を土台に『中共党史人物伝』という資料集を編集した。研究会の代表者を務めたのは温済澤［1914-1999］であった。

当時温済澤は、中国社会科学院研究生院院長であった。彼はいち早く右派分子の汚名取消しに成功して名誉回復を果たした人物である[256]。彼の名誉回復は、中央組織部長を務める胡耀邦の強力な後押しで実現したのである。職場復帰した彼は、延安整風運動で冤罪を着せられ殺された王実味についての調査を主導した。その結果は、無実であるという結論となり、王実味は名誉回復した。温済澤は強いリーダーシップを発揮して、革命烈士の資料整理、編纂を効率よく実施した。

中共党史研究で著名な中国人民大学教授胡華［1921-1987］が、『中共党史人物伝』[257]の編集主幹として招かれた。全国の党史研究者を北京に集めて、編集の趣旨、方針を伝え、取り扱う人物の歴史的評価について議論した。さらに、彼らを通して、執筆者を選び、執筆を依頼することになった各地の大学教授等に編集の趣旨を周知させた。多くの場合は、革命烈士と同一地方の出身者に執筆を依頼した。

編集・執筆段階で、編集者が最も手を焼いたことは、史料収集自体よりも、むしろ紙面の割当てや人物評価をめぐって、遺族から押し寄せた苦情・不満への対応であった。「どうし

---

256 温済澤は建国後、中央人民広播電台副総編輯や中華全国新聞工作者協会副秘書長を歴任し、1957年に右派として打倒された。1960年に北京広播学院新聞系教授。

257 中共党史人物研究会編『中共党史人物伝、第一巻』（陝西人民出版社、西安、1980年5月刊）には胡華が1979年12月19日付けで「第一巻前言」を書いている。また、このシリーズの完結巻である、中共党史人物研究会（何長工会長、胡華主編）編『中共党史人物伝、第五十巻』（1991年5月刊）には、「五十巻編後記」が掲載されている。これらの「第一巻前言」や「五十巻編後記」には、温済澤の名は見えず、民政部革命史料研究室の役割についても全く言及がない。欧陽氏の記憶違いの可能性も考えられる。

てうちの夫についての記述はこんなにわずかなのだ！」といった類の不満である。私は民政部の革命史料研究室の代表として武漢の会議に出席した時、トロツキストとされた人物の遺族から、なぜ烈士として認められないのかと厳しく問い詰められたこともあった。また、複数の配偶者がいた烈士の場合、夫の伝記には他の妻の名前は出ているのに、どうして自分の名前は出ていないのだという不満も寄せられた。

民政部の革命史料研究室は、硬直した方針を実情に応じて柔軟に解釈することができる権限を与えられていなかったので、これらの苦情は中央組織部に対応してもらうしかなかった。しかし、回送した苦情に中央組織部が適切に対応したとは限らない。編集主幹の胡華は多数の遺族関係者の憎みの的となったと聞いたことがある。

編集事業の規模が大きくなるにつれて、民政部と各地方政府との間の連絡調整は次第に円滑を欠くようになった。民政部には各地方政府へ命令する権限がなかったためである。この問題解決のため、編集事業の主管は、民政部から中央組織部に移された。事業の成果は、中央委員の審査を経た後、中央組織部の名で上梓された。

安主任は、革命史料研究室の存在理由はなくなったと言って同室を解散した。それと同時に、私は民政部を退職した。

第三節　党歴審査申請と入党時期の確定

退職が近くなった1982年、私は直接胡耀邦に宛てて、自分のタイでの入党の事実確認とタイでの入党以来の党籍継続の承認を求める請願書を送った。間もなく胡耀邦から、早期解決を約した返事が届いた。しかし、事実確認の調査は一向に進まなかった。

ちょうどその頃、1938年に私が暹羅共産党に入党した際の紹介人であった鐘育民［1982年11月26日68歳で死亡］が重病に陥った。延安に到着した時、私が党に提出した文書にも、私の入党紹介者は鐘育民だと明記していた。鐘が亡くなってしまえば、私がタイで入党したことを証明できる人物はすべて他界してしまうことになる。延安以来40年以上続いている党歴問題は死ぬまで解決できないかも知れない。危機感を覚えた私は、テープ・レコーダーをもって妻とともに民政部の責任者を訪ね、入党紹介者である鐘の病状を説明して、鐘から早く証言を取ってくれるように訴えた。その訴えを録音したテープを胡耀邦宛てに送り、再度請願した。その結果、胡耀邦は中央組織部に調査班を作るように指示した。

中央組織部と私の所属機関の民政部とは、共同調査班を鐘育民のもとに派遣した。育民は、「欧陽恵の入党紹介人は自分と阿桂である。欧陽恵は抗日募金や多数の若者を延安に連れて帰国するなど身を挺して活動した。もし、この証言が信ずるに足らねば、黄耀寰に聞き、それでも不十分なら当時の僑党の責任者李華に聞くように」と口頭で証言した。育民には自分で筆を執る元気は既に残っておらず、口頭証言を、他の人に代筆してもらった文書にサインをした。彼の証言により、私が1938年5月1日に入党したことが確認された。

次いで調査班は、李華に当時の中国共産党と暹羅共産党との関係について質した。李華

は、「欧陽恵は、僑党の仕事に従事していた。僑党は中国共産党の下にあったので、中共と兄弟党との間のような党籍問題はない」と説明してくれた。李華の論法は、僑党と兄弟党とを分け、暹羅共産党は兄弟党ではなく僑党、即ち中共の一部だと言うものである。これは暹羅共産党の性格を見る上で重要なことである[258]。李華は私のタイでの入党を党歴の始まりであると認めたのである。

中共中央は1957年頃、抗日戦争以前の共青団入団は、入党と同一と見なすという方針を示した。私の暹羅共青団入団の二人の紹介者は、既に死亡していたが、張慶川の下で団員として活動していた庄江生および樹人学校の学友であった蓮芬（黄明、在バンコク時代に恋仲であった許一新と延安に到着後すぐに結婚した。現在バンコク在住）が私も団員であったことを証明してくれた。私が1935年9月に共青団に入団したこと（実際は入団の申請をしたこと、入団が許可されたのは、その3カ月後）が確認された。

調査班の調査結果は中央組織部に報告され、同部から民政部に通知された。民政部の担当者は、これでおまえは満足しただろうと横柄な口を叩いた。その口調に私はむかっとなった。「こんなつまらないことで40年以上も、もめていたのだ。もし、延安到着の当初から1935年の入党が公認されていたならば、長征に参加した紅軍の古参幹部と同様の資格を得ることができ、活躍の舞台はもっと広がっていたはずだ。体の半分が墓場に埋まってしまった今頃になって、ようやく事実を認めてもらっただけで、どうして満足と言えるのだ。今の発言は私の人格への侮辱だ」私は猛反発した。

とにかく、1935年9月の共青団入団申請時から私の「参加革命工作時間」が開始することが公認された。私の『老幹部離休栄誉証』（1982年10月26日発行）にも、「参加革命工作時間」が1935年9月と明記された。私の党歴は、やっと事実に即して、1935年開始であることが認められたのである。

---

258 暹羅共産党は、中共広東省委下の南洋共産党臨時委員会に属する暹羅委員会とベトナム青年革命同志会ウドン省委、則ち中共の在シャム組織とベトナム人共産主義者の在シャム組織が合体して1930年4月に成立した。1936年末以降ベトナム人組織の暹羅共産党内での組織的活動は消滅した。それ以後、暹羅共産党の活動は、華僑学校の教員・学生を中心とする華僑組織による抗日救国活動となった。1938年2月、1939年8月のタイ政府の一斉逮捕で暹羅共産党の在タイ指導部は、殆ど潰滅した。残ったリーダーの李華も、本稿で欧陽氏が述べるようにウィエンチャンに移動した。1941年8月に、李啓新が送り込まれ中共工委を立ち上げた。当時、ピブーン政権の弾圧で華校は既に存在していなかった。中共工委は、従来通り、抗日救国活動を掲げ、華校卒あるいは中退の新世代をリクルートするとともに、華僑・華人労働者の組織化に努めた。1942年11月末から12月初めに10数人が参加して、タイ共産党の第一回代表大会がバンコクで開催された。初代総書記には李華が就任したが、1943年にはタイ生の華人、余松（ソン・ノッパクン）に総書記の地位を譲った。しかし、タイ人（実質はタイ生の華人）のウエィトは華僑組織に比し、微弱で余松総書記も、李啓新、李華、邱及などの指導下にあり、総書記の肩書は名目的なものに過ぎなかった。戦後になって、タイ共産党から華僑組織が分離して中共暹羅総支部と称した。中共暹羅総支部は1953年に解消し、成員の一部は中国に帰国した。このような暹羅（タイ）共産党の歴史から、同党は中共の下部組織（僑党）なのか、中共とは別個の兄弟党なのかという問題が存在したのである（前掲村嶋論文「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930−1936）」、村嶋英治『第二次世界大戦期間的日泰同盟及泰国華僑』（早稲田大学 COE-CAS Working Paper, No.12, 2005）pp. 21−22）。

私が自分の一生を通じて、これほど党歴・党籍問題にこだわってきた理由は、党歴・党籍は党員としてのキャリアや待遇のみならず、政治生命に関わる重要問題であるからである。組織部の個人档案に「党籍上還有問題、已重新入党」とある場合、政治キャンペーンの度に、どうして離党して再入党したのだ、スパイではないのかと追及されるのだ。

個人档案は、①歴史問題がない人、②若干問題がある人、③問題がある人（スパイの疑い）の3種に分類されている。毛沢東流の政治キャンペーンは、批判対象にする予定枠を、例えば10パーセントなどとあらかじめ決めて開始される。②や③に分類されている人たちは、予定枠に一番最初に入れられる。私の場合、他の問題はなくても華僑であるだけで問題とされるのに、更に再入党をしたのであるから一層不利であった。

私と同じようにタイで入党して延安に行った、他の人たちの党歴問題がどうなったかは知らない。私の場合、幸運であったことは、証言してくれる人が生きており、かつ全員が北京に住んでいたことである。

党歴問題の解決には、長時間を要する場合もある。例えば、1938年3月にタイから国外追放された呉琳曼は、戦後雲南の地方委からベトナムに派遣され、多数の仲間とともにベトミンの手でスパイとして処刑された。彼の妻は、彼の名誉回復のために奔走したが、地方と中央の間でたらい回しにされ、解決までに38年を要した[259]。

第四節　報告文学の創刊

退職後はつれあいと悠々自適の老後を過ごすのが普通のようであるが、私は何か仕事をしていないと、落ち着かない質である。

魯芸の学友で当時某出版社のトップであった友人の誘いを受けたので、私は民政部革命史料研究室の上司であった廖経天と組んで、報告文学[260]という雑誌の創刊に携わった。創刊に当たって、その出版社は、出版経費は我々編集者が自力でまかなうこと、赤字が出たら直ちに廃刊すること、出版社からのスタッフ提供はしないこと、という三つの条件をつけた。私たちは実務経験に裏打ちされた自信から、この三条件を飲んだ。私たちは、出版社からは単に名前を借りるだけで、すべての困難は、自分の力や人脈で克復するつもりであった。

新しい雑誌は、現代中国を動かした著名人の実話や回顧録を取り扱う、大陸では珍しい伝記専門誌として世に出した。創刊号には、元国民党特務の最高幹部の一人、沈酔が書いた回想録[261]を掲載した。当時は、国民党系の人物はタブー視されており、新たな題材を開拓したものであった。本誌は、1980年代の文学ブームの中で多くの読者の興味をそそり、創刊号

259　注66を参照。

260　人民日報出版社の月刊誌、1984年1月に創刊号刊行。創刊号の奥付には、主編、田流。副主編、程光鋭。編輯、『報告文学』編輯部。出版、人民日報出版社、とあるが、欧陽恵氏の名はどこにも記載されていない。

261　『報告文学』創刊号（1984年1月号）pp. 65–71には、確かに、沈酔「『軍統内幕』節選」が掲載されている。しかし、同記事は沈酔が、報告文学のために書き下ろしたものではなく、同時期に出版された、沈酔『軍統内幕』（文史資料出版社、北京、1984年2月刊）の抜粋に過ぎない。

は三千元の利益を上げた。一般幹部の平均月収が50元くらいであった時代に、三千元は相当の額であった。

雑誌の人気ぶりを見た出版社の管理者たちは、突然変心して私たちを編集陣から追い出し、金の卵を産む報告文学を掌中にした。私たちが去った後、報告文学はかろうじて経営を維持できるに止まり、創刊直後の盛況は二度とは戻らなかった。

創刊号に掲載した回想録の著者である沈酔[262]は、国民党の特務機関（軍統）のボスから、一転して全国政治協商会議委員となった人物である。国共間の数十年にわたる確執の縮図とも言える沈酔の一生は、多くのドラマチックな要素を含んでいる。私は彼の人生を素材にして映画の脚本を書き下ろした。

彼の波乱の人生は、一見ドラマ化しやすいように思われたが、いざ書き出してみると、思いの外、扱いにくいものであることが判った。共産党の人間改造の偉業を称えるためには、国民党秘密工作員時代の彼がいかに反革命的、反人民的悪行に励んだかを、克明に描き出す必要がある。しかし、そこが難しいところであった。あまりに詳細に書くと、却ってそれを賛美するかのように見え、また、興味本位のものに堕してしまう恐れがある。かといって、彼の悪行について通り一遍に触れる程度では、共産党の人間改造の成果の重みが伝わらない。試行錯誤の末、やっと自分なりに納得できるいい線に達した。

友人の紹介で、東北電影スタジオが私の脚本を制作計画に入れてくれたので、映画化実現の入り口にまで漕ぎ着けた。しかし、そこでまたとんでもない事態が発生した。私の脚本を入手した映画監督は、撮影開始の宴会で私から全体構想を聞きだした後、私に連絡することなく密かに制作チームを率いてロケに向かった。脚本作者である私は、制作チームから完全に外されたのである。早速、沈酔に電話をして事情を尋ねた。沈酔はただ「気にしないで」と言うだけで、監督の非常識な行動を糾弾する言葉は一言も発しなかった。私が残りの脚本と関連資料の提供を拒否したことは当然であった。結局、映画制作は、監督の無謀な行動で流産した。

以上の二つの体験を通じて、私は、ささやかな私利のために約束を平気で破ったり、大切な友情を裏切ったりするようなことが当たり前になり、人々のモラルがどん底にまで落ちて

---

[262] 沈酔は国民党の特務機関（軍事委員会調査統計局、略称軍統）のボス戴笠の秘蔵子で1932年以来様々な共産党員や国民党内反蒋介石派の迫害や暗殺に関わり、国共内戦において国民党の最後の拠点であった雲南で国民党政府国防部雲南区駐在専員と国防部保密局（軍統の後身）雲南省站長を兼ねていた人物であるが、共産党の統一戦線政策のおかげで処刑を免れ、11年間の獄中生活で反省を示し自己改造に努め1960年に46歳で特赦を受けた。一年の労働の後、1962年に溥儀らと共に全国政治協商会議文史資料研究委員会専門委員に配属され、共産党指導者の要請により『文史資料選集』に特務時代の実話を書いた。上海における江青と張春橋の過去を知る彼は、文革中の1967年から5年間四人組の迫害で再投獄されたが、釈放後復職。1979年雲南の文書整理で1949年に共産党に応じて蜂起に加わっていたことが判明して待遇改善。1981年初一月足らず香港で離散家族と再会、香港の新聞雑誌に自筆の文章が多数掲載された。1981年11月23日全国政治協商会議常務委員会で全国政治協商会議委員に招請された（沈酔『わが三十年：もと蒋介石集団戦犯の手記』外文出版社、北京、1987年）。欧陽恵氏が沈酔の手記を掲載した時点で、沈酔は既に多数の手記を内外の雑誌に発表している著名人物であった。

いることを、身をもって実感した。度重なる政治動乱のなせる業だろうか。

第五節　泰国帰僑英魂録の編集

1982年に退職した後、私は創立されたばかりの華僑歴史学会に入り理事を担当した。1986年には、タイ国からの帰僑である呉佟[263]［深圳出身の客家］、謝光[264]［1926-1999］、張伯樹[265]［1928-1994］、それに私の4名で民間団体として泰国帰僑聯誼会を発起させた。設立目的は、中国に帰った華僑、即ち帰僑の子女たちが教育面で不利な扱いを受けないように華僑担当部門に請願するためであった。北京で成立した帰僑団体としては、我々の団体が最初のものであった。この後、フィリピン、ベトナム、ラオス、カンボジアなどの団体が成立した。但し、民間団体とは言え、毎年一回の大会には中央対外連絡部の担当者が出席して、訓話をするのが常であった。5〜6年前、大会に出席した楊白冰（中央対外連絡部司長クラス）は、講演でタイの僑党は25年間活動し幕を閉じたと語ったことがある。それは、タイで僑党が存在したのは、1927年から1952年までの25年間ということを意味する。

1930年前半、広肇公学に学ぶ私を、共産主義に導いた2年先輩の魯文は、周りの同志たちよりも早く［1937年末に］タイを出て延安へ向かった。中国に帰った後の魯文の態度は、なぜか打って変わったように見えた。延安に華僑聯合会[266]という団体があったが、魯文は華僑出身であるのに、華僑聯合会の会合にめったに顔を出さなかったのみか、普段も我々華僑とのつき合いを避けていた。

263　呉佟は1922年、タイ生まれ。太平洋戦争中、タイで中原報の記者。英語もタイ語も堪能。中国に帰り、1983年当時は中国建設雑誌社副総編集として『中国建設』（宋慶齢基金機関誌）を編集。現在、タイに住む。佟英の筆名で著作『佟英文集』（鷺江出版社、廈門、1998年）や『湄南情緒（佟英文集之三）』（バンコク、泰華文学出版社、2003年）などがある。

264　1926年海南島生まれ、父親が早世し、兄たちの住むバンコクで洗濯工として働き、新民学校に学ぶ。1941年11月タイ共産党に入党。南タイの抗日運動を指導、戦後バンコクで全民報の責任者。1953年帰国して中央対外連絡部でタイ担当、1969年文革で反革命とされ入獄、1975年に釈放される。翌年再度逮捕入獄、1978年2月に出獄。名誉回復・党籍回復して中連部に復職、1999年死亡。著書に謝光『泰国華僑的政治活動（1906-1939）』（中タイ両文、チュラーロンコーン大学中国研究センター、2003年）がある。但し、同書は、事実の間違いが多い。

265　原籍広東省普寧県、1928年コーラート県シーキュウ生。父親は精米所と商店を経営。母親はタイ人。ピブーンの排華政策で華校が閉鎖されたので、父親は故郷に送って教育。上海暨南大学国際貿易系在学中の1949年入党、1950年から中国青年報社に勤務。整風運動時に右派分子とされた同報職員を右派ではないと擁護したために、「右傾」とされ「留党察看処分」を受ける。文革時は、家庭が裕福なのにどうして中国に来たのだとスパイの嫌疑をかけられた。1978年に全国で右派分子に対する名誉回復が行われ、「右傾」の帽子も取消された。社会科学院世界経済研究所編集部に職を得て世界経済雑誌創刊に関わり、次いで上海の世界経済導報の副総編輯。1983年僑務部門が華僑を対象とした雑誌『華声報』を計画し、その創刊の任務に転勤し初代総編輯、1986年世界経済導報に復帰。1985年には全国優秀新聞工作者に選ばれた。1988年定年、タイに戻る。タイには母方の従兄プラマーン・アディレークサーン[1913-2010]元副首相などの有力親族がいた。泰国研究学会副会長に推薦され、学術交流に努める。また、中泰間のコンサルト会社を営んだ。1994年死亡。遺骨は北京八宝山革命公墓に安置（『泰国帰僑英魂録、第四巻』pp. 306-313）。

266　延安に存在した華僑団体の正式名称は「延安華僑救国聯合会（救国聯）」であると思われる。この団体は1940年9月に成立した。延安の王家坪に旧址が残っている（2007年1月20日、村嶋が延安で確認）。注234も参照のこと。

写真 20　延安のタイ華僑（庄江生等）

彼は 1972 年に共産党北京市委員会の委員に出世し、我々との付き合いは一層薄いものとなった。彼は、泰国帰僑聯誼会の活動にも殆ど出席しなかった。私はこれを見て、彼は大官になったので、昔の仲間とは意識的に距離をとろうとしているのだろう、と解釈した。しかし、ある年、老共産党員である友人の庄江生[267]と一緒に、新年の挨拶で魯文を訪ねた際、彼が話したことは、私にずいぶん違う印象を与えた。確か 1989 年、天安門事件の前のことだった。

会話が始まった当初、私たちはなるべく政治の話題には触れないように、世間話ばかりを選んで話した。魯文が泰国帰僑聯誼会の様子を聞いたので、私たちは、活動内容は討論会を中心としたものであることを報告し、かつ、党中央、政府の台湾政策を断然擁護するという華僑界の態度を明確に表明することも忘れなかった。

私たちの公式風の報告を一通り聞いた魯文は、深刻な表情を浮かべた。

「君たちは、これらの活動が、本当に役に立つとでも思っているのか」

「……」

魯文の問いの真意が判らない私たち二人は、答えに躊躇した。

「忙しいとか、偉くなったとか、そういうつまらない理由で私が、華僑団体の活動に関わらないようにしている、という噂が時々耳に入ってくるが事実ではない。本当の理由は、今までの活動がまったく意義がないものにしか見えないからだ」と、魯文は厳しい口調で切り出した。

魯文は会話の中で、我々に革命の道理を教えた、バンコクの廣肇公学教員の夏夢雲という

267　延安の中国人民抗日軍事政治大学記念館には、庄江生、張声良、蘇青を抗日戦争開始後タイ国から延安入りした華僑として紹介し、彼らの写真を展示している（2007 年 1 月 21 日、村嶋が同記念館で確認）。

人物に言及し、「あの男はけしからん。悪く言えば、ただの機会主義者だった」と断言した。

魯文は、「過去における我々のタイでの活動は価値がなかった、と考えている」とまで言い切った。

彼は次のように質した。

「君たちは、当時我々がタイで行った活動に、本当に価値があったかどうかを真剣に考えたことがあるのか」

正直なところ、私はこのように問われるまで真剣に考えたことはなかった。魯文の唐突な問いかけも、真面目には受け止めなかった。

最後に魯文は「君たち、華僑同士の交歓活動なんて、時間と労力の無駄に終わるだけさ」と切り捨てた[268]。

泰国帰僑聯誼会の主要な活動の一つとして、タイから中国に帰った共産党系華僑（物故者のみ）の伝記を、『泰国帰僑英魂録』として集成する計画に着手した。この計画は、私と呉佟が発案したもので、タイ共産党の元総負責人[269]であり、帰国後外交部アジア司長のポストにまで昇進した李華（副部長待遇、亡くなる一年前には帰国華僑聯合総会副主席）、伍治之、邱及の支持を得たので、仕事はやりやすかった。

李華は1988年11月12日に76歳で死去した。葬儀の時、彼の亡骸は党旗で覆われていた。これは党員として大変名誉なことである。彼は死亡する4年ほど前に、『泰共産党―初稿』を書き上げた。これは5〜6万字からなるガリ版刷りの作品で、何人かに回して意見を求めた。私も意見を求められ、読む機会を得た。現在この文書にアクセスすることはできないが、私の記憶では、李華はタイで共産党が発展しなかった理由として、（1）華僑の中での活動に終始して現地のタイ人を取り込む努力を怠ったこと、（2）抗日活動を重視し、タイ人民に革命意識をもたせるための活動には力を入れなかったことを挙げていた。私は、タイ人を取り込む努力もそれなりに行ったとして、タイ語でのビラ配布を例に出した。私がさらに、タイ共産党が発展しなかったのは、タイ文化に起因するものだと思うと述べると、李華は不機嫌になったように見えた。

また、李華は『泰共産党―初稿』の中で、我々の失敗の原因は、武装勢力を発展させなかったことにある、我々は毛沢東の「銃口から政権」という思想を十分には理解していなかった、という見解を記していた。更に彼は、同初稿の中で、タイ国における共産党のトップ指導者を次のように書いていた。すなわち、最初の総負責人は伍治之［1905-2000］、続いて劉漱石［1899-1942］。1939年8月に劉漱石が逮捕された後の総負責人は李華［1912-1988］。1941年に、李啓新［1910-2007］が中央（香港）から派遣されて来た後は、李啓

---

[268] 魯文は2001年11月19日に北京で死去したが、『泰国帰僑英魂録』には彼の伝記・追悼文は掲載されていない。

[269] 李華は1942年12月1日に創立されたタイ共産党（暹羅共産党の後身）の初代総書記。翌1943年にタイ生まれの華人、ソン・ノッパクン（余松）に名目上、総書記の地位を譲った。注258も参照のこと。

新、李華の順で両者を総負責人と記していた[270]。この順序から見て、李華より李啓新が上位であったと思われる。

戦後のタイで、李啓新と李華との間の対立が激しくなり、中央から仲裁人が派遣されて来たほどである[271]、という。私は、両者の対立の原因が何かは知らないが、この結果、李啓新は本国へ異動させられ帰国することになった、と聞いている。[李啓新の更迭後に、中共は伍治之を責任者として送り込んだ。] 帰国した李啓新は、毛沢東に「お前は欽差大臣なのに少し左翼過ぎたのではないか」と叱られた、とも聞いている。しかし、どのような点が左翼過ぎたのかは知らない。李啓新は最後は、中央対外連絡部の副部長待遇であった。

李啓新は泰国帰僑英魂録の編集に、何の協力もしなかったし、情報も提供しなかった。私は李華の伝記の草稿[272]を書いた際に、李啓新に近い呉佟を通じて、李啓新に同草稿を見せて意見を求めたが、李啓新の答えは多忙で読む時間がないというものであった。李啓新は大官ぶって態度が横柄であり、私たちが旧正月の挨拶に行っても門前払いを喰わしたことがある。

しかし、李啓新は泰国帰僑聯誼会とは何の関係もなかったということでもない。李啓新はバンコク時代および中央対外連絡部時代において自分の部下であり、かつ同じ海南人でもある謝光を通じて、自著の『湄江留言』[273]を聯誼会の費用で出版させ、聯誼会に配本まで担当

---

270 『泰国帰僑英魂録』に掲載されている伍治之、劉漱石、李華の伝記は、すべて欧陽氏の手になる。なお、欧陽氏は、李啓新とはタイに同時期にいたことがないためか、あるいは人脈上の違いのためか親しくない。また、欧陽氏は、李啓新によって引上げられた謝光の学識に低い評価しか与えていない。これは、欧陽氏と謝光は、『泰国帰僑英魂録』編集の主導権争いで対立したことも一因かもしれない。欧陽氏によれば、英魂録第三巻に、同氏が執筆した原稿が一本も掲載されていないのは、両者の対立の結果である。注179も参照のこと。

271 2008年9月から2010年2月まで『週刊マティチョン』(タイ語)に73回に連載されたタイ共産党史、"Luk Chin Rak Chat(『愛国僑生』)"(2010年にマティチョン社より単行本で出版)の著者で、古参タイ共産党党員のチャオは、村嶋に、「戦中、戦後の共産党活動が平穏裡にうまく行ったのは、李華、李啓新の二人が協調したからであり、欧陽氏が言うような両者間の対立など存在しなかった」と述べた(村嶋のチャオ・ポンピチットとのインタビュー、2007年12月27日、バンコク)。チャオは、自著の中で『泰国帰僑英魂録』に掲載された欧陽氏の文章を多数引用しているが、総じて欧陽氏に批判的で、欧陽氏の言動に感情的に反発する傾向がある。上記自著のなかでも、村嶋から聞いた話を完全に誤解して、暗に欧陽氏を糾弾している個所がある(例えば、Chao Phongphichit, "Luk Chin Rak Chat (19)", in *Matichon Sut Sapda,* 23–29 Jan. 2009, p. 43)。これは、チャオが謝光と親しいという人間関係も影響していると思われる。チャオが無給で所属した、チュラーロンコーン大学アジア研究所中国研究センターは、タイ華僑の共産主義運動を記録するプロジェクトを作り、謝光に執筆を依頼した。しかし、謝光は途中まで執筆した段階で急逝した。彼の遺作は、前出、謝光『泰国華僑的政治活動(1906–1939)』として、同研究センターが2003年に刊行した。チャオの著作 *Luk Chin Rak Chat* は、謝光の遺作がカバーできなかった時代(主に1940年から1953年)のタイ華僑の共産主義運動を記録するために、同研究センターがチャオに執筆依頼した成果である。謝光、チャオの両著作ともに、自らの党活動経験や党指導者たちから直接聞いたことを記録している部分は、貴重であるが、それ以外は調査不十分で誤りが多いという欠点がある。なお、チャオ氏は2012年9月21日に88歳で病没されたが、22章から成るタイ共産党史の遺稿(未刊行)を遺された。

272 欧陽氏が書いた李華の伝記は、「悼念李華」のタイトルで、『泰国帰僑英魂録、第一巻』pp. 396–404に掲載されている。

273 1990年出版、全248頁。李啓新が、スリン(素林)という筆名で在タイ時代に華僑共産組織の機関誌『真話報』に掲載した220本余の論説の中から選んだ55本(最初の論説は1942年7月25日付け、55番目は1947年1月26日付け)に、1948年6月25日にバンコクで執筆した一文を加

させようとしたことがあった。私は、このような李啓新の態度、やり方に批判的であった。

泰国帰僑英魂録は、共産党系の活動に参加したタイ華僑で中国に帰国した物故者を対象として、各人毎に項を立て回想文、追悼文、伝記資料などを集めて掲載した。原稿を執筆した者は、編集者[274]、対象者の遺族もしくは対象者をよく知る人物である。編集者の旧知である場合は、編集者自身が取材資料も加えて執筆した。対象者の遺族が、文章をうまく書くことができない場合には、編集者が遺族から話しを聞いたり対象者の元勤務先を訪ねたりして取材して文章にした。取材では話しの要点のみをノートに筆記し、テープには録音しなかった。私を含め編集者は、新聞・雑誌記者として経験が豊富であったので、このような聞き書きはお手の物であった。

私は英魂録の原稿は、法律上検閲の対象にはならないだろうと考えていた。ところが、謝光と呉佟は全原稿を中央対外連絡部に提出して事前検閲を受けて修正した。修正された部分は、対外関係に関わる部分（外国領土上で中共が活動したことが、主権侵害などの外交問題を引き起こすことがないように)、文革で自殺に追い込まれた人たちの無念や、「華僑は祖国を愛しているのに、祖国は華僑を愛さない」などと書いた部分であった。中央対外連絡部に勤務する楊白冰の意を受けた謝光は、私を目障りにして聯誼会の役員改選時に、私に高齢だからそろそろ身を引いたらどうかと発言した。私は謝光に、自分は君より健康だと反論した。

泰国帰僑英魂録に各人毎に項目を立て、無名の庶民の一人一人の政治活動歴を比較的詳しく記すことが可能になった理由の一つとしては、共産党員はしばしば自伝を書かされるので、その都度過去と直面し、矛盾がないように記憶を整理せざるを得ない自伝制度の存在を指摘できよう。中国共産党員は、政治的に生き延びるために自分の過去の履歴を明確に説明できることを心がける必要があるので、頭脳中に記憶しているだけではなく、文章にして記録している人が多いのである。

自伝制度は、毛沢東の発案と言われているが、共産党員は入党以後、何度も自伝を書くことを強いられる。自伝には、次の3種がある。

まず、入党時には、年齢、両親の出身・経歴、自分の経歴を主とした「自伝」を書かなければならない。

次に、「思想自伝」として、マルクス主義を信奉した経緯、即ち、マルクス主義とどう出会い、どんな人から影響を受け、どんな本を読んだかを中心とした自伝の作成が求められる。

さらに政治キャンペーンの度に、「歴史自伝」として、小学生以来今日まで、どのような人と交際交流したかを書くことが求められる。最近のキャンペーンの例では、天安門事件のケースがある。整党会に出席して、定められた項目毎に、天安門事件に参加したかどうか、

え、最後に謝光、楊白冰の「《真話報》的出版経過及其歴史作用」が付されている。『湄江留言』には出版社、出版年月日、出版地などの書誌情報が一切記載されていない。

274 欧陽氏自身は、「欧陽恵」10本、「慕蘭」5本、「凌燕」5本、「欧陽」3本、「楊慧」2本、「区恵雄」1本と、6つの名前を用いて、合計26人の伝記を書いている。一方、謝光は、「謝光」20本、「方生」8本と、二つの名で28本を執筆している。

アメリカ人の友人がいるかどうか、どんな身分の人か、どうして知合い、どんな関係があったのか、などを記入させられた。

いくつも書かされる自伝の記述の間に、矛盾や異同があれば、例えば、何年に何歳で入党したかが各自伝の間で一致せず齟齬があれば、追及を受け酷い目に遭うことになる。また内容不十分であれば書き直しを求められる。それ故、熟考の上、慎重に記述しなければならない。また、自分の記述の正しさを証明してくれる証人名も記しておく必要がある。

最初に自伝を書かされた時は、私はその重要さを理解できず大雑把に書いたので、後で大変苦労することになった。慎重な人は、提出した自伝のコピーを作り保管している。しかし、このようなコピーは、他人には見せないものである。私が英魂録の取材で、遺族が該当者の自伝を見せてくれたのは1件だけであった[275]。

泰国帰僑聯誼会《英魂録》編委会編『泰国帰僑英魂録、第一巻』は、1989年10月に北京の中国華僑出版公司によって刊行された。第一巻の裏表紙には、「責任編輯：劉戦英」と印刷されているが、この人は中国華僑出版公司の職員で、出版行為の形式上の責任者であり、実際の編輯には何ら関与していない。英魂録第一巻に掲載した人物は、編集者自身の旧知の故人が多かったので、資料収集の苦労は少なかった。

私たちは、知合いだけで終わりにせず、できるだけ多数の対象帰僑を発掘し、彼らの人生を文章にして後世に残す方針であったので、編集者と面識がない対象者が次第に多くなった。そのため調査や執筆依頼の作業が増大した。調査や資料収集、執筆依頼のために、編集者が潮州や海南島に出張することもあった。タイ華僑出身で南洋商業銀行の荘（庄）世平[276]［1911-2007］が資金を提供したので、調査費、編集費、あるいは出版費の心配はなかった。おかげで、十分な調査、資料収集が可能になり、全6巻[277]の大シリーズを刊行することができた。

なお、泰国帰僑英魂録では、「中国共産党」、「暹羅共産党」あるいは「タイ共産党」とい

---

275 共産党員が、しばしば自伝を書く必要に直面したことは、当然、記憶を反復する機会となり、忘却を防止することに貢献したと思われる。『泰国帰僑英魂録』（全6巻）には、多数の共産党員が登場するが、彼らの詳しい経歴が作成できたのは、党員の「自伝」作成制度の御陰もあるであろう。また、欧陽氏の回想が理路整然としている理由は、同氏の頭脳の明晰さ、および記憶力の良さという天性の資質に加えて、共産党員として入党及びその後のキャンペーンの度に「自伝」を書き審査を受ける必要があったことも寄与しているだろう。

276 荘世平は1930年代半ば、バンコクの名門華僑私立学校新民学校教師。彼の経歴は、当時の新聞に次のように紹介されている。「原籍広東省普寧県、北平中国大学畢業、歴任本京新民学校教職4年、現在新民中学校副校長」（『華僑日報』1937.2.27）。彼は共産党員の知識人としてバンコクの華字紙に論文を掲載した。例えば、荘世平「歴史哲学与唯物史観」（新民学校新語文学研究社『新語』第21期、『民国日報』1935.2.4所載）など。太平洋戦争中の1943年時には南委（中共南方工作委員会）特派員としてラオスに滞在。戦後の一時期安達公司を興しバンコク支店長。

277 『泰国帰僑英魂録』は、第一巻（417頁、掲載人物数、53人）が1989年、第二巻（415頁、同87人）1991年、第三巻（465頁、同100人）1993年、第四巻（517頁、同100人）1997年、第五巻（640頁、同102人）2003年が刊行された。欧陽氏とのインタビュー後の2007年1月に、第六巻（544頁、同84人）が刊行され、同シリーズは全六巻（頁数総計2998頁、掲載人物総数526人）で終了した。

う名称を明示することを避け、その代わりに「華僑進歩組織」という名称を使用した。その理由は、中共組織がタイ国内で活動したことを明らかにすると、タイ国の主権を侵害したと批判されることを恐れたからである。

タイ国から中国に帰り物故した共産党諸人士の伝記を編纂した泰国帰僑英魂録の外に、タイに残りタイで亡くなった中共人士の伝記を編集する計画も存在した。これについて原稿を書くことができるタイ在住者は存在しているのだが、彼らは積極的ではなかった。そこで、バンコクと北京の間を往復していた呉佟が、私に一年間タイに来て、編集を手伝うように頼んだこともあった。しかし、実現には至らなかった。もし、タイで出版することができたなら、タイでは中央対外連絡部の検閲は受ける必要はないはずなので自由に書くことができたであろう。

欧陽恵氏の著作目録（在タイ時）

1935年

區恵雄「回憶」(『中華民報』1935.10.25の副刊「椰風」に掲載)(「廿四. 十. 十七脱稿於湄江河畔」と末記あり)

區恵雄「民族的歌声、『合電影片名而成的一篇小説』」(『中華民報』1935.10.28, 10.29の副刊「椰風」に2回に分け掲載)(末尾に1935.10.17記とあり)

區恵雄「不幸的他們」(『中華民報』1935.11.20, 22, 23の副刊「椰風」に3回に分け掲載)(「1935.11.12恵雄脱稿於曼哈」と末記あり)

區恵雄「愛底遺恨」(『中華民報』1935.11.29, 30の副刊「椰風」に2回に分け掲載)(「24.10.30日脱稿於湄江」と末記あり)

1936年

恵雄「企望着『天明』的来臨」(「曼谷日報」(『民国日報』) 1936.5.30の生力読書社編『生力、Shengli』第1期に掲載(この当時、『民国日報』には4面から成る「曼谷日報」が付いている。曼谷日報の1、4面は広告。2面が「新時代」、3面が「大衆工」。「生力」は「新時代」面に掲載(「生力」が掲載された場合は「新時代」は休み)

阿白三、洪因、恵雄、念念の4名による集体創作「生死線上」(「曼谷日報」(『民国日報』) 1936.8.31の生力読書社編『生力、Shengli』第7期に掲載)

恵雄「當」(『華僑日報』1936.12.29副刊の「華僑文壇」)

1937年

(1937年の『華僑日報』をすべて見たが欧陽恵執筆の記事はなし。『華僑日報』に左翼の記事が掲載されるのは1937年12月に華僑文壇の編者が邱心嬰に代ってから)

我們読書社『我們的話』

第一期(『中華民報』1936.11.11)

第二期(『中華民報』1937.1.27)慕蘭(欧陽恵)、牧軍、如今、瑞珠、白涛……

慕蘭「悲壮的紀念日」

1938年

恵雄「救亡談座、一個建議」(『華星日報』(華僑日報) 1938.1.24の「華僑文壇」に掲載)

恵雄「募衣運動(二)」(『華星日報』(華僑日報) 1938.2.4の「同路」(我們社・今日社合編第7期)に掲載)

恵雄「免費生是不准一科不及格的」(『中華民報』1938.2.9の学習社「磨錬」に掲載)

慕蘭「醒獅」(『中華民報』1938.2.21, 2.22 の「椰風」に掲載)

慕蘭「慰問」(『華星日報』(華僑日報)1938.2.26 の「華僑文壇」第 559 期に掲載)(1938 年 2 月 12 日に逮捕された華校教師への慰問)

恵雄「我要国貨!」(『華星日報』(華僑日報)1938.3.2 の「同路」(我們社・今日社合編　第 10 期)に掲載)

恵雄「僑胞的光栄」(『中華民報』1938.3.10 の学習社「磨錬」第 2 期に掲載)

慕蘭「探親」(『華星日報』(華僑日報)1938.3.14 の「華僑文壇」第 653 期に掲載)

恵雄「為什麼不幹救亡工作?」(『華星日報』(華僑日報)1938.3.16 の「同路」(我們社・今日社合編　第 12 期)に掲載)

恵雄「即知即傳人」(『華星日報』(華僑日報)1938.3.22 の「華僑文壇」第 654 期に掲載)

慕蘭「怎様存起銭来?」(『華星日報』(華僑日報)1938.3.28 の「華僑文壇」第 656 期に掲載)

慕蘭「三月二十九日」(『華星日報』(華僑日報)1938.4.5 の「華僑文壇」に掲載)

慕蘭「搬車」(『華星日報』(華僑日報)1938.4.16 の「同路」(我們社・今日社合編)に掲載)

慕蘭「学生的統一戦線」、『暹羅華僑日報星期刊』第 1 巻第 5 期(1938 年 5 月 1 日号)p. 25.

慕蘭「聖潔的友情」(『華星日報』(華僑日報)1938.5.16 の「華僑文壇」に掲載)

慕蘭「投『弾』帰来」(『華星日報』(華僑日報)1938.5.21 の「文芸戦線」第 2 期に掲載)

慕蘭「紀念高爾基」(『華星日報』(華僑日報)1938.6.18 の「文芸戦線」第 6 期に掲載)

慕蘭「国貨内衣」(『華星日報』(華僑日報)1938.7.20 の「同路」に掲載)

欧陽葭生「紀念双七節後的感想」(廿七、七、十於培校)、『暹羅華僑日報星期刊』第 1 巻第 18 期(1938 年 7 月 31 日号)p.24.

慕蘭「中国之友」(『華星日報』(華僑日報)1938.9.10 の「文芸戦線」第 14 期に掲載)

慕蘭「小弟何伯敬語、写慰労信的実践報告」(『華星日報』(華僑日報)1938.9.24 の「文芸戦線」第 16 期に掲載)

慕蘭「廣州失陥了」(『華星日報』(華僑日報)1938.10.27 の「華僑文壇」に掲載)

「華僑文壇」の第二次筆談会に慕蘭も参加(『華僑日報』1938.11.10)

慕蘭「悼李南卓先生」(『華星日報』(華僑日報)1938.12.20 の「華僑文壇」に掲載)

1939 年

慕蘭「本刊第三次筆談会感想与希望献給新年底文芸工作者」(慕蘭も意見を求められた多数の中の一人)(『華聲報』(華僑日報)1939.1.6 の「華僑文壇」に掲載)

(1939 年 1 月 7 日の『華僑日報』は、4 面の『華僑日報』No. 4486(総編輯督印人、張亦錚)、4 面の『華星日報』No.2626、4 面の『華聲日報』No. 2626(総編輯、邱心嬰)の 3 紙構成である)

慕蘭「芒果花開的時節」(『華聲日報』(華僑日報)1939.1.13 の「華僑文壇」に掲載)

慕蘭「中中游芸会的演出」(『華聲日報』(華僑日報)1939.2.27 の「華僑文壇」に掲載)

慕蘭・邱健・蕭沙「百的暹羅華僑文藝之産品」(「華僑文壇特載」、『華聲日報』(華僑日報) 1939.3.15–3.23 に連載)

慕蘭・邱健・蕭沙「二月的暹羅華僑文藝産品」(『華聲日報』(華僑日報) 1939.4.24–4.27 に連載)(この連載中の 1939.4.27 号に慕蘭「二月的戯劇」がある)

(『華聲日報』(華僑日報) 1939.5.27–5.28 に「三月的暹羅華僑文藝産品」が掲載されているが、筆者は邱健・蕭沙の二人のみ。既に慕蘭の名前はない。この時点では欧陽恵は既にバンコクを出発したことを示す)

1940 年

慕蘭(本報重慶特訊)「春禮労軍運動在重慶」(『中原報』1940.2.21–2.22)(1940 年 2 月 10 日の大会の様子を重慶から報告)

羅蘭(ママ)(本報重慶特訊)「陳波兜在巴蜀学校公開演講『我従華北帰来』」(『中原報』1940.3.18)(筆者名が「羅蘭」となっているが、誤植か故意に変えたものと思われる)

引用文献目録

新聞・雑誌

タイ官報、Bangkok Times

華僑日報、華暹新報、僑声報、真話報、中華民報、民国日報、励青日報

暹羅華僑日報星期刊、暹僑救亡与中暹合作半月刊

論文・書籍

延安中央党校整風運動編写組編『延安中央党校的整風学習』第一集、中共中央党校出版社、北京、1988年

王俊彦『廖承志伝』、人民出版社、北京、2006年

黄文歓『滄海一粟』、解放軍出版社、北京、1987年

艾克恩　『延安文芸回憶録』、北京　中国社会科学出版社　1992年

蟻錦中『蟻光炎伝』、世界華人企業家伝記編委会（北京）、香港、1994年

呉敬業的一生編写組『呉敬業的一生』、中共広東省党史研究委員会・中国華僑歴史学会、北京、1990年

高華『紅太陽是怎様昇起的』、中文大学出版社、香港、2000年

『胡喬木回憶毛沢東』、人民出版社、北京、1994年

暹羅啓明学校紀念文集編輯組編『永恒的懐念：暹羅啓明学校紀念文集1935-1938』、広州、1990年

沙健孫主編『中国共産党通史、第四巻』、湖南教育出版社、1999年

謝光『泰国華僑的政治活動（1906-1939）』（中タイ両文）、チュラーロンコーン大学中国研究センター、バンコク、2003年

沈酔『軍統内幕』、文史資料出版社、北京、1984年2月

沈酔『わが三十年：もと蒋介石集団戦犯の手記』、外文出版社、北京、1987年

《崇實学校》紀念文集編委会『崇實学校』、人民交通出版社、北京、1995年

全国政協文史資料研究委員会華僑組編『崢嶸歳月：華僑青年回国参加抗戦紀実』、中国文史出版社、北京、1988年

孫淑彦・王雲昌編『潮汕人物辞典』、中山大学出版社、広州、1991年

泰国帰僑聯誼会《英魂録》編委会編『泰国帰僑英魂録、第一巻』、中国華僑出版公司、北京、1989年、417 p.

泰国帰僑聯誼会《英魂録》編委会編『泰国帰僑英魂録、第二巻』、中国華僑出版公司、北京、1991年、415 p.

泰国帰僑聯誼会《英魂録》編委会編『泰国帰僑英魂録、第三巻』、中国華僑出版社、北京、

1993年、465 p.
泰国帰僑聯誼会《英魂録》編委会編『泰国帰僑英魂録、第四巻』、中国華僑出版社、北京、1997年、517 p.
泰国帰僑聯誼会《英魂録》編委会編『泰国帰僑英魂録、第五巻』、中国華僑出版社、北京、2003年、640 p.
泰国帰僑聯誼会《英魂録》編委会編『泰国帰僑英魂録、第四巻』、中国華僑出版社、北京、2007年、544 p.
『泰国中華中学校友会特刊：1993年』、バンコク、1993年
『泰国中華中学校友会復会十二週年紀念特刊（1986-1998）』
大連市史志弁公室編『蘇聯紅軍在旅大』、中共大連党史叢書（十）、1995年
中共党史人物研究会編『中共党史人物伝、第一巻』、陝西人民出版社、西安、1980年5月
『中央陸軍軍官学校第17期26総隊　華僑生畢業同学録』
陳嘉庚『南僑回憶録』、草原出版社、香港、1979年
鄭成「国共内戦期における中共とソ連の相互接近と協力―大連の『実話報』を中心に―」、『アジア太平洋討究』、第8号、2005年
鄭成博士論文「国共内戦期の地方レベルにおける中共・ソ連協力関係：旅順・大連地区を中心に」、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士学位論文 、2009年
鄭成『国共内戦期の中共・ソ連関係―旅順・大連地区を中心に』、御茶の水書房、2012年
『鉄血雄風：泰国華僑抗日実録』、泰国黄埔校友会、バンコク、1991年
田軍（蕭軍）『奴隷叢書之二、八月的鄉村』、出版社、奴隷社。発行者、容光書局、上海、1935年8月初版
『南離子邱及』、中国世界語出版社、北京、1993年
日本郵船株式会社『日本郵船株式会社百年史』、東京、1988年
文思編『回国抗戦　奔赴延安』、中国文史出版社、北京、2005年
村嶋英治「1970年代のタイ国における学生運動と共産主義」、『アジア経済』23巻12号、1982年12月号
村嶋英治「タイ華僑の政治活動―5・30運動から日中戦争まで」、原不二夫編『東南アジア華僑と中国』、アジア経済出版会、1993年
村嶋英治『ピブーン、独立タイ王国の立憲革命』、岩波書店、1996年
村嶋英治「タイにおける華僑・華人問題」、『アジア太平洋討究』第4号、2002年
村嶋英治『第二次世界大戦期間的日泰同盟及泰国華僑』、早稲田大学COE-CAS Working Paper, No. 12, 2005
村嶋英治「カンボジア共産党ナンバー・ツー、ヌオン・チア（Nuon Chea）のバンコク時代（1942年-1950年）」、『アジア太平洋討究』第11号、2008年
村嶋英治「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930-1936）：シャム共産党内における

ベトナム人幹部の役割を中心として」、『アジア太平洋討究』第13号、2009年
村嶋英治「タイ華僑社会における中国ナショナリズムの起源」、『岩波講座、東アジア近現代通史、第二巻』、岩波書店、2010年
李啓新『湄江留言』、北京、1990年
劉戦英・周建主編『中国僑聯主席名典』、中国人事出版社、北京、1996年
冷燕虎・欧陽恵著『赤子熱血―環球華僑抗日』(中国抗日戦争紀実叢書)、解放軍文芸出版社、北京、1995年
Chao Phongphichit, *Luk Chin Rak Chat*(『愛国僑生』)(タイ語)、Matichon, Bangkok, 2010
Damri Ruangsutham, *Khabuankan RaengganThai nai Kantotan KongthapYipun nai Songkhramlok khrangthi 2*(『第二次大戦期に日本軍に抵抗したタイの労働運動』)(タイ語)、Sukhaphapchai, Bangkok, 2001
Eiji Murashima, *Kanmuang Chin Sayam*(『タイ華僑の政治運動1924-1941年』)(タイ語)、Sunchin suksa, Chulalongkorn University(チュラーロンコーン大学アジア研究所中国研究センター研究双書第一号)、1996
Eiji Murashima, "Opposing French Colonialism: Thailand and the Independence Movements in Indochina in the Early 1940s" *South East Asia Research*, Vol. 13 No. 3, Nov. 2005
Eiji Murashima, *Khamnoet Phak Khommiunit Sayam 1930-1936*(『暹羅共産党の誕生:1930-1936』)(タイ語)、Matichon, Bangkok, 2012

事項索引

あ

アンジー（洪字、紅字）77, 82, 85, 86

愛国七君子裁判　28, 53

安塞の華僑紡績工場　117

安達公司　107, 211

インドシナ共産党　16

インドシナ共産党海外指導部　17

異化　15

ウィエンチャン寮都公学　105

右派分子　43, 176, 181, 182, 184–191, 194–196, 198

エスペラント（世界語）　71, 74, 75, 92

英雄労働者　177

延安における受入審査　116

延安の華僑工作　142

延安の男女人口比率　133, 134

延安華僑救国聯合会（僑聯）　152, 206

延安整風運動　122, 125, 127–131, 134, 135, 138, 141–144, 147–149, 191, 194, 201

延安大学　21, 118, 138, 139, 149, 158, 160

冤罪　189, 198

演説街　26

オンドル焚き　194, 195

秧歌隊　129

黄魂学校　17, 30, 32, 47, 56, 70

落ち穂拾い　197

か

下放　42, 182, 188, 192, 195–197, 200

火礱（精米所）　11

河北省　150, 155, 182, 198

華僑進歩組織　212

華僑隊　145, 150–154, 190

華僑中学　71, 74, 82

華僑日報　50
華僑部隊の東北進軍　155, 156
華僑文壇　36–40, 47, 48, 55
華僑歴史学会　206
華校教員考試暹文　80
華暹輸船公司　7
華南縦隊　151
華北大学　166
華北自治運動　28
過蕃（過番）　15
我們読書社　34, 39, 44, 49, 52, 54, 101
回国服務　78, 81, 82, 88, 103, 104, 193
解放区文学　132
解放日報　121, 132, 137
革命史料研究室（民政部）　199, 200, 202, 204
革命烈士　200, 201
隔離審査　136
学抗　81, 82, 193
学而優則仕　148
学生聯合会（学聯、赤色学聯）　24, 31, 43, 69, 82
壁新聞　133, 136, 137
皖南事件　32, 113
幹部課　138
幹部審査　136–138, 142–144
漢奸　68, 78, 86, 170, 173
韓国　193
「希望者 ESPERANTO」　75, 98
帰僑　8
飢饉　183, 189
規勧小組　139
基層組織　149, 150
機会主義分子　181,
偽国　42, 68
吉林省　188, 191, 193, 196, 198
吉林省楡樹県　188, 189, 191, 192, 194

客属工会　89
九・十八事変　23, 68
救国国債　81, 82
救国時報　60
兄弟党　123, 203
共産主義青年団（共青団）26–28, 31, 63, 69, 72, 81, 83, 89, 90, 97, 125, 126, 203
共匪　42, 78
協益学校　17, 70, 80, 193
教会学校　13, 14
僑社　37
僑生招待所（重慶）115
僑党　33, 60, 90, 202, 203, 206
僑務委員会　111, 113
金瓶梅　121
群衆　123
啓明学校　26, 34, 35, 44, 45, 47, 49, 50, 53, 55, 63, 69, 70–77, 79, 81, 82, 89, 92, 107, 123, 193
啓蒙学校　79
献衆新文字研究社　49
コミンテルン　22, 92
コミンテルン第7回大会（1935年7–8月）28, 60, 78
胡耀邦講話　198
個人档案　188
五金公司　192, 193
工余足球隊　63, 64
工聯読書社　66
孔敬（コーンケーン）華僑学校　58
孔子誕生記念日　23, 35
孔子批判　23, 35
広肇公学（Kwong Siew School）　9, 20–24, 27, 30, 35, 43, 70, 71, 92, 206, 207
広肇足球隊　64
光華堂　45–47, 73
抗大　中国人民抗日軍政大学を見よ
抗日救国聯合総会（抗聯総会）94, 96, 101
抗敵救国後援会　暹羅華僑抗敵救国後援会を見よ
抗聯　暹羅華僑各界抗日救国聯合会を見よ

抗聯執行委員（許一新、呉琳曼、許侠、林鳴、阿桂）　81
抗聯主席（許一新）　81
抗聯総会　84, 96, 97, 99
紅衛兵　42, 194, 196
紅旗党　143
紅楼夢　121, 122
洪門十八幇会　82
黄埔軍官学校　24, 32, 92
国際縦隊　68
国際派　127, 128
国統区文学　132
国防戯劇　40, 45, 47, 57
国防文学　40, 46
国民党政府　116, 140, 141, 155, 157, 158–160, 163, 165, 168, 170–174
国民党政府の経済封鎖　116, 129
今日之群　52

さ

サームロー　11
再入党　122–125, 136
作家協会　182
三点会　82, 85
三民主義　23
三民主義青年団（三青団）95, 96, 97
参加革命工作時間　10, 27, 90, 203
只専不紅　180
司局級待遇　10
死書　32
私派　85
私立学校法　30
思想改造　188
思想自伝　210
思想反省文　183, 186, 187
歯輪読書社　36, 83
自己批判書　135

自伝制度　210, 211
地・富・反・悪　197
識字教育（対労働者）　71, 72
七七事変（芦溝橋事件）82
七層大厦（チェット・チャン）　8
失地回復　91
実話報　21, 158–166, 171, 175, 178, 198
社会科学院　138, 147–149
社会情報部　138, 139, 148, 149
暹羅華僑各界抗日救国聯合会（抗聯）　34, 58, 79, 81, 82, 85, 88, 89, 94, 96, 97, 107
暹羅華僑教師抗日総会（教師救国会、華抗）　97
暹羅華僑工人抗日救国聯合会（工抗）　81, 82, 89
暹羅華僑工人抗日救国聯合会（工抗）第五分会　64, 66, 82, 84
暹羅華僑抗敵救国後援会　95–97
暹羅華僑中華民族解放先鋒隊（民先）　92, 97, 98, 110
暹羅華僑熱血青年抗日救国会（熱血青年）　85, 86, 97
暹羅華僑文化界抗日救国聯合会（文抗）　52, 81, 82
暹羅華僑文芸作者協会（作協）　37, 48
暹羅各界華僑青年抗日救国聯合総会（青抗）　60, 85, 97, 98
暹羅共産党　16, 17, 21, 24, 26, 28, 33, 37, 39, 49, 66, 76, 79, 80, 83, 89, 90–94, 103, 113, 114, 122, 123, 125, 144, 202, 203, 211
暹羅共産党バンコク市委員会（カナ・カマカーン・ナコーン）　45, 56, 67, 91, 101
暹羅共産党中央委員会　146
暹羅共産党中央ウィエンチャン移転　103, 106
暹羅中華商務総会　13, 29, 37
暹羅中華総商会　16, 18, 29, 46, 56, 104
暹羅網咯（バンコク）滅火公会　12
暹羅反帝大同盟（反帝大同盟）　24, 28, 31–33, 56, 81, 89, 193
上海美専　58, 108
樹人中学（樹人学校）　49, 50, 52, 57
樹人中学師範班　32, 35, 44, 56, 58, 59, 61, 69, 70–73, 83, 89, 193
秋田劇社　44
集団農場　178
重慶学校　46, 77
出版法　61

鋤奸団　77, 82, 84, 85, 86, 88, 96, 97
鋤奸団委員会　97
小広播　133, 134
「小二黒結婚」　130
「松花江上」　109
商抗　81, 83, 84
昇進ポスト争奪　200
蒋介石五〇歳祝募金　65, 66
墻報　133
進徳学校　21, 30, 114
新華社　159, 182
新華社承徳支社　155, 156, 159, 198
新華書局　32, 45, 50, 59, 60, 61
新城門　17, 193
新中華学校　26, 56, 77, 89, 107
新潮学校　34, 38
新唐　15
新民学校　24, 30, 33, 43, 50, 71, 107, 211
新四軍　28, 32, 76, 78, 81, 83, 84, 91, 99, 113, 127, 151
真話報　98, 144
人味読書社　49
人民公社　189, 195, 197
人民日報　60, 185, 200
人力車夫　11
スパイ（失足者）　特務も見よ　144, 147, 148, 149
スペイン内戦義勇兵　66, 67, 138
綏東戦事　53, 65, 68
崇實学校　21, 22, 24, 28, 31, 36, 43–46, 49, 50, 53, 57, 69, 70, 71, 75, 77, 79, 81
セーンネオン（Saeng Neon）　61, 62, 63
生力読書社　38, 44, 45, 47, 49, 54
西安事件　68, 69, 78, 81
西南政府（広東）　28
西南聯合大学　110
西風劇社　36, 45, 47, 58
青年学習社　98

醒華学校　34
整風運動　延安整風運動を見よ
赤色学聯　学生聯合会を見よ
赤色総工会　43
陝北公学　31, 64, 117, 118, 123, 125, 135, 136, 138, 148, 151, 190
全民日報（サイゴン）　35, 89, 114
全民報（バンコク）　50, 98
ソ連軍の武器援助　173, 174
ソ連軍の婦女暴行　168, 169
ソ連軍東北進駐　168, 169, 170
ソ聯共党史　109, 130
組織生活　115, 125, 162
組織部　188
双十節　30
走資派　83
挿紅旗　25, 26, 31
「搶占北方、放棄南方」　159

た

タイ共産党　16, 22, 24, 60, 93, 188, 206, 211
タイ共産党創立大会　92, 203
タイ仏印紛争　91
タークシン王　13, 14
ダムロン親王　12
「打回老家去」　67
大実権派　193
大衆生活（週刊誌）　28, 29, 31, 59
大連　158, 159, 163, 164, 172
大連市長　169, 170, 171, 173
泰越革命聯席会議　16
『泰共産党史―初稿』　69, 80, 208
泰国帰僑英魂録編集　66, 80, 206–212
泰国帰僑聯誼会　206–211
第三種人　53
第三派　37, 38, 39, 55

中央海外工作委員会（海委）　147, 151, 152, 153
中央宣伝部　180, 182, 198
中央組織部　116, 119, 122, 157, 189, 199–203
中央対外連絡部　191, 206, 209, 212
中央党学校（在延安）　31, 64, 118, 133, 151, 152, 153
中華贈医所　12
中華中学（中中）　29, 30, 43, 50, 56, 71, 75, 76, 92
中華中学スト　31, 32, 39, 70
中華中学学生自治会　33
「中華民族解放先鋒隊告青年僑胞書」　97
中華民報　50
中華民報副刊椰風　34
『中共党史人物伝』　201
中原報　114
中国共産党　122, 123, 163, 167–169, 172, 174, 188, 199, 200, 202, 203, 210, 211
中国共産党一般幹部　158, 170, 173, 199
中国共産党吉林省委員会秘書長　190, 194
中国共産党昆明支部　111, 112
中国共産党暹羅総支部　19, 80, 203
中国共産党大連市委員会　158, 160
中国共産党駐越南連絡員　36
中国共産党東北局（ハルビン）　31, 125, 157, 158, 175
中国共産党旅暹工委（1941–42 年）　22, 91, 93
中国共産党旅大地委　165, 166, 171, 172
中国共産党遼寧省委員会宣伝部長　190, 194
中国紅軍　169
中国国民党暹羅総支部　17, 30, 38
中国国民党暹羅特別党部（反蕭佛成派）　85
中国女子大学　123
中国人民抗日軍政大学（抗大）　22, 31, 118, 122, 123, 134, 144, 151, 193
中国民主同盟（民盟）暹羅支部　42, 65
中正書局（プノンペン）　35, 89
中ソ対立　177, 179
中ソ友好協会　21, 167, 179, 182, 188, 198
中ソ友好協会訪ソ代表団　176, 177, 178

中ソ友好協会総会　176
中蘇（ソ）友好報　175, 176, 179, 180, 190
長白山　193
朝鮮戦争　19, 166
朝鮮族　191, 193
潮州会館　42
潮州語ラテン化新文字　107
潮州女校　34
徴税請負人　12
『通俗経済学講話』　59
『デカブリストの妻』　185
テキサス映画館　92
デッキ・パッセンジャー（甲板客、三等客）　7
摘帽右派　194
鉄血青年抗日会　97
天安門事件　207, 210
天華医院　8, 12
天外天　60
トロツキスト　201
図們市（吉林省）　157
奴隷化教育　23, 129
奴隷思想　128
東江縦隊　91, 151
東北局　中国共産党東北局を見よ
東北三省　145, 155
東北地方接収　156, 157
東北中ソ友好報　176
東北中ソ友好協会　175, 176
東北民主連軍　171
「桃李劫」　59, 60
党籍問題　122–124, 202–204
党歴審査　202, 204
洞窟（窓洞）　118, 121, 132, 135, 139
特務（スパイ）　116, 125, 141, 142, 143
読書社　43–45, 110, 113

読書生活　31

な

南哨読書社　32, 38, 44, 49, 51, 52, 55
南風戯劇社　47
南方局（香港）　157
南洋各属華僑籌賑祖国難民代表大会（南僑総会）　35, 88, 89
南洋共産党暹羅特別委員会　78, 114, 203
南洋共産党臨時工委　83, 203
日貨ボイコット　78, 82
ヌアイ・タイ（タイ人組織）　92, 93
熱血青年　暹羅華僑熱血青年抗日救国会を見よ
野百合花　132

は

パスポート無し入国　9
排華政策　206
培英学校　30
培民学校　17, 70, 80, 112, 193
白毛女　130, 131
柏各庄農場（河北省唐山）　182, 184–186
八・一宣言　60
八月的郷村　44–46
八哥　84
八路軍　78, 81, 84, 87, 112, 113, 115, 157, 171, 173
八路軍重慶辦事処　68, 111, 113
八路軍駐香港辦事処　58, 81, 102
反右派運動（闘争）　42, 138, 180, 181, 182, 190, 191
反革命　194　195
反帝大同盟　暹羅反帝大同盟を見よ
反党活動　133, 138, 180, 183, 188
反党分子　182
反日大同盟　65
ビラ撒き（共産党の）　25, 26, 31
批判大会　182, 188, 194, 196

被拘蔵客（被逮捕密航者）救援　71
罷市罷工　16
プーケット　12
フルシチョフ修正主義　179-181
プロレタリア芸術聯盟　36, 39, 42, 43, 81
婦抗（婦女抗日救国会）　81, 83, 110
婦女協会　36
婦女慈善救国会　97, 110
武力闘争　146, 147
「風雲児女」59
副刊　34, 37, 74
文化界救国統一戦線　53
文化界聯合会　53
文化大革命（文革）　56, 131, 136, 138, 144, 185, 191, 193, 194, 196, 198
文化聯友社　52, 65, 66, 81, 82
平壌　157, 158
平壌南浦　158
米較（精米所）　11
越南青年革命同志会ウドン省委　203
越南華僑政治保衛局　36
越南南圻華僑救国総会（救総）　35
募衣運動　79, 82
募金統制法　65
「保衛馬徳里」　66, 67
彷徨学社　31, 36, 38, 39, 49, 52, 83
報告文学　204, 205

ま

マッカサン国鉄工場　63, 90, 92
マラヤ共産党　115
馬列主義老太太　199
曼谷華僑籌賑祖国難民委員会　89
民国日報　50, 95
民衆日報　50
民生マッチ工場（民生火柴廠）　63

民政部（中国民政部）　10, 198–202
民先　暹羅華僑中華民族解放先鋒隊を見よ
民先章程　98
民族革命戦争的大衆文学　40
民族革命大学　113
名誉回復　198, 206
美南（メナム）日報　13
『湄江留言』　209, 210
モスクワ大学　178
「毛主席万歳!」　194

や

夜哨読書社　53
椰風　34, 35, 38, 40, 44, 53, 75, 78
四人組　193, 199
四人組裁判　199

ら

ラッタニヨム　30
拉丁（ラテン）化新文字運動　36, 46–48, 61, 72, 74, 75
螺旋読書社編「泡沫」　53, 55, 83, 108
雷雨　131
李七嫂　44, 45, 46
流火読書社編「Liuxuo」　53
旅順軍港　172
旅大ソ連軍　158, 159, 160, 161, 163, 172
旅大報　165
両条心、半条心　一条心　127, 128
寮都公学　105, 106
励志社　65, 94
歴史自伝　211
歴史結論　198
ロシア語学院　149
ロシア語版中ソ友好報　179
路条　139, 140

魯迅芸術文学院（魯芸）　22, 31, 118–122, 129–131, 138, 151, 152, 204
魯迅追悼大会　37, 44, 48, 49, 51, 53, 89, 101
盧溝橋事件　79, 148
芦溝橋戯院　99
老唐　15
労働改造　43, 181–188

人名索引

あ

阿桂　27, 61, 80, 81, 89–92, 144, 202

秋田雨雀 [1883–1962]　44

毓賢　84

ウィット・ウドムプラサート　80, 92

ウィラット・アンカターウォン [1921–1997]　92, 93, 98

ウィロート・アムパイ（黄君玉）　30, 33, 71, 76, 91

ウドム・シースワン [1920–1993]（高漢）　93, 104, 152

袁挺丙　68

閻錫山 [1883–1960]　113

王羽　150

王甘英　150

王起華　179

王鏡秋 [?–1945]　38

王康　123

王光震　133, 134

王実味 [1906–1947]　130, 132, 137, 138, 201

王震 [1908–1993]　153, 154

王大才（インドネシア共産党員）　152

王明 [1904–1974]　60, 127, 129, 130

王耀華 [1918–2006]　32, 114, 144

区（おう）恵雄、区炳発 [1918–]　11, 44, 51, 52, 104, 113

欧陽欽 [1900–1978]　163

翁寒光（民国日報）　38, 49, 50

翁向東 [1914–1986]　102, 105, 109

黄栄灿　110, 111

黄炎培 [1878–1965]　117

黄覚生 [1913–1969]　36, 80, 83, 100, 108, 123–125, 135, 136, 138, 142–145, 152, 156, 179, 189–194

黄声　107

黄正光（ベトナム華僑）　68, 138, 153

黄楚襄　49

黄病佛 [1902–1961]　34–39, 47–50, 52, 55, 82
黄文歓（Hoang Van Hoan）[1905–1991]　70, 71
黄耀寰 [1903–1981]　24, 26, 31, 42, 48, 55, 57, 59, 67, 69, 73, 80, 81, 97, 98, 100, 101, 105, 107, 114, 143, 145, 146, 193, 202
黄流 [?–1994]　44, 45, 46
岡野進（野坂参三）[1892–1993]　136, 152
温済澤 [1914–1999]　201
温伯明　56, 57, 61, 73

か

カムペーンペット親王 [1882–1936]　63
戈宝権 [1913–2000]　177–180
何英 [1914–1993]　152–154
何幹之 [1906–1969]　148, 149
何其芳 [1912–1977]　119, 122, 131, 132
何樹燊　84
何孟基　48, 55, 69, 89
夏夢雲　21, 207
夏陽　158, 159, 162
家香　83
海豊　152
艾思奇 [1910–1966]　48
艾青 [1910–1996]　122, 132
郭枯 [1906–1980]　53
郭培華　102
韓英朴　152
韓光 [1912–2008]　163, 165, 172
魏天育　38
蟻錦中（Amphon Iamsuree）　18
蟻光炎 [1879–1939]　16, 18, 46, 49, 56, 67, 73, 74, 85, 86, 94, 104, 139
蟻美厚（Mongkhol Nawikaphol）[1909–1994]　18, 19
邱逸群 [1917–1993]　24, 31–33, 48, 56
邱亦山 [1907–1997] 17, 35, 42, 52
邱及 [1910–1984]　22, 42, 58, 75, 91, 92, 98, 203, 208
邱心嬰 [1909–1974]　35–42, 49, 51, 52, 82, 101

許煜　35, 74, 79
許一新 [?–1942]　35, 36, 44–46, 63, 65, 66, 77, 79, 81, 82, 143, 203
許亦曽 [1904–1951]　92
許葛汀　32
許侠 [1911–1998]　34, 35, 37, 39, 41, 42, 46, 48–53, 55, 56, 59, 67, 71, 73, 75, 77, 79–82, 84–86, 88, 89, 101, 142, 143
許子奇 [1907–1980]　107, 108
許尚先　49
許方彬　98
邢錦華　82
倪捷敬　31
厳文井 [1915–2005]　122
ゴーゴリ　121
ゴーリキー　32, 51, 59
胡偉徳　180
胡華 [1921–1987]　201, 202
胡奇　185
胡耀邦 [1915–1989]　42, 192, 198, 201, 202
伍治之 [1905–2000]　17, 19, 21, 26, 80, 81, 93, 208, 209
伍退思　79
呉玉章 [1878–1966]　60
呉景盛　88
呉正国（Ngo Chinh Quoc）　93
呉田夫 [1919–?]（ベトナム華僑）　109, 112, 190, 191
呉佟　206, 210, 212
呉碧岩 [1883?–1962?]　94, 95
呉琳曼[1911–1948]　35–37, 39, 41, 42, 44, 45, 47–53, 55–63, 65, 66, 69, 71, 73, 77, 79–82, 89, 101, 103, 114, 142, 143, 193, 204
孔雀　57
江暁初　85
洪奇英　98
高漢　ウドム・シースワンを見よ
高蟒　178, 180
康生 [1898–1975]　133, 138, 152
小林多喜二 [1903–1933]　121

さ

ザハロフ　160, 162, 165, 166, 167
シー・アノータイ　80
ショーロホフ　121
謝徳明　160, 161, 162, 165, 171
謝光 [1926–1999]　93, 206, 209, 210
謝司基（インドネシア華僑）　159
朱自清 [1898–1948]　31
朱叟林 [1900–1974]（プラパン・ウィーラサック）　78, 79, 92, 93
朱田　114, 144
朱徳 [1886–1976]　23, 42, 78, 94, 151, 152
朱南和 [1919–1979]　22, 48, 73, 92, 193
周恩来 [1898–1976]　19, 78, 111, 114, 127, 157
周介文 [1917–1968]　135, 153, 189–193
周明軒（インドネシア華僑）　159
周揚 [1908–1989]　122, 131
周立波 [1908–1979]　119, 120, 121, 122
秋江（シンガポール華僑）　160, 162, 163, 164, 165, 166
如今　49, 52
庄江生 [1918–2003]　24　27, 28, 82, 83, 90, 193, 203, 207
庄国英 [1920–1999]　94, 95, 97, 98, 100–102, 105, 111–113, 136, 153, 190, 191
荘（庄）世平 [1911–2007]　49, 50, 107, 211
荘蝶　49, 53
蒋介石 [1887–1975]　23, 28, 29, 59, 78, 94, 171, 172, 174
蒋経国 [1910–1988]　172
蒋光赤 [1901–1931]　21, 59
蕭英　148
蕭軍 [1907–1988]　44, 45, 122, 132
蕭乾 [1910–1999]　183, 184
蕭佛成 [1864–1939]　28, 38, 70, 74, 94, 95
蕭林（ベトナム華僑）　147, 152, 153
蕭魯　152
鐘育民 [1915–1982]　63, 64, 84, 89–91, 202
鐘若潮 [1911–1944]　89, 91
沈鋭　50

沈酔　204, 205
スターリン [1878–1953]　94, 109, 159, 170, 171, 174, 177, 179
鄒韜奮 [1895–1944] 28, 31, 59, 61, 114
石涛　134
千家駒 [1909–2002]　176, 179
銭之光　113
蘇恵 [1909–1996]　83, 193
蘇青 [1918–1997]　83, 193, 207
蘇蘭 [1922–1997]　35, 58, 73, 75, 83, 102, 103, 110, 111, 115, 117, 124–126, 133, 142, 190
宋慶齢 [1893–1981]　82, 117, 176, 206
宋子文 [1894–1971]　68
曹禺 [1910–1996]　132
曹雪芹　121, 122
曾慶紅 [1939–]　91
曾山 [1899–1972]　91
ソン・ノッパクン [1919–2012]（Song Nophakhun、余松）　24, 33, 76, 92, 203, 208
孫文 [1866–1925]　26, 94

た

ダムリ・ルアンスタム [1923–]（Damri Ruangsutham）　22, 92, 153
戴慶有（陳駁）　32
戴晴　115
譚金洪　30, 31
譚義　193
譚白光　92
譚亮濱 [1917–1988]　64, 65, 66, 84, 143, 152
チャオ・ポンピチット [1924–2012]（劉源泓）　22, 30, 69, 92, 209
チャーチル [1874–1965]　170
遅子祥 [1884–1951] 169, 170, 171, 172,
仲夷　172
張慶川 [1913–1997]　24, 27, 39, 43, 80, 83, 90, 93, 113, 114, 144–147
張見三　7
張志新 [1930–1975]　194
張秋雲　102, 103
張声良 [1919–2005]　83, 193, 207

張伯樹 [1928–1994]　206
趙安博 [1915–1999]　136, 142
趙承隷　84
陳雲 [1905–1995]　128, 156
陳嘉庚 [1874–1961]　35, 89
陳企霞 [1913–1988]　132, 183, 186–188
陳桂華 [1913–1994]　36, 48, 53, 73, 83, 108, 144–146
陳荒煤 [1913–1996]　122
陳子華　198, 199
陳守明 [1904–1945]　29, 46, 56
陳書謀　95, 96
陳昌成　50
陳雪玉　94, 97, 98, 101, 110
陳天賜 [1920–]　71
陳展之　82
陳独秀 [1879–1942]　201
陳伯達 [1905–1989]　147
陳豹（Tran Bao）　57, 76
陳文振（Tran Van Chan）　93
陳文添 [1890–1950]　70, 94, 97
陳炳権（Tran Binh Quyen）　35
陳立旺　32, 39
陳立恵 [1919–1941]（銅馬）　11, 32, 33, 39, 41, 42, 44, 48, 51, 73
陳麗英　32, 76
丁玲 [1904–1986]　119, 122, 132, 183
定操　155
鄭堅　21, 22, 23, 24, 91
鄭智勇 [1851–1935]（二哥豊）　7
鄭鉄馬　49
狄超白 [1910–1977]　59, 61
トルストイ [1828–1910]　121
トーン・チェームシー[1921–] 91, 93, 144
トーンバイ・トーンパオ [1926–2011]　50
杜金泉　44
杜力生　44

唐達成 [1928–1999]　184
唐道民 [1916–1991]　82, 193
桐来　82
鄧小平 [1904–1997]　168

な

ニット・ポンダープペット [1927–2000]（伍勤英）　30

は

巴金 [1904–2005]　59, 119
馬松 [1920–1993]　82, 83, 193
馬夢樵　24
貝子端 [1903–1974]　74, 79
潘子明（Prasit Rakpracha）　32
潘女雄　21, 27, 44, 63, 64, 65
ヒットラー[1889–1945]　141, 152, 179
ピブーン [1897–1964]　30, 91, 141, 206
馮志堅（Phung Chi Kien）　76
馮爾和 [1885–1967]　104
プーシキン [1799–1837]　121
プラマーン・アディレークサーン [1913–2010]　206
フルシチョフ [1894–1971]　177, 179, 180
巫客峯 [1913–1987]　105, 108
傅大慶 [1900–1944]　115
傅作義 [1895–1974]　155
武競天 [1908–1977]（中央組織部秘書長）　31, 122
文潔若 [1927–]　184
ホーチミン [1890–1969]　114
莫莎 [1921–1981]（呉艾文）　41, 98, 104, 108
薄一波 [1908–2007]　113
方宜生　88
方浮生　56
方禄栄　24, 70
彭光涵 [1918–]（マラヤ華僑）　151, 154, 155
彭真 [1902–1997]　150

澎湃 [1896–1929]　34
茅盾 [1896–1981]　21
穆青 [1921–2003]　123

ま

マールット・ブンナーク（Marut Bunnag）[1924–]　76
毛沢東 [1893–1976]　19, 23, 42, 68, 78, 94, 116, 121, 127–132, 143, 147–149, 152, 153, 170, 173, 194, 208–210

や

兪任甫 [1912–1971]（Mani Sukhawirat）　48, 57, 61, 75–77, 91, 144
熊新民　32
余軍英　102
余松、ソン・ノッパクンを見よ
余丁如　123, 124, 125
葉剣英 [1897–1986]　76, 78, 114–117, 119, 127, 152, 157
葉駝（葉章梓）[1916–1945]　135, 153
葉挺 [1896–1946]　78, 113
葉陸萍 [1913–1964]（陸叔、六叔）　65, 84–86, 88, 104
楊白冰　93, 206, 210

ら

羅怡（王魯心、王諾迺）　112, 113
羅大年　102
羅道譲　152
李華 [1912–1988]（楊雪濤）　10, 22, 31, 42, 63, 69, 70, 73, 80–83, 90–92, 94, 95, 99, 100, 103, 105–109, 114, 123, 124, 135, 142–146, 189–193, 202, 203, 208, 209
李啓新（素林）[1910–2007]　22, 80, 83, 91–93, 96, 98, 144, 146, 203, 208–210
李憲　88, 94, 95, 96, 99
李光（林学）　44, 50, 91, 105
李東龍　96
李佩恵　92
李必新　162, 163, 165, 166
李明徳　191, 192
陸定一 [1906–1996]　167

柳亜楼　163
劉玉元　85
劉順元 [1903–1996]　165, 170, 171
劉少奇 [1898–1969]　115, 128, 129, 171, 193, 194
劉漱石 [1899–1942] 16–18, 39–42, 48, 52, 56, 67, 69–71, 80, 81, 83, 91–93, 101, 105, 107, 112–114, 143, 144, 193, 208, 209
劉東鰲　167
劉茂雲 [1916–?]　10, 26, 60, 85, 97–102, 104–106, 111, 112
梁振標　23, 30
梁傳燊 [1921–1939]（牧軍）　11, 21–23, 25, 27, 29–33, 42, 44, 45, 52, 63, 65, 73, 119, 120
廖経天（インドネシア華僑）　180, 200, 204
廖似光　113
廖承志 [1908–1983]　17, 58, 81, 82, 89, 94, 106, 107, 109, 124, 151
林衍　134, 135
林玉興 [1870–1949]　85
林剣鴻 [1917–1944]　24, 33
林謙（スリヤー）　80, 98, 108
林秋野（中華民報編集者）　38, 49, 50, 53
林柔 [1916–1989]　114, 144
林春　82
林仲（フィリピン華僑）　152
林南中 [1910–1967]　31, 32, 33, 48, 51, 52, 71
林壁川　86, 97, 98, 99
林慕豪 [1911–1989]　80, 83, 98, 104, 107, 108, 123, 124, 189, 190, 192
林務農 [1904–1999]　83
林鳴 [1906–1982]　17, 22, 56, 81, 82, 89, 91, 105
林明傑 [1908–1991]（新華書局）　45, 47–50, 52, 60, 145
林朗　179
ルーズベルト [1882–1945]　170
レーニン [1870–1924]　94
レールモントフ [1814–1841]　121
レン・ポーラーンウォン（Leng Poranwong、陳廷芳）　93
霊雨　49
黎孟楨（Le Manh Trinh）　49, 93
連貫 [1906–1991]　31, 58, 81, 91, 151

連吟嘯　34
蓮芬　35, 63, 203
呂雪冰　44, 45
呂咪　75
魯迅 [1881–1936]　21, 32, 82, 109, 119, 121, 164
魯文（関弓、関錫潤）[1919–2001]　21–25, 36, 44, 60, 66, 206–208
盧維基　50
盧静子　53
老丁　78

著者紹介

村嶋英治（Eiji Murashima）

1951年福岡県生。1974年東京大学法学部卒業。アジア経済研究所研究主任、成蹊大学教授等を経て、1997年より早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授。1975年から現在まで通算12年半の在タイ調査歴を有する。

e-mail: murashim@waseda.jp

鄭成（Zheng Cheng）

1971年中国上海生まれ。早稲田大学社会科学部非常勤講師、同大学アジア太平洋研究センター・特別センター員。早稲田大学現代中国研究所主任研究員（准教授）。北京外国語大学大学院日本学研究センターより日本文学修士学位取得。早稲田大学アジア太平洋研究科学術博士（国際関係学）博士号取得。対外経済貿易大学（中国北京）専任講師、早稲田大学アジア太平洋研究センター助手を経て、2009年より現職。専攻は中国現代史。著書に『国共内戦期の中共・ソ連関係』（御茶の水書房、2012年）、共著に『歴史の中のアジア地域統合』梅森直之ほか編（勁草書房、2012年）、『脆弱的同盟：冷戦与中蘇関係』沈志華ほか編（北京：社会科学文献出版社、2010年）などがある。

e-mail: newmannzheng@hotmail.com

アジア太平洋研究センター
リサーチ・シリーズ　第1号
Research Series No. 1
2012年12月15日発行
発　　行　早稲田大学アジア太平洋研究センター
東京都新宿区西早稲田1-21-1
早稲田大学西早稲田ビルディング
郵便番号　169-0051
Waseda University Institute of Asia-Pacific Studies
Sodai-Nishiwaseda Bldg. 7F
1-21-1 Nishiwaseda
Shinjuku-ku, Tokyo 169-0051, JAPAN
印刷・製本　株式会社　国際文献社
東京都新宿区高田馬場3-8-8

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは法律で認められた場合を除き著者および出版社の権利の侵害となりますのでその場合には予め当センターあて許諾を求めてください。